

第11章 南へ、さらに南へ

——惠州

■臨城道中作

紹聖元(1094)年、蘇軾59歳。

蘇軾を遙か南方の英州の知事に移すとの辞令が定州に届いた。閏4月3日、その辞令を頂戴したことに感謝する書状を朝廷に提出すると、すぐに定州を発ち、西南一百里(約60km)ほどの臨城に至る道でこの詩を詠んだ。序文がある。

中山(定州)に赴いてより、毎日のように風に埃が飛ぶ日が続き、太行山脈がはっきりと見えることはついぞなかった。嶺表(五嶺の南)に行くにあたって、そのことを非常に残念に思っていた。臨城の内丘を通過すると、急に天気が爽やかに澄みわたり、西に太行山脈を望めるようになった。山の草木を数えられるほどで、岡や山の並びが北へと走り、崖や谷が深く刻まれているありさまがはっきりとわかった。私は嘆息して言った。「私は南に遷るけれども、速やかに返ってくるであろう。これは韓愈が衡山を見たのと同様の吉祥であるのだろう」。それで詩を書いて蘇邁に渡し、このことを記憶に刻むよう言った。

(1)「韓愈^{かん ゆ}が衡山^{こうざん}を見た」とあるのは、韓愈^{かん ゆ}が罪を赦されて嶺南^{れいなん}の潮州^{ちよう}から帰る途中、折しも秋の雨に塞がれて衡山が見えないのを残念に思い、心をこめて天に祈ると、たちまち晴れ上がって衡山の姿がありありと見えたことをいう。このことについて、蘇軾^{そ せき}は韓愈を祀る廟の碑文に、「韓文公^{かんぶんこう}の精誠^{せいせい}は衡山を隠していた雲を開いた」と、記している(第10章171ページ)。このことをもって、太行山脈^{たいこう}がにわかにも見えたことは帰還が叶う吉兆であるとしたのだ。(2)序文から、長男の蘇邁^{そ まい}が同行していたことがわかるが、母の喪に服するために官職から離れて父のもとにきていたのだろう。黄州^{こう}に流されたときにただひとり蘇邁が同行したことを想起すると(第6章20ページ)、ここで「記憶に刻め」と言った言葉はなかなか感慨深い)

地位^おを逐われた旅人に、

わざわざ眼を向けようとする者はいない。

ところが、千里にわたって続^{たいこう}く太行山脈は、

あたかも、我が乗る馬をずっと見送ってくれるかのようだ。

柳宗元^{りゅうそうげん}が己^ごに比して愚溪^{ぐけい}と名付けた谷は、

柳宗元をその地に引き留めようとした。

私はそうはならないだろう。

山^しが人を識^しる――

その例^{ためし}は、衡山^{こうざん}と韓愈^{かん ゆ}の関係がひとつあるだけではないのだ。

(1)「地位^おを逐^おわれた旅人」の原語は「逐客^{ちくきやく}」で、蘇軾^{そ せき}は「逐客^{ちくきやく}」もしくは「逐臣^{ちくしん}」

(次の詩)と自称する。しかし、そこに悲愴感はさほどなく、南への旅立ちにあたって蘇軾は楽天的なこの詩を詠んだ。それは言葉だけの強がりではないであろう。黄州に流されてからあまたの苦難の乗り越えてきた経験の裏付けがあつての精神的な余裕があるのだらう。(2) 柳宗元が左遷の地で、溪谷に「愚溪」と名付けたことは第9章49ページで見ている)

■過湯陰市得豌豆大麦粥示三兒子

詩題は、「湯陰市を過ぎり、豌豆と大麦の粥を得た。三人の息子にこの詩を示した」。「三人の息子」は蘇邁、蘇迨、蘇過である。

北方の野には赤裸の土地が広がり、
岸辺はどれも黄色い土埃で覆われている。
夏は日照りのために麦の穂が伸びなかった、
秋は長雨のために豆のさやに実が入らなかった。
ここの旅の宿で朝の粥に呼ばれると、
厨房の者は季節の逸品を出してくれた。
匕や箸の先で、豌豆の青く斑な表面が照り映え、
歯や歯茎に当たって、ぎしぎしと音が鳴り響く。
立派なお役にある知り合いが御馳走を用意してくれたとしても、
地位を逐われた官員(逐臣)は、それは謝絶すべきで、

旅の空のこの質素な食事こそが似つかわしい。

ひょうれい

漂零(零落して流れ漂い)——ついにどこに行くのか、

こうとう

浩蕩(広く限りないところ)——そこにこの身を寄せるのである。

人々は、食事に気をつけ養生するように言ってくれる。

私は、あちらでも土地の人々に背くことなく努めるつもりでいる。

いま万里の旅人として行く——

そして三年の任期の後には、

収獲したばかりの豊かな農作物を食べたいものである。

(グリーンピース入りの粥を蘇軾は味わいつつこの詩を詠んだ。「家にあれば^け筍に盛る

いい くさまくら

飯を草枕旅にしあらば^{ありまのおうじ}椎の葉に盛る」と詠んだ有馬皇子の嘆きはここにはない)

■赴英州乞舟行状

ちくしん

逐臣となったことを決して悲嘆はしない蘇軾ではあっても、遙かな旅路は現実的には非常に厳しいものがあつた。官用の船を使えるようにしていただきたいと、この文章を書いて朝廷に願い出る。

わたし

臣軾が申し上げます。

朝廷の辞令によって、二つの職務を失い、一つの官職から追われ、嶺南の小郡の知事として流されることになりました。臣はただちに旅の支度をし、日夜道を急ぎ、

今すでに滑州に至りました。

辞令を聞きましてから憂いと恠れによって疾となり、もとより両目は昏く濁ってわずかに道筋を見分けられるだけで、左手は不自由、右臂は力が入らず、六十歳に及んで、頭は禿げ上がり、齒は抜けてしまいました。このようなありさまではもはや長くは生きられないであります。しかも、非常に重い罪名を負い、上には恩義にそむき、下に普段の生きざまを恥じ、恠れが血気を損ない、憂いが飲食を隔て、そのため病が癒えることは決してないのであります。臣はかねてから家計のやりくりが不得手で、お上より賜るところの祿は右から左に消えてしまい、旅の費用を工面しようにも囊の中はからっぽとなっております。

臣は陸路を使って、日夜急いで速やかに任地に赴こうとしています。しかし、病がこうであって、費用が続かず、しかも、英州からの迎えの者は来ませんし、定州から送ってくれる者はこれより前に行こうとはしてくれません。人を雇い馬を買いたくてもその費用の出所はないのであります。道の途中で窮まってしまい、譬えていえば川の中ほどで舟を失い、一本の浮き木を抱えてそれに命を託しているようなありさまなのであります。浮き木はいまにも沈もうとしていて、臣の衰危はまさにここに極まっていますのであります。

竊かに伏して思念いたしますに、罪を得て以来、三度辞令が改まり、聖恩によって生命は保たれて、ついに一郡に付していただきました。これは聖主の至仁至明によるもの、八年もの間お近くに置いていただきました臣のことを思われて、この生命が全うされることを願ってくださっていると期待しましても間違いはないのであります。臣は衰病の余生をもって、強いて南方の夏の毒暑を犯して、四千余里の炎

こう
荒の道を陸走して、途中で伏し倒れて旅宿で死んだとしましても、^{ことわり}理として疑うべきことは何もなく、罪を累ねた重さからすれば惜しむに足りないのであります。しかしながら、それは職務を全うしての死ではなく、仁聖とは殺さずして万物を育むものであるとの本旨とは反するものでありましよう。

^{わたし}臣は、家族を分散させ、長子は近い土地に行かせて農耕によって食を得られるようにし、ただ数人だけを伴って舟に乗り、^{べん}汴州、^し泗州の間を進んで^{ちやうこう}長江に出て、ますます先を急いで^{なん こうぐん}南康軍に至って、そこからまた陸路で任地に至ろうと目論んでおります。

貴ぶところの医薬、食事は大切なツボを失ってはおりませんが、^{わたし}臣が竊かに自身を顧みますにこの多病早衰はもはや氣息がわずかに通じるばかりで、きつと長くは生きながらえられないであります。この身を舟に託すことによって、いささかなりとも寿命を延ばして、任地にたどり着けますならば、^{れいひやう}嶺表の酷暑の地において死んでも心に甘んじるものであります。陸路を進んで道の途中で死んで路傍に埋められ、行く手のない鬼になってしまうのとは大違いなのであります。

^{うやうや}恭しくも聖主の徳は下は昆虫にも及びますとか。^{わたし}臣はかつてはお近くに置いていただいた者であります。きつと死地に棄てようとなさるものではないのでありましよう。それをもって、舟で行くことの計画を申し上げて、敢えて天の慈悲を望むものであります。少しく憫惻を加えてくださいますように。

(この文章は、上の2篇の詩には詠まれていなかった衰病や旅の困難が記されている。皇帝に懇請する上で敢えて強調したのかもしれないが、たぶんこれが実情であるのだ

ろう。当時の中国の版図をほぼ南北に縦断するような遥かな道のりを、陸路でしかも自費で移動するのは気の遠くなるような難事業であったであろう。都を出る直前に妻を喪ったことも、不自由さを増して、旅をより困難なものにしていたのかもしれない。せめて（通常の任地替えと同様に）官用の船に乗れるよう皇帝に願い出たのである）

■書松醪武後

閏4月15日、蘇軾^{い じょう}は韋城^{てい}に到着した。定州から韋城は直線距離にして330km余り、蘇軾が定州を発ったのは閏4月3日以降であるから、上の文章に「ただちに旅の支度をし、日夜道を急ぎ」とあったのは少しも誇張ではない。韋城で、友人のために『松醪^{しょうろう}の賦^ふ』を書いた。これはその後書き。

（定州^{てい}で、松を用いた酒を作り、『松醪^{しょうろう}の賦^ふ』を詠んだことは第10章372ページで見ている。そこでは賦を訳すのを回避した。訳者の手に負えるものではないと感じたからだ。蘇軾^{い じょう}が韋城で、もしかすると己の遺品になるかもしれないと、紙も筆も墨も特に当時の名品を用いて心をこめて書いたことを思うと、『松醪の賦』がどのようなものなのか見ておかないわけにはいなくなる。正確な訳文を作れないのは今回に限ることではなく、毎度おなじみの「ずっぽ訳」で恥の上塗りを一つ重ねればよいだけだど開き直って、賦の訳もこの後ろに掲げることにする）

私は皇居^{し ぜんどう}の資善堂（学士が執務する場）にいたときに、呉安詩^{こ あん し あざな だんせい}（字は伝正）と職務を

離れた交わりを結んだ。私が中山(定州)に赴くことになると、呉安詩は別れに際して張遇(宋初の墨工)が作った「易水供堂の墨」の一粒を贈ってくれた。

紹聖元年閏四月十五日、私は英州に赴任する途中で韋城に立ち寄った。そこに呉安詩の甥の欧陽思仲がいて、ともに呉安詩の高風について語り、しばし感嘆し合った。

私はかつて『洞庭春色の賦』を作り、呉安詩はそれを特に愛してくれて、それを書くよう私に求めた。近ごろ私は『中山松醪の賦』を作り、前作に見劣りするものではなく、呉安詩がまだ見てくれていないのを残念に思っていた。そこで、李氏の(南唐の皇室御用達ということ)「澄心堂の紙」を取り、杭州の程奕の「鼠須の筆」を用いて、呉安詩から贈られた「易水供堂の墨」で、『中山松醪の賦』を書いて欧陽思仲に授け、呉安詩に直接渡してくれるように頼んだ。どうかこれを大切にしてもらいたい。

呉安詩は普段から道を学んですでにそれを得ていて、私は竊かにその一つ二つを聞かさせてもらった。いま嶺表に行くに当たってまた会えないのを残念に思い、この賦を書いて贈るものである。この賦の末尾の句より思いを致して、遙か遠くにある私のことを想ってくれることを望む。

(1) 呉安詩とは都で詩の唱和をしている(第10章306ページ、322ページ)。その甥の欧陽思仲は欧陽脩の親類であるという。(2) 最後の部分は、『中山松醪の賦』の終わりに、これは屈原の詩集にある『遠遊』を継ぐものであるとの文言があることによる)

ちゅうざんしょうろう

『中山松醪の賦』

始余宵濟於衡漳、(こうすい しょうすい私が初めて衡水と漳水の流れを渡ったのは夜のことだった)

車徒涉而夜号。(それから、車や徒歩で騒がしく移動した)

燧松明而識淺、(たいまつ松明をととして川の浅い深いを知り)

散星宿於亭阜。(道辺の家へと星が沈んでいった)

鬱風中之香霧、(重苦しく吹く風の中に湿った香りがあって)

若訴予以不遭。(私に向かって松が不遇を訴えているかのようであった)

豈千歳之妙質、(「本来なら千年だって生きられますのに」)

而死斤斧於鴻毛。(斧によって命を羽毛のように軽く扱われ)

效区区之寸明、(たかだか一寸先を照らすために)

曾何異於束蒿。(一束の蒿と同じようにされてしまっているのです)

爛文章之糾纏、(ただ樹皮の模様は焼け爛れ)

驚節解而流膏、(あふみ節はばらばらにされて膏を流しているのです)

嗟構厦其已遠、(「ああ、君が大建築を構えるのは遠い夢となってしまった」)

尚藥石之可曹。(それでも、薬用にその身を供することならできであろう)

收薄用於桑榆、(桑や榆の材を集め)

製中山之松醪、(ちゅうざんそうだ、中山の松の酒を造ろうではないか)

救爾灰燼之中、(灰塵になってしまうところから君を救い出し)

免爾堂爝之勞、(堂の代わりをする労苦から解放しようではないか)

取通明於盤錯、(わだかまった節から透明な樹液を取り)

出肪沢於烹熬。(脂分を抽出し)

与黍麦而皆熟、(黍や麦と一緒に煮ると)

沸春声之嘈嘈。(ぐつぐつと沸き立つ声がする)

味甘余而小苦、(味は十分に甘くて少し苦く)

歎幽姿之独高。(驚くほど幽遠な独特のようすになる)

知甘酸之易壊。(ほかのものの甘いとか酸っぱいとかは物の数ではなく)

笑凉州之蒲萄。(涼州の葡萄酒などは笑ってしまう)

似玉池之生肥、(仙界の池の水のまろやかさに似て)

非内府之蒸羔。(宮廷の料理など足元にも及ばない)

酌以癭藤之紋樽、(藤の花を描いた杯に酌んで)

薦以石蟹之霜螯。(真っ白な蟹の身とともにやってみようではないかい)

曾日飲之幾何、(毎日これを飲んだら)

覺天刑之可逃。(あらゆる苦しみから逃れられるだろう)

投拄杖而起行、(老人も杖を放り投げて歩けるようになり)

罷兒童之抑搔。(痒いところを子供に搔いてもらう必要もなくなる)

望西山之咫尺、(一杯やれば——西の山々がすぐそこにあると見え)

欲褰裳以遊遨。(着物をからげてすいすい登って行く)

跨超峰之奔鹿、(疾走する鹿に飛び乗り)

接挂壁之飛猱。(猿とともに絶壁をよじ登る)

遂從此而入海、(さらには海へと入り)

渺翻天之雲濤。(はたまた雲の波の上で身を翻す)

使夫嵇阮之倫、(昔々の嵇康^{けいこう}、阮籍^{げんせき}といった連中を呼び出し)

与八仙之群豪。(仙人たちとわいわいやるのだ)

或騎麟而翳鳳、(はたまた麒麟^{きりん}にまたがり、鳳^{ほう}に乗り)

爭榼挈而瓢操。(その上で古^{いにしえ}の酒器をもてあそぶのだ)

顛倒白綸巾、(頭巾などはさかさまにかぶり)

淋漓宮錦袍。(錦の上着も酒でぐっしょりだ)

追東坡而不可及、(この東坡居士^{とうば こじ}を追いかけようとしたって誰も付いてこれはいない)

歸鋪歎其醕糟。(帰ってからは酒の粕でも食らうでしょう)

漱松風於齒牙、(松を吹く風で歯を漱いでから)

猶足以賦遠遊而統離騷也。(屈原^{くつげん}の名作『遠遊』^{えんゆう}を超える賦をさりりと作るのだ)

■書贈楊子微

蘇軾^{こう が}は黄河を渡り、都の東五十二里に位置する陳留^{ちんりゆう}の町にまで来た。都に入ることは許されていない。陳留^{ちんりゆう}で楊子明^{よう し めい}の訪問を受け、この短文を記して渡した。楊子明^{よう し めい}は、蘇軾^{こう が}の故郷の旧い友人の楊濟甫^{よう さい ぽ}の息子で、前年の秋、蘇軾^{こう が}の妻が亡くなってから定州に赴くまでの間に、蘇軾^{こう が}は都で楊濟甫と会っていた。楊子明^{よう し めい}は、南への旅の途中にある蘇軾^{こう が}に何とかして会おうとして、陳留でうまく尋ね当てることができたのである。

我が旧い友人である楊^{よう}濟^{さい}甫^ほの子の楊^{よう}子^し明^{めい}(字は子微^{あごな し び})は数千里の道を遠いとせ
ずに私と弟に会おうとして蜀^{しよく}から来てくれた。たまたま弟は汝^{じょ}州^{しゅう}に行き、私は嶺^{れい}表^{ひょう}
に遷^{うつ}ることになった。楊^{よう}子^し明^{めい}は私を追いかけて陳^{ちん}留^{りゅう}にやってきた。しばし留^{りゅう}まって、
去るを忍び難^{なん}くしている。楊^{よう}濟^{さい}甫^ほに何か書いて贈^{くわ}りたいのだが、旅にひどく疲れてし
まい、とても果たすことができない。それでこれを楊^{よう}濟^{さい}甫^ほのもとに持って行ってしま
い。いまから書く。それ以上のものは作れない。

楊^{よう}子^し明^{めい}は学問に熱心で文章に優^{すう}れて^{じゆつ}いる。数術^{すうじゆつ}(暦や占い)を知ると自分で言い、
私はきっと嶺^{れい}表^{ひょう}で死ぬことはないと言^いってくれる。その証^{しやう}として、老子^{らうし}の『道徳経』の
言葉とともにこの紙に記しておく。

紹^{しょう}聖^{せい}元年^{げん}閏^に四^し月^{げつ}十八^{じゅうはち}日^{にち}、新^{しん}英^{えい}州^{しゅう}知事^{ちじ}の蘇^そ軾^し、書^かく。

(楊^{よう}子^し明^{めい}はこれより9年後に科挙に合格している)

■ 自跋洞庭春色賦中山松醪武

陳^{ちん}留^{りゅう}から蘇^そ軾^しは都の東側を南下し、雍^{よう}丘^{きゅう}県^{けん}の脇を通過したときに、その
地^ちの知事^{ちじ}を務める米^{まい}叡^い (第10章298ページ)に宛てて、ぜひとも会いたい
旨^しの手紙^てを送^{くわ}ったが、実際には会えなかったようだ。そして襄^{じやう}邑^{ゆう}にまで
きて大雨に遭^あい、しばし留^{りゅう}まって『洞庭春色の賦』および『中山松醪^{ちゅうざんしょうろう}の
賦』を書いてこの跋文^{ふつぶん}を記した。

始めに安定郡王^{あんていぐんおう}(趙世準^{ちやうせいじゅん})が黄柑^{こうかん}で酒を造^{くわ}り、「洞庭春色」と名付けた。それを甥^{どうていしゆんしよく}

趙令時^{ちやうれい じ}が得て、私に馳走してくれたので、戯れに賦を作った。後に私は中山^{ちゅうざん てい}(定州)の知事になり、松の節で酒を造り、このことをやはり賦に詠んだ。その事柄も文も似ていることから、合わせて一卷とする。

紹聖元年閏四月二十日、嶺表^{れいひやう}に行こうとしていて大雨に遭い、襄邑^{じやうゆ}に留まってこれを書いた。

東坡居士^{とう ば こ じ}記す。

(このときに書いた一卷が明、清^{みん しん}の皇室に宝物として伝えられ、満州国皇帝となった溥儀^{ふ ぎ}が北京から長春^{ちやうしゆん}に持ち出し、1945年の以降、行方不明となった。1982年、ある中学教師の家に保管されていることが発見され、現在では吉林省博物館の所蔵品となっている)

■子由新修汝州龍興寺吳画壁

襄邑^{じやうゆ}から、蘇軾は突如西に大きく迂回し、200km以上離れた汝州^{じょ}にいる弟を訪ねた。恐らく、これは隠密な単身行動で、家族や荷物は襄邑に留めたままで、弟とこの先の生活設計などについて相談したのだろう。先の文章で「家計のやりくりが不得手」(原文は「不善治生」(治生^{ちせい}に善^よからず))とある通り、蘇軾には貯えがなかった(知事としての権限を使って懐を肥やすようなことはしないし、定州で見たように人々にやたらと贈り物を与えたがったり、巨大な鉢を焼いたりと散財ばかりするので、俸禄はまさしく「右から左に消えて」(原文は「随手耗尽」(手^てに随^{したが}って耗尽^{ちゆうじん}す) しまうのだった)。弟は何事も堅実であるから、副

宰相として得ていた俸禄をきちんと貯蓄にまわしていたようだ。弟は兄に旅費を渡すとともに、家族を分散させて今後の経済的負担を軽減させる方策（先の文章にも記してあった）について具体的に助言したようだ。

この詩はそうした差し迫った問題とは無関係に、弟が汝州の竜興寺りゅうこうじにある呉道子ごどうしの壁画を修繕したことを歌っている。呉道子ごどうげん（呉道玄）とうが唐代を代表する画工であることは第2章29ページから何度も見ている。

丹青たんせい（絵画の技）は長く衰え、

画工は精妙な技芸を失ってしまった。

人物を描くのは最も難しいとされ、

そのまま今に至ったのだった。

つまり、市井の人をそっくりそのままに模写できる者が、

画工の中でもあたかも公卿にあたるとされてきた。

画工の手はただ写すだけの奴隷となってしまったのだ。

呉道子ごどうしはいまに画の手本を残してくれただけでなく、

画の不死の生命を伝えてくれている。

人間界のあちこちに呉道子が描いた仏弟子の画があり、

どれも海に翻る波濤の勢いがある。

細かに手の動きを観るなら、直線と曲線をみごとに描き分け、

絶妙な位置を測って、自然の摂理を捉えていることがわかる。

真の奔放とは本当は精微であって、

狂い咲きの花が際立って美しいかのように見えるのとは訳が違ふのだ。

呉道子の遺墨^{じよ}が汝州に留まっていると聞いて、

人は古い壁を見て、

^{かたつむり} 蝸 が這いまわったような跡しかないのに涙を流してきた。

蘇轍は金帛を喜捨して堂を修繕し、

散り散りになった浮雲が新たに晴れ上がったかのように、画を蘇らせた。

衣を幾度も整え直してから、その画の前に座って吟唱する。

後に古を慕^{いにしよ}う人がここに来て、

かつて画を修復した人がいると知ったなら、その人の姓名を尋ねるであろう――

それは他ならぬ東坡^{とう ぽ}の弟であつたと記憶に刻むがよい。

■初貶英州過杞贈馬夢得

蘇軾はあわただしく汝州^{じよ}から引き返すと、かねて朝廷に願い出ていた船を使う許可が下りたので、陳留^{ちんりゆう}に戻って官船に乗り込んだ。そこに杞^き（雍丘^{きゅう}）から馬正卿（字は夢得）が（恐らく米黻^{べいふつ}のメッセージを携えて）尋ねてきたので、この詩を渡した。

はるか昔から仇池^{きゅうち}の穴があるといわれている。

私は仙界に行くところか、

かの雪堂せつどうに帰りたいとの思いさえも果たすことができない。

貴君と竹林を歩いたことを、しみじみと夢に見る……

貴君と私はかの山濤さんとうと王衍おうえんのようであったのだ……

(1) 仙界きゅうちに通じる仇池せつの穴については第10章212ページなどで見ている。(2) 雪堂せつどうは黄州どうの東こうの坡おかに蘇軾ば せいけいが建てたもので、その土地はまさに馬正卿の力で得たことは第6章152ページで見ている。(3) 最後は昔の著名人の名を引いて、蘇軾と馬正卿の間柄は、主人と使用人の関係ではなく、優れて高いレベルのものであったと讃えたのである。馬正卿は蘇軾よりわずかに8日遅れて生まれ、26歳のときに2人は出会い、それから33年の歳月が経過した。蘇軾の詩文に馬正卿の名が出るのはこれが最後であるという)

■師続夢経

船は大運河を南下して南京なんけい応天府おうてん ふを通過し、蘇軾おうきやうは王鞏に手紙を送って会いたいとの希望を伝えたが、実現しなかったようだ。その一方で、偶然による出会いもあった。蘇軾の故郷びの眉州だいにんに、人々から「大任しょうにん」、「小任」と呼ばれる任兄弟にんがいたことはしばしば見てきたが(第6章178ページ、第10章159ページなど)、任一族にんの任伯雨にんはくうとたまたま邂逅してしばらく同行することになった。これは任伯雨のために書いた文章。

広陵郡王こうりやうぐん おう(皇族の一員)の学校の教授である眉山出身の任伯雨び ざん(字は徳翁にんはくう あざな とくおう)は、そ

の母、呂夫人を喪って十四日、号泣することがややおさまると、仏事を行おうと思い立った。ある人が『金光明経』を読誦することを勧め、世に伝わる本は誤りが多く、ただ咸平六年に刊行されたものが最良で、そこには張居道が蘇ったことがきちんと記載されていると言った。それで任伯雨はその本を求めたけれども得られなかった。柩の前の蓆で、甥の任師統が仮寝をしたところ、たちまち夢から覚めて、次のように言った。

「私は夢で都の相国寺の東門に行きました。糟姜という人の店があり、『ここにはお経があります』と言うので、『咸平六年の本がありますか』と尋ねました。『あります』との答えて、『そこには張居道について書いてありますか』と問うと、『あります』と。それはほとんど夢のようではありませんでした」

任伯雨はそれを聞くと非常に驚き、任師統を都に走らせると、夢に見た通りに糟姜がお経を売っていたのだった。

任伯雨は母を葬るために柩を船に載せて蜀へと向かい、私は嶺外の任地へと向かい、たまたま楚州と泗州の間に出会い、弔問に訪れてこのことを聞いた。

紹聖元年、同郡の蘇軾が記す。

（咸平六年とはこれより 91 年前である。張居道の再生譚は未詳。一度死んで蘇った者が向こうの世界で見てきたことを語る話は無数にある）

■記徐仲車語

楚州、泗州のあたりはこれまでも何度も通ってきたところ。ここで決ま

って会う人物がいた。徐積（字は仲車）^{じよせき あざな ちゅうしゃ}（第10章180ページ）である。これは徐積と語ったことを記した短文。

私は別れ際に、徐積^{じよせき}に言葉を求めた。

徐積は言った。

「昔から、功績を残した者はたくさんいました。それでも、禹^うの功績だけが抜きんでて賞賛されています。昔から、才能のある者はたくさんいました。それでも、周公^{しゅうこう}の才能だけが抜きんでて賞賛されています。それは二人に徳があったからで、理由はそれだけなのです」

（禹^うも周^{しゅう}公^{こう}も孔子^{こうし}が特に尊敬した人物である。左遷の身となった蘇軾^{しよく}には、徳を重んじる徐積^{じよせき}の言葉が特に印象的であったのだろうか）

■過高郵寄孫君孚

船は高郵^{こうゆう}を通過し、この詩を孫升^{そんしょう}（字は君孚^{あざな くん ぶ}）に送った。孫升は高郵の人で、朝廷の重職にあったが、改革派の復帰と入れ替わりで遠くの任地に追いやられてしまった。蘇軾は似た境遇におかれた孫升のことを、その故郷を通りつつ偲んでこの詩を作ったのである。

淮河^{わい が}を過ぎると風がさわやかになり、

塵にまみれた我が顔をさりと洗ってくれる。

水辺の木々が次第に大きく繁り、

がま 蒲にまじって遊ゆうりゅう竜の紅い花が咲いている。

可愛らしいことに、夜合ねむの花が、

青い枝の上に紅い糸を散らしている。

貴君は遠く旅してここに帰ることがなく、

花々の笑みは誰に向けたものであるのか。

我が故郷はどこかといえば、

我が手で植えた松がすでに地を覆っていることだろう。

我が旅はすぐに路を失ってしまうことの繰り返し、

帰りゆく夢は千の山が重なる向こうである。

聞けば、貴君にはこの町の近くに農地があり、

二頃けいのその地はよく耕されているとか。

そこから秋の収穫を終えたなら、

夜も米を搗く音が寝台に響いてくるであろう。

秋の祭りの酒に軽く顔を赤くすれば、

楽しくてもはや何の憂いもないのだ。

深酒は禁物、

官人としての旅にも好いことがないわけではないけれど、

ほどほどがよいのであろう。

深みにはまってはならないのである。

(前半は孫^{そんしょう}升のために高郵^{こうゆう}の風光をことさらに美しく描いて明るい調子で歌っている。蘇軾^{そく}はもともと淮河^{わいが}より南の地を好ましく感じていたので、このあたりまで来て、実際に心が軽くなるのを感じていたのだろう。それに加えて、船での旅を許されたことも好材料となって、蘇軾は、これ以上に悪くなることはないと楽観視していたようだ。しかし、朝廷では蘇軾をより重罪にするための議論が行われていたのだった)

■僕所至未嘗出遊過長蘆聞復禪師病甚不可不一問既見則有間矣明日阻風復留見之作三絕句呈聞復並請轉呈參寥子各賦數首

船は高郵^{こうゆう}から揚州^{よう}を通して真州^{しん}の長蘆^{ちょうろ}にまで達した。長い詩題は次の通り。「私はこれまでは行く先々で船を離れて出歩くことがなかった。長蘆にきたところで、聞復^{もんぷく}禪師の病がはなはだしいとのことであったので、これは訪ねてみなければなるまいと見舞ったところ、具合が少しよくなっていた。翌日は風に阻まれ、また留まって会いに行き、三首の絶句を聞復禪師に示した。これを參寥^{さんりょう}（道潜^{どうせん}）にも見せて、数首を賦してもらおうと思う」。この題にあるように、先を急ぐ旅であるから、船から離れて遠く行くことはなかったのだろう。聞復禪師は、かつては杭州^{こう}の孤山^{こざん}にいた思聰^{しそう}という僧で、蘇軾とはかねてから交流があったようだ。參寥はいうまでもなく杭州にいる蘇軾の親友である。

(1) 揚州^{よう}から真州^{しん}に至る間に、呉復古^{ごふこ}（第10章323ページ）の訪問を受けている。呉復古は自由人であるから、蘇軾の後を追って身軽に行動できたのだろう。(2) このころ

までに長男の蘇邁^{そ 邁い}は父と別れて陽羨^{ようせん}に向かったようである。かねてそこに買っておいた農地（第7章82ページ）で自活しようというのである）

其の一

聞復^{もんふく}禪師の病は、

かの道^{みち}に達した人が、活^いきず死^いなずのありさまを見せたのに似ていようか。

聞復禪師が快方に向かったのは、

老子^{ろうし}が沐浴して世の初めに遊んで帰ってきたのと同じであろうか。

あるいは、

寒風の吹きすさぶ中で松だけがきりと立っている姿なのか、

老いてなお眼光鋭い虎が頭を垂れている姿なのか。

其の二

聞復禪師が言われる、

「故郷^{しよく}の蜀は西のかた万里の向こうにありと、

まあ、そういうことは口にしなさんな。

ひとまず、南に涯^{はて}の山に遊びにおいでなさるのでよろしいのだ」

聞復禪師は病中にありながらも、

川辺に立って旅人を送り出す。

私は櫂^{かい}を杖にして、

我が行く手へと頭を回らせるのである。

其の三

老いて、この生とも別れるときがもうそこに来ている、
それでも、興が湧いて、明日はまた旅に出るのだ。
横になって船頭の言っていることを聞くと、
夜中に南風が吹いて、前には行けなくなるようだ。

■六月七日泊金陵阻風得鐘山泉公書寄詩為謝

船は長江に入って流れを遡り、南京に達した。詩題は、「六月七日、金陵
(南京)に停泊したところ、風に阻まれて進めなくなった。鐘山(蒋山)
の法泉(仏慧禅師)から手紙がきて、その返事としてこの詩を寄せた」。

今日は長江のあたりは天候が悪く、
暴風の先駆けであるとされる「炮車の雲」が出ている。
船より鐘山を望みみると、
林の間に、一羽の鶴のような白い塔が聳え立っている。
それはむかし宝公(南朝時代の名僧)が建立したものであろうかと、
宝公を慕って山に向かって叫んだ、
宝公の骨はもはや冷えて、返事はない……

すると、法泉老師が私に向かって呼ぶ声が響いてきた。

老師は、瞳から電光を発し、虎のような歯をおき出しにし、舌で雷鳴を轟かせ、
私のために千の山のような雲を吹き飛ばしてくれた。

これより南方万里の旅、

それとて何ほどのこともない。

あちらの寺で一杯水を酌んで、その味を見てくだけなのだ。

これより後に、鐘山を画に描く人は、

法泉老師が東坡居士を呼ぶのを決まった構図とするであろう。

なんこうばんり また なにごと
（「南行万里 亦 何事ぞ」と、この詩も引き続き軽やかな気分で歌っている。題に「六月七日」とあるが、この2日前に、朝廷では蘇軾に関する重大な決定が下されていた。
先帝を何度も謗った罪によって蘇軾は寧遠軍節度副使に降格となり、惠州安置の身とされたのだった。「安置」とは、こう黄州に流されたときにみたように、居住の自由を奪われて監視下に置かれるということである。「節度副使」は名目だけのもので、官員として何らの権限も与えられず、わずかな収入があるかないかの状態になることを意味した。その命令が届くまでのいましばらくの間だけは、蘇軾はまだ楽観的な気分でいたのである）

■阿弥陀仏賛

ほうせん
法泉が雲を吹き飛ばしてくれたのかどうかはわからないが、蘇軾は少し
きんりょう
の間、金陵に留まったようだ。

蘇軾の妻の王氏、名は閏之、字は季章は、四十六歳をもって元祐八年八月一日に都で卒した。臨終の夕べに、手元にあったお金を喜捨して阿弥陀像を画くよう子の邁、迨、過に言い残した。

紹聖元年六月九日、阿弥陀像ができたので、金陵の清涼寺に納める。

その賛に曰く、

仏の弟子はこの世にあるときは百の憂いにまわりつかれる。

行くに臨んでの一念はどのようにあるべきなのか。

口に南無阿弥陀を誦えるならば、

日が地より出て万国に暁をもたらすのと同じになる。

まして自ら喜捨して、

この円満にして天の日のようなお顔を画いたである。

見聞きて喜びにいっぱいになるのは、

ことごとく成仏して、天人も人も虫も鳥も区別がないということ。

阿弥陀如来は常に平等觀を持ち、

もとより憂樂も、短命長命の違いもないのだ。

一丈六尺の仏の身も大きくはないし、

一寸であっても小さくはない。

この心が平らかになるのは西方の地、

眼を閉じてすぐに到るのは一切の妖魔のないところである。

きんりょう すういんぜんいん そうしゅう
(金陵では、崇因禪院に詣でて、長老の宗襲が自ら寄進を集めて造った観音像を拝み、
北に帰る日にはまたここに来て観音菩薩の頌詞を作ると誓っている。それが叶ったか
どうかは第13章の終わりで見ることになる)

■贈清涼寺和長老

きんりょう せいりょう じ わ
これは上の賛にあった金陵の清涼寺の和長老に贈った詩。和長老がどの
ような僧であるかはわからないという。

馬をも沈めてしまうような北の地の塵から離れたばかりで、

こうなん わ
江南のこの地で雲に臥す人(和長老)にお会いする。

む ちやく
和長老は昔の無著のような高僧、

無著はある寺に来て、

そこの僧に問われて答えられずにいると、たちまち寺が消えてしまった。

私は無論、何もわからない者ではあるけれど、

あ み だ
阿弥陀像をここに留め置くことにした。

老いて後は山林に退隱しようとの思いはいつまでも夢想のまま。

雨上がりの空に響く鐘が心を清新してくれて、

白い頭巾で身を守るまでもなく、

南の地の炎熱の諸毒を洗い流してくれるのである。

(最後の句は、これから行く嶺南^{れいなん}の地の暑さを警戒してのもの。折しも季節は盛夏、北方の気候に慣れた身にはすでに辛いものがあった)

■予前後守倅余杭凡五年夏秋之間蒸熱不可過獨中和堂東南頰下瞰海門洞視万里三伏常蕭然也紹聖元年六月舟行赴嶺外熱甚忽憶此處而作是詩

船^{なんきん}は南京を出て長江^{ちやうかう}を遡った。詩題は、「私^{こう}は杭州の副知事と知事であること合わせておよそ五年であった。夏から秋まで蒸し暑さがひどく、どうにも過ごせないほどであった。ただ、中和堂^{ちゆう わ どう}(杭州の街の南^{ほうおうざん}の鳳凰山にあった)の東南の部屋は下に海への口を臨んで、万里の彼方まで見通すことができ、真夏の間でもひっそりとして涼しかった。紹聖元年六月、船^{れいがい}で嶺外に向かいつつ、暑さがはなはだしく、その地を憶ってこの詩を作った」。

忠孝^{せん}をもって知られた錢氏の王家が、
千本の柱^{ちゆう わ どう}をもって建てた中和堂。
とう ぼ
東坡は五年にわたってその地の役人となり、
そこの東南の部屋にきてみたところ、
人間世界のそこだけに万里の彼方からの風が吹いていたのだった。

■慈湖夾阻風五首

南京^{なんきん}から数十キロ上流^{じ こきよう}の慈湖夾で風のために進めなくなり、五首の詩を

作った。

其の一

見上げる帆柱を左右から引^{ロープ}張る二本の索、
逆風の空に向かって索がびゅんびゅん^{うそぶ}嘯く下で、
浪の花が飛びかう。

船頭は一人ぐうぐうと寝入っている。

菅^{かん}蒨^{かい}（^{ともづな}縄を作る水草）は船客がひやひやしているのを知ってか知らずか、
いかにも弱々しげな一本の^{ともづな}縄が、
万里を吹き抜ける風と争っている。

其の二

この生^{せい}の帰り行く路は、
無数の青い山、
天^うを拍^{ちやうこう}つ長^{ちやうこう}江の水、
そのまた遥か彼方……
ここに餅^{へい}を売る小舟がふっと現れる。
嬉しいことに、
山の前に村落があると、
我が耳に聞くのである。

(1) このまま長^{ちょうこう}江を遡って行けば故郷^びの眉州に至る。かつて28年前には父の棺を船に載せてここを通って帰郷した。今回はこの先で南に折れ、旅路はやはり遥か彼方である。(2) 餅^{へい}は日本語の「もち」ではなく、小麦粉をこねて焼いたお好み焼きのようなもの。蘇軾は長い旅の行く末に思いを馳せるよりも、目の前の小さなことに喜びを見出そうとした)

其の三

私の旅はすべて韓愈^{かん ゆ}の詩のなかを行く。
韓愈は南方への旅で、洪水に浸かった村を見て、
「水は家の扉の半ばにも及ぶ」と詠んだ。
いままさにそのままで、
桑や麻を植えた千頃^{けい}の畑が船底の下にある。
水草が高い陸地に打ち上げられ、
そこに魚がひっかかっている。

其の四

日輪が真上に昇ってくると、
汗が珠^{たま}となって流れ、身が融けそうになる。
南方の地を教導して長く養ってきた功績がどこにあるのか、
これでは誰も知ることができない。

と
思っている
と、
に
わか
に雨
が激
しく降
り、
雲
が通
り過
ぎて、
た
ちま
ち快
く
な
り、
空
に輝
く明
る
い月
を妨
げ
る
も
の
は
何
も
な
い。

（「南方の地を教導した功績」（原文は「南訛長養功」（南訛 長養の功）とは、中華文明は黄河中流の「中原」に始まって、南方の未開人を順次教え導いて文明世界を拡大して行ったとする歴史観に基づくもの。その過程は宋代にも続いていて嶺南の地はなお後進地であるとするのが一般的な認識があり、北方の人間にとっては気候条件も悪いので、蘇軾のような邪魔者はそこに流されるのである）

其の五

船
に寝
そべ
った
ま
ま、
千
丈
の
高
さ
か
ら落
ちて
ゆ
く月
を看
て
い
た船
頭
が、
起
ち上
って喚
ぶと、
す
が
す
が
し
い風
が吹
い
て
き
て、
帆
が半
分
ば
か
り広
げ
ら
れ
る。
水
辺
に並
ぶ村
落
の
前
を、
船
は斜
め
に
な
っ
て通
り過
ぎ
る。
人
間
世
界
のど
こ
に
で
もあ
い
ない場
所
が
あ
る。

■書六賦後

慈湖^{じこきよう}夾^{きょう}からさらに数十^{こじゆく}キロ進んだ姑熟^{こじゆく}で、蘇軾^{そ かく}は朝廷からの新たな辞令^{ししん}（惠州^{けいしゅうあん}安置^{あんち}の処分）を受け取った。州知事の地位も失って罪人として南に流される身となったのである。新たな局面に、蘇軾は身の振り方の変更を迫られた。そのことがここに記されている。

次男^{そ たい}の蘇迨^{そ たい}は英州^{えいしゅう}にまで一緒に行くはずであった。船^{ふね}で姑熟^{こじゆく}に至ると、私は建昌^{けんしやう}軍司馬^{ぐん し ば}に落とされ、惠州^{けいしゅうあん}安置^{あんち}の処分を受けた。もはや家族を同行させることはできない。三男^{そ か}の蘇過^{そ か}だけを連れて行くことにし、蘇迨^{そ たい}に託^{たく}して一家^{いっか}を陽羨^{やうせん}に帰し、長男^{そ まい}の蘇邁^{そ まい}と一緒に住まわせることにする。

蘇迨^{そ たい}は学問を好み、楚詞^{そ じ}（屈原^{くつげん}などの古い詩）を知り、世の外に生きる志をもっている。それで、私の六篇の賦を書いて、別れに贈るものである。

紹聖^{しょうせい}元年六月二十五日、東坡居士^{とう ば こ じ}書く。

（長男^{そ まい}の蘇邁^{そ まい}は、農業によって生計を営むことにさせて、蘇軾とはすでに（本章20ページで触れたように、恐らく真州^{しん}のあたりで）別れて、常州^{じやう}宜兴^{ぎ こう}県の陽羨^{やうせん}に向かっていた。惠州^{けいしゅうあん}安置^{あんち}の身となつては家族を養うことはできないと判断し、別の手紙類からも知れるように、蘇軾^{そ かく}は三男^{そ か}の蘇過^{そ か}と王朝^{おうちやううん}雲と2人の老女だけを伴うことにしたのだった。ここで次男のために書いた六篇の賦とは、後杞^{のちのこきく}菊賦^{のふ}』『服胡^{ふくごま}麻賦^{のふ}』『赤壁^{せきへき}賦^{のふ}』『後赤壁^{のちのせきへきのふ}賦^{のふ}』

『洞庭^{どうてい}春色^{しんしよく}賦^{のふ}』『中山^{ちゆうざん}松醪^{しやうろう}賦^{のふ}』であつたという。自身の誇るべき作品としてこれらを選び、遺品となるものとして書いたのであろう）

■題陶靖節歸去來辭後

船は、陶淵明が最後に役人勤めをした彭沢のあたりを通過し、これはそのときに書いたと推測される短文。

私は陶淵明が彭沢で賦した『歸去來の辞』の願いをいまだに果たせずにいる。いま嶺南の命令を受け、この人生において素志を遂げることの難しさに思いを巡らせている。船の中ではすることもなく、『歸去來の辞』をそっくり顔真卿の書法を用いてこの一卷を書いた。胸中に結ばれ滞るものをしばし舒ようとするもので、敢えて古の人々と並んで天下に己を誇ろうとするものではない。

東坡居士識す。

（陶淵明は『歸去來の辞』を賦して彭沢を去ると、役人暮らしに戻ることはもうなかった。蘇軾が『歸去來の辞』の替え歌を唱えながら畑を耕していた黄州（第6章267ページ）はここから200キロほど上流である）

■帰朝歎

彭沢を通過して間もなく、船は鄱陽湖（彭蠡沢）の出口である湖口に着き、ここから細長い湖を縦断して南へと向かった。湖口の向かいには九江で、思いがけないことに蘇堅が蘇軾のことを待ち受けていた。蘇堅は杭州で親しい関係にあった人で（第9章118ページ）、新たな任地先（豊陽）に向

かう旅の途中であった。蘇堅が詞を詠み、蘇軾がそれに和した。

我夢扁舟浮震沢、(私は夢の中で、震沢^{しんたく たいこ}(太湖)に小舟を浮かべていました)

雪浪搖空千頃白。(見渡す限り雪のような白い浪が天までも揺るがせていました)

覚来滿眼是廬山、(覚めると、眼の前いっぱいにあるのは廬山^{ゐざん})

倚天無数開青壁。(無数の青い岩壁が、天に寄り添って突き立っています)

此生長接淅、(私の人生はいつもあわただしい旅)

与君同是江南客。(いまあなたとともに江南^{こうなん}の旅人です)

夢中遊、(夢の中での遊びも)

覚来清賞、(覚めて景色をめぐるのも)

同作飛梭擲。(機織^{はたお}の梭^ひが飛び交う間のことなのです)

明日西風還掛席、(明日、あなたは西ゆ^く風^{ふう}に帆を掲げます)

唱我新詞淚沾臆。(私のこの新しい詞を唱えると、涙が胸を濡らすことでしょう)

靈均去後楚山空、(かの屈原がこの世を去ってからは、楚^その山々は空しくあるだけ)

滢陽蘭芷無顔色。(あなたが行かれる滢陽^{れいよう}の草花も(詩に詠まれずに)面目をなくしていました)

君才如夢得、(あなたの詩才はかの劉禹錫^{りゅう う しやく}に匹敵するもの)

武陵更在西南極。(劉禹錫が流された武陵^{ぶ りよう}は(滢陽より)さらに西南の果てです)

竹枝詞、((劉禹錫が武陵で採集した)竹枝^{ちくし}の詞)

莫搖新唱、(土地の人々はいま新しい歌をうたっていることでしょう)

誰謂古今隔。(古今の隔たりなどないのです)

(詞の前半は、かつて杭州^{こう}にいたのも、いま湖口^{こう}にいるのも、どちらが夢でどちらが現実^{うつつ}なのかかわからないというココロ。後半は、屈原^{くつげん}や劉禹錫^{りゅううしやく}の名を出して、蘇堅^{そけん}の詩才を讃えたもので、とりわけ、劉禹錫がその土地の人々の歌を題材にして新たな詩の世界を拓いたのと同様のことをするよう(すなわち土地の人のための政治をするよう)期待したものである。蘇軾は蘇堅との別れに際して悲哀の情を詞に詠むことをしなかった)

■壺中九華詩

蘇軾は無類の石好きで、石のためなら大金をはたくことも厭わない。そのことがこの詩の序文に如実に表されている。

湖口^{こう}の人、李正臣^{りせいしん}は異^{めづ}しい石を蓄えている。その石には、九^{れい}つの峰^{ろう}が玲瓏として聳^{えん}え、宛^{えん}転^{てん}として並び立ち、窓^{れん}の櫺^じのような形状になっている。私はこれを百金で買^きって、「仇池^{きゅうち}の石^ち」と偶^べにしたいと思^うった。しかし、南^うに遷^つる途中でそのようにする時間^{じかん}がなかった。この石は名^な付けて「壺中九華^{こうちゅうきゅうか}」という。詩^しを作^{つく}ってこのことを識^しす。
(「仇池^{きゅうち}の石^ち」は第10章211ページから何度か見ている。「壺中九華^{こうちゅうきゅうか}」はこの序文にあるように九つの峰^かがあり、池州^ちにある九華山^{きゅうかざん}に似ているのでその名がある。もとは「湖中九華^{こちゅうきゅうか}」の名であったのを蘇軾が改めたという)

清らかな溪川^{たにがわ}は電光のように折れ曲がり、

(石に刻まれたその谷を遡る者は)雲の上の峰をたちまち見失ってしまう。

みどり

翠の山が空に突き出るありさまが、

(石を鑑賞した後の)夢に現れて驚き目覚めることがある。

ごれいさん

(現実の世界において)これから超えることになる五嶺山はまだまだ千山の彼方……

だからといって愁うものではない、

きゅう か ざん

九華山でさえこうして一つの壺の中に納まってしまうのだから。

九華山の絶頂の池からは、水が絶え間なく流れ落ち、

山中に住む仙女はからりと窓を開いて、世界のあらゆるところを見通す。

きゅう ち

私の「仇池の石」がひとりぼっちなのを忿って、

おも

みどり れいろう

この碧の玲瓏たる石を百金で買って帰りたいと切に思う。

■過廬山下

ろ ざん

かつて蘇軾は廬山を西側から見た（第7章1ページ以下）のだが、今回は東側から見ることになった。短い序文がある。

ろ ざん

私は廬山の下を通過した。もくもくと雲が湧いていた。黙って祈ると、正午になる前に、峰々がはっきりと見えるようになった。それでこの詩を作った。

雲が乱れ、山に土を降らせるかのような。

雲の勢いは、風に翻って南へと移ってゆく。

次から次へと雲が群がり、勇んで往^ゆくありさまは、馬が争い進むかのよう。

心ひかれるのは、

鬱蒼^{うっそう}と繁る森から時に紫翠^{しすい}の山気が吹き出すこと、

それを受けて、雁は東の嶺へと姿を消し、竜は西の岩から現れ出る。

廬山^{ろざん}は、ときに人を一瞬笑わせたかと思うと、

人がそのことを語る間に、百の変化を見せる。

突然の雨が尾根を破り、涼しい風が山の濁りを掃き清める。

無理にでもその姿を見て取ろうとするのは粋^{いき}ではない。

廬山はあるべき姿へとからりと帰ってゆくだけである。

かくて、空を突く紫の峰の並びも、奥深い白い石の壁も見えてきた。

五老峰^{ごろうほう}の雪を帯びる松もくっきりと数えられ、

双溪^{そうけい}の流れが天から落ちるありさまもありありとわかる。

黙って祈ったことに応じてくださったか……

いや、そうではないだろう。

古^{いにしえ}の人は、山に隠れるとの志に反して官に仕えた者を卑しんで、

その者を二度と山に入れないよう神に頼んだ。

そのことを思うと、私は深く恥じなければならない。

(このころに、ここまで同行してきた任伯雨^{にんはくう} (本章 16 ページ) と別れている。また黄庭

堅^{けん}がわざわざ訪ねてきて 3 日ほど一緒に過^{どう}ごし、「銅雀硯^{どうじゃくけん}の銘」を作^{つく}って与えている)

■南康望湖亭

こ こう は よう こ
 湖口から鄱陽湖を南に数十キロ遡ったところの南康軍(軍は行政単位)の呉
 さん ぼう こ てい
 山に望湖亭があり、蘇軾はそこで詩を詠んだ。

八月、長く横たわる湖(鄱陽湖)を渡る。

ありとあらゆるものが寂しく頼りげなく見える。

船の帆を吹く秋の風が強まり、

夕焼け空にぽつんと山が聳え立つ。

国を治めるのが我が仕事であるとの思いはなおあるものの、

やす
 時を康らかにする術は虚しく我が手から消えた。

が び さん びんこう
 峨眉山、岷江の家は万里の彼方、

帰って老いの身をそこに投じることが果たしてできるのだろうか。

ご さん じゆんさいりゆうおう
 (この詩を詠んだ呉山には順済竜王を祀る祠があり、その竜王が蘇軾を救ったとい
 う伝説がある。事実ではないだろうが、面白いところもあるので訳しておこう。以下に
 あるいくつかの地名はいずれも呉山より南側の鄱陽湖に面する地である)

どう ば てい えい たく ぶんふう ほ けい あん ち
 東坡が昔、定州から英州に謫されたとき、夜に分風浦に停泊した。東坡が惠州安置の処
 分を受けたことを知った役人が使いの者を派遣し、夜中に五百人で取り囲んで東坡の乗る
 船を没収しようとした。東坡は言った。

せいこう
 「この夜の間に、星江に行き、村で別の船を調達するまで待っていただきたい」

使者はそれを許諾した。

じゆんさいりゆうおう
東坡は順濟竜王に祈り、

こう こ
「私は江湖の上を往来して三十年になります。竜王様と私は古くからの知り合いで、この友
が困ったときにはいつも竜王様は助けてくださいました。朝までに星江に行けるなら、あとは
陸路で予章に行けます。私はそれによって救われます。そうでなければ、また使者がやって
きて船を奪われ、岸边で路頭に迷うことになってしまうのです」

そう言い終わらないうちに、風が耳をかすめ、船頭が帆をあげると、たちまち帆はいっぱい
に膨らんだ。飯を炊きおわらないくらいの時間で楊瀾の前を渡り、昼には予章にまで来てい
たのだった。

■江西

じゆんさいりゆうおう 順濟竜王の助けがあったのか、は よう こ 蘇軾は無事に鄱陽湖を渡り終え、ちやうこう 長江の
かん こう 支流の贛江を南に遡ってこうせい 江西の地に至った。

こうせい 江西の山水は真に吾が邦といってよい。

みどり
白い沙、翠の竹、

かわ
江の底は一枚の石である。

十里を行く間に、九つの早瀬が船底を磨る。

岩の角と篙が当たってごつんごつんと響く。

酔っては臥し、醒めては水音を聞く。

昔、馬祖^{ばそとう}(唐代の著名な禅僧)に龐居士^{ほうこじ}が教えを請うたとき、

「そなたが江西の水を飲みましたら教えてやろう」

と、言った。

そのことを思い出し、

ならば、一口に吞んでしまおうとしたら、

あれは誰なのか、

川をじっと覗いて大物を狙っている者がいる。

^{さすまた}又を挙げて絶叫すると、

一尺を超える二匹の鯉が貫かれていた。

(初句は「江西山水真吾邦」(江西の山水は真に吾が邦)である。罪人として南に流されて行く人の詩とは思えない。蘇軾はどこであつても「吾が邦」と思う境地に達していたのだった)

■秧馬歌

中国大陸は広大である。官船に乗ってよいとの許可を得たのが4月末ないし5月初め、すでに8月に入っているのに、蘇軾はなお船の上にあつた。贛江をさらに遡って廬陵に至り、そこで新式の農具を主題にした詩を作った。序文がある。

廬陵^{ろりょう}にきて、官職から退いた曾安止^{そうあんし}に会った。曾安止は『禾譜』^{かふ}という作品を見せ

てくれた。文章はまことに温雅で、(稲作に関する)事柄が詳しく記されている。惜しいことに欠けているものがある。農具について触れていないのだ。

私はかつて武昌^{ぶしょう}のあたりを旅して、農夫^{おうぶ}が皆、「秧馬」にまたがっているのを見た。その馬は、腹の部分に楡^{にれ}や棗^{なつめ}を用いて滑りやすくし、背の部分に楸^{ひきぎ}や梧^{あおぎ}を用いて軽くしている。腹側は小舟のような形で、首と尾の両方が高くせり上がっている。背中^{せなか}は重ねた瓦のような形で、(それをまたいで座ると)両方の髀^{もも}が動かしやすく、泥の中で自在に跳ね回れるようになっている。首のところに藁^{わら}を束ねて繋ぎ、そこに秧^{なえ}をしばっておく。一日に千の畦^{あぜ}に行くことができ、身体を屈めて作業する大変さに比べて雲泥の差がある。

『史記』に、禹^うは四種の乗り物を用意し、泥を行くときには橇^{そり}に乗ったと記されている。これを解釈する者は、「橇^みは箕のような形をし、泥の上を投げろように行く」としている。「秧馬」と同様のものなのだろう。

『秧馬の歌』一首を作って、『禾譜』の終わりに付ける。

(「秧馬」は橇^{そり}のような道具で、それにまたがって泥田の上を後ろ向きに滑りつつ、稲の苗を植えて行くのである。それを武昌^{ぶしょう} (現在の武漢^{ぶかん}) にあたりで見たとあるのは、父の喪に服するために長江^{ちょうこう}を遡ったときであろうか。

春の雲が濛濛^{もうもう}と空をおおい、雨が淅淅^{しとしと}と降るころ、
稲の秧はよく生長して、一斉に伸び上がろうとする。

ああ、このときに、

女性や子供までもが泥水の中を歩きまわり、
朝に一つの畝^{うね}に取りかかって、
暮れるまでに千の畦^{あぜ}に秧を植えようとするのである。
腰をぐいと半円形に曲げ、首は啄^{ついで}む鶏^{けい}のよう、……
筋はびんびん、骨はぎしぎし、声はひいひい、……
ここに、我等は手に手に「桐^{きり}の馬^{おうば}」(つまり秧馬)をひっさげて田に現れ出る。
「桐の馬」は、頭と尻が高く、腹の脇が低くなっている。
背中^{せなか}は瓦を重ねた感じで、角ばったところを取り去ってあるから、
両足^{りょうそく}を使って本物の馬のように動きまわれるし、
鴨^鴨のようにびよんと跳ねたりさっと滑ったりだってできる。
細い秧を束ねて持って行けて、
しかも、馬に必要な腹帯^{はらたき}やら額の飾り^{かざり}やら余計なものは何もいらない。
畦^{あぜ}の東から走ってたちまち畦^{あぜ}の西へと移る。
村の門を閉じる合図の太鼓が聞こえると、
すぐさま、谷川を越える名馬のように帰ってくる。
あとは壁にかけて高いところにほったらかし、
秣^{まぐさ}など与えなくてよいし、うるさく嘶^{うなり}くこともない。
若いときにこれに騎乗して慣れてしまえば、
老齡^{らうれい}に及んでもつまずいたりころんだりすることはない。
馬の鞍に錦を敷いて、皇城の門をぐる貴公子は、

我等のことを、牛に鋤を引かせて一生を送るだけだと笑うけれど、
我等には実は木の駿馬があるのを知らないのだ。

(この後で、蘇軾は農民の労苦を軽減するために「秧馬」の普及に努めるようになる(本章 165 ページ))

■八月七日初入贛過惶恐灘

八月七日に^{かん}贛州に入り、^{こうきょうたん}惶恐灘を通過してこの詩を詠んだ。このあたりの^{かんこう}贛江には断続的に早瀬が現れ、18 カ所の難所があるという。とりわけ惶恐灘がその名の表す通り危ういところとして知られている。

七千里の旅にある半分白髪の人、
^{じゅうはちたん}十八灘においてひとひらの葉に身を委ねる。
山は^{さくきかん}「錯喜歡」(^{しよく}蜀の山道にある)を思い出させ、
遠く故郷を夢に見る。

地には^{こうきょう}「惶恐」(おそれおのの意)の名があつて、
孤独な官人を泣かせる。

しかし、
吹き続ける風は、いつも帆を膨らませて旅人を送ってくれる、
降り続いた雨は、水かさを増して船を川底から持ち上げてくれる。
こうしてみると、

私は官の御用として水先案内人を務めるのがよいのだろう。

この一生のうちに、各地の津わたしばを知り尽くただけではなのだから。

(1) 冒頭の対句は「七千里外二毛人、十八灘頭一葉身」(七千里外 二毛の人、十八灘頭 一葉の身)と、数字を巧みに使っている。(2) 蘇軾自身の注で、「蜀の山道に、大散関の近くに「錯喜歎」がある」と記されている。「錯喜歎」とは「ぬか喜び」の意味。難所続きの蜀の山道の中で、「錯喜歎」はもう平地に至ったかと錯覚させるような場所であるという。蘇軾は「十八灘」を超えつつ、難所はもうこれで終わりかと「ぬか喜び」を何度か経験したのだろう。(3) この詩の前半は旅の困難を歌い、後半は一転して軽くジョークを飛ばしている。難所を無事に越えて、天はどうやら自分をいつも助けてくれるようであるから、全国の渡し場を知り抜いてもいることでもあるし、水先案内人になるのが適材適所であるというのである)

■書淵明詩

蘇軾はいつも陶淵明の詩とともにあったようだ。8月9日にこの短文を記している。

(後漢の終わりのこと、孔融は一度免官になり、一年余り後に官職に復帰すると、大勢の客人の訪問を受けるようになり)孔融はこのように言った。

「部屋に常に大勢の客人がいて、樽の中にちゃんと酒がある。それで(不如意の)事は何もないのだ」

この語は酒中の趣をみごとに言い表している。

しかし、陶淵明^{とうえんめい}が、

「たまたまよい酒があるのなら、飲まずにいる夜はない。我が影を顧みながら飲み
尽くすと、たちまち酔い心地になる」

と、書いているのを見ると、孔融^{こうゆう}には実は「事が多かった」とわかるのだ。

陶淵明^{とうえんめい}の言葉は『飲酒二十首』の序文にある（第10章214ページ）。孔融^{こうゆう}は直言を重ん
じ、時の権力者である曹操^{そうそう}にも遠慮会釈なく物を言ったために、56歳で刑死した。蘇
軾が陶淵明を選ぶか、孔融を選ぶかはなかなか難しい問題であった）

■木蘭花令

造口^{ぞうこう}というところで夜に雨音を聞いて弟に寄せた詞。合わせて土地^{ちよう}の張
庭堅^{ていけん}（字は才叔^{あざな}）にも示した。

梧桐葉上三更雨、^{あおぎり}（真夜中に、梧桐の葉に降り注ぐ雨の音がしています）

驚破夢魂無覓処。（夢にさまよう魂は驚かされ、行き先を失います）

夜涼枕簟已知秋、（夜に竹の寝床は涼しく、すでに秋）

更聽寒蛩促機杼。^{こおらぎ}（こして寒蛩がせかすようにこして鳴く声に、聞き入るのです）

夢中歷歷來時路、（夢の中で、ここまでの長い旅路をたどるとき）

猶在江亭醉歌舞。^{あづまや}（私はまだ川べりの亭で酔う賑わいの中にいるのです）

尊前必有問君人、(盃の前には必ず君のことを問う人がいます)

為道別來心与緒。(それで別れてからの心の内を語るのです)

(^{てい}定州を発ってすでに4カ月、夢の中でその道をたどり直すと、きっと弟との別れが思い出されたのだろう)

■書虔州八境図跋文

蘇軾は虔州(南康)に到着し、ここで船を降り、そこからは陸路をとった。虔州の地を踏んだのはこれが初めてであったが、かつてこの風光を描いた画を見て8首の詩を詠んでいた。土地の人々はその詩の作者が来たのを喜び、ぜひ筆を執って書いてほしいと頼んだ。蘇軾は請われるままに応じ、この短文を添えた。

南康(虔州)の川の水は毎年のように町を破壊していた。孔宗翰が州知事になると、石を巡らせて町を守り、町はいまもそれを頼りとしている。私はかつて密州の知事を務め、孔宗翰が後任としてやってきた。私が出て行くときに孔宗翰は南康を描いた『八境図』を出してきて、画を見て文と詩を作ってくれまいかと求めた。それを南康の人に送って、石に刻んで各所に置きたいと言うのであった。それから十七年が過ぎて、私は南に行き、南康を通過した。それで、「八境」を実際に見ることができた。私の先の詩は「八境」の万分の一も詠めていなかった。南康の士大夫がこもこも私に、「詩文はかつて石に刻みましたが、それぞれ持ち去ってしまった人がいて、

いまではすっかりなくなっていました。また書いていただけるなら、再び刻みたい
と思います」と言った。すでに孔宗翰は亡くなっていて、人々の要望に応えないわ
けにはいかない。

しょうせい びざん
紹聖元年八月十九日、眉山の蘇軾書く。

(蘇軾が密州知事を辞めたときに後任として孔宗翰がきたことは第5章134ページで
見ている。孔宗翰のために詩文を作ったのは、それから数カ月後の徐州知事であったと
きだった。第5章ではその詩を訳さなかったので、ここで見ておこう)

けんしゅうはちきょうず
虔州八境図八首

序文

なんこうはちきょうず こうそうかん
『南康八境図』は知事の孔宗翰の作である。孔宗翰は町を石で固め、その上に建
つ高い建物から見えるありさまを図にした。東に七閩の地を望み、南に五嶺の
山々を望む。山が高く低く連なるのが覧え、章水、貢水の奔流を下に覗く。雲煙
出没し、草木 蕃麗し、邑屋 相い望み、雞犬の声 相い聞ゆ。この図を観るなら、
ぼうぜん さんぜん がいいぜん
茫然として思い、粲然として笑い、慨然として嘆息するのである。

ここで私は言う。

「この画は南康の『一境』ではなからうか。何をもって『八』とするのか」

私が答える。

「観えるものが自ずと異なってくるのである。君が太陽を見る。朝には槃と観えて、

昼には珠と観えて、夕べには破れた壁と観える。これをもって三つの太陽があると君は言うのかな。かの南康に『八境』があるとするのは、寒暑、朝夕、雨暘、晦冥によって異なるのをもってするのではなかろうか。あるいは、坐作、行立、哀楽、喜怒の変化によって、目に入ってくるものが吾が心に感じさせるものが変わるであろう。そうすると、それは『八』どころではなくってとても数えきれない。『八』が『一』から出るのがわかったならば、この世界の外にあるとされる詭譎譎怪の事柄、『禹貢』に記されていること、鄒衍が語ったこと、司馬相如が賦したこと、およそ千万にもなろうというこもものことも、もとはといえば『一』であると知れるのである」

後世の君子はこの『南康八境図』を見てきっと感じるものがあるだろう。

八章の詩を作って、図の上に題する。

其の一

『南康八境図』を描いた知事殿は、

石で固めた楼閣の上に座って、

下で奔流が激突するのを眺めている。

ここでしばしば宴席を設け、何ら憂うことはない。

昔、ある太守は石で造った犀を置いて川の流れを制御しようとした、

治水の功績として、ここの知事殿にかなり見劣りがする。

昔、ある侯爵は楼閣から眺めて八首の詩を詠んだ、

風雅を愛でる点で、ここの知事殿とほぼ肩を並べられるだろう。

(第一首は孔宗翰^{こうそうかん}を讃えたもの。以下は、虔州^{けん}の名所を詠み込んでいる)

其の二

波濤の頭が城に打ちつける、

還ってゆくときは寂しげである。

章貢台^{しょうこうだい}が夕焼けに包まれる、

旅に倦んだ人はここに登り、

ふと寒さを覚えるとともに、無限の思いに落ちてゆく。

ぽつんと浮く雲に落ち行く日の光が当たる、

都はあの方角なのだろうか。

其の三

白鶴楼^{はくじゃくろう}の前に山裾が迫る。

五嶺^{ごれい}を超える路はいつも雲に閉ざされている。

古い友人は千の山の彼方にいて、

梅が開いたとの手紙を寄せても返信はない。

其の四

朱い楼閣の奥深い部屋に、

まだほのかな明かりがさしている。

貴人の乗る車が帰ってくる、
中の人のはもはや酒が半分醒めている。

この夕暮れ時に、
漁師^{きこり}も樵も去ってしまい。

螺亭^{らてい}を巡るのは碧い溪川と青い嶂^{あお たにがわ やま}だけである。

其の五

知事殿は暇さえあれば毎日のように参禅する。

寺の林を眺めて、知事殿^{ちようぜん}は悵然^{ちやうぜん}と思う――

成仏するのは、誰かの後にはなるまい、
功名は、望む人が先んじるにまかせよう。

其の六

塵外亭^{じんがいてい}からこの塵の世の中を見返ると、

数々の楼台が霧雨に暗く包まれている。

山水の美しさに引かれて人は道に迷い、
ぽつんと立つ塔を尋ねて東西を認めるのである。

其の七

鬱孤台^{うつこだい}は薄雲のたなびくなかにある。

山裾は中空に浮かび、半ば雨が上がっている。

ここに想い見るのは、かの蜃気楼、
しん き ろう

赤い建物が見え隠れするのは仙界の蓬莱宮なのだ。
ほうらいきやう

其の八

回る峰、乱れ立つ嶂、それぞれに高く低く、
やま

雲の外には気高い隠者が住む。

人のいない山で月明かりのもとで遊ぶ人、

山の木もまた詩をよく吟じるのである。

(この一連の詩は、画を見て想像を膨らませて詠んだものであるから、蘇軾自身が先に記しているように、『八境』の万分の一も詠めていなかった) のは仕方のないことで、17年後に現地に立っての詩をこの後見てゆく)

■鬱孤台

上の詩の其の七にあった鬱孤台うつこだいを実際に訪れてこの詩を詠んだ。

「八境」を画に見ていた……

鬱孤台うつこだいでかつて遊んだような気がする。

山は翠の浪となって湧き、
みどり

水は玉の虹となって流れる。

朝、^{こうどう}崆峒の山に日が麗らかに注ぎ、
 秋、^{しょうすい}章水、^{こうすい}貢水に風がさかんに吹く。

ここは南の地、
 山の葉はなお色を変えることもなく、
 川の中州では魚や亀が産卵を続け、
 草や木は半分が熱帯のものである。
 夕暮れの迫るころ、
 山の路は雲に包み込まれてゆき、
 町の木々は^{くら}靄に昏く沈み、
 ただ早瀬の声が町の楼台に響いてくる。
 故国は千に峰の外にある。
 この高台に十日も留まろうか。
 「三泊したところには必ずそこにまた帰って来て舟を繋ぎたくなる」という。
 故郷とかねて画に見たこと、
 我が心はどちらに引かれるのか。

■廉泉

^{けん}虔州の町の東南に^{ほうおん じ}報恩寺があり、あるとき境内に水が湧き出して池ができた。当時の知事が清廉をもって評判の高い人であったことから、池は^{れん}廉泉と名付けられた。蘇軾はそこを訪れてこの詩を詠んだ。

水の本性はもともと自ずから清くあるものだ。

清くないのはこれを撓^{みだ}すからである。

この廉泉^{れんせん}を見るがよい、

水の五色は、仏典にある摩尼^{まに たま}の珠よりも美しい。

泉は「廉」と名付けられたが、

水はもとより清廉なのだから、

わざわざそれを名にするまでもない。

「廉」があるなら「貪^{どん}」があるということなり、

「慧^え」があるなら「癡^ち」があるということになるだろう。

柳宗元^{りゅうそうげん}は谷を「愚溪^{ぐけい}」と呼んで詩を詠み、

呉隱之^{ごいんし}は「貪泉^{どんせん}」の水をことさらに飲んだ。

漁師は、悩む屈原^{くつげん}に向かって、世間の水が濁ったならば足を洗えばよいと言った

——漁師の足はもとより泥だらけだから洗いたいのだろう。

許由^{きょゆう}は、天子がよろしくないことをしようとすると聞いて、山の水で耳を洗った、

——許由の耳はとくに垢まみれだったわけではあるまいに。

とにかくにも、人はあれこれ名を立ててがやがや騒いでいるのであって、

この水はそんなことはほとんどご存知ないのである。

毀誉褒貶は時とともに消え去るもの、

この水はいつ尽きるとも知れない。

廉泉のほとりにふらりとやってきて、
鬚をひねって、我が髪や眉を見る。

「ああ、この水の中の人よ、
元気でいてくれよ。

これから行く先々で楽しみをともにしようではないか」

((1) いくつもの故事を引いて、ごちゃごちゃ理屈をこねたいかにも蘇軾らしい詩。蘇軾は白か黒かの二分法を好まない。「廉」と呼ぼうが、「貪」と呼ぼうが、水は水の本性のままにあればよいのである。(2) 最後の結びの原文は「好在水中人、到处相娛嬉」(好く在れ水中の人、到る処相い娛嬉せん)。「水中の人」とは本性のままにある本来の己なのであるのだろう)

■塵外亭

「八境の図」の詩の其の六にあった塵外亭を訪れてこの詩を詠んだ。

(北の楚の山々は淡く、その姿は見えない、
(ここの)贛水は清らかで、歩いて渡れそうだ。

塵の外へと遊び来て、手を振って俗世間と別れる。

山は高く、

人は力を惜しんで、十歩に一度ずつ休憩を入れる。

いまや浮く雲の端に立ち、

万戸の井戸が照り映えるの下に見る。

風流人がここで宴会を開きやすいようにと、

あらかじめ竜や虎が草を刈って整えてくれたのか。

それこそ、我を惑わすものであるに違いない。

昔、馬祖^{ばそ}(禅宗の高僧)が山に入ったとき、

山の神たちが垣を築いて修行の場として整えておいたのを見て、

「これは、我を助けるのではなく、我を誤らせる悪だくみである」

と、言って、そこを立ち去った。

私は、馬祖と同じく千年も語り継がれよと、

軽口を飛ばして、

袂^{たもと}をはらって、ここには留まらずに去るのである。

■書彭城観月詩

八月十五日の中秋の名月を虔州^{けん}で見て、かつて詠んだ詩を書き、短文を添えた。

暮雲収尽溢清寒。(夕暮れの雲がすっかり消えると、溢れ出てくるさえずえとした光)

銀漢無声転玉盤。(天の川は声なく玉盤を回転させる)

此生此夜不長好、(この生もこの夜も長く好いわけではない)

明年明月何処看。(来年の明月はどこで看るのだろうか)

私は十八年前の中秋の夜に、^{ほうじょう} 彭城(徐州)で弟とともに月を観て、この詩を作り、
『^{ようかん}陽関』の調べに乗せて歌った。

いま^{かんすい}贛水のほとりに宿り、これより^{れいひやう}嶺表に遷こうとしているときに、独りこの曲をまた歌う。

ここに書いておくのは、今夜の悲しみがあるとあらかじめ知るものではなかったけれど、いずれ必ず喜びがあるといま私にはわかっているということを、記録として留めておくためである。

((1) 18年前の詩は、第5章199ページで見ている。(2) 弟と中秋の名月を見ることが必ずまたあると、蘇軾は敢えて確信しているのである)

■天竺寺

^{けん}虔州は、「^{はちきやう}八境の図」の詩をかつて詠んだことにとどまらず、蘇軾にとっていささか古い^{ゆかり}所縁のある地であった。そのことがこの詩の序文に記されている。

私が十二歳のとき、我が父は^{けん}虔州から帰ってきて、このように言った。

「^{てんじくじ}城(町)の近くの山に^{けん}天竺寺があり、そこに^{はくらくてん}白樂天が自身で書いた詩があった。

一山門作兩山門、(一つの山門が二つの寺の山門になっている)

兩寺原従一寺分。(二つの寺はもとは一つだったのが分かれたのだ)

東澗水流西澗水、(東に澗の水が流れて西の澗の水になり)

南山雲起北山雲。(南の山に起つ雲が北の山の雲になる)

前台花発後台見、(前の建物に咲く花が後ろの建物から見え)

上界鐘清下界聞。(上の境内の鐘の音が下の境内で聞かれる)

遙想吾師行道処、(我が師はいまどこに行かれたのかと、遙かに想像するに)

天香桂子落紛紛。(天からの香りをただよわせて桂の実がさかんに落ちるところである)

筆の勢いは奇れて逸く、墨の跡はまるで新しく書いたかのようだった」

今はそれから四十七年、私が天竺寺を訪れると、書かれた詩はすでに失われていて、石に刻まれたものだけが残っていた。涙が流れて止まらず、この詩を作った。

((1) 蘇軾が12歳のときとは、蘇軾の祖父の蘇序が亡くなった年で、伯父の蘇洵と父の蘇洵とが喪に服すために相次いで帰ってきた(第2章117ページ)。伯父は地方官を務めていて、一方で、父はその前の年に都で制科の試験を受けて不合格となり、失意の内に都を出て各地を巡る放浪の旅を続け、虔州にまできたところで父の訃報に接したのだった。蘇洵はこのときの帰郷後に、学問によって身を立てることを決意し、独りで努力を積み重ね、その8年後、張方平が成都にきたときに書き溜めていた文章を見せ、世に現れ出るきっかけを掴んだ。それは蘇洵が47歳のときで、蘇軾が科挙に合格したのはその2年後である。(2) 白居易(楽天)の詩は、杭州の天竺寺の韜光禪師に贈ったもの。杭州に天竺寺があつて靈隱寺と隣り合わせになっていることは第10章448ページで見えていて、詩はその二つの寺のありさまを歌ったものである。韜光禪師はもとは靈隠寺に住まい、後に天竺寺に移り、さらに虔州の修吉寺に來た。その折に白居易が書

いた詩を携えていたのであろう。修吉寺は後に、韜光禪師にちなんで天竺寺と名を改めたのだった。(3) 蘇軾は、白居易と境遇が似ていることをずっと意識していたし、父の所縁もあり、また杭州とも関わりがあることから、様々な思いが溢れ出たであろうから、序文にある「涕が流れて止まらず」は誇張ではないのだろう)

香山居士(白居易の号)の筆の跡を留めるのは、

天竺禪師(韜光禪師)の古い庵である。

香山居士が同じ字を重ねた「連珠体」の詩を詠んだのも遠い昔、

壁を連ねたその詩をいま吟じてみる……。

香山居士はすでに飛ぶ鳥となって消え、

驚蛇の勢いの墨蹟も失われてしまった。

林の奥深くの桂の木にはもう実が残っていない、

雨に濡れる山薑だけが枯れかかったまま花をつけている。

四十七年は真に一つの夢だ、

天の涯に流落する身となって、涕をこぼし続けるのである。

((1) 「連珠体」とは同じ文字を重ねた詩体。上に引かれている白楽天の詩を見ると、

いくつもの文字が重ねて用いられていることがわかる。(2) 山薑はヤブミョウガに似たものであるようだ)

■書樂天詩

上の詩の序文と同じ趣旨の短文が残っている。天竺寺の人々は、蘇軾の訪問を当然のことながら好機と捉え、白居易の詩を書いてほしいと頼んだのである。

一山門作両山門、両寺元従一寺分。東澗水流西澗水、南山雲起北山雲。

前台花發後台見、上界鐘清下界聞。遙想高僧行道處、天香桂子落紛紛。

唐の世に、どう韜光禪師がどうこう錢塘(杭州)のせんどう こう天竺寺からきてこの山に住んだ。

はくきとい らくてん白居易(樂天)が蘇州知事であったときに、この詩をそ韜光禪師に寄せた。けいれき慶暦年間に我が父がこの山に遊んだときには、なお白居易の真筆を見ることができた。それから四十七年、私は南に遷く途中でゆ けん虔州を通過し、この寺にくと、ただ石に刻んだものを見るだけであった。

しょうせい紹聖元年八月十七日。

■自題出潁口初見淮山詩

蘇軾は虔州を発つ前に、筆を執って、36歳のときに詠んだ詩を書き、この短文を添えた。ここに記されているように、蘇軾は歳月の経過を正確に記憶していて、それが基礎資料となって蘇軾の年譜が編まれている。

私は三十六歳のとき、こう杭州副知事として赴任するに際してじゅう寿州を経過し、この詩を

作った。

いま五十九歳。南に遷^{うつ}って虔州^{けん}に至った。煙る雨が降りきり、当時の気象と非常に似ている。

((1) 36歳のときの詩は第3章125ページで見ている。そのときは雨ではなかったよ
うだが、心象的に一致するものがあつたのだらう。(2) 虔州^{けん}では福州^{ふく}知事の俞^{ゆう}括^{かつ}とともに
崇慶^{そうけい}禪院に遊んでいる。そのことは後で見ることにする(本章171ページ))

■過大庾嶺

中国大陸の大きな区分である嶺南^{れいなん}（嶺表^{れいひょう}）と嶺北^{れいほく}を分けるのは五嶺^{ごれい}の山
並みで、その東の端にあるのが大庾嶺^{たいゆれい}である。蘇軾^{そし}は大庾嶺を超えていよ
い嶺南に入ろうとするときにこの詩を詠んだ。

我が一念によって、

身心の垢も汚れもなくなるのなら、

洞^{からり}としてすべてが清浄になる。

浩然^{ひろびろ}とした天地の間に、我独りだけが正しい——

そのような境地にだって至るのだ。

今日、峠を越えて行くに、

我が身のことも世間のことも、

すっかり忘れてしまう……。

そうか、これは、

仙人が我が頭のでっぺんを撫でてくれたからなのだ。

きっと、少年のように若返らせて、長生の秘訣を授けてくれるであろう。

(1) 左遷されて嶺南に行く人は大庾嶺で悲嘆に沈むのが普通で、いわばそれを約束するようにして詩を詠むものとされてきた。蘇軾がもしもここで、辺境の地に追いやられる我が身を悲しみ、悔いや恨みを詩に詠んだならば、蘇軾を罪に落とした連中も少しは納得するものがあつたろう。ところが、我が一念によってすべてを乗り越えられるとし、さらには、山の上であたかも仙人に出会ったかのような訳のわからない詩を詠まれたのでは、ますます憎しみを強めたことであろう。(2) 蘇軾がかつて黄州に流されたときには、最後に越える峠に至ると、陳慥(方山子)がそこに待ち受けていた(第6章32ページ)。そのような奇跡の邂逅は大庾嶺ではなかったので、蘇軾はその替りに仙人との出会いを空想したのだろうか)

■宿建封寺暁登尽善亭望韶石三首

大庾嶺を越えて建封寺に宿をとり、暁に尽善亭に登り、韶石山を望み見てこの詩を詠んだ。韶石山には、溪をはさんで互いに向かい合う高さ百仞の岩があり、太古の聖天子である舜がその岩の上に登って音楽を演奏したという伝説があつた。

其の一

二つの岩が中空に浮かび、
 朝日を反射して、この^{じんぜんてい}尽善亭を照らしている。
 いまも、猿や鳥は^{しゆん}舜を慕って^{うそぶ}青空に嘯いている。
 舜はここから西に旅をし、
^{どうてい こ}洞庭湖でまた^{がく}楽を奏し、魚や竜が舞ったのだった。

其の二

^{しよく}蜀の人(司^し馬^ば相^{そう}如^{じょ})の賦、^そ楚の人(屈^{くつ}原^{げん})の辞にある通り、
^{ぎよう}堯^{そうざん}は崇山に、^{きゅうぎ}舜は九疑に葬られた。
 二人の^{みち}聖天子が真に道を得た人でなかったとしたら、
 遠くに南の地にきたところで、何もすべきことはなかったであろう。
 (^{ぎよう}堯^{しゆん}や^{みち}舜は真に道を得た人であったから、二人が遙か南方にわざわざやってきたの
 は、死んで葬られた見せて、実は仙人となって天に昇るためであったと、この詩は歌っ
 ているのである)

其の三

^{れいなん}嶺南の海のさらに東南から、
 月の生まれるところのさらに西まで、
^う禹は、あまねく天下をまわって洪水を治めた。

その功績^{げんけい}によって天より玄主を賜った。

このあたりは神仙のすまうところ、

禹もまたここに来て昇仙^{かいてん}し、会稽に葬られたのだった。

(これらの3首は、堯^{ぎょう}、舜^{しゆん}、禹^うの三代の聖天子が南の地にきて仙人になったということとを歌っている。蘇軾^{そしつ}は嶺南^{れいなん}に流されたことの意味を何かしら見出そうと苦悩して、われわれには無理なこじつけとしか思えないけれど、聖天子と共通するところがあるかもしれないと、敢えて思うようにしたのだろうか。それはそれとして、嶺北^{れいほく}とは異なる嶺南の自然に触れて、神秘的な力がここに宿っていると感じ取ったのだろう。蘇軾はこれまでにも仙薬や養生に強い関心を抱いていたが、一段とその傾向を強めて神秘的な内容の詩文を多く作るようになる)

■月華寺

大庾嶺^{たいゆれい}を越えてから道はひたすら南に向かつて下って行く。これは韶州^{しょう}の月華寺^{げつかにじ}で詠んだ詩。詩の題に、蘇軾自身の注で、「寺の隣に岑水場^{しんすいじょう}がある。寺に寄進をしたのはいずれも鉅山の経営者である。月華寺はこの百年間に三回燃えたという」と付記されている。岑水場とは銅の精錬場で、精錬場からの廃水は当然のことながら鉅害を引き起した。

天公^{てんこう}(造物者)はどうして自分自身を大切にしないのか。

土を結び、石を融かして、銅の山を作った。

山から銅を捜して削り出そうと、

一万もの男どもが働けば、その陰で女たちは泣かなければならない。

銅を掘って得た利は、結局のところは、悪知恵のある者のところに集まった。

その金は、我が手の内に独占することなく仏に喜捨したのだが、

それとて、一枚の瓦を寺に献じれば千金(来世の福運)として還ってくるとされるからで、

何のことはない、己の強欲のためにしただけなのだ。

げっ か じ ころ
月華寺が三回も燃えたのは、天の意によるのだろうか、

いまは茅葺の小屋が草むらに建っているだけだ。

僧が言うには、

「ここには、もとは古の高僧いにしえのような方がおられました、

ところが、掌てのひらを返すような目まぐるしい興廃に見舞われてしまったのです、

このような困難な状況に、どうして置かれなければならないのでしょうか」

高い巖いわおからは夜ごとに金碧きんぺきの気が吐き出され、

暁まだらには斑いっに青く光る異石いせきが採掘される。

坑口から流れる水はさながら地から銭ぜにを湧き出させ、

暮いつに百鎰かん、朝には千鍰と、後から後から宝を生み出す。

この山は宝を出して、その代わり、己自身を損なってしまった。

銅の地脈がすでに断たれたのは、天も物惜しみをするのだろうか。

私が願うのは、

銅の山がすっかり変わって、たっぷり陽ざしを受ける農地となり、

麦や稲が豊かに稔って、

父を失った子や、夫を失った妻が蘇生すること。

仏の道に修行する人が要るものといったら、

飯を煮る破れた鍋と、草葺きの小屋だけで十分なのだ。

(この詩は、鉅害と仏教界の歪んだ仕組みを告発するものである。蘇軾は仏教界にたくさん
さんの友人を持つが、世俗の苦役から逃れその蔭で財を食うような仏教者に対しては
むろん厳しい眼を向ける。唐代の韓愈は仏教界の悪い側面をもって仏教を全面否定し
たが、蘇軾はそこまで狭量ではない)

■南華寺

韶州^{しょうしゅう}の南華寺^{なんかじ}で詠んだ詩。南華寺は中国の禅宗の開拓者の一人である六
祖慧能^{そえのう}が修行した寺で、曹溪寺^{そうけいじ}とも宝林寺^{ほうりんじ}とも呼ばれ、現在も続いている。

(慧能^{えのう}に始まる禅宗の一派は南宗^{なんしゅう}と呼ばれ、日本の臨済宗^{りんざいしゅう}や曹洞宗^{そうとうしゅう}に強い影響を及
ぼした)

慧能師^{えのう}は、ここで祖師弘忍^{こうにん}にまみえると、

「本来の面目を知れ」

と、言われ、たちまち大悟した。

いま慧能師は高く聳える塔の中の人となっていて、

「何を見るのか」

と、私に問う。

慧能師は一瞬の電光のうちに万法を知り、

水を飲めば、自ずから知るところがあり、

月を指さしても、何も迷うことはなかった。

私は元来は修行を積む人であって、

過去、現在、未来の三世にわたって精練すべきであつたのだが、

その中間において一念を失い、ここに百年の譴責を受けてしまった。

衣をかかげて慧能師の塔に礼拝すると、

感動の涙が溢れてくる。

慧能師が錫杖で叩いて湧き出した泉の水を借りて、

綺語^{きご}ばかりを書いてきた我が硯を洗おうと思う。

（最後の句にある「綺語^{きご}」とは詩文の美辞麗句。仏教用語においては、真実に反して飾り立てた言葉をいい、それを用いることは十悪の一つとされる。蘇軾は、罪を得たのは綺語のためであるから、もはやそのようなことのために硯を用いるのをやめて本来の修行の身に帰ることをこの詩では願っている。黄州^{こう}に流された当初、安国寺^{あんこくじ}に籠って己の心と向き合ったこと（第6章46ページ）が思い起こされるだろう。定州^{てい}を出てから悲嘆の辞を吐くことはほとんどなかったが、その実、深い苦渋のうちにあつたことは間違いない）

■碧落洞

蘇軾は当初そこの知事に任命された英州えいしゅうに入った。碧落洞へきらくどうという現在も有名な観光地になっている鍾乳洞を訪れてこの詩を詠んだ。

へきらくどう えい
(碧落洞は英州の町から十五里下り、さらに溪谷をうねうねと二十里遡ったところにある。碧落洞とうは唐の時代以降さまざまに詩歌に詠まれ、蘇軾もここに来る前から知っていた。南中国には石灰岩の作る奇勝、奇観が多数ある)

峰々ぎざぎざが槎牙に乱れ立ち、
絶壁うねうねが晃蕩と横たわる。

みどり
翠の山裾の間に、道教、仏教の人々の霊跡があることを、
遙か遠くにいたときから私は知っていた。

北の絶壁は朝日を射て返し、高いところは仙界の都と連なっている。

南の絶壁は月の光に叩かれ、夢の中で仏界の都に遊ぶのである。

がらり
果然と石の門が開かれ、その中に銀河が傾き流れている。

奥深い龕ぐんが窈窕くわうてうと入り込み、別に扉がまたあってがらんとした穴が穿たれる。

たぎ 泉が流れて珠が下り、ひも 乳が洗うようにゆる 纓が緩やかに交差している。

私はここに来るのを人に知られるのを畏れていた。

いまは仙人に迎えられるような気がして恐れを抱いている。

ささやき声さえも大きく響き、雲が驚いて山から飛び去るかのようである。

ならば、杖をついて帰るべきであろう。

その前に、仙人を煩わして食事を馳走してもらいたいものだ。

(天下の奇勝に遊んでも、蘇軾の心はざわついて十分には楽しめなかったようである)

■峽山寺

蘇軾^{こう}は広州に入り、峽山寺^{きやうざん じ}に遊んでこの詩を詠んだ。現在の広州は、経済の先進地域として世界的に知られるが、実は古くから南海貿易で栄え、南方の僻地と見なされながらも、とくに唐代^{とう}以降は先進地域であった。この詩には、蘇軾自身の注で、『伝奇』に記されている孫恪^{そんかく}と袁氏^{えん}の物語はこの寺でのことである。いまも白い猿を見るという人がいる」と付記されている。その物語の背景として、南海貿易によって外国人の往来が盛んであったことがある。

(蘇軾の注にある物語の概略を記しておこう。唐^{とう}の時代のこと、峽山寺^{きやうざん じ}では白い猿が飼われていた。あるとき猿は異国の人が持ってきた珠^{たま}を連ねた環をもらい、不思議な運命を授かった。都に連れて行かれ、玄宗皇帝^{げんそう}に可愛がられるようになり、安祿山^{あんろくざん}の反乱の折に宮中から逃れ、いつしか人間に変じて袁氏^{えん}という非常に裕福な家の娘となった。そして、孫恪^{そんかく}の妻になり、夫婦で各地を旅して再び峽山寺にきた。孫恪の妻は昔の猿の仲間と呼ばれ、山に戻った。以上の話に現れる異国の人は、たぶん南の海洋ルートで来たインド系ないしイラン系の商人であったのだろう。また、猿が袁氏の娘になったというのは、大昔に袁公という剣の達人がいて、実は白い猿が変じていたのだったという伝説があることによる)

天はここに清^{せい}遠^{えん}峽^{きょう}を開き、

地は転^ぎじて凝^ぎ碧^{へき}湾^{わん}に変わる。

私は衣の裾を上げ、ゆるゆると山の道を歩む。

峽山寺の僧は、もとより静かに独り暮らしていて、

町^{たくはつ}に托鉢に出たまままだ帰ってきていないという。

誰もいないところで、

水^{うす}が碓^つをかたことと搗き、風が松の門を守っている。

私を楽しませようと、

岩から泉の水が流れ落ち、竹が触れ合って山に音を響かせる。

かの剣豪の子孫の美女^{えん}(伝説の袁氏の娘)は、

戯れに人間世界でしばし遊んでみた白い猿で、

雲の中で友^{うさぶ}が嘯^{さう}くのを聞くと、

詩を賦し、珠の環を留めてたちまち去ってしまった。

深い林に、その猿を見ることができないものか……

いつしか霧雨がきて、その美女も山も包み隠してしまうのだった。

(1) 詩の冒頭で、この付近の地形を大きく詠んでいる。「湾」とは、谷から出て広がった水域を指す。清遠峽は海からは数十キロ離れている。(2) 蘇軾が息子の蘇過^{そ か}とともに峽山寺に遊んだことを記した訪問記録があつて、その日付は9月13日になっている。また、9月12日にはやはり蘇過とともに英州^{えい}の寿聖寺^{じゅせい}に遊び、ある隠者と話を

したことを記した文章を残している)

■清遠舟中寄耘老

蘇軾^{こう せいえん}は広州清遠県のあたりの川を下り、船の中で、賈収^{かしゆう ごう うんろう}(号は耘老)に
寄せるこの詩を作った。賈収^こは湖州に住む隠者で、蘇軾^{ようせん}が陽羨(いまは長
男と次男がそこにいる)に土地を買ったときに、賈収が訪ねてきたことは第
7章189ページで見ている。

一万の谷、一千の巖が人境に背を向けたところ、
すなわち、梅花嶺^{ばい か れい だい ゆれい}(大庾嶺の別名)を、
小寒のころに越えた。
いま、清遠^{せいえん}のあたりで泛宅^{へんたく}(船のこと)の旅にあり、
ふと夢に、郷里の井戸ばたにあるとはっきりと見た。
目覚めると、
眼いっばいに水と山があり、
鴨のような緑の波が鳳凰のような山の影を動かしている。
ここは郷里の川辺なのか、
はたまた苕水^{ちようすい}(湖州の名勝)の岸辺なのか……
海陵居士^{かいりよう こ じ}(賈収)には(出世をとげるための)雲梯^{はしご}などではなく、
晩年^{いおり}に至って苕水のほとりに廬を結んだ。

山は、蒼^{あお}い玉で飾^{ぎょく}った帯を自らつける、

——官服で身を飾る必要などない。

野の馬は、黄金で飾^{つな}った羈を受けはしない、

——官職に身を縛り付けない。

門の前に官人の乗る車が通っても、

居士は知らん顔、

清流に向かって笑って己の髪の毛を数えている。

汀^{みぎわ}の洲から春の風が起ち、

水草の白い花が散って水煙のなかへとまじりこんでゆく。

その風の行く手の万里の彼方に、

いまだ帰ることのできない私がいる。

我が目は蒼い浪に断たれ、

郷里も苔水も見えない。

そこに北からの雁がやってきて、

居士の手紙を届けてくれた。

「洪水に襲われて我が廬は水没してしましましてな、

十日の間は、はからずも齋戒しているかのように、煮炊きができませんで、

曲がった煙突に亀や魚が棲みついております。

今年は米の値が下がって水のようにただ同然になり、

銭を手に入れようとしても、囊^{ふくら}の中はもはやからっぽです。

まことに弱りきっております」

人生は百年、それとて寄せるが如きのみ。

七十歳でびんびんしているのはそうあることではない。

居士よ、何も嘆くことはない。

子がいるのなら、それだけで十分、

賢かろうが愚かだろがどちらだってよいのだ。

昔の隠者のように、経典を腰に帯びつつ畑を耕せばよいではないか。

さあ、この南の天よ、

とうば
東坡の爺さんを見るがよい、

いままで続けてきた読書をこれからもやめたりはしないのだ。

((1) かつては賈か収しゅうから節約術を学んだのだが(第6章121ページ)、ここでは逆に賈収を論すようなかたちになっているのもおもしろい。なお、賈収との交流を示すものはこの詩が最後であるという。(2) この詩の終わりは、先に南華寺で詠んだ詩(本章63ページ)と逆のことを言っているようでそれもまたおもしろい。(3) 弟の蘇轍は本章13ページで見たように汝州知事の任にあったが、兄が惠州に流されることが決まったのと同時に降格処分となり、かつてと同じく筠州(第6章3ページ)に移されることになった。弟は兄の旅路の跡を追うようにして廬山の南にまできて、そこから西側の道を通じて9月25日に筠州に到着した)

■舟行至清遠県見顧秀才極談惠州風物之美

船は清遠^{せいえん}県の町に至り、顧^こ秀才（詳しいことは不明）に会い、（これから行く）
惠州^{けい}の風物がいかにもすばらしいか熱く語るのを聞いたという詩。

私が陛下のおそばに仕えた者であることから、

行き先々で観ようとする者が集まってくる。

これから行く^{けい}惠州は、

仙界の宮殿に住まうべき者にこそふさわしいところであるようだ。

川から漠漠^{もやもや}と湧く雲が桂の花を湿らせ、

海から^{しとしと}條條と降り来る雨^{ライチ}が荔枝^もの花を然え立たせる。

黄柑^{こうかん}は鵲^{かささぎ}に投げつけても惜しくないくらいにふんだんに稔り、

朱橘^{しゅさつ}だって値がつかないほどにいくらでもできる。

私は、さながら宮中の門に冠をかけて去った隠者のように、

惠州の山で靈薬を練る仙人を探すとしよう。

（結びの句の原文は「便向羅浮覓稚川」（便^{すなわ}ち羅浮^{らふ}に向けて稚川^{むか}を覓^{ちせん}めん）である。羅
浮^{けい}は惠州の北に連なる山、稚川^{しん}は晋の時代の葛洪^{かつこう}の字。両者とも後に詳しく見るよう
になる）

■広州女仙

上の詩にあったように、どこに行っても蘇軾^{そし}に会いたがる人が大勢いた。

蘇軾は気軽に応じたようで、^{こう}広州の町に到着すると、^{そうどうだい し}崇道大師といういさ
さかあやしげな人物と会っている。

先頃、私は都にいたときに、^{り はく}李白の作だと伝えられる詩をある人から見せられた。
そこには、

朝披夢沢雲。^{あした ひら ぼうたく くも}(朝に披く夢沢の雲)

笠沢清茫茫。^{りゅうたく きよ ぼうぼう}(笠沢は清く茫茫たり)

という句があった。これは世間の人間が言える言葉ではない。李白が^{しゅう し}酒肆にいた
ときに、ある人がこの詩を耳に聞いて得たのであろう。神仙の道は^{まこと}真に知り難いも
のがある。

^{しょうせい}紹聖元年九月、^{こう}広州を通過し、^{そうどうだい し か とうくじゅん}崇道大師何徳順を訪れたところ、その部屋に神
が降りてきて、自ら^{じょせん}女仙であると言った。たちまち詩を賦し、俗世間から超絶したこ
とを語り、^{み ぼうさ}ときに箕や帚に託して物を言い、世にいう^{し こしん}「紫姑神」と同じようであった。し
かし、女仙の言うことを味わうと、紫姑神の言えるようなことではない。人が鬼になっ
たり、鳥や獣になったり、箕や帚に託して何かものを言ったりするようなことがあるの
は、実は怪しむに足りないのだらう。崇道大師は変わった事を好み、客人を喜ばせ
ようとする人で、^{し たい ふ}大勢の士大夫と交際がある。偽りを作り上げるようなことは決してし
ないだらう。

(1) 前半の李白の句と、後半の女仙のことがどう関連しているのか、訳者にはわから
ない。(2) 蘇軾の目の前に女仙が下ったように訳したが、^{そうどうだい し}崇道大師が語ったのを聞いた

だけなのかもしれない。(3) 紫姑神^{し こ しん こう}は黄州ですで見えていたから(第6章138ページ)、蘇軾はよくあることとして少しも驚かなかったのだろう。むしろ、イカサマだと蘇軾が笑い飛ばさないことの方が訳者には驚きなのだが、嶺南^{れいなん}の地でなら他所ではありえないことも普通にありうると捉えていたのかもしれない)

■ 広州蒲澗寺

広州^{こう}にはたくさんの菖蒲^{しょうぶ}が咲く谷川^{しょう ぼ かん} (菖蒲澗) があり、そこにある蒲澗^{ぼ かん}寺を訪れてこの詩を詠んだ。この詩には蘇軾自身の注で、「広州には十二節の菖蒲がある。安期生^{あん き せい} (昔の仙人) の家だとされるものがあり、始皇帝^{し こう てい}がそこを訪れたという」と書き添えてある。「十二節の菖蒲」とは文字通り、茎に十二^{ふし}の節があるのだろうか。安期生はこの菖蒲を食べて不老長生の術を得て昇仙したとされる。

寺の僧に案内されるまでもなく、
雲の外にある山の泉へと自ら尋ね入る。
千本の古木が、地のない深い谷に臨み、
百尺の滝が天の漏れ穴へと注ぎ込んでいる。
昔、菖蒲^{しょうぶ}の生えるところに方士^{ほう し} (安期生^{あん き せい}) が庵を構え、
後には、薔薇^{ぐちなし}に向かって蒲澗寺^{ぼ かん じ}の祖師が禅を結んだ。
いま咲いているのは含笑花ばかりで、

始皇帝がここで仙術を学ぼうとした愚かさを、

その花はずっと笑っているのだ。

(1) 含笑花は南方特有の花で、蘇軾はこの詩に「山中に含笑花がたくさんある」と書き添えている。(2) 蘇軾はこのとき蒲澗寺の信長老に詩を贈っているが、陳妙な字句を並べていて訳者には意味が掴めない)

■発広州

惠州に向かって広州を発ったときの詩。惠州は広州の東隣りである。

都は日に日にすでに遠い。

この身はしかとこのようにある。

「軟飽」(飲酒)は三杯でよろしく、

その後は、「黒甜」(睡眠)を一つの枕に寄せる。

すると、蒲澗寺から遠く鐘が聞こえてくる。

黄湾(広州の海岸)ではいまようやく落ち葉が始まったところ。

天の涯といわれるようなところに来てみれば、

さして遠くにあるとは思えない。

どこにでも樵はいるし漁師もいるのだ。

(1) 第二句の「此身良自如」(此の身は良に自如たり)は、字句は平易だが意味は深い。本来の己に返るのなら、この身がどこにあろうとも、それは変わるところがないと

いうことであろう。(2) 蘇軾自身の注で、^{せつ}「浙の人々はお酒を飲むことを『軟飽』という」
「俗に睡眠のことを^{こくてん}『黒甜』という」とある。ことさらに方言や俗語を詩に用いたのは、
末句への伏線であろう。(3) 詩の終わりは、庶民の生業はどこに行っても変わらないの
だから、どこが中央でどこが辺境であるとかの区別はないという意味であろう。蘇軾は
地理的遠近、身分の上下に関係なく、どこでも誰でも等しいと見ているのである。(4)
この詩は平明で味わい深いと思うので、原文と読み下し文を添えておく)

朝市日已遠、^{ちやうし ひ すで とお}(朝市 日に已に遠く)

此身良自如。^{こ み まこと じ じょ}(此の身は良に自如だり)

三杯軟飽後、^{さんばい なんほう あと}(三杯 軟飽の後)

一枕黒甜余。^{いっちゃん こくてん あま}(一枕 黒甜の余り)

蒲澗疏鐘外、^{ぼ かん そしやう そと}(蒲澗 疏鐘の外)

黄湾落木初。^{こうわん らくぼく はじ}(黄湾 落木の初め)

天涯未覚遠、^{てんかい いま とお おほ}(天涯 未だ遠さを覚えず)

处处各樵漁。^{しょしょ おの しょうぎょ}(处处に各おの樵漁あり)

■浴日亭

^{こう}広州から東南八十里のところに^{よくじつてい}ある浴日亭で、朝の出発の際に、「浴日」
の名にちなんでこの詩を詠んだ。

けん き

剣気——ぞくっとさせられる気配が、何やら夜空に立ち昇っていた。

ぜいこう

こうわん

瑞光——吉兆を思わせる光が、暁の黄湾に明滅していた。

日の出る彼方に金色の暈が浮かび出てきたときに、

ふと、遥かに想像したのは、

せんとうこう

銭塘江を遡る潮の、雪山のような波頭。

朝の清々しさに、病んだこの身が蘇るかのように感じる。

衰えた顔から、夜中に取りつかれた何かの気が洗い流されたのだ。

たちまち鳥が動き出し、旅人も出発する。

日もあわただしく、もう山々の上へと飛び上がっている。

((1) 海の近くにまで来て、昇り来る朝日に、杭州の銭塘江を遡る潮のありさまを連想したのである。(2) 訳詩ではうまく生かせなかったのだが、三句目から七句目まで、それぞれ冒頭に、「坐そにみ看る」「遥はるかにおも想う」「已すでにおぼ覚える」「更さらにわずら煩わす」「忽たちまちおどろ驚く」と、時間の経過を叙述する二文字を置いてリズムを出している)

■題羅浮

蘇軾は惠州に入り、道教の霊場として有名な羅浮山らふざんに立ち寄り、この訪問記録を残した。羅浮山は最も高いところは1296メートル、山中に大洞窟があり、仙人が住むといわれていた。この後、蘇軾の詩文に羅浮山の名をしばしば見ることになる。

紹聖元年九月二十六日、東坡翁は惠州に遷る途中で、舟を泊頭鎮に繋いだ。
翌朝、肩輿に乗って十五里、羅浮山に至った。延祥宝積寺に入り、天竺瑞像に
礼拝し、梁の時代の僧の景泰禪師に所縁のある卓錫泉の水を飲んだ。その味わ
いは川の水を遙かに超えてよいものだった。東に三里で長寿観に至り、さらに東北
に三里で沖虚観に至り、晋の時代に葛洪が仙薬を焼いた竈の址を見た。その隣
に、諸仙人が北斗真君を拝む朝斗壇があり、壇上に銅竜が六体、銅魚が一体
ある。壇の北に朱明洞があり、草木で塞がれていて入ることができなかった。洞窟
から水が出て、琴筑のような音を響かせ、水の中に菖蒲が生えている。道士の鄧
守安、字は道玄がいて、道を得た者であるというので、訪ねてみたが、たまたま他
出していた。遺履軒に座って、麻姑峰を望み見て、酒を飲もうとすると、進士の許
穀が遊びに来たので、呼んで一緒に飲んだ。すでに酔い、宝積寺に帰って泊まっ
た。夜に強い風が吹いて、山は焼けるようで、何かの声がした。朝に粥を食べ、船
に還り、花光寺で休憩した。

この遊びに同行したのは、末子の蘇過、巡検の史珪、宝積寺の長老齊徳、延祥
寺の長老紹冲、沖虚道士陳照明であつた。山中の行くべきところでその暇がなか
ったのは、明福宮、石楼、黄竜洞。来年の三月にはきつとまた来ようと思う。

(1) 葛洪の名が挙げられているが、後に何度か出てくるので、説明を加えておこう。

葛洪（字は稚川、号は抱朴子）は蘇軾より 800 年ほど昔の晋代の人で、政界で活躍し
た後に、晩年になって金丹（仙薬）をつくるために、その原料の産地であるベトナム方
面に行こうとしたが、広東にまで至ってそこの知事に引き留められ、羅浮山に入って仙

薬を作ったり、『抱朴子』^{ほうぼくし}『神仙伝』^{しんせんでん}など道教に関する書物を著すなどして、最後は仙人となって昇天したといわれている。(2) このときには会えなかった鄧守安^{とうしゅあん}とは後に交流がある)

■書卓錫泉

上の文章中にあった卓錫泉^{たくしゃくせん}について書いた短文。

錫杖泉^{しゃくじょうせん}は羅浮山^{らふざん}の宝積寺^{ほうしゃくじ}にある。景泰禪師^{けいたい}が錫杖^{しゃくじょう}で卓^{たく}いたところであることから、卓錫泉^{たくしゃくせん}ともいう。

蘇軾はこのように言う。

私は昔^{べんが}、汴河^{わいが}から淮河^{ちようこう}に入り、長江^{うか}に泛^{さんきやう}んで、三峡^{しよく}を遡^{なまぐさ}って蜀^{しよく}に帰^きった。それまでの間は淮河や長江の水を飲み続け、蜀に至^{いた}って井戸の水を飲むと、腥^{なまぐさ}くて渋いと感じた。百日余り経つと、安らかに飲めるようになった。長江の水が蜀の井戸の水よりも甘いことをはっきりと知ったのである。

私は嶺北^{れいほく}からここに来るあいだに、揚子^{ようす}から長江の水を飲み始め、南康^{なんこう}に至^{いた}って川はますます清く速く流れるようになり、水はますます甘くなった。さらに知ったのは、嶺南^{れいなん}の川は嶺北の川よりもよいことだ。近頃^{せいんきんきやう}、清遠峽^{へきぎやく}に入ると、水の色は碧玉のようで、味はますます優れていた。いま羅浮山に遊んで、景泰禪師の錫杖泉を酌んでみると、清遠峽の水でさえその下におかなければならないものである。嶺南の人々は茶の優劣を競うのを喜ぶので、この水は虚しくここに出たわけではないのだ。

しょうせい

紹聖元年九月二十六日書く。

(1) 広い中国を旅すれば、水の味わいはいろいろに変わるのだろう。(2) 最後の日付はやや疑問である。ひとつ前に見た訪問記録が正しいのなら、この文章が書かれたのは少なくとも9月27日以降でなければならないのだが)

■遊羅浮山一首示兒子過

蘇軾^{ら ふ ざん}は羅浮山で詩を詠み、息子の蘇過^{そ か}に示した。

(この詩には羅浮山^{ら ふ ざん}や仙術に関連する様々な事柄が詠み込まれ、それらについて蘇軾自身による多数の注が付記されていて、なかなか煩わしい。親馬鹿ぶりを敢えて演じているところもあって、戯れの作であることから、大意をとって軽く訳すだけにした。注は省略して、ごく一部を訳詩中に組み入れた)

天上界^{はくぎょくけい}にあるはずの白玉京がなんとこの人間界にあった。

それは、羅浮山^{ら ふ ざん}——

ここは、あまりの高さに、夜中に日が昇って鶏がひと声鳴く。

山上にある南楼^{なんろう}は泰山^{たいざん}の日觀峰^{にちかんほう}ほど高くないにしても、

太陽とともに奔る鬱儀^{うつぎ}という仙人^{しゅめいどう}は、毎朝この朱明洞に挨拶にくる。

かつてここに棲んだ葛洪^{かつこう}は、東坡居士^{とうぼこじ}の師匠で、

前の世において真の契りを結んだのだが、

東坡居士は流落して朝廷の一員になりさがったために、

東坡居士の小さな田はいまは誰も耕す者がいない。

どう かい 道華は師匠の菓を盗み食^{なつめ}いしてちゃっかり昇仙したというし、

けい きょ 契虚は立派な僧でありながら、人に仇をなす身中の虫を退治し損なったというから、
人それぞれにいろいろなことがあるのだろう。

空に連なるようにして鉄橋や石柱があつて、

そこに至る者はほとんどいないと聞けば、

飛びゆく猿を追って行こうと、杖を手に奮い立つのだが、

雲に閉ざされた暗い谷には吠えない虎が潜んでいるとか、

ほく と しん くん 北斗真君を拝む朝斗壇^{ちよう と だん}には獰猛な竜がありありと姿を見せもするとか、

いささか怖気づかざるをえない。

我が末子はまだ年少ではあるが、なかなか立派な志があつて、

夜中に起きて精神を養い、

近頃は戯れに『凌雲賦』^{りょううん ふ}を作り、かなりの勢いがある。

書物を背負って、私に付き従つてとうとうここにまで来てしまったところ、

この仙人たちは新しい建物の銘を作ろうとしているようなので、

そなたと私とで競ってみるのも悪くはないだろう。

それが完成したなら、我が弟にも見せるために、

かて 糧を包んで万里の旅に上るがよい。

■十月二日初到惠州

10月2日、蘇軾^{けい}は惠州の町に到着した。定州^{てい}を発ってからほぼ半年が経過していた。

惠州^{けい}に来てみると、

明らかにかつてここで遊んでいる……

それは夢の中であったか……

漢^{かん}の時代に、劉邦^{りゅうほう}が新しい町を造ったとき、

連れてこられた人々は、ここは昔から住んでいた場所だと喜び、

鶏も犬も己の部屋がどこにあるかを知っていたという。

——私はその鶏や犬と同じなのだ。

惠州の役所の人々は、

何の罪があって私がここにきたのかと驚き怪しんでくれる、

惠州の町の人々は、

この爺さんを迎え入れようと押し寄せてくる。

漢^{かん}の時代に、蘇武^{そぶ}が砂漠で幽閉されていたとき、

いつか帰国できると知っていただろうか。

三国時代に、管寧^{かんねい}が戦乱の世を避けて北の地に移ったとき、

結局はそこで老いることになるを知っていただろうか。

どこがよいところなのか、誰にもわかりはしない。

ここに「嶺南万戸」という酒があって春の味がする、

それもそのはず、嶺南の万戸はいつでも春の色を帯びているのだ。

ここにはきつと居候を迎え入れてくれる風流人がいるに違いない。

（蘇軾は流謫の地にきてても弱音を吐かない。痩せ我慢でもなく、偽りの強気でもなく、言葉の上だけで笑い飛ばそうというのでもない）

■至惠州謝表

10月2日、惠州に到着したことを皇帝に報告するこの謝表を書いた。

臣は先の辞令によって、二つの職より落とされ一つの官より追われ、承義郎知英州軍州事となりましたが、続けての辞令によって、寧遠軍節度副使惠州安置の処分を受け、今月二日に惠州の役所に到着しました。御仁聖によって曲げて臣の命を全うさせてくださり、民のために一郡を守らせようとなさったのでありましたが、もろもろの議論が撃ち交わされ、必ず臣を死に至らせようとしたのでありました。それでもなお寛くせよとの御恩を賜り、よって辺境の地に置かれるにとどまったのであります。臣の感謝するところであります。

伏して念いますに、臣は本性からして偏って浅く、学術は荒唐であって、しかも愚かさを少しも改めなかったために、ついに赦されることのない咎を成してしまったのであります。その狂妄の跡を見るならば、これまでもずっと誅罰しなければならぬものであったのです。しかも、口のために窮まってしまい、その罪はもはや数えき

れないまでになったのでした。それでもなお生きていられますのは、天の幸いという以外にないのであります。これは、皇帝陛下の大きな包容力よって、他の人には我慢のならぬこともよしとされる政にお遇いしたことによるのであります。……(故事を引いて以上述べてきたことをさらに強調する)……。

臣は仁の至りに命を託し、心を洗って自ら新たになるよう努め、死に及ぶまで怨むところはないのであります。気候が悪く魑魅が隣に住むような土地でありますから、衰えと疾に交互に攻められ、帰郷できるとの望みはもとより持っておりません。精誠はいまだ失せてはおらず、死に至るまで忠義を尽くすものであります。

((1) かつて黄州に流されたときにも、自身を新たにすると、蘇軾は誓い(第6章39ページ)、真剣に取り組んだのだが、今回はどのようなであったのか、これから見てゆくことになる。(2) 惠州は広南南東路に属し、帰善県、河南県、博羅県、海豊県を治め、州の役所は帰善県に置かれた)

■寓居合江楼

蘇軾は惠州到着後しばらくの間は、合江楼の官舎に滞在した。東江(竜江)と西江が町の東側で合流するところに建っていることからその名がある。そこで詠んだ詩。

(以降の詩文では、河川に対して蘇軾は一貫して江の字を用いている)

海のほとりの蔥朧とした山はまことに佳いたたずまい。

二つの江が^{かわ}合わさるところにある^{あか}朱い楼閣から眺望が開ける。

仙人の棲^{ほうらいどう}む蓬萊島も方丈島^{ほうじょうどう}もきっとここから遠くはないのだから、
この蘇先生のために江に浮かんでここにぶかぶかと来てくれたりしないだろうか。

江からの風に涼しさを覚え、眠りはまことに結構、
楼閣^{からす}の上で啼く鴉に呼ばれて起き出す。

いま私は、西に流れ落ちる^{はくじつ}白日と東に流れるゆく江と同じように、
身と世と互いに行き違いになってしまっている。

かくて、楼閣の中の私は老いつつ、
しかしながら、日に日に気分は爽快になってゆく。
思うに、天上界には愚^くかしく^{ごと}繰り言を言う仙人は一人もないだろう。

仙人の島がすぐ近くにあるとしても、
まだそこに帰れるわけではないのだから、
我が思いは一杯の「羅浮春」^{らふしゅん}に託すでしょう。

((1) 惠州^{けい}の町から海までは数十キロある。大陸人の感覚では、それでも十分に海辺の町であるのだろう。(2) 後半で、自分はもう仙人の一人になるのだから、繰り言は言わないと詠んでいる。大庾嶺^{だいゆれい}を超えてから、蘇軾^{そし}はすでに仙界のメンバーカードをすでに持っているかのように詠に歌っているのである。(3) 最後の句には、蘇軾自身の注で、「我が家で醸^{かも}した酒に『羅浮春』と名付けた」とある)

■試筆

筆を試すという詩。題を「自笑」^{じしょう}とする本もある。

硯^{し せき}は「子石」——玉^{ぎょく}を磨いたかのようなのである。

墨^{えんえん}は「遠煙」——煤の塊を削ってまことに真黒である。

それらを病んだ我が手に取ると、

勢いよく黒い雲が湧き出てくる。

この中に何の好^よさがあるのか、

私は喜んでそこに迷い込むのである。

下駄^{ろく}にひたすら蠟^{げん ぶ}を塗っていた阮孚、

柳の下で鍛冶仕事にふけた^{けいこう}嵇康、

私もそうした奇人の類であろう。

酔って筆を揮えば、天の完全性を得て、

宛^{うねうね}宛とのたくるありさまは「天投霓」^{てんとうげい}(竜に似た霊物)さながらである。

大いに感謝しなければならないのは、

この静かな暮らしの友となっている筆があることだ。

(子石^{し せき}と遠煙^{えんえん}はそれぞれ硯^{げん ぶ}と墨^{けいこう}の名。阮孚^{げん ぶ}と嵇康^{けいこう}は、蘇軾が以前にも詩に引用していた奇人。他の人から見たらばかばかしいことに打ち込んでしまう人の仲間に自分もいると蘇軾というのである。蘇軾は、先の謝表で、口のために窮まってしまったと書いていながら、やはり筆を持ち、詩文を作ってしまうのである。読書をやめる気はないと前に

宣言もしていた（本章70ページ）

■無題

このころの思いを歌った詩。

六十の歳が間もなく開かれようとしている。

世間との縁はますます疏^{うと}くなるばかりだ。

我が宝は貪らないこと……

車に乗る代わりに静かに歩む。

故郷には木々が高く繁り、

父の小さな家がいまもあるだろう。

誓うのは、

何事もなく閑散と暮らして、一行の書さえも著さない。

（最後の誓いが守られるはずのないことは上の詩で見ている）

■浣溪沙

恵州の役所から西に八十里の大雲寺に遊んでこの詞を作った。序文がある。

紹聖元年十月十三日、程郷県知事の侯晋叔と、帰善県の役人の譚汲と大雲

寺に遊んだ。松の下で酒を飲み、松黄湯しょうおうとう(薬湯)を用い、この詞を作った。我が家では近ごろ酒を醸し、かも ばん か しゅん「万家春」と名付けた。嶺南万户れいなんの春の酒というわけである。

羅襪空飛洛浦塵。(都の塵の中を歩んだのもいまでは空しいこととなりました)

錦袍不見謫仙人。(皇帝から錦の袍を賜った李白うたぎ(実は蘇軾のこと)はどこにいますか)

携壺藉草亦天真。(酒を携えて草に座るのもまた天の真なのであります)

玉粉輕黄千歳薬。(玉のような黄色い粉は千年の寿命を延ばすという薬)

雪花浮動万家春。(雪のような花が浮いて動くのは「万家の春」)

醉歸江路野梅新。(酔って帰れば、江べりの道に野の梅が新たに開いています)

((1) 前に嶺南万户れいなんばん この酒があるとし(本章 81 ページ)、家で羅浮春の酒を作ったとし(本章 84 ページ)、ここでは「万家の春」の酒があるという。すべて異なるものであるのかどうかよくわからない。(2) 南国の惠州では 10 月に早くも梅が咲き出したのだ)

■思無邪丹賛

10 月 18 日、蘇軾は合江楼から嘉祐寺に移った。その一室を「思無邪齋」と名付け、そこで「思無邪丹」と名付けた仙薬を作ろうとし、この賛を書いた。

((1) この賛は仙薬の効能と製造法を歌っていて、訳者には理解不能なので、原文をそのまま掲げておく。大筋としては以下のようなことを言っているのだろう。「丹田」たんてん

の下にあると想定された臓器)は極めて重要な器官で、そこに特殊な作用を及ぼして完全で乱れることのない精神よこしま(邪なことを一切思わない)を養う薬を、賛の6句目にある「鉛えん汞丹砂」を原材料として作る。もとより、鉛も汞(水銀)も丹砂(硫化水銀)も有毒物質であるのだが、天の運行と呼応する霊妙な製造法を用いるなら、目指す薬「思無邪丹しむじやたん」ができるのである。(2) 化学実験を好む蘇軾は、惠州にきてから仙薬作りに熱中し、それに関連する幾つかの文章を残している(この賛と同様に多くは訳者には理解不能で割愛せざるをえない)。仙薬は、次の文章にもあるように、もちろん完成しなかったし、蘇軾が試作段階で服薬してみたということもなかったようだ。飲んでいたら心身の不調が現れ、よこしま「邪なことを思わない」という「思無邪」とは正反対の効果が出たに違い、とうだい(唐代の皇帝には仙薬を服した者が幾人もいて、喜怒哀楽の情が常軌を逸したり身体の調整機能が乱れたりするなど、心身を著しく害い、いずれも早世した))

飲食之精，草木之華。集我丹田，我丹所家。
我丹伊何，鉛汞丹砂。客主相守，如巢養鴉。
培以戊己，耕以赤蛇。化以丙丁，滋以河車。
乃根乃株，乃宝乃華。昼煉於日，赫然丹霞。
夜浴於月，皓然素葩。金丹自成，曰思無邪。

この賛は筆にまかせてそのまま書いたもので、何らの変更も加えていない。ほとんど天が成したといってよく、我が意をもって造ったのではない。
こころ

■事不能両立

仙薬作りに関連する一文。

白居易^{はくきょい}は(左遷されたときに)廬山^{ろざん}に草堂を作った。それは丹薬を焼くためのものであった。薬が完成しかけたときに、^{いろり} 爐と^{かなえ} 鼎が壊れてしまった。その翌日^{ちゆう}に、忠州知事に任命するとの辞令が届いた(左遷が赦された)。

そのことから、世間に関わることと、世の外に出る(仙人になる)こととは両立しないと知れる。

私にも同じ志がありながら、ついに完成しないのは、やはりまだ世間に関わるのがすっかり終わったわけではないからであろうか。今日もまた失敗した。

『尚書^{しょうしょ}』に「民の欲するところは、天は必ず従う」とある。まことにその徴^{しるし}はあるのだ。

紹聖^{しょうせい}元年十月二十二日。

(「思無邪齋^{しむじやさい}」で仙薬を作ろうとして失敗が続いた。この文の終わりの意味は、自分はまだ官僚として国と人民のためにひと働きするようになるのかもしれないと、蘇軾^{そし}は考えたということである)

■朝雲詩

12歳のときから蘇軾^{そし}に従ってきた王朝雲^{おうちやううん}のことを詠んだ詩。序文がある。

世間ではこのように言っている――

白居易^{はくきょい}は老いて、駱馬^{らくば}(愛馬)を売り、楊柳枝^{ようりゅうし}(歌妓の樊素の綽名)を放とうとした。

馬も歌妓も忍び難い思いを示したので、白居易はそれに感じ入って詩を詠んだ。

一方で、劉禹錫^{りゅううしやく}の詩にはこのようにある――

春尽絮飛留不住、(春は尽き、絮は飛んで留むれども住まらず)

隨風好去落誰家。(風に随って 好し 去って誰が家に落ちるのか)

また、白居易の詩にはこのようにある――

病与楽天相伴住、(病は楽天と相い伴って住まり)

春随樊子一時歸。(春は樊子に随って一時に歸る)

これらからすると、樊素はついに白居易のもとを去ったのである。

私の家には数人^{しう}の妾^{しやう}がいたが、四五年の間に相次いで辞去した。朝雲^{ちやううん}だけが私に随^{うつ}って南に遷^{うつ}ってきた。

白居易の詩集を読んで、戯れにこの詩を作った。

朝雲^おの姓は王氏^{せんとう}、錢唐^{こう}(杭州)の人で、かつて子がいて幹兄^{かんじ}と呼んでいたが、一年にならずして亡くなってしまった。

(1) 蘇軾^{はくきょい}は白居易^{はくちくてん}と似ていることを強く意識しつつ、実は大いに異なっているとしばしば主張している。ここもそうで、白居易と違って蘇軾は愛する女性をずっと近くに置いているのである。晩年に至って、2人の距離はいろいろな面で急激に開いてゆく。(2)「数人^{しう}の妾^{しやう}がいた」との記述は興味深いが、どのような女性であったのかは詳らかではない。(3)王朝雲^{おうちやううん}が生んだ子が満1歳になる前に死んだことは第7章55

ページで見ている)

楊柳枝(ようりゅうし) はんそ はくきょい
楊柳枝(樊素)が白居易と別れたのと、似ていない。

かん つうとく れいげん
(漢の時代に)通徳(つうとく)が伶玄(れいげん)(非常な才女であった)に伴い続けたのに似ていよう。

しん あど らんしゅう
(晋の時代に)阿奴(あど)がいつまでも母の絡秀(らんしゅう)と一緒にいたようにはならなかった。

天女(てんむ)が維摩(いま)とともに仏陀の教えに通じたように、私とともに禅を理解するようになった。

ここでの新しい暮らしは経巻と薬爐(くわ)に親しむものであるけれど、

舞うときの衣装や詩を記した扇(あふぎ)には旧くからの因縁(いんえん)がなお残っている。

丹葉(たんえつ)が完成したなら私を逐(おし)って仙界(せんがい)に行くのであって、

ふざん
かの巫山(ふざん)の神女のように艶(えん)っぽさを現世に残すようなことはしないのだ。

((1) この訳文は全く自信がない。王朝雲(おうちょううん)のために詠んだ詩で、2 人の間で了解できればよいので、他人は理解するのが難しいのは仕方ないのだろう。(2) 前半は幾つかの故事を引用しつつ、王朝雲とはいまは仏教や道教の奥義を窮めようとする同志のような関係にあると歌っているのであろう。(3) 最後の句は、楚(そ)の王が夢に巫山(ふざん)の神女と交わりを結んだという伝説を逆用して、もはや 2 人は性愛を超えた間柄にあると言っていいのであろう)

■寄虎兒

弟の蘇轍(いん)は筠州(いん)に流され、3 人の息子のうちやはり年少の蘇遠(そえん)だけが同行

した。これは蘇遠に寄せた詩。詩題に「虎児に寄せる」とあるのは蘇遠の幼名が虎であるからだ（第7章7ページ）。

独り桃榔の樹に寄り添って立ち、

ときに華撥の根を掘り起こす。

私のこの生き方を、君は拙いと見るだろうか。

とにもかくにも、南の果ての村でこのように老いの日々を送っているのである。

（これは南国の風光に身を置き蘇軾の自画像であろう。桃榔（クロツグ）はヤシ科の木で、高さ数メートルになり巨大な葉を付ける。華撥はコショウ科のつる性植物で、果実や葉が薬として用いられる。桃榔、華撥ともに南国を象徴するものとして詠まれている）

■十一月二十六日松風亭下梅花盛開

「十一月二十六日、松風亭の下の梅の花が盛んに開く」という題。松風亭は、蘇軾が身を寄せた嘉祐寺の近くの山にあった。この詩には次のような蘇軾自身の注が付されている。「私は昔、黄州に赴いたときに、春風嶺の上で梅の花を見て、二首の絶句を作った。その翌年、岐亭に往き、道の途中で『去年の今日 関山の路、細雨 梅花 正に 魂を断つ』と詩に賦したのだった」。かつて黄州で詠んだ詩は、それぞれ第6章25ページ、第6章141ページで見ている。

しゅんふうらい わいなん
春風嶺の上、淮南の村、

我が魂は、梅の花によって断たれそうになった。

そのときには知る由もなかった――

またしても流落の身となり、

南の国の荒い風に吹かれ、

見慣れぬ獣を濡らす雨に打たれつつ、

たそがれ
黄昏どきに愁いて梅の花を見るようになるとは。

しょうふうてい いばら
松風亭の下の荊棘の先、

二株の梅が、玉のような花を朝日よりもまぶしく輝かせている。

長い枝は、ライチ荔枝の並ぶ水辺へと半ば落ちかかり、

ふ臥した幹は、こうろう桃柳の繁る園にひとり際立った姿を見せている。

花の奥深い光――それは夜のとばりを留めているかのよう、

花の色の冷ややかさ――暖かいはずのこの地の冬も寒化してしまうかのよう。

南の海の彼方の仙界の雲が、おめかしして軒下へと墮ちてきたのか、

それとも、白い衣の女性が月の下を歩み来て、門を叩くのか。

酒から醒め、夢からも覚め、起って梅の樹をめぐる、

梅には妙なる意がある……きつとある……だが、何も言ってくれない。

先生よ、残念がることは何もない、

月が、ほら、觴の中を覗いている。

(後半にある「海南仙雲嬌墮砌、月下縞衣来扣門」(海南の仙雲 嬌にして 砌に墮ち、

げっ か こう い きた もん たた
 月下の縞衣 来りて門を叩く)は蘇軾^{そしつ}嫌^{きら}いの人も激賞する名句とされていたようだ。そこだけを切り出すなら、技巧を駆使した対句として褒めることになるのだろうが、この詩全体としては、まだ馴染めない南国の風光の中で、梅は親しんできた姿のままで、なおかつ^{こう}黄州での思い出も想起されて深く感じるものがあると歌っていて、それが読む人の心を打つのではなかろうか)

■再用前韻

上の詩と同じ韻を用いた再び詩を詠んだ。

ら ふ ざん
 羅浮山の下に梅の花の村、

ぎょく
 玉のような雪を骨とし、氷を魂として花が開く。

ちらほら かか
 紛紛と咲き出すと、月が樹に挂るかと疑われ、

きらきら
 耿耿と光るのは、星が夕暮れに現れ出たかのよう。

先生は海のはとりに寂しく住み、

病んだ鶴が荒れた園に^{しゅんぱり}悄としているのとそっくりであるようではあるが、

鶴は、天の香りとも国の美ともいふべき梅の花を顧みたりはしないし、

先生は、酒が入ると詩がますます清く温雅になる。

ほうらいきゅう
 ここに蓬萊宮からの使いであろうか、

緑の鳥が朝日の中でさかさまになって枝にとまった。

鳥は花のかたまりを抱え、先生が酔って伏しているのを窺い見ると、

自分よりも先に啄木^{さつつき}を遣わし、
門をこつこつと叩かせて、
「麻姑^{まこ}仙^{せん}女^{にょ}があなたをお訪ねしますよ、
急いで掃除してお待ちなさい」
と、告げさせた。

とたんに、鳥が歌って舞い、花も何やらものを言い出した。

酒が醒めると……

山は静まり返っていて、人は誰もいない、
空っぽの盃に花びらが貼りついているのだった。

((1) 仙界のメンバーカードを持つ蘇軾は、ファンタジックな空想をふくらませて詩を詠んでいる。(2) 「緑の鳥」の部分には、蘇軾自身の注で、「嶺南^{れいなん}には珍しい鳥がいて、倒挂子^{とうけいし}という。羽毛は緑で、口ばしが紅く、鸚鵡^{おうむ}に似た小さな鳥である。東の海からきて、俗世にいる生き物には見えない」と付記されている。「倒挂子」はその名のままに枝にさかさまに止まるという)

■花落復次前韻

梅の花が散ったときに、また同じ韻を用いて詩を詠んだ。

仙界^{ぎょくひ}の玉妃(梅の花)は、
雨のそぼ降る村に流謫の身となっていた、

先生は玉妃を慰めるために詩を作る――

「人間界の草木には、私と対になるものはありません。

月に奔って桂の木と一緒にいるのです」

梅は名残の香りをそっと春の短い夢に忍ばせ、

小さな園の枝に青い実を結んで去ってしまった。

先生は花を惜しんで、毎夜、人を呼んで飲み続けた。

雪の膚^{はだえ}(梅の花びら)が散り敷かれて地面を温めてくれ、

松明を灯し、愁いのままに睡らず^{ねむ}にいて、

井戸より水を酌んで、その清らかさを腹に入れると、夜が明けた。

先生は、来年は六十になり、

道を見る眼を定め、すでに仏門に入ろうとしているのだが、

もとより多情で事を好むためになお俗気に染まったまま、

花を惜しんで、じっと無言でいることができない。

物に引かれて心をそこに留めてしまうのは先生の過ちである、

ならば、笑って百罰を受けて、盃を空っぽにしようではないか。

(この3首の梅の詩は、^{こう}黄州に着いてすぐのところに詠んだ^{かいどう}海棠の詩(第6章52ページ)に似るところがある)

■白水山仏跡巖

^{はくすいざん}白水山の^{ぶつせきがん}仏跡巖で詠んだ詩。白水山は、^{けい}惠州の町から東北二十里、^{らふざん}羅浮山

(本章 76 ページ) の東にあり、仏跡巖は、巨人の足跡のような深さ二寸ばかりの窪みが点々と存在する岩。

ほうらいとう

蓬莱島の島守とは何人であったのか、

夜中に左の股を失い、

うずくま おおとり

それが蹲る鵬のような形の浮き島となり、

たちまち天を覆うばかりの羽を伸ばし、

ら さん

飛んで羅山に激突した。

根も株も合体し、崖や峰が呑み合おうと争うばかりのありさまとなった。

たくみ

ふいご

天の工は炉や鞴をつかって、山を融かし山を繋げ、

いまに至るもそのときの継ぎ目が残っていて、

そこから大きな滝が流れ出ているのである。

浮き島と羅山が合わさるときに、

さしまね

天上の匠は月の斧を靡いて用いたのだが、

ひかざき

天帝の觴からの滴りに酔っぱらってしまい、

山々はなお未完成で、

谷は酔って舞い踊るありさまでいる。

海からの風で山が凝固する前に、

古の仏がここに来て足跡を残した。

おうもう

それは太古の罔罔氏に似て、

足を地に投じたときに親指の痕を付けなかった。

浄土の蓮は見えないながらも、

天の花のような恵みの雨が太古の昔から降り注ぎ、

二つの溪が九回も折れ曲がりつつ、

一万の馬が太鼓の音に合わせて踊り上がる勢いで流れ下り、

雷を走らせ、玉の雪を^{ぎよく}濺いで、深い淵が穿たれ、

その奥底に水の神の宮殿がある。

水底に潜む鱗は飢えた^{みずち}蛟のもの、

虎が喉を潤しにきたなら、尾を^{ふる}掉って呑み込んでしまうのだ。

私がここに来たのは、ちょうど酔い心地であったので、

蛟を侮って足を濯いだ。

すると、つむじ風が起こって電を巻いて飛ばし、

強い弓で放たれたように顔を掠めた。

「山の霊よ、

私のことを激しく憎まないでくれたまえ、

このちっぽけな命を取ったところで何にもなるまい、

私はこの山で老いていこうと思っているのであって、

慎んで厭わずに、我が願いを受け止めてほしい、

どうか溪の流れを春の酒に変えていただきたい、

山と私とで、差しつ差されついたそうではないか、

さらには、青い竹を^{かいつひ}連ねて筧として、

下の葉草園に灌^{くわん}つもりである」

((1) この詩の前半は、海から飛んできた浮き山^{ふきざん}(浮山) がもともとあった羅山^{らざん}に激突して羅浮山^{らふさん}になったということを歌っている。あたかも現代の地球科学が説くプレートテクトニクスの理論のようで愉快である。(2) 全体として、空想が空想を生む、とにかく不思議な詩である。嶺南^{れいなん}の空気が霊的なインスピレーションを喚起させたのだらう)

■詠湯泉

^{はくすいざん}白水山には湯の湧き出す泉があり、それを詩に詠んだ。すぐ近くには冷たい水の湧く泉もあって不思議がられていたという。

火といえば――

水を積み上げると、巨大な^{えんじゆ}槐を焚いたような火を発するという、
油を蓄えすぎたために、火を噴いて、武器庫を焼いてしまったことがあった、
^{しよく}蜀には火を燃やし続ける井戸があった、
火に投じると、塵だけが燃えて、洗われたようになる火浣布がある……
火について聞いたことをここに並べたものの、
我が耳目には残念ながらひどく^{せま}隘い見聞しかなく、
陰陽の作用によっていかにして火が生じるかを理解できていない。

山で鬱攸^{ぼうぼう}と火が烈しく燃え、
湯の泉が譬沸^{ぽこぽこ}と湧き出している。

喉を渴かした獣たちを驚かせるだけでなく、
癡な児^{あほう} (蘇軾^{こども}) も怖れさせる。

魚や亀は湯の泉ではとても生きながらえられない、
せいぜい狐や兎を煮ることならできであろうか。

山の中には、木客^{ぼくきゃく} (木の霊) がいるようで、
ときどき脱ぎ棄てられた草鞋を見るのは、
ここの湯につかりにきているのだらう。

ここは、町の人々が拳^{こぶし}って入りこくには遠いけれど、
皇帝が遊び呆けて国を亡ぼす原因になったと、
つまらぬ汚名を温泉が被ることはない。

((1) どうして熱い湯が地下から湧いてくるのか、蘇軾は納得できるメカニズムを考え出すことができない。(2) 長江以南^{ちやうこう}は長らく森林に覆われ、深い森には妖怪^{ぼくきゃく}=木客が棲むといわれ、木客にまつわる数々の怪異譚が伝わる。(2) 最後は、玄宗皇帝^{げんそう}がしばしば楊貴妃^{ようきひ}を伴って驪山^{りざん}の温泉に遊んだことを踏まえていて、驪山はなまじ都に近いところにあつたために、国の乱れの一因になったとの汚名を着せられてしまったというのである。それはすなわち、蘇軾自身にも当てはまることなのだろう)

■新醸桂酒

桂酒とは強い^{けいしゆ}香り^{につけい}のある肉桂を加えた酒。蘇軾は桂酒を作ってみてこの詩を詠んだ。

香^{から}り^み辣味がある肉桂^{につけい}を搗^ついて篩^{ふる}って酒の瓶^{かめ}に入れる。

春の溪に水がいっぱい^{にこ}にあふれ、雨を帯びて渾ったかのようになる。

桂^{かつら}の木とは仙山に生えるもの、

——それを集めて祭りの酒を造る甕^{かめ}に納める、

桂の木とは月に生えるもの、

——それを芳しい樽に呼び入れる。

酒の材料は、我が門下生が持ってきてくれた、

野菜の束は、いつもながらに地主の恩で頂戴できる。

葵^{あおい}をひたひたに煮^{スープ}て羹にし、

桂酒^{けいしゆ}を酌んで飲もうではないか。

このような風流が味わえるのは、

南に果ての村でなければならぬというのがちと残念である。

（訳詩では「南の果ての村」と穏やかな表現にしたが、原詩は「蛮村^{ばんそん}」である。嶺南^{れいなん}は中国の文化圏の外の世界であるというのが当時の一般的な認識であった。そうした「蛮村」に身を置かねば味わえないものがあると、詩の結びに歌っている）

■江郊

かわ

江べりの風光を詠んだ詩。短い序文がある。

けい

き ぜん

とうこう

恵州帰善県の役場から北に数百歩で東江に至る。少し西に行くとわたかまる岩があり、その下に小さな潭ふちがあって釣り糸を垂れるのにちょうどよい。よって「江郊」の詩を作った。

かわ

江べりの野に木がこんもり繁り、

雲と水がきらきらと輝く。

川岸がぐいと曲がり、

ふち

潭でぐるぐると流れが回る。

先生はここを悦び、

むしろ

うたげ

蓆を敷いて静かに宴を催す。

朝日が下を照らし、潜む鱗を俯して見ることができる。

釣りおもを意いづけれど、魚をとることを忘れ、

竿から糸を垂らすことだけを楽しむ。

ゆう

かな

ゆう

かな

優なる哉、悠なる哉、

自然の変化に遊ぶのである。

(この詩は一句が四文字の特殊な形式で作られている。古風な民謡調という趣なのであろう)

■詹守携酒見過用前韻作詩聊復和之

詩題は、「惠州知事の詹範が酒を携えてやってきて、先の『桂酒』の詩に和して詩を作った。それにさらに和した」。

あぐらをかき、古い甕かめを叩いておかしな歌をうたう、
毛をむしって、さながら遊牧民のように、肉を焼く。
村の市であれこれ呼んでものを集め、
客人を引き連れて行き、
いつもの釣り場所を掃除し、
そこに酒樽を置く。
山辺に住む悪童どもが出てきて、酔客が舞うのを、見物する。
川辺に放置されていた白骨は、
この知事殿には、すでに恩を感じている。
西南を望めば、
ぽつんと雲が浮かび、日が落ちてゆく、
鴉からすは己の村を識しって帰ってゆく、
それを羨んでずっと眺めやる。

((1)「白骨」について、蘇軾自身の注で、「時に詹知事は野にさらされている骨を拾って葬ることを検討していた」と記されている。このあたりでかつて戦乱があって白骨が

そのまま放置されていた。詹知事がそれを拾い集めて埋葬したことは、立派な治績の一つとして記録に残されている。(2) 詩の最後は、カラスは帰るところ知っているのに、自分はどうかと、嘆いているのである)

■書潤州道上詩

蘇軾^{けい}は惠州で大晦日を迎え、かつて杭州副知事であったときに大晦日に詠んだ詩を書いて、短文を添えた。

行歌野哭^{こう か や こく}両堪悲^{ふた かな た}、(行歌と野哭 両つともに悲しむに堪え)

遠火^{えん か}低星^{ていせい}漸向微^{ようや かす おか}。(遠火と低星 漸く微かへと向う)

病眼^{びやうがん}不眠^{ねむ}非守歳^{とし まも}、(病眼の眠らずにいるのは歳を守るのではない)

郷音^{きやうおん}無伴^{どもな}苦思^{ねんごろ かえ おも}帰^{かえ}。(郷音に伴うものがなく 苦に帰るのを思っている)

重衾^{ふすま}脚冷^{かき}知霜重^{あし ひや しも おも し}、(衾を重ねても脚は冷やかで、霜の重さを知り)

新沐^{あら}頭輕^{もく}感髮稀^{あたま かる かみ ま}。(新たに沐して頭は軽く、髪が稀れになったのを感じる)

多謝^{た しゃ}殘燈^{ざんとう}不嫌客^{きやく きらん}、(多謝する 殘燈が客を嫌わずにいることに)

孤舟^{こ しゅう}一夜^{いち や}許相依^{あ い よ ゆる}。(孤舟の一夜 相い依るを許してくれているのだ)

私は三十九歳^{じゅうん}のとき、潤州からの道中で除夜^{けい}に当たった。それから二十年、惠州で年を越すこととなり、この詩を書いた。

(この詩、除夜野宿常州城外^{じょ や じょうしゅうじょうじょうがい や しゆく}) (除夜 常 州 城外に野宿す) は第4章 160 ページで

ている。20 年経っても蘇軾はいまだに帰郷を果たせずにいた)

■寄鄧道士

しょうせい

紹聖2 (1095) 年、蘇軾 60 歳。

道士の鄧守安に寄せた詩。鄧守安の名は、羅浮山で会おうとして会えなかった者として見ていた (本章 77 ページ)。

羅浮山には野人がいる。人々が言うには、葛稚川(葛洪)の使用人であったとのこと。

道士の鄧守安は羅浮山に棲む有道者である。かつてその庵の前で足跡を見たところ、長さが二尺ばかりあった。

紹聖二年正月十日、私はたまたま韋応物が全椒山の道士に寄せた詩を読んだところ、その詩にこのようにあった。

今朝郡齋冷、(今朝は役所もひんやりとして)

忽念山中客。(たちまち山の中の人を思った)

澗底束荊薪、(谷底で薪を拾い集め)

歸來煮白石。(庵に帰って石を煮て薬を作っているであろう)

遙持一樽酒、(遙かにひと樽の酒を贈って)

遠慰風雨夕。(遠く風雨の夜の慰めにしてみようと思う)

落葉滿空山、(しかし、人気のない山はいま落ち葉に埋もれてしまっていて)

何処尋行跡。(どこに行き先を尋ねたらよいのだろうか)

そこで、この詩の韻を用いて詩を作り、一壺の酒とともに送った。

(1) 葛洪^{かつこう}は本章 77 ページで見たように晋代^{しん}の人で、それに仕えていたのなら 800 歳を超え、前世あるいは前々とかのことであろうか。(2) 韋応物^{いおうぶつ}は唐^{とう}のなかごろの人。蘇軾^{そく}がしばしば掲げる「夜雨対牀^{やうたいしやう}」の語は韋応物の詩に由来する(第2章 21 ページ)。ここに引用された作品からもわかるように、韋応物には静かに思いを述べる詩が多い)

一杯^{いちはい}の「羅浮春^{らふしゆん}」を、
遠く山^{ゐる}で薇^とを采^とる人に贈ろう。

遙かに知る——

独り酌み終わると、松の下^との石に、貴君は酔い臥すであろう。
奥深い趣のあるその人は、やたらに見るべきではないのだろう。
月の夜に、清らかに嘯くのを聞くのである。
庵の中の人にいささか戯れて、
さっと飛んで行って、酒だけを置き、
他^とには何の跡を残さずに帰るのだ。

(1) 蘇軾^{そく}は自家製の酒に「羅浮春^{らふしゆん}」と名付けたことは本章 83 ページで見ている。
(2) この詩を見ると鄧守安^{とうしゅあん}は俗世間との交渉を断った隠者のようであるが、実はなかなかの活動家であることを後に見ることになる)

■記遊松風亭

嘉祐寺かゆうじの近くにある松風亭しょうふうてい (本章92 ページ) のあたりを歩いて記した短文。

私は惠州けいの嘉祐寺かゆうじに寓居していたときに、ぶらぶらと松風亭しょうふうていの下したのあたりを歩いていて、足がひどく疲れてしまった。そこで、林で少し休むことにした。

松風亭はと見ると、まだまだ梢の向こうにあって、とてもそこまで行けるとは思えなかった。

しばらくして、ふとこのように思った。

「ああ、どこでもたっぷり休めばよいのだ」

ならば、釣り針にかかった魚もたちまち解脱する……

人もこのように悟るなら、敵陣と接し合って、陣太鼓が雷のように響いて、進めば敵の前で死に、退けば軍法によって死ぬというときでも、たっぷり休むことだってできないはずはないのだ。

(蘇軾は散歩の途中で何かに大切なことに気づいた。それが何であるのか、言葉によっては伝えるのは難しく、しかし、言葉によって伝えるしかないので、この短文を記した。訳者は、ここで蘇軾の伝えたいものが何であったのかきちんと理解できていないので、この程度の訳文しか作れない。そもそも詩はそのような困難のもとに存在しているので、時に理解が及ぶようなことがあればそれだけで嬉しいのだが、散文の場合には十分に理解できないとひどくもどかしく感じてしまう)

■与程正輔七十五首之一

これは驚くべき手紙である。程之才（てい し さい あざな せい ほ字は正輔）が広南東路提点刑獄と
して管轄地域を順に視察するために広州（こう）にやって来た。程之才は州や県
の知事よりも高い地位（ていきよう）にあって、程郷県知事（こうしんしゆく）の侯晋叔を使者に立てて、
蘇軾に手紙を届けさせた。それに対する返事がこれである。

程之才とは誰なのか。蘇軾の姉を虐待死させた夫、まさしくその張本人である（第4章201ページ）。蘇軾は、程之才の弟たちとはすでに和解していたが、程之才はなおも許すことのできない極悪人であると認識していた（第10章160ページ）。朝廷はそうした2人の関係を知っていて、敢えて程之才を（けい）惠州をも管轄下に置く広南東路の重職（しかも刑罰を職掌とする）に任命したのである。侯晋叔がもたらした手紙に何が書いてあったのかはわからないが、これが蘇軾の返事である。

近頃、朝廷の使者の旗（てい し さい こう程之才）が広州に少しの間留まると聞きまして、御挨拶
に参上いたしたいと思っておりましたところ、こう ていきよう こうしんしゆく侯長官殿（程郷県知事の侯晋叔）が
来られ、伏して御伝言を承り、お志のはなはだ厚いことに深く感じ入りました。

ここのところ春はいよいよ新たに、結構な日々が続いております。遠からず東
に来れるとのこと、もしもお目にかかれますなら、まことに幸いに存じます。

（てい し さい けい程之才が惠州にくるのなら会おうと、蘇軾は返事をしたのである。果たして二人はど
のように会ったのか、しばらく後に見ることになる）

■書東臯子伝後

東臯子^{とうこうし}の伝記の後ろに書き添えた短文。東臯子とは、隋^{ずい}の終わりから唐^{とう}の初めにかけての混乱期に独自の生き方を貫いた王積^{おうせき}の号。

私は一日中酒を飲んでも、五合を超えることはない。天下の飲めない者でも、私の下にある者はいないだろう。

私は人が酒を飲むのを喜びとする。客人が杯を挙げておもむろに飲むのを見ると、我が胸中^{ひろびろ}は浩浩焉^{さっぱり}として、落落焉^{たけなわ}とする。酒酣^{さけあはれ}の心地よさは、きっと客人以上のものがある。閑居の身となって、客人のない日は一日もなく、客人が来れば酒を置かないことはない。天下の飲むのを好む者でも、私の上にある者はいないだろう。常に思うのは、人として最上の楽しさは、身に病がなく、心に憂いがないことであって、それ以上のものないだろう。いまの私にはこの二つともない。これらがある者が私の前にやってくると、私は完全な楽しみを得るわけにはいかなくなる。そこで、いつでもどこでも善い薬を蓄えておき、これを求める者がきたなら、それを与えるようにしている。その上で、我が家で醸^{かも}した酒を客人に飲ませるのを一番の喜びとしているのである。

ある人がこのように言った。

「あなたには病がないのに、たくさんの薬を蓄えています。あなたはあまり飲まないのに、たくさんの酒を醸しています。面倒なことを人のためにしているのは、どうして

なのでしょうか」

私は笑って答えた。

「病んだ人が薬を得ると、私の身体が軽くなったように感じます。飲む者がもう飲めなくなるまで酒に飽きると、私の酔い心地が実によくなります。つまり、自分のためにしているだけなのです」

東臯子とうこうしが、門下省もんかしょう(国家の中枢機関の一つ)に招くとのとう たいそう(唐の太宗皇帝からの)詔みことりを受けたとき、詔には日に酒三升を与えるとあった。

弟の王静おうせいが兄に尋ねた。

「皇帝のお招き受けて楽しいですか」

「招かれて何が楽しいものか。ただ旨い酒が三升とあるのを、実に恋しく思うだけなのだ」

いま私は嶺南れいなんにあって、法として酒を作ることは禁じられていない。私は自分で醸すことができ、一カ月に一斛こくの米を用いるなら、六斗の酒が得られる。しかも、南雄州なんゆう、広州こう、惠州けい、循州じゆん、梅州ばいの五州の知事は時折私に酒を贈ってくれる。その得るところをおよそ計算するなら、東臯子をほとんど超えるほどである。

東臯子は自身のことを五斗先生と呼んだ。五斗を飲むその口では、日に三升もらったところで足りないのであって、客人にはとてもまわらない。私に日に二升五合の酒があるのなら、野人やじんや道士の腹中にもちゃんとおさめることができる。

東臯子は仲長先生ちゆうちやうしやうという隠者と遊び、己の本性を養い、よいものを食べることを好み、あらかじめ死ぬ日を知って自分の墓誌を自分で作った。私は千年を隔てて東

臯子を友としている。たぶん私と近いのであろう。

(1) 蘇軾の酒との付き合い方がここに端的に記されている。(2) 蘇軾は惠州および周
辺の州知事と良好な関係にあり、士大夫だけでなく様々な階層の人々とも広く交流し
てゆく。そうしたことが以下の詩に描かれている)

■上元夜

1月15日の上元節じょうげんせつの夜に詠んだ詩。

先の年の上元じょうげんには、私は玉輦ぎよくれん(天子の車)に付き随っていた――

端門たんもん(宮中の門)には一万もの燈籠とうろうが輝き、

壁たまのような月(皇帝の比喩)が罽毘ふうし(宮殿の垣)に掛かり、

珠たまのような星々(近臣の比喩)が觚稜こりょう(宮殿の屋根)に連なっていた。

去年の上元ちゆうざんには、中山府てい(定州)にいた――

老いの病にあっだけれども宵おには興き、

牙旗がき(軍の大きな旗)を前に立てて夜の町を進み、

馬の鉄の蹄の音を春の氷に響かせたのだった。

今年の上元は、遠い江海こうかいにいる――

山の庵で僧とともに過ごしつつ、

いくつもの灯火が掲げられているのを、

松の間に眺めやる。

や し
枕柳の林をぶらぶら歩くと、
ふきふき
鬚髻とした大きな葉の間に月がのぞく。

知事殿が来て酒を馳走してくれ、

その宴が終わると、

おか ふえ つづみ
松の陵に簫や鼓の音を響かせつつ行ってしまう。

入れ替わりに珍妙な人物が現れて酒を求める。

盃をひとたび挙げると、たちまち数升を飲み干し、

大きな声で歌いながら門を出て行ってしまう。

ぼんやり
私は瞢騰と酔い心地の内にある。

((1) 2年前に、皇帝主催^{じょうげんせつ}の上元節の宴に参加したことは第10章301ページで見えている。(2) 唐代^{とう}の人々なら、蘇軾のいまのような境遇に置かれたならば、悲嘆に満ちた詩を例外なく詠んだであろう。蘇軾は、むしろ「珍妙な人物」(原詩は^{きようせい}「狂生」)とのひとときの邂逅を楽しんでいる。蘇軾自身の注で、「狂生」^{か どうじん}とは賈道人であると記されている。賈道人が何者であるのかは、他に史料が残っていないのでわからない)

■正月二十四日与兒子過頼仙芝王原秀才僧曇穎行全道士何宗一同遊羅浮道院及棲禪精舍過作詩和其韻寄邁迨

詩題は、「正月二十四日、息子の蘇過^{そ か}と、頼仙芝^{らいせん し}、王原秀才^{おうげんしゅうさい}、僧の曇穎^{そう どんえい}と行全^{ぎょうぜん}、道士の何宗^{どう し}とともに羅浮道院^{か そういち}および棲禪精舍^{ら ふ どういん}に遊んだ。蘇過^{せいぜんしゅうじや}が詩を作ったので、その韻に和して息子の蘇邁^{そ まい}と蘇迨^{そ たい}に寄せる」。頼仙芝と

王原は先に通過した虔州（本章 43 ページ）の人で、蘇軾のまさしく「追っ
かけ」となって惠州にやって来ていた。曇穎は羅浮宝積寺の僧で、行全
も僧であるが詳しいことはわからない。何宗一は広州出身の道士。つまり、
この詩は「狂生」一行でハイキングを楽しんだことを歌っているのでは
ある。

橋が断たれていて、心ひかれる場所と隔てられている。

履を脱ぐと、うれしいことに、衣を少しばかり上げるだけで渡れるではないか。

南国の花が（春を迎えて）すでに紅く咲き乱れ、

道端の柳はまだ細い葉がまばらに出たばかり。

斜川で遊んだ陶淵明とその友人たちに似てどうか、

ただ、私の年齢が進んでしまったのを嘆かねばならないであろう。

羅浮道院は荒れて寂しく、

雨に穿たれた垣根へと、風に吹かれた壁が頽れかかっている。

黄色い冠を戴せた道士は常に飢え、

袂の破れを羞じらいつつ客を迎える。

仙人の棲む山はどこにあるのかと問えば、

そこへと帰る鶴が時折このあたりに羽毛を落とすと答える。

険しい道を歩み、

松黄（靈妙な薬効があるという）を拾い集めようとする。

歯が抜け、髪が落ちるのを防ぎたいものである。

そのような欲があると知られたなら、

千年も一つの夢の内と悟る禅僧に笑われてしまうだろう。

夕暮れ時に棲禅精舎に来て、

酒を置くと、肴として並べられたのは蕉と荔枝の南国の果物、

厨を覗くと釜には羹もなく、籃には野で摘んだ蕁があるだけ。

陽羨にいる長男と、頭の長いその弟に言葉を寄せる――

父は、こうして季節を追って遊ぶのを楽しみとし、

この世の移ろいを眺めて暮らしてゆくつもりだ。

三月には、水に入って業障を洗う褌をしようと思っている。

諸君等はおのおの力を尽くして家を支え、

期限内に先んじて租税を完納するようにするのだぞ。

((1) 陶淵明の斜川での遊びへの憧憬を、蘇軾はこれまでに何度か詩に詠んでいた。そ

れと似たような遊びをしている今日までに長い歳月が過ぎ去ったことを悼むのであろ

う。(2) 次男の蘇迥は頭が長かったようで、蘇軾はその特徴にしばしば言及している。

(3) この詩を長男と次男に寄せ、その結びを「門戸各努力、先期畢租税」(門戸 各そ

の努力して、期に先んじて租税を畢らせよ) とした蘇軾の思いがどのようなものであつたの

かと考えると、なかなか味わい深いものがあるであろう)

■正月二十六日偶与数客野歩嘉祐僧舍東南野人家雜花盛開扣門求觀主人
林氏媼出応白髮青裙少寡独居三十年矣感嘆之余作詩記之

詩題は、「正月二十六日、たまたま数人の客と野を歩いたところ、^{か せう そう}嘉祐僧
^{しや}舍の東南の庶民の家にさまざまな花が盛んに開いていたので、門を^{たた}叩い
て^み観せてくれるよう求めた。出て^{りん}應對してくれた主人は^{おうな}林氏の媼で、白
髪で^{スカート}青い 裙、若くして夫を喪い、独居すること三十年になるという。感
嘆の余り詩を作ってこのことを記した」。

^{あさざいろ}紺 の枝、^{あおしろ}縹 の帯から、^{がく}絳 い花の房が出て、^{あか}緑 の陰に^{かげ}青い子^みができる……

春の日々を送るのは忙しい。

^{さめごめ}涓涓と露に泣くのは^{がんしょう か}紫の含笑花、

^{ほうほう}焰焰と空を焼くのは^{ぶつそう か}紅い仏桑花。

落ちゆく日を受けてぽつんと煙が昇り、

故郷を離れた者の心を知っているかのようであるので、

来てみると、

ここには、低い垣根のなかに傾いた家、

これらの花々は誰のために香っているのだろうか。

主人はと見れば、^{スカート}青い裙袂の白髪^{と ほ}の女性、

^{と ほ}杜甫の詩にある^{こう し じょう}黄四娘の家とそっくりではなからうか。

(1) ^{がんしょう か}含笑花も^{ぶつそう か}仏桑花も南国特有の花。(2) ^{と ほ}杜甫の詩にある^{こう し じょう}黄四娘 (^{じょう}娘は年配の女性

の意味) とは、杜甫が成都に流寓していたときに詠んだ「川べりを独り歩いて花を尋ねた」という題の7首の絶句の第6首にある。

黄四娘家花满蹊、こう し おばあさん (黄四 娘 の家は小道いっぱい花が咲いている)

千朵万朵压枝低。(千の枝、万の枝が重なりあってたれている)

留连戏蝶时时舞、(蝶はいつまでもそこに戯れて時折舞い)

自在娇莺恰恰啼。(愛らしい鶯が自由自在に鳴いている)

黄四娘は杜甫の近所に住む老女であったということ以外のことは知られていない。当時の杜甫との境遇が類似していることと、成都への思いとが重なって、蘇軾はとくに黄四娘のことがゆかしく思えたのだろう。ひっそりと暮らす庶民を見る蘇軾の目はまことに温かい)

■ 竜尾石硯寄猶子遠

いん 筠州に流された蘇轍に同行した甥の蘇遠そ えん (本章91 ページ) に竜尾石の硯を贈って、この詩を添えた。蘇軾自身の注で、「蘇遠の人となりは私に似ている」と書き添えていて、それで蘇遠のことをこの詩では「小東坡」しょうとう ばと呼んでいる。なお蘇遠は後に蘇遜と改名する。

この硯は雲から出た月のように光り輝き、
水から出た蓮の葉のように青々としている。

君の文章の巧みさを、この硯を使って、いつまでも書き続けるがよい、

君の忠義の心を、老いに至るまで、この硯で磨き続けるがよい。

立派に節を保つには怒りは禁物であって、

少なからず和らかくあるべきだ。

私はもう衰えてしまってこの硯は無用の長物となった、

よって小東坡君に与えるのである。

(自分に似ると思うから、怒りを禁じて和を大切にせよと忠告したのだろう)

■海月弁公真贊

杭州の天竺靈山寺の海月禪師慧弁の肖像画に付した贊。蘇軾の親友である参寥(道潜)の依頼によってこれを書いた。

- (1) 杭州に天竺寺と靈山寺が並び建っていることは本章 55 ページなどで見ている。
- (2) 参寥はこのころ天竺寺に属していて、その手紙を誰が届けたのかということは後に見ることになる)

銭塘(杭州)に仏教者が多いことは天下第一といってよい。その中には、道に徳のある才智の士と、凡庸で偽りが巧みな人などが混在していて、整えることが難しいとされている。それで、僧官として僧正、僧副のほか(杭州では)特に都僧正を一人置くようにしている。帳簿を管理したり、度牒を審査したり、人を出迎えたりする仕事は僧正、僧副以下の人の責任で行い、都僧正が行うのは肝要なところの指揮と、衆人の統率である。しかし、僧官の一人であることから、世俗から遠く離れて山の

棲む士はこれはつまらないことだとしている。だから、道に通じて正しく雅で、世の外にあつて物を忘れるような者にこのことを任せるのは難しい。

私が杭州の副知事であつたときに、海月大師慧弁かいげつだいし えべんはまさにこの位にあつた。海月大師は精神が澄み渡り、怒りも喜びも外に見せることがなく、僧も俗人も喜んで帰服していた。私も喜んで海月大師に従つて遊んだ。時に東南の地は事が多く、政務せいむの暇が少なく、私は壮年で意気盛んであつたので、仕事からなかなか離れることができなかった。師に会いに行くたびに、静かに向き合つて座り、時に一言を聞くだけで、百の憂いが氷解し、身も心も安泰となつた。それで、莊子そうしがいう東郭順子とうかくじゅんしの人となり、すなわち「人の容貌はしていても天の虚こころに等しく、道みちに縁よつて己の真まことを保ち、清純で他物を包容し、他物が道ならぬことをすればそれを正し、内に容れつつ他物に正しさを悟らせて、人の我意を消す」とあるのは、きっと海月師のことを言つたのであつたと思つた。ある日、海月師は病んで伏せた。私のところに人が来て、山に来るよふにと言つた。たまたま暇がなくて十日余り経つて行くと、師は亡くなつて四日が過ぎていた。遺言として私が来てから棺を蓋うよふにとのことで、生きていたかのようにふたさ趺坐して、頭の頂はなお温かつた。

私は黄州こうにいたときに、夢で西湖せいこのほとりに至つた。大きな建物があつて、上に「弥勒下生みろくげしょう」と掲げてあつた。そして、弁才師、海月師といった馴染みの方々がそこに居並んでいた。

海月師が亡くなつて二十一年、私は惠州けいに謫居し、天竺淨恵師てんじくじょうえしに属する参寥師さんりょうしが手紙を遣わして「檀越たんえつの許氏きよが海月師のために肖像画を作り、賛を求めている

のですが、久しくその願いが叶えられていません。どうでしょうかと記してあった。私は^{かくぜん た}瞋然と起って、喜んでその賛を作った。

人皆趨世、出世者誰。(人は皆、世間に走る。世間から出る者は誰なのか)

人皆遺世、世誰為之。(人は皆、世間を忘れる。世間にためにするのは誰なのか)

爰有大士、処此両間。^{ひと}(この両者の間にあるのは大きな士だけである)

非濁非清、非律非禪。^{だく せい りっしゅう ぜんしゅう}(濁でなく清でなく、律宗でなく禅宗でもない)

惟是海月、都師之式。(ただ海月師だけが全ての僧の上に立てるのだ)

庶復見之、衆縛自脱。(海月師を見るだけでももろもろの束縛が自ずから虚脱する)

我夢西湖、天宮化城。(私は夢に西湖に行き、天上の寺院を見た)

見両天竺、宛如平生。(海月師と弁才師がいつも通りにされていた)

雲披月満、遺像在此。(雲が掃われ月が満ち、海月師の像がここにある)

誰其賛之、惟東坡子。(誰がその賛を作るのか、東坡先生である)

((1) 蘇軾が^{こう}福州知事として杭州に赴任したときに、^{え べん}慧弁(^{かいげつぜん し}海月禅師)、^{べんざい}弁才の兄弟弟子に会っていることは第10章59ページで見ている。(2) 海月禅師の人となりを表す文章として、『^{そう じ}荘子』をそっくり引用している。ここに仏教に向き合う蘇軾の姿勢を端的に見ることができる。仏教に関して蘇軾が重視するのは、精神の安定であって、理想とする境地は庄子が説くところと同じなのである。(3) この賛の依頼を受けたのと同じころに、^{ご ぶく こ}呉復古が^{けい}惠州に來ている。呉復古とは先に^{ちやうこう}長江のほとりでも会っている(本章20ページ)。呉復古の郷里は^{ちやうよう}潮陽で惠州からさほど遠くない。蘇軾が大庾嶺を越える内陸^{だい ゆ れい}

コースを移動する間に、呉復古は恐らく海路で郷里に帰っていたのであろう)

■弔天竺海月弁師三首

これは22年前の^{きねい}熙寧6(1073)年の作品。上に見た^{かいげつぜんし えべん}海月禪師慧弁が亡くなったときに詠んだ挽歌で、第4章では割愛したのでここで見ておきたい。

其の一

師の遺跡を強いて尋ね、衣を^{うるお}涙で沾してしまう。

もとより「^{せい}生」というものはないのだから、「^{ぼう}亡」もありえない。

今夜も師の講堂には月が照り、

庭には霜のように冷たい光が、変わることなく満ちている。

其の二

生と死は、臂を伸ばしたり曲げたりするようなもの、

それでも、我等は^{じょう}情のために苦しまなければならない。

^{はくらくてん}白楽天は^{ほうらいとう}蓬萊島へと旅するのではないと詩に詠んだ。

やはり西方浄土に帰ったのである。

其の三

「^{いん}因」があり、「^{えん}縁」があって、物事が起こるという。

浮き雲に尋ねて「因」を減するなら、

「縁」もなくなって、夢の中の身となる。

昔、先に死んだ方があちらのことを告げに来ようと友と約束した者がいた。

ことわり

理がわかっているのなら、そのようなことをする必要はないのに。

■惠州近城数小山類蜀道春与進士許穀野歩会意処飲之且酔作詩以記適参寥專使欲帰使持此以示西湖之上諸友庶使知余未嘗一日忘湖山也。

詩題は、「惠州の町に近い幾つかの小山は蜀の道に似ている。春、進士の許穀と野を歩いて意に適うところがあったので、そこで飲んでしばし酔い、詩を作ってそのことを記した。たまたま参寥が遣わした使いの者が帰ることになったので、この詩を持たせて、西湖のあたりに住む友人たちに示そうと思う。私が一日たりとも杭州の湖や山を忘れずにいることを知ってもらいたい」。

夕陽を受けて、柳の絮が、平野へと乱れ飛ぶ。

万里の春を前に、一つの酒壺を置く。

懐かしいかの地は山々の向こう、

かの伝説の通りに、陰い山々は誰かが剣を揮って削って作ったのだろうか。

遠くからの便りは届かない、

かの伝説の通りに、手紙を運ぶ魚が鉄に化して沈んでしまったからなのか。

南国の花ともすでに馴染みとなり、
 ますます香りを好いと感じる。
 鳥はまだその名を知っていないのだが、
 それぞれの声で私を呼んでくれる。
 夢に見るのは、やはり普段から尽きることのない思い、
 朧の月に照らされた林を抜けて、西湖^{せいこ}に到るのである。

■与参寥子

同じころに参寥^{さんりょう どうせん}（道潜）に出したと思われる手紙をみておこう。

（参寥^{さんりょう}からの使者は一度だけではなかったようで、たぶん杭州^{こう}からは海路を使えば往復はさほど大変ではなかったのだろう。このころ海上交通はなかなか盛んで、役人ばかりでなく、商人や僧侶、道士などの行動範囲はかなり広がったようだ）

遠くお使いの方がこられて、お手紙を頂戴し、並びに最近の詩を拝見させていただきました。一笑の楽しみを得て、数日もの間、喜び慰められ、その味わいを忘れることはありませんでした。

私はここに流されて半年になり、およそのことはほぼすでにお伝えしましたので、それ以上詳しく申し上げるには及びませんでしょう。靈隱寺^{れいいんじ}や天竺寺^{てんじくじ}の和尚が院を退いて後に、小さな村の寺に引っ込んで、足袋を縫ったり、飯を煮炊きしたりして、残りの一生を過ごせるようになったのと似ているでしょうか。

こちらでは暑い風土ならばの病気はありますけれど、北方にだって病気がないわけではなく、病気になって死ぬ者がいるのは、暑い土地に限ったことではありません。ただし、医薬がないのは困りものではありますが、都で国一番と評判の医者にかかって死んでしまう者だってたくさんいるわけです。

参寥師はこのように聞けば一笑して、もう私のことは心配しなくなるであります。私の知り合いの方々にこのようなことをお話してください。他に人には言うに及びません。いつまたお会いできるともしれませんが、仏道のために自愛自重なされますように。

■書淵明東方有一士詩後

とうえんめい 陶淵明の「とうほう 東方にいっ し あ 一士有り」の詩の後に記した短文。始めに陶淵明の詩を掲げ、蘇軾の文章が続く。

東方有一士、おとこ（東に一人の士がいる）

被服常不完。（いつもろくなものを着ていない）

三旬九遇食、（食事にありつけるのは三十日に九回だけ）

十年著一冠。（十年の間、冠はたった一つのもの）

辛苦無此比、（これ以上の辛苦はないのに）

常有好容顔。よ（いつでも穏やかな好い顔をしている）

我欲觀其人、（私はその人に会いたいと思い）

晨去越河関。(朝に出て川や山を越えた)

青松夾路生、(青い松が道の両側に生え)

白雲宿簷端。(白い雲が軒端にかかっていた)

知我故来意、(私がわざわざきた心を知って)

取琴為我彈。(私のために琴を弾いてくれた)

上弦驚別鶴、(最初は鶴の別れの曲に驚かされ)

下弦操孤鸞。(終わりは孤独な鸞^{らん}の曲を弾いてくれた)

願留就君住、(できれば貴君のもとにとどまって)

従今至歲寒。(寒い冬にまで至りたいものだ)

この「東方の一士」とはまさに陶淵明^{とうえんめい}のことである。「東方の一士」と一緒に遊ぶ者は誰なのか。もしこの一段が了解できたなら、己がそのまま陶淵明であり、陶淵明がそのまま己なのである。

紹聖^{しょうせい}二年二月十一日、東坡居士^{とうぼこじ}は飲んで酔い、食べて飽き、黙って思無邪斎^{しむじゃさい}に座り、兀然^{どろとろ}として睡るかのようにし、目が覚めてから陶淵明の詩を写し、息子の蘇過^{そか}に示した。

(この陶淵明^{とうえんめい}の詩に和した蘇軾^{そし}の作品は次の章で見ることになる)

■二月十九日携白酒鱸魚過詹使君食槐葉冷淘

詩題は、「二月十九日、白酒と鱸魚を携えて、惠州知事の詹範^{けんはん}を訪ね、槐^{かい}

葉ようの冷淘れいとうを食べた」。冷淘は夏の食べもの。槐えんじゆの葉を煮た汁で小麦粉を練ってうどんのようにし、鍋で茹でてから冷やしたのが、ここにある「槐葉の冷淘」。鮮やかな緑色で、ひんやりとした舌ざわりであるという。

枇杷びわの実はずでに熟して、金たまの珠のように輝いている。

桑の繁るもとで、とろりとした「桑落そうらく」の古酒を初めて嘗める。

蓮の葉のような大きな蓋さかずきをちよいと借り、

五台分の書物を詰め込んだ我が腹へと注ぎ込む。

青は——卵型の碗かいように盛った槐葉れいとうの冷淘、

紅あかは——氷の上に散りばめた鱸魚ろぎょの細切り。

酔飽すいほうと高眠こうみん、これこそが真の我が事業、

生きることの味わいは「三余さんよ」にあるのだ。

((1)「桑落そうらく」とは、桑の葉が落ちるころに仕込み、長い年月をかけて熟成させた酒。

((2)「三余さんよ」とは、なかなか勉強する時間がないとぼやく者に、「三余」があるではないかと董遇とうぐうという学者が教えたもの。すなわち、年の余りの冬、日の余りの夜、晴れの余りの雨である。蘇軾は、それを踏まえて、流罪となった我が身は「人生の余り」にあるというのである)

■書歸去来詞契順

3月2日、参寥さんりょうからの使者とはまた別の者が来た。そのことを記した文

章。

私は惠州に謫居となり、弟は高安(筠州)にあって、それぞれ息子を一人だけを従えた。その他の者は宜興と許昌にいて、山や海を遠く隔て、息子たちからの音信は絶たれ、無聊のうちに憂愁に沈んでいた。

蘇州の定慧院で仏説を学ぶ卓契順が我が長男の蘇邁にこのように言った。

「あなたさまはどうしてそのようにひどく憂いておられるのですか。惠州とて天の上にあるわけではなく、行けば必ず到りましょう。あなたさまのためにお手紙を持ってお訪ねしてさしあげましょう」

卓契順は徒歩で川を渡り山を超え、野宿をし、南国の悪い熱気に冒されつつ、顔を真っ黒にし、足を腫らして、紹聖二年三月二日、惠州にまでやってきた。私が蘇邁への返事を書いて渡すと、卓契順はただちに帰ろうとした。

私は、

「何かほしい物はありませんか」

と、尋ねた。

契順は答えた。

「私は何も求めません。だから惠州に来たのです。もしも求めるものがありましたなら、都に行ったでしょう」

それでも私が何度も尋ねると、契順は言った。

「唐の時代に、蔡明遠は鄱陽のしがない役人でしたが、顔真卿が旅の間に

食糧がなくなって困っていたときに、米を舟に載せて運んで助けました。顔真卿はその意を喜んで、謝礼の手紙を与えました。それによって天下の人々はいま蔡明遠のことを知っております。いま私はあなたさまに米を持ってきたわけではありませんが、万里の道を歩く勤めをしてまいりましたので、もしも蔡明遠の例に倣って、数文字でも頂戴できればと思います」

私は喜んでそれに応じることにした。

名節を重んじることと、字画の好さは顔真卿に及ばないのを取じるものではあるが、陶淵明の『どうえんめい 帰去来ききょらいの辞』を書いて与えた。

この文に卓契順の名が不朽であれとの願いを託す。

(1) 卓契順たくけいじゆんは単身で遠く歩いて来たのだった。(2) 卓契順のために『ききょらい 帰去来の辞』を書き、それにこの文章を添えたことで、その名が後世に伝わればという卓契順の望みは確かに叶い、われわれはこうして卓契順の長旅に思いをめぐらすことができるのである。なお、蘇軾が『ききょらい 帰去来の辞』を書いたことは本章 31 ページでも見ている。(2) 卓契順は、実は蘇邁の手紙を届けるためだけに惠州けいに来たのではなかった。そのことは以下の詩や文章から知れる)

■次韻定慧欽長老見寄八首

詩題は、「蘇州の定慧禅院の守欽長老そ じょう え ぜんいん しゆきんから送られた詩に次韻して八首を作った」。短い序文がある。

蘇州の定慧禪院の長老の守欽が、その弟子の卓契順を使者として惠州にまで超越された。守欽は私の安否を問いつつ、唐の寒山の詩に類似した十首を寄せてくださった。その語は僧璨禪師や弘忍禪師のように真理に通じていて、しかも賈島や僧無可の詩のように情感の乏しいものではない。私はこれが大変よいと思い、和して八首の詩を作った。

(1) 卓契順は守欽の使者として惠州に来たので、さらにいうと、ここには記されていないけれども、蘇州副知事がかねてから親交があった錢済明が、誰か惠州に行ける者がいないかと守欽に相談して、卓契順が選ばれたのだった。卓契順は僧侶ではなく、寺で雑用を勤める者であった。卓契順は蘇州を発つと、すぐ隣の常州宜興縣陽羨に蘇邁を訪ねて手紙を受け取ってから惠州に向かったのである。(2) 寒山以下名の挙がっている5人は唐代の人々で、寒山の詩は平易な語句を用いながら、飄々とした独特の味わいがある。蘇軾のこの一連の詩は、深い洞察に富んでいるのだが、数々の典故を踏まえていて容易には理解できないところがあるので、第1首だけを訳す)

其の一

天下の争奪戦とて、蝸牛の左右の角の争いのようなもの、
宮殿での席次争いなど、夢の中での寢言のようなもの。
簾を上げて燕の親鳥を入れてやったり、
障子に穴を開けてのろまな蠅を逃がしてやったり、
鼠のために飯粒を残してやったり、

蛾を焼かないために燈をつけなかったり、

長老殿はあれやこれやとなさりつつ、

「わしはしょうじょう小乗の僧じゃわい」

と笑っておられる。

(仏教には、戒律に厳しい小乗仏教と、おおらかな大乘仏教があり、中国では大乘仏教の方が重んじられていた。それで、しゆきん守欽が生き物に細やかな心遣いをしていること(たぶんもとの詩にそのようなことが詠まれていたのだろう)を、細則にこだわる小乗仏教のようだといったのである)

■守欽

上の詩に見たしゆきん守欽長老について記した短文。

そ蘇州のじょうえいん定慧院の長老であるしゆきん守欽のことを私は初めは知らずにいた。けい惠州に至ったときに、じしや守欽は侍者のたくけいじゆん卓契順を使者にして私の安否を問い、かつ十首の詩を寄せてくれた。私はその詩の後ろに、「この僧はせいいつ清逸、ぜつぞく絶俗で、語はそうきん僧璨そうきん禪師やこうにん弘忍こうにん禪師のようにかとう真理に通じ、そうむか賈島や僧無可の詩のように情感の乏しいものではない」と記した。私はさんご三呉の地を長らく往来してきたのだが、この僧のことを知らずにいたのはどうしてだったのだろうか。

(しゆきん守欽は蘇軾とかねて面識があったわけではなかった。しかし、それでも遠く使者を超越したのだった)

■記卓契順答問

たくけいじゅん

卓契順について記した短文がもう一つある。

そ じょう え いん じょうにん

蘇州の定慧院の浄人(在俗のままで僧に仕える人)である卓契順は数千里の道も遠くないとして海山を超えて、恙なくしていかと私に尋ねにきた。

私は卓契順に問うた。

「何か物を持って来られたのでしょうか」

卓契順は両手を広げた。

「数千里を、まさか手に何も持たずに来られたのでありましょうか」

卓契順は何かを荷うような姿勢を作ると、歩みにまかせて行ってしまった。

(これは禪問答のような文章。事実とはいささか異なるけれども、^{たくけいじゅん}卓契順の印象を端的に伝えるものといえるだろう)

■題白水山

はくすいざん

白水山(本章96ページ)に遊んだことを記した短文。

しょうせい

せん

はくすいざん

ぶつせきじ

紹聖二年三月四日、詹知事に迎えられて私は白水山の仏跡寺に遊んだ。

温泉で湯浴みし、滝の下で風に吹かれた。嶺のなかほどまで登り、滝の出るところを望み見た。

山を出て、肩輿かごでもと来た道を戻り、山を眺めつつ人々と語り合った。

晩れいほに荔浦れいほのほとりで休息し、竹陰ひしのもとを歩いた。時に芡さいしの実に似た荔枝たいちが累累にみのっていた。そこの老人たちが指さして私に、

「もうすぐ食べられましょう。酒を携えてまた来られるとよろしいでしょう」

と、言った。私は喜んでそれに応じた。

一緒に遊んだ者は、柯常かじょう、林抃りんべん、王原おうげん、頼仙芝らいせんし。詹知事はんの名は範、私というのは蘇軾である。

（(1) ここに名が挙げられている惠州知事の詹範けんはん以下では、柯常かじょうはどのような人物であるのか不明、林抃りんべんは字は天和で、このときは博羅県の知事であった。王原おうげんと頼仙芝らいせんしは本章 112 ページで見た虔州から来た人で、まだ惠州に留まっていた。(2) これと重複するところがあり、しかし、日付が異なる別の文章が伝わっているので、参考のために訳しておく)

紹聖元年十二月十二日、末の息子の蘇過そかと白水山の仏跡院ぶっせきいんに遊んだ。

湯池とうちで浴びると非常に熱かった。その源に熱い物がきつとあるのだろう。

山を巡って東に行き、少し北に行くと、百仞ひゃくじんの高さから水が懸かり、山を八回も九回も折れ曲がりつつ落ち、折れた先に滝壺があった。石を投げ入れて深さを測ると、五丈を超え、どこで止まったのかわからなかった。雪をそそぎ雷が怒るようなありさまは、喜ぶべきであり畏れるべきである。

水の流れの先に巨人の跡がいづつもあり、それがいわゆる仏跡である。

夕暮れに帰り、もときた道を引き返し、山を観ると、非常に壮観であった。仰ぎ見て、あるいは下を見て、谷の数をかぞえた。

江に至ると、山に月が出て、流れの中に波が立ち、珠壁を掬い取れるかのようであった。

家に到ったのは二鼓(夜中前)で、蘇過とまた酒を飲んだ。残った物を食べたり、菜を煮たりした。顧みると我が影はぐんにやりと崩れ、まだ眠くはなかったので、見て来たものを書いた。

東坡翁記す。

■与陳季常

上に見た3月4日の白水山での遊びから帰って、蘇軾はこの手紙を記した。あて名は陳慥(字は季常、仇名は方山子)(第6章32ページ)。かつて黄州に流されたときに、黄州に入る直前に忽然と姿を現し、黄州における暮らしを支えた人物である。その陳慥が惠州を訪問する意欲があることを手紙で知らせてきたので、すぐに返事を書いたのである。

(再三記しているように、手紙文の読解は私の力の及ぶところではなく、おぼろげながらに汲み取ることできた大意をそれなりにまとめただけの「ずっぱ訳」である)

惠州の卒(用務員)が来て、貴君からのお手紙を頂戴いたしました。お健やかでおられることを審らかにし、三人の御子息もまた安らかでますます学問に励まれている

るとのこと、非常に喜ばしく思います。

私には大きな罪があり大いに責められるべきでありながら、聖恩によって罪を償うことを赦され、咎めをお与えなさらず、罪の深さをお心に少しもお掛けにならず、何の不足もないところに置いてくださることとなりました。移動の途中で新たな御命令をいただき、すぐに家族を陽羨^{ようせん}に還すことにし、末の息子の蘇過^{そ か ちやうくわん}と朝雲、それに二人の老いた女中とともに大庾嶺^{たい ぐ れい}を超えました。

惠州に到って半年になろうとしています。風土も食物も悪いことはなく、役人もまわりの人々もたいへんよくしてくれています。孔子^{こう し}が「文明の外にある国でも誠実さは伝わる(蠻貊^{ばん がい}の邦^{のくに}と雖も行^{いふ}矣^{おこなわる})」と言った言葉は、私を欺くことはないのです。ここ数年^{ない ねん}は内丹^{ない だん}、外丹^{がい だん}の要所(養生の基本)を知るようになりましたが、厚祿を頂戴し、重い役目を担っていたのでは、決してうまくゆくはずがないのであります。官職を失ってから、山をやすやすと超え、天の川にもすぐにも近づけそうな気になっております。まだまだ簡単には到達できないであります。

あれこれ思いますに、貴君は安らかに家におられるべきで、軽々しく外に出ようとはなさませんように。この愚かな老人について過分の御配慮は無用で、草鞋を履いて頭巾を載せてここにまで訪ねようとは決してなさいませんように。また私のところに人を遣わそうなどともなさいませんように。お互いに髯^{ほ へ}を戟のように伸ばしていながら、おなごのようにめそめそするのはよしにいたしましょう。

てい しょうろ
定州^{てい しょうろ}にいましたときに『松醪^{しょうろ}の賦』を作りましたので、それを写してお送りいたします。後々にまたこちらに来てみようなどと思いを起こされましたときには、はるかな旅路を

たちまち超えるよすがとしていただけることでありましょう。

長男の蘇邁そまいは官吏となりまして、父の気風をよく受け継いでおります。次男と三男は詩が上手で、父を超えること驚くばかりであります、と書いたところで、貴君がここを読んで捧腹絶倒するありさまが目に見えるようです。

今日は白水山はくすいざんの仏跡院ぶつせきいんに遊びました。山の上から三十仞じんの水の布がかかり、雷が鳴って電光が走るありさまは名状しがたいものでありました。かの項羽こううが秦しんの軍勢を破った勢いもさぞやと想えるものでありました。山中から帰って、燈のもとでご返事をしたためているところです。

筆に任せて書いたままで、紙が尽きましたので終わりいたします。郡中の皮で作った筒に入れてお送りします。

黄州こうの方々がこの手紙を見てくださったなら、私が沈み込んでいるものではないとわかっていただけましょう。

弟は筠州いんにあってごく安らかに暮らしており、私と異なるところがありません。昔の書物に、「老軀ろうくが健康であるなら死は遠くにある」とありますのを繰り返し読んで、確かにその通りであると喜んでおります。吾等は他の者とは違って、若い者によくある不摂生とは無縁でありまして、近頃弟に会った者が言うには、四十歳くらいに見えたとのことでありますが、それはきっと本当であるでしょう。

(先に見た卓契順たくけいじゆんは蘇州から手紙を携えて来たのだが、陳慥ちんぞうの手紙は惠州の役所から届けられている。官の通信システムに便乗して送ったのだろう。手紙を送るだけでなく何らかの経済的支援をしようと、陳慥自身が行くなり私的な使者を立てるなりするこ

とを検討していたのだろう。^そ蘇州と惠州は地図上で測った直線距離で 1100km 余り、
黄州と惠州は 850km ほど、どちらにしても往復するのは容易ではない

■和陶埤園田居

「^{わとうし}和陶詩」の第二作。序文がある。その大半は先の短文と同じである。

三月四日、^{はくすいざん}白水山の^{ぶっせきがん}仏跡巖に遊び、^{とうせん}湯泉で沐浴し、髪を^{かわ}滝の下で^か晞かし、大きな声で歌って帰った。^か肩輿でもとの道を戻りつつ人々と語らい、いつの間にか川の北の^{れいしほ}荔支浦のあたりに来た。夕日は^{ぼんやり}蔥朧く、竹の陰は^{かげ}蕭然げで、時に^{ひし}芡の実に似た^{ライチ}荔子が^{たわわ}累累に実っていた。八十五歳になるという老人がそれを指さして私に言った。

「食べられるころになりましたなら、酒を携えてお越しになりませんか」

私は喜んで応じた。

帰って臥せ、目覚めると、子の^そ蘇^か過^{とうえんめい}が陶淵明の『園田の居に帰る』の詩の六首を朗誦しているのが聞こえ、それでことごとくその韻に和すことにした。私は^{こうりょう}広陵(揚州)にいたときに初めて陶淵明の『飲酒二十首』に和し、いままたこれを作った。必ず全ての詩に和してしまおうと思う。

これを書いて、^{みょうそうだい}妙総大士^し參寥^{さんりょう}に寄せる。

(1) ^{はくすいざん}白水山に遊んだことはよほど強い印象を与えたのだろう。それによっていくつかの詩文が作られたのだった。(2) ^{とうえんめい}陶淵明の『飲酒』に和した詩は第 10 章 213 ページで

見ている。そのことと同じく、陶淵明の原作と蘇軾が和したものとを交互に並べて訳す。これ以降は、陶淵明の詩は変則的な読み下し文で訳す。原詩の趣をいくらか伝えられると思うからだ。蘇軾の詩はその訳し方には適さないもので、いままで通りのスタイルである。

(3) 陶淵明の『園田の居に帰る』は最後となった官職を擲って帰郷した翌年の作とされ、そのとき42歳であった。(4) 蘇軾は六首の詩に和しているが、六首目の原詩は陶淵明の作ではなく、江淹の詩であるので、ここでは訳さない)

其の一(陶淵明)

少無適俗韻、^{わか} (少いころから^{せけん} 俗と^{ちゆう} 韻をあわ^な 適せることができなくて)

性本愛丘山。^{もと} (本の^{せい} 性として^し 丘山を^{あい} 愛していた)

誤落塵網中、^{あやま} (誤って^{ちり} 塵にまみれた^{あみ} 網の中に^{なか} 落ちてしまひ)

一去三十年。^{ひと} (一たび^ゆ そこに^{さんじゅうねん} 去くこと三十年となった)

羈鳥恋旧林、^{つな} (羈がれた^{とり} 鳥は^{もと} 旧の^{はやし} 林を^こ 恋ひ)

池魚思故淵。^{いけ} (池の^{うお} 魚は^{もと} 故の^{ふち} 淵を^{おも} 思うものであつて)

開荒南野際、^{みなみ} (南の^の 野の^{さわ} 際で^あ 荒れたところを^{ひら} 開こうと)

守拙歸園田。^{つたな} (拙さを守^{まも} って^{えんでん} 園田に^{かえ} 帰った)

方宅十余畝、^{すまい} (方宅は^{じゅうほ} 十余^{あま} 畝)

草屋八九間。^{くさ} (草^{いえ} ぶきの^{やっ} 屋には^{この} 八つ^{へや} か九つの間)

榆柳蔭後簷、^{にれ} (榆や^{やなぎ} 柳が^{うし} 後ろの^{のき} 簷を^{おお} 蔭ひ)

桃李羅堂前。^{もも} (桃や^{すもも} 李が^{ひろま} 堂の^{まえ} 前に^{つら} 羅なっている)

暖暖遠人村、ほんやり とお ひと むら
(暖暖と遠く人の村があり)

依依墟里煙。ゆらゆら むらごと けむり
(依依と墟里の煙があがる)

狗吠深巷中、いぬ お(ま るじ なか
(狗が吠えるのは深った巷の中)

雞鳴桑樹顛。にわとり な くわ き いただき
(雞が鳴くのは桑の樹の顛)

戸庭無塵雜、もん にわ ごたごた な
(戸や庭には塵雜したものが無く)

虛室有余閑。がらん へや あま ゆとり あ
(虚とした室には余りある閑が有る)

久在樊籠裏、ひさ とりかご うち あ
(久しく樊籠の裏に在ったけれど)

復得返自然。ま し ぜん かい でき
(復た自然に返ることが得たのだ)

とうえんめい
(陶淵明の第一首は、自身の本性に従った決断で郷里に隠棲するに至った経緯と、隠棲後の暮らし向きをさらりとスケッチしている。これに対して、自らの意志に反して流罪の身となって惠州に置かれた蘇軾はどのように和すのだろうか)

其の一(蘇軾)

環州多白水、けい めぐ
(惠州を環るのはどれも清流)

際海皆蒼山。きわ あお
(海の際までもみな蒼い山)

以彼無尽景、(尽きることのないこの好風景をもって)

寓我有限年。(我が限りある残りの年月を寄せるところとする)

東家著孔丘、こう し
(東の家には孔子のような人)

西家著顏淵。がんえん
(西の家にはその弟子の顏淵のような人)

市為不二價、いち
(市に出てもたかい値をふっかけられるようなことはなく)

農為不爭田。(農夫も田畑をめぐる争うようなことをしない)

周公与管蔡、(周公とか管蔡とかの古の偉人だって)

恨不茆三閭。(ちっぽけな家にいれば余計な骨折りをしないですんだはずなのだ)

我飽一飯足、(私は一碗の飯があれば満足で)

薇蕨補食前。(おまけに薇や蕨でもあればなおよい)

門生饋薪米、(門弟が薪や米を贈ってくれるから)

救我厨無煙。(厨房から炊事の煙が上がらないということない)

斗酒與隻雞、(一斗の酒と一羽の鶏を)

酣歌餞華顛。(飲んで食べよと、この禿げ頭にくれることもある)

禽魚豈知道、(鳥や魚は道(大宇宙の真理)を知ってはいないのだろうか)

我適物自閑。(私がゆったりしていると、ほかのものもやりのんびりしている)

悠悠未必爾、(悠然としていられるほどにはまだなっていないにしても)

聊樂我所然。(私はこのようであることをいささか楽しんでいるのである)

((1) この詩の第一句の「環州多白水」(州を環って白水多し)は、歐陽脩が滁州に左遷されたときに書いた『醉翁亭の記』の冒頭の5文字、「環滁皆山也」(滁を環りて皆山也)を思わせるものがある(第6章344ページ)。蘇軾は敬愛する陶淵明と欧陽脩とを重ね合わせてこの詩を作ったのであろう。(2) 第三句の「無尽の景」とは、蘇軾が『赤壁の賦』で提示した「造物者の無尽蔵」(第6章313ページ)を踏まえたものであろう。

(3) 最後の句は「聊樂我所然」(我が然る所を聊か楽しむ)は意味が深い。陶淵明と違って蘇軾は自身の意志でこの現状を選び取ったのではない。だから心から満足する

ことはできないのだが、現状を否定することなく、むしろ陶淵明と同じくらいに強く肯定して楽しもうとしているのである。(4) 次韻の達人は、韻をそのまま使うという制約がありながら、陶淵明と並ぶ高い水準の「和陶詩」の一群の作品をこのようにして詠み上げて行く。あるいは、制約があった方が蘇軾の創作意欲をより高めたということもあったのかもしれない)

其の二(陶淵明)

野外罕人事、の そと ひと かかわり まれ(野の外では人との事が罕で)

窮巷寡輪鞅。おぼろ くる ま すく(窮った巷にはやってくる輪鞅も寡ない)

白日掩荆扉、ひる ま しばのと おお(白日から荆扉を掩い)

虛室絕塵想。がらん へや つまら おも た(虚とした室では塵ない想いなど絶えてない)

時復墟曲中、とき ま むら すみ あたり(時には復た墟の曲の中を)

披草共来往。くさ ひら みな ゆきき(草を披いて共と来往する)

相見無雜言、たが み よけい こどば な(相いに見て雑な言は無く)

但道桑麻長。た くわ あさ の い(但だ桑や麻が長びたことを道うだけだ)

桑麻日已長、くわ あさ ひ すで の(桑や麻は日にひに已に長びて)

我土日已広。わたし はたけ ひ すで ひろ(私の土は日にひに已に広くなる)

常恐霜霰至、つね おそ しも あられ き(常に恐れるのは霜や霰が至て)

零落同草莽。し おれ ざっそう おな(零落て草莽と同じになってしまうこと)

其の二(蘇軾)

窮猿既投林、(行き場を失っていた猿が林に逃げ)

疲馬初解鞅。(疲れきった馬が革^{かわ}の首ひもから解放された)

心空飽新得、(心^こを空にして、新たに得たもので満たす)

境熟夢余想。(この境地が熟してくと、夢の中でもその想いが余るほどになる)

江鷗漸馴集、(江の鷗も私に馴れて集まってくるようになったし)

蜚叟已還往。(蜚民^{たんみん}(水上生活をする少数民族)の老人も行き来してくれるようになった)

南池綠錢生、(南の池では緑の銭のような蓮の葉が生じ)

北嶺紫筍長。(北の山では紫の筍が伸び出した)

提壺豈解飲、(提壺^{ていこ}(鳥の一種)は、名ばかりで酒を飲むことは知らないはずだが)

好語時見広。(好^よ語りかけてきて、心をゆるやかにしてくれる)

春江有佳句、(春の江^{かわ}には佳^よい句が流れていたのだが)

我醉墮渺莽。(私は酔ってどこか遠くの草むらに落としてしまった)

其の三(陶淵明)

種豆南山下、(南^{みなみ}の山^{やま}(廬山)の下に豆を種た)

草盛豆苗稀。(草^{くさ}が盛^{さか}んにのびて、豆^{まめ}の苗^{なえ}は稀^{わずか}しかない)

晨興理荒穢、(晨興^{あきお}きてから荒穢^{あれたはたけ}を理^{ととのえ}ようとし)

帶月荷鋤歸。(月^{つき}を帯^おびて鋤^{すき}を荷^{にな}って歸^{かえ})

道狹草木長、(道^{みち}が狭^{せま}く草木^{くさき}が長^のびているので)

夕露沾我衣。(夕べの露で私の衣は沾れてしまう)

衣沾不足惜、(衣が沾れるのは惜しむに足りないことだ)

但使願無違。(但く豆が育ってほしいとの願いを違に使ってしまったのではないでほしいものだ)

其三(蘇軾)

新浴覺身輕、(湯浴みをしたばかりで身が軽い)

新沐感髮稀。(洗ったばかりの髪は薄くなったのを特に感じる)

風乎懸瀑下、(滝の下で風に吹かれ)

卻行詠而歸。(もと来た道を吟唱しつつ帰る)

仰觀江搖山、(仰ぎ観るのは、江に揺すぶられる山)

俯見月在衣。(俯いて見るのは、衣にかかる月の光)

歩従父老語、(歩きながら老人と語り)

有約吾敢違。(約束したからには違えることはない)

(これは序文に記されていることを詩にしたもの)

其四(陶淵明)

久去山沢遊、(久しく山や沢での遊びから去れていけれど)

浪莽林野娛。(林や野で浪莽と娛んでいる)

試携子姪輩、(試と子や姪といった輩を携れて)

披榛步荒墟。(榛を披いて荒れた墟を歩いてみる)

徘徊丘壟間、は か ば あたり ぶらぶら(丘壟の間を徘徊すると)

依依昔人居。ありあり むかし ひと すまい(依依と昔の人の居がある)

井竈有遺処、いど かまど あと のこ い(井や竈の処が遺って有るし)

桑竹残朽株。くわ たけ く かぶ のこ(桑や竹の朽ちた株も残っている)

借問采薪者、ちよっ たきぎ と ひと たずね(借と薪を采る者に問してみる)

此人皆焉如。ここ ひと みなどこ い(「此の人は皆焉に如ったのですか」)

薪者向我言、たきぎ もの わたし むか い(薪をとる者は我に向って言う)

死没無復余。し しま も だれ いま(「死んで没って復う余も無せんよ」)

一世異朝市、いっ せ くに まち こと(一世(三十年)で朝も市も異なってしまうというが)

此語真不虛。こ ことば まこと むな(此の語は真に虚しいものではないのだ)

人生似幻化、ひと せかい まぼろし に(人の生は幻化に似ている)

終当帰空無。つい き くらむ かえ(終には当と空無に帰ってしまうのだろう)

其四(蘇軾)

老人八十余、(老人は八十歳余り)

不識城市娛、(町の中での楽しみなどは知りもしない)

造物偶遺漏、(造物者の手からたまたま漏れてしまったのだろう)

同儕尽丘墟、(ほかの仲間はみんな墓地に入ってしまったのに)

平生不渡江、(普段から川を渡ることもなく)

水北有幽居、(水辺の北で静かに暮らしている)

手插荔枝子、(自分で荔枝^{ライチ}の実を植え)

合抱三百株。(ひと抱えもある大きな三百本の木にした)

莫言陳家紫、(「^{ちん か}かの陳家の紫の品種の)

甘冷恐不如。(甘く冷たい味わいには及ばない、などとは言わせませんぞ)

君来坐樹下、(あなたも来られて、木の下に座って)

飽食携其余。(お腹いっぱい召しあがって、余ったら持ち帰えられて)

歸舍遺兒子、(家に帰ってお子様方にさしあげたらよろしいでしょう)

懷抱不可虚。(この思いは無になさらないでください)

有酒持飲我、(酒があるからと持ってきて飲ませてくれて)

不問錢有無。(もちろん錢については何も言わなかった)

(これはライチの林で会った老人を詠んだもの。「陳家^{ちん け}の紫^{むらさき}」というのは閩中^{びんちゅう}第一との定評があるライチの品種だという。それにひけとらないものを爺さんは育てているというのである)

其五(陶淵明)

悵悵独策還、(^{いた うら}悵悵^{ひと つえ}独^{かえ}策^{かえ}をついて還ることにし)

崎嶇歷榛曲。(アブダブ^{アブダブ}崎^{やぶ}嶇^{あたり}ある榛^{とお}の曲を歴る)

山澗清且浅、(山の澗は清く且つ浅いので)

可以濯吾足。(吾^{わたし}の足^{あし}を濯^{あら}うのに可^{ちやうど}以^よさそ^ううだ)

漉我新熟酒、(我^{わたし}の新^{あら}たに熟^{じやく}した酒^{さけ}を漉^こして)

隻雞招近局。(隻の雞でもって近局を招こうではないか)

日入室中暗、(日が入って室の中が暗くなったので)

荊薪代明燭。(荊薪で明るい燭の代わりにしよう)

飲来苦夕短、(飲びが来て、苦ことに夕が短いのだ)

已復至天旭。(已に復う天が旭けるときに至ってしまったてではないか)

(其の四の続きで、気持ちをほぐすために近所の人々を呼んで酒を酌み交わしたのである)

其五(蘇軾)

坐倚朱藤杖、(ゆるゆると身を預けるのは朱い藤の杖)

行歌紫芝曲。(歩みつつ歌うのは「紫の芝」の曲)

不逢商山翁、(その曲を作った商山の翁には逢えなくても)

見此野老足。(この野に住む老人を見れば心は十分に満たされる)

願同荔枝社、(願うのは、荔枝づくりの寄合いに入れてもらって)

長作雞黍局。(鶏や黍をともに食べる仲間として長く付き合ってゆくこと)

教我同光塵、(私は塵の中に光を封じ込めてしまおうとおもう)

月固不勝燭。(月の光はもとより燭台の明るさに勝てないというし……)

霜飄散氛祲、(霜を帯びたつむじ風が悪い気を吹き飛ばしてしまおうなら)

廓然似朝旭。(からりとして朝日が射し込むようになるのだ)

(終わりの四句はわかりにくい。「和光同塵」とは、仏が本来の光を隠して俗世に身を

置くこと。蘇軾はそれを見習って、惠州^{けい}の農民の間に自分を交えようというのであろう。
部屋の中に差し込む月の光は、燭台の明るさには勝てない。しかし、全世界を照らすの
は月の光のほうである。蘇軾は、いまは燭台の光に負けてはいるが、いつか朝日が射す
ようになると、希望を歌うのであろう。陶淵明が近隣の人々と完全に一つになっている
のに対して、蘇軾の場合にははかりそめであるというのは大きな違いであろう)

其六(蘇軾)

昔我在広陵、(その昔、広陵^{こうりやう}揚州)にいたときに)
悵望柴桑陌。(はるかかなたに柴桑陌^{さいそうはく}陶淵明の郷里)を望み見て)
長吟飲酒詩、(飲酒の詩を長く吟じて)
頗獲一笑適。(一笑して心に適するものを得た)
当時已放浪、(そのときからすでに放浪の身で)
朝坐夕不夕。(朝には座っていても、夜には夜らしく寝られるというわけにはいかなかった)
矧今長閑人、(まして今はずっと長く閑な人で)
一劫展過隙。(離れたところから世間のあわただしい変化を見ているのだ)
江山互隱見、(江や山はこれまで交互に現れたり隠れたり)^{かわ}
出沒為我役。(私のために(蘇軾が転々とするので)、出没を繰り返さなければならなかった)
斜川追淵明、(これからは、陶淵明^{しやせん}の斜川の遊びを追ってもよいし)
東臯友王績。(東臯^{とうこう}に隠れた王績^{おうせき}を友としてもよいのだ)
詩成竟何為、(詩がこゝして完成して何になるのか)

六博本無益。(博^{ばく}打と同じく、もとより益などないのだ)

(1) 陶淵明^{とうえんめい}の斜川^{しゃせん}の遊びについては第5章331ページなどで、東皐^{とうこう}の王績^{おうせき}については本章107ページで見ている。(2) この其の六は和陶詩の第二作としての結びである)

■次韻表兄程正輔江行見桃花

3月の初めはいろいろなことが重なった。程之才^{てい し さい}（字は正輔^{あざな せい ほう}）（本章107ページ）から、これより惠州^{けい}に向かうとの知らせがあり、蘇過^{そ か}が舟で迎えに出て、2人は43年ぶりに会って話をした。3月5日ないし6日のことである。程之才は『江^{かわ}を行き桃花^{とう か}を見る』という題の詩を出して見せ、蘇軾^{そ しゃく}はそれに和した。父の蘇洵^{そ じゅん}が妻の実家である程の家との絶縁^{てい}を宣言して（第4章206ページ）から36年、両家はここに和解を果たしたのだった。

（この作品は次韻の詩によくあるように、あれこれ故事を引いて内容がごたごたしており、文脈を読み取るのが非常に難しい。蘇軾^{てい し さい}が程之才との和解を果たすために作ったという意図を汲んで、はなはだ大まかな訳文をどうにか作ってみた）

屈原^{くつげん}は僻地^{へきち}に流されたとき、

夏の草木が盛んに伸びるありさまに心を痛め、

賦を作った。

徳のある人の前には、

荊^{いばら}の野もなければ、陰阻^{いんそ}な山道もないという。

我が兄(程之才^{てい し さい})は立派な器の姿を持ちながら、
この暑い川べりの地に流落の身となり、
清浄な眼で、桃の花が紅い雨^{あか}のようにしきりに落ちるのを見ると、
仏に花を供える台^{うてな}を静かに払い、
花を散らす天女に向かって尋ね、
それを詩に賦した。

私は言葉をよく解する花(女性)を見ても、
化粧を施した顔も泥土のようにしか思わないし、
我が一言は千の真理に当たると自負してもいるのだが、
初めから何も言わない桃の花には到底及ばない。
とはいえ、これもそれもとよりつまらない話で、
後々思い出すようなものではない。
こうして詩をつぶやいているのは、
せいぜいのところ、ぎしぎしと鳴る櫓の音に和しているにすぎないのだろう。
見るがよい、
川辺の草木は閑を持て余し、
閑な人間にそがそれに似合っているのだ。
杜甫^{と ほ}が痩せ細っていたのは、苦しんで詩を作っていたからだ。

我が兄よ、
袖に手を入れ、筆も硯も焚いてしまうとよいだろう、

詩などはまことに用のないものなのだから。

私が願うのは、

北に向けて車を整え、六つの轡を手にとって進むこと。

いま行くな、宮中の庭に桃の花が開き、

水の暖かさを知っておどろ鴻は北に去って行くであらう。

■外曾祖程公逸事

この文章は、てい し さい程之才との完全な和解のしるしとして書いたと推測しても、たぶん間違いではないだろう。蘇軾にとっては母方の曾祖父、程之才にとっては父方の曾祖父であるてい じん は程仁覇のエピソードを記したもので、2人に共通する先祖の大切な言い伝えとして親しく語り合い、この機会にと筆を執って記録したのではなかろうか。

(この文章の主要な部分の訳はすでに第3章17ページで見ているが、改めて全文をここに掲げる)

こう いみな じん は び ざん
公の諱は仁覇、眉山の人である。仁に厚く、郷里の人々に信頼されていた。

しよく そう
蜀の地が宋朝の統治下に組み込まれたとき、都の人々は遠くまで赴任するのをいやがり、そのために蜀では官員が不足した。そこで、地元の人間できちんと仕事のできそうな者を選んで臨時の官職に就けた。公もその一人となり、眉山県の参軍という職に就いた。

盗賊を捕えるのが役目の尉^{じょう}の職にある者が、ある盗人を掴まえた。盗みをしたのは確かで、たまたま持っていた刃物で誤ってその家の主人を傷付けてしまっていた。そこで、県尉はその盗人を、強盗殺人を繰り返す極悪人に仕立て、自分の手柄を大きく見せて褒賞を得ようとした。県尉は獄吏と組み、盗人に拷問を加えて目論見通りに白状させた。

県知事の判決がこれから下されるときに至って、盗人は役所の廊下で泣き続け、その衣がぐしょぐしょに濡れるほどであった。そこに公が通りかかり、話を聞いて、これは冤罪であると知った。

それで盗人に言った。

「おまえは、これは冤罪であると知事に訴えろ。そうしたら、私がどうにかしてやる」盗人が言われた通りにすると、公が脇から力を添えたので、知事はもう一度調べ直すよう命じた。

公は冤罪であると主張した。しかし、県尉と獄吏は徹底して争い、とうとう盗人は死刑になってしまった。そのために公は官職を失い、郷里に帰った。

それから一カ月の内に県尉も獄吏も急死した。

さらに三十余年後、公は白昼、そのときの盗人が庭先に座ってこちらを拝んでいるのを見た。盗人はこう言った。

「あっしはあれからずっと閻魔様の前で県尉と獄吏と白黒争ってまいりましたが、やつらはいまだに自分達の罪を認めようとしません。あっしはあなたさまのお越しを待って決着を付けようと思っていました。閻魔様は早くにあなたさまを呼んで、結論を

急ごうしましたが、あっしは『我が恩人を驚かせたくない』と反対しました。しかし、今日に至ってあなたさまの御寿命が尽きることになりましたので、あっしはあなたさまを閻魔様のお裁きの場へとお連れしたいと思います。お裁きが終わりましたら、あなたさまは必ず天に昇られ、御子孫はきっと繁栄いたしますよう」

盗人は消え、公は見た通りを家の者に告げると、沐浴し、正装して横になり、そのまま亡くなった。

私蘇軾は幼いときにこの話を聞いた。そのときはすでに曾祖父は九十歳で亡くなった後だった。

公の子が初めて高い身分に昇り、八十五歳で亡くなった。公の曾孫は皆官に仕えて名声があり、同時に三人(程之才、程之元、程之邵)が司法に関わる職に就いた。玄孫はますます盛んで学問に励んでいる。

一方で、かの県尉や獄吏の子孫は微賤のままである。

ある人が言うには、盗人が公の徳の深さを思って、公を煩わせまいとしばらく待ったのはよいことだったとしても、獄が長らく決着のつかないままであったのは、実は閻魔も県尉と獄吏を長く苦しめてやろうとしていたからではなかろうかと。

紹聖二年三月九日、蘇軾は惠州にあって、陶淵明がその母方の祖父について書いた『孟嘉伝』を読み、『凱風』『寒泉』の思い、実に厥の心に鐘る(陶淵明の母が祖父のことを深く深く思っていたという意味)の句に意が淒然として悲しくなった。そこで、公の逸事を書いて程氏(蘇軾の母も含むその家の人々)のために遺し、陶淵明と心を一つにしようとするものである。

(1) 最後の段落の日付と内容が、程之才のために書いたと推測する根拠で、和解のしるしであるとあからさまに言うのはいかにも無粋であろう。(2) 蘇軾と程之才はひとたび心を許し合うと、その後は従兄弟同士として実に良好な関係となり、朝廷の一部の人々が期待したように程之才が蘇軾を苦しませるというようなことは一切なく、むしろ蘇軾は程之才からさまざまな支援を得たのだった)

■追餞正輔表兄至博羅賦詩為別

程之才（字は正輔）は10日ほど惠州に留まった後に去り、蘇軾は見送りつつ隣の博羅県まで同行し、この詩を作って別れた。

私は独り南に旅し、

黄色い菅に覆われた地に堕ちてしまった。

貴君もまたどうしたことなのか、

南蛮の地に来て、

蜑民(水上生活をする少数民族)と並んで竜岡窟に舟を泊め、

椰の葉の下、桃榔の木の間で別れの酒を置くこととなった。

貴君の立派な言辞の前では、衰えた私のさえない語りは笑うがなく、

貴君の優れた詩句が清く輝きを増すのに感じ入るだけである。

ここ博羅は小さな県で僧舎は古びているが、

私は去り難く、貴君は還るのを忘れかけている。

貴君はこれから帰路を見やって、
 夢の中で早くも川を渡し、関を越えて行くであろうが、
 私は^{いん}筠州の旅人(弟のこと)^{おも}を念い、
 心はその地にある^{おうぼくさん}黄檗山に遊んで禅僧のもとに参じようとする。
 いつかはきれいさっぱりと^{きず}瑕を拭って垢を洗い、
 貴君を追って帰ることが出来るのだろうか。
 いましも梨の花の咲く^{かんしよく}寒食の時節……
 両岸が白い花で埋もれる^{ちやうこう}長江をさかのぼり、
 遥かに二つの山が煙るところへと向かい、
 帰耕しようではないか……
 もはや一銭の物として必要でなく、
 ただ二本の足で山の顔を蹴り飛ばして進みさえすればよいのだ。
 そのとき貴君は忘れずに、玉のような^{ぎよく}丹砂^{たんさ}を分けてくれて、
 我が^{かなえ}金の鼎を光り輝かせるのを助けてくれたまえ。

(終わりの部分は、空想を飛躍させ、郷里に帰って靈薬を完成させると歌っている)

■再用前韻賦

上と同じ韻を用いてまた詩を賦した。

^{はくらくてん}白楽天の鬢の毛が霜をかぶった^{すげ}菅のようになったのは、

はん そ しょうばん

樊素と小蛮の二人の妓女を解き放ってからたという。

我が兄の髪はふさふさしてもとの緑のままでありながら、

人間界の事柄は夢幻に等しいとすでに了解している。

美しい眉の女性に酒を勧められても、

ただそれだけのことで、

酒のために残忍になる奴がいようが、臆病になる奴がいようが、

全く頓着しない。

三杯飲めばすぐに酔い、

大勢の女が舞い踊ろうが、もはや何とも思わない。

はるばる遠い旅を何度もしてきたので、

送別の詩を重ねて歌ったところで、やはりもはや何とも思わない。

酒が醒めて夢が終われば、

花は落ち、水は流れて、ただそこには山があるだけ。

にわかに銅鑼^{どら}の音が響く——

そうだ、出発の時がきたのだ、

いかなる風流人も月によじのぼることはできないのだから、

別れて旅に発^たたなければならぬ。

我が兄に贈る物は何もない、

「病を起こす霧に侵されることのないように」

ただその一言だけがある。

ら ふ ざん

羅浮山の仙人はすでに我が友となっているので、

歳月が移らぬようにして、我が兄の顔を若いままに保ってくれるよう頼むでしょう。

私はもとはといえば天上の文章係であったのだ、

いつかまた仙人の並びの中に加えてもらえることだろう、

我が兄とともに。

(① 終わりの部分は仙界のことをいいつつ、朝廷に復帰する期待を述べたと解釈することもできるであろう。(2) 程之才はこれで都に帰還したわけではなく、まだしばらくこの地域で巡察を続ける)

■遊博羅香積寺

てい し さい

程之才を見送った後、蘇軾はしばらく博羅県に留まり、香積寺を訪ねてこの詩を詠んだ。短い序文がある。

こうしゃくじ

香積寺は町から七里のところにあり、三つの山が犬の牙のように突き出ている。寺までの道は、両側ともに豊かな田畑で、麦や稲がさかんに成長している。寺の下
の溪流は臼を搗くのに使えそうで、もし百歩の広さの池を作り、水門から水を落とす
なら、二つの輪を回転させて四つの杵を挙げることができだろう。そこで県知事の
林抃に頼んで、工事を監督させて、成就したいと思う。

(やはり蘇軾には水利工学の才がある。水の流れを見て、水力を活用する適地であると判断したのである)

足かけ二年、

蛙や魚のすまうところに流落する身となっている。

今朝こに來て、

麦が芒^{のぎ}を吐き出しているのを見て喜びがわく。

東の風に、麦は波を起し、清らかな緑が舞う。

朝^ひの陽に、露に潤う芒のやわらかな黄色が美しく映える。

春の泥は汪汪^{たふたふ}の水を含んで膝を沈めるまでに深く、

秋に剌^{びんびん}剌と穂を出す稲はいま苗を植えたばかり。

万里の彼方にきて、友人はいないと、人は言うのかもしれないが、

麦と稲のこの二つの美しさを見れば、

心はもの狂いになるほどの喜びでいっぱいになる。

三つの山に取り囲まれて小さな寺がある。

一步^{たにがわ}の幅の溪川が雷のような音を立てて巡り来て、

松の木陰がまことに涼しい。

この水の力を臼を搗^つぐのに使ったらよいであろう。

地脈をよく観察して、堤防を造るのだ。

麦の粉が、霏霏^{はらはら}と降る雪のようにしてできあがるのが見られ、

糠^{ぬか}を搗きあげていく隱隱^つと太鼓を打ち続けるような音が聞かれるようになるだろう。

餅^{へい}の肌が十字に分かれて香ばしく焼き上がり、

流れるような真っ白な粥を啜ることができるのだ。

かの美味とされる「牢九古味」の団子だって作れるし、

仙人の飲み物のような「真一酒」さえ作ることができる。

この詩ができてみると、

自分でもまさに捧腹絶倒、

書生が食べ物について語り出すと、留まるところを知らないのである。

(1) 詩の後半は、水力を活用したらこうなるという空想の羅列。「牢九古味」については蘇軾自身の注が付されているが、その意味がわからない。何か団子の類の名であるようだ。「真一酒」については別に詩文がある(本章171ページなど)。(2) 蘇軾がこの後惠州に戻ったところに卓契順(本章125ページ)が蘇州に帰ることになり、先に見た通りに陶淵明の『帰去来の辞』を書いて持たせたのだが、それだけでは旅の労苦に十分に報いたことにならないと思ったのだろう、程之才宛の手紙を書いて卓契順に届けさせ、なにがしかの餞別を卓契順に与えてくれるようそこに書き添えた)

■恵誠

杭州の南の永嘉から一人の僧がきた。恐らく蘇軾に会うために遠く旅してきたわけではなく、幸運の導きによって蘇軾に会えたのだろう。

私が惠州にいると、永嘉の羅漢院の僧の恵誠が来て、

「明日、浙東に帰ります。どなたかに御伝言がありませんか」

と。言った。

私はすぐには答えられず、心の内で思ったのは、呉越^{こえつ}には大勢の名僧がいて、普段から親しくしていたのはざっと十九人。そのうちの数人の名を恵誠に授け、帰ったなら私の意^{こころ}を伝え、また我が住まいのありさまや、暮らし向きを話して、人々の心配をといてほしいと頼んだ。

筆にまかせて紙に書いたので、順序は乱れ、漏れ落ちた者もあるだろうが、ちょうど酔っていて詳らかにしない。

紹聖二年三月二十三日、東坡居士書^{しょうせい どうば こじ}

(訳者が参照している本には、19人とあるだけでその名は挙げられていない。別のテキストでは、参寥^{さんりょう}以下12人の名が挙げられているものもあるという)

■臨江仙

「惠州で前韻^{けい}を改める」との添え書きがある詞。「前韻」とは、密州知事^{みつ}であつたときの作品で、それには「熙寧九年四月一日、趙庾^{きねい ちょう ぐ ぎやう}(字は成伯)、公謹^{こうきん}(未詳の人物)らとともに蔵春館^{ぞうしゅんかん}の残花を賞玩した。蔵春館は密州の邵家の庭にある」との添え書きがある。19年前に黄河下流の密州の春の終わりを詠んだ詞の前半をそっくりそのまま用い、後半を変えて惠州知事^{しやう}の詹範^{せんはん}に示したのである。

九十日春都過了、(九十日間の春はすっかり過ぎ去ってしまいましたのに)

貪忙何処追遊。(意地汚くどこで春をまだ追いけようというのでしょうか)

三分春色一分愁。(春の色を三つに分けると一つは愁いの色)

雨翻榆莢陣、^{にれ さや}(榆の莢が一斉に雨のなかで翻り)

風転柳花毬。^{まり}(柳の花がつくる毬のようになって風に転がって行きます)

我与使君皆白頭、(私も知事殿もそろって白髪頭)

休誇少年風流。^{スビリット}(若いころの風流を燃え立たせることはもうできません)

佳人斜倚合江楼。^{うつし ごうこうろう}(佳人の人が合江楼に寄り添って立っていても……)

水光都眼淨、^{きよ}(水に映るものすべてが眼に淨らかで)

山色総眉愁。(山のたたずまいが愁いを呼び起こします)

^{みつ}(密州での詞の後半は、「閨苑先生須自責、蟠桃動是千秋。不知人世苦厭求。東皇不拘束、肯為使君留。」で、幾つかの故事を踏まえていて、訳者は意味が掴めないので訳せない)

■蝶恋花

同じ頃に春の風光を詠んだ詞。

花褪殘紅青杏小。^{あ くらない くず あんず}(花は褪せ、紅は残れ、青い杏の実はまだ小さいまま)

燕子飛時、^あ(燕が飛ぶときに)

綠水人家繞。(緑の水が人の家をめぐります)

枝上柳綿吹又少、(枝の上の柳の綿は吹かれてもう少なくなっていました)

天涯何处無芳草。(天の涯であっても、^{かぐわ}芳しい草のないところはないのです)

牆裏鞦韆牆外道。(牆の内に^{へい}鞦韆、^{ぶらんこ}牆の外に^{かき}道)

牆外行人、(牆の外を行く^{かぐわ}あの人)

牆裏佳人笑。(牆の内^よで佳き人は笑っています)

笑漸不聞声漸悄、(笑いは聞こえなくなり声はひっそりします)

多情卻被無情惱。(多情はかえって無情によって悩まされるのです)

(これは抒情詞で、筋道だった訳文をこしらえようとしてもできるものではない。われわれが普通に歌う歌詞もそうであるように、意味のつながりは明瞭でなくても、音律に乗せて唱えれば情感に強く訴えるものがあるのだろう。蘇軾がこの詞を王朝雲^{おうちょううん}に示すと、王朝雲は途中で声を詰まらせて歌えなくなったという言い伝えがある)

■題嘉祐寺壁

^{か ゆう じ}嘉祐寺 (本章87 ページ) の壁に記した短文。

^{しょうせい}紹聖元年十月二日、私は^{けい}惠州に至ると、始めは^{か ゆう じ}嘉祐寺の^{しょうふうてい}松風亭に寓居した。そのあたりを歩き回り、犬や鶏とも知り合いになった。

翌年三月に、^{ごうこうろう}合江樓の^{かわ}公舎に移った。江の大きな眺めは得られたが、趣のあるところをぶらぶらと尋ね歩くことはなくなった。

しょうふうてい 松風亭ほどに喜ばしく感じられるところは、^{れいなん}嶺南にも^{れいほく}嶺北にもほかにないのではな
 かるうか。

^{けん}虔州の^{かくでん}鶴田の^{おうげん}王原、^{あざな}字は^{し ちよく}子直は千里の道も遠くないとしてここにまで私を訪ねてく
 来て、留まること七十日でここを去ることになった。

^{とう ば こ じ}東坡居士書く。

(1) ^{けい}蘇軾は^{ごうこうろう}惠州に到着した直後は合江楼に短期間だけ仮住まいをし、それから^{か ゆう じ}嘉祐寺
 に移り、そして再び合江楼に戻っていたのでである。(2) ^{けん}虔州から来ていた^{おうげん}王原(本章
 112 ページ) がこのときに帰った。一緒に来た^{らいせん し}頼仙芝もたぶん一緒に帰ったのだらう)

■贈王子直秀才

上の文にある^{おうげん}王原(^{あざな}字は^{し ちよく}子直)が^{けん}虔州に帰るのに際して贈った詩。

万里の雲と山、

一枚のおんぼろの衣、

百錢を杖の端にひっかけ、

ぶらりと旅に出る。

五台の車をいっばいにするだけの書物は、子供等に与えて読ませている、

^{けい}二頃^のの広さの農地では、鶴に食べさせるための餌を作っている、

水の底で笛吹き歌うのは蛙の音楽隊、

山の中で働いているのは千本の橋の木。

頭巾をのせて、そこへと帰る貴君に随って行きたいと思う。

海のほとりのここけい惠州には、私の旧いなじみは誰もいないのだから。

(本章 112 ページでは、王原おうげんしゅうさい秀才と記していたから、科挙を目指して勉強していた時期もあって、蘇軾と詩の贈答ができるだけの教養があったのだろう。前の文章で見たように、王原の住まいは虔州けんの鶴田かくでんというところにあつたので、この詩では、鶴の餌を作っていると洒落て、その続きで、蛙の音楽隊や橘の労働者といった連想を働かせたのである)

■跋嵇叔夜養生論後

晋しんの時代に「竹林ちくりんの七賢人」と呼ばれた一人に嵇康けいこう (字が叔夜あざな しゆく や) がいて、蘇軾の詩文に時折その名が引かれているが、これは嵇康の『養生論ようじょうろん』を読んで得るところがあつて筆写したという短文。

東坡居士とうば こじは梢に残る夕陽、すなわち憂患のうちの余生にある。

学問の道おくに後れ、すでに道の奥に達した人には笑われているけれど、以前よりは
いづか賢くってはいるのだろう。嵇康の『養生論』を読んだところ、いろいろな病
にすこぶるあたるところがあつたので、写して数本を作り、その一つを羅浮らふの鄧道師どうどうし
に贈る。

紹聖二年四月八日、書く。
しょうせい

(1) 惠州に来てから、謫居の身でありながら悠然と過ごしているかのように見えもす

るのだが、ここの最初の一行がその実態を示しているのではなかろうか。蘇軾^{けい}は、惠州に来てから、養生や道術について熱心に研究しているが、その背景には言い知れぬ憂患があるのだろう。(2) 写本を贈った相手は羅浮山^{らふざん}の道士の鄧守安^{とうしゅあん}（本章77ページ）である。蘇軾はいろいろな階層の人々との交流を通じて地域の実情を尋ね、社会にながしかの貢献をしようと努めていた。そのことは後に見る。定州^{てい}を出るときに「私は、あちらでも土地の人々に背くことなく努めるつもりでいる」（本章3ページ）と歌った官員としての責任感は失せることはなかったのである）

■江漲用過韻

南国の梅雨は早い。4月の初め、惠州^{けい}の町に流れ込む東江^{とうこう}と西江^{せいこう}に水が漲り、一部が溢れた。息子の蘇過^{そか}が詩を詠み、その韻を用いて蘇軾も詩を作った。

町の古い住居跡には草木が繁り、
 から堀にはたくさんの牛や羊がいた。
 春の江^{かわ}が溢れて町を取り囲み、
 夜の間に、そこらにあった竹づりの家屋が浪によって流されてしまった。
 水は海にまで連なって白く漲り、
 なお緑色を帯びているのは霍山^{かくざん}だけである。
 水と火は互いに攻め合う関係にあるというけれど、

いまは水が勝って、魚や亀が我がもの顔で陸地を横行している。

太古の昔にも、火の官は水の官と競って敗れたことがあった、

それでも、火の官は一矢報いようとしたというから、

南の国のこの危難を救いに、

北風とともに火の官が来てくれたりはしないだろうか。

沙にまではびこってしまった害毒を焼いて一掃してほしいものだ。

こうした禍福の循環はいつか止むのだろうか。

造化の不可解さを私は悲しく歌う。

哀れなのは水害と干害に苦しむ民衆で、

逃げるための舟やら車やらを備えておくことさえもできないのだ。

江の流れをたちまちおさめてしまうことがもしもできたなら、

祭りの酒を大いに楽しみたいものである。

■連雨江漲二首

上と同じく、雨が^{かわ}続いて江が^{みなぎ}漲ったときの詩。

其の一

山から出た雲が^{えつせいこう}越井岡の上をおおう……

^{そう か こう せいこう}牂牁江(西江)のあたりは、天にまで水が広がる……

隱遁者(蘇軾)の家では、雨漏りを避けようと、寝床をあちこちに動かす。

たんみん

蜚民は船がそのまま家であるから、入り江から入り江へと自由に移り行く。

竜が、魚や蝦を巻き上げて、雨と一緒に降らせる。

人は、鶏や犬とともに土塀を登って屋上で眠ろうとする。

二階家の階段までもすっかり水に漬かってしまった――

その跡をもって、

かの先生(蘇軾)^{こ けい}が五嶺を越えたのはあの年だったと、

今後は長く記憶に留めることだろう。

たんみん

(蜚民は水上生活をする少数民族である(本章140ページなど))

其の二

激しい雨が蕭蕭^{さうさう}降って、夕方には涼くなった。

寢床に入ると、

ガジュマル

榕樹の葉の鳴る音が長い廊下で反響し続ける、

ほんのり明るい燈火も、夢のなごりもともにぼんやりとしている、

半分濡れた簾帷からは、しみついた匂いかじっとり湿って立ち昇る、

川に立つ高い浪によって、床が揺り動かされるほど、

かめ はち

甕や盃^{はち}からもしぶきが飛び出そうだ、

暗がり^{がし}を吹く風が樹を驚かし、幹が琳瑯^{がし}と鳴っている。

これでは晴れたところで、

先生は水に囲まれてどうせ家から出られないのだから、

意味がない。

ならば、夜の間中、

誰もいない階段に好きなだけ雨をしたたらせたらよいだろう。

けい

(惠州では雨の降り方も、雨の音も、雨の匂いもどれも北の地とは違うのである)

■四月十一日初食荔支

四月十一日に熟した荔支^{ライチ}の実を食べたという詩。

けい

やまもも

きんかん

惠州の南の村には楊梅、北の村には盧橘、

あちこちで白い花を咲かせ、青い葉は冬も枯れない。

煙る雨のころに、

楊梅に紫の実が連なり、盧橘に黄色い実が垂れるのは、

つまるところ、

ライチ

荔支の先駆けとなろうとするものであった。

荔支の実は――

海の中にある山の仙人が、

あか

うすもの

はだき

あか

しゃ

あせとり

はくぎよく

はだえ

絳い羅の襦をまとい、紅い紗の中單で白玉の膚を包んだもの、

ようきひ

楊貴妃が微笑むのを待つまでもなく、

まち

城を傾ける美人の風骨を見せるのである。

この優れたものを、海辺の隅の地に生じさせたのは、

はたして天公(造物者)にどのような意図があるのか。

松や檜は雲のかかる山で老いる定めであり、

梨や麤^{かりん}は霜や雪に苦しめられてがさつになる。

先生は盞^{かつらん}を洗って桂の酒を酌み、

氷のような盤^{さら}にこの竜の鱗^{あか}い珠を盛る。

果肉は江鱈^{はまぐり}を開いて玉柱^{かいばしら}を斫^きったかのよう、

さらには、河豚^{ふぐ}を洗って腹^この腴^こえたところの肉^にを煮^にたかのようである。

我が人生はもとより口のための世渡りであったが、

(晋^{しん}の張翰^{ちやうかん}のように)蓴菜^{じゆんさい}と鱸^{すずき}くらいでは官職を棄てる気にならなかった。

人間界のことで夢幻でないものはない、

万里の彼方の南に来たのはまことによい方途であったのだ。

((1)「我が人生は口のため(食うため)であった」と、黄州^{こう}に到着した直後にも歌っていた(第6章41ページ)。ライチのためなら惠州^{けい}に来たかいがあったという

のだ。(2)終わりの句「人間何者非夢幻、南来万里真良図」(人間 何者が夢幻に非ざら

む、南来 万里 真に良図)は実に蘇軾らしい。南に流されたことを嘆くのではなく、夢幻とした上で、現実を全面的に肯定するのである)

■書緑筠亭詩

衢州^くの人の梁琯^{りやうかん}の訪問を受けて蘇軾が記した短文。衢州は北東に数百キロ離れた遠隔の地である。

愛竹能延客、(竹を愛し、客人を招き入れる)

求詩剩掛牆。(客人に詩を求め、それを壁に掛ける)

風梢千纛乱、(風が梢を吹いて、竹は千本の旗のように乱れる)

月影万夫長。(月の光に竹は万人の影を伸ばす)

谷鳥驚棋響、(谷の鳥は碁を打つ音に驚き)

山蜂識酒香。(山の蜂は酒の香りを知っている)

只応陶靖節、(陶淵明とうえんめいと同じ)

解聽北窓涼。(にこの主人は)北の窓辺の涼しさの妙味を知っているのである)

かつて私は清献先生せいけん(趙抃ちょうべん)から緑筠亭りょくいんていの詩を作るよう求められた。

清献先生は、

「緑筠亭は我が故郷の人、梁处士りょうの住居である」

と言った。

それから二十五年後に梁处士りょうかんの子の梁瓘りょうかんに会い、緑筠亭を詠んだ詩を書くよう求められた。

紹聖二年四月十三日。

(1) ここに掲げられている詩は蘇軾が 35 歳のときに都で作ったもの。趙抃ちょうべんの依頼で、緑筠亭の主人である梁处士りょういんてい (处士は官職に就かない人) の人となりを詠んでいる。北の窓から吹き込む涼しい風を受けると太古の人になったような気がするというのは、

とうえんめい

陶淵明の詩に基づく。趙抃は蘇軾の恩人である（第5章223ページなど）。(2) 蘇軾を訪ねた人が最も喜ぶのは蘇軾の書であったから、梁瑄は父のことを詠んでくれた蘇軾自身の詩を書いてもらって、この上なく嬉しかったであろう。梁瑄は次の文章にも登場する)

■題秧馬歌後

蘇軾は惠州で、田植えに使う器具である秧馬（本章38ページ）の普及に努め、これはそのことを記した短文。

惠州博羅県の知事の林抃君は農民のために勤めている人物である。私が秧馬を歌った詩を出して示したところ、林君は非常に喜び、自ら役人を指揮して製作し試してくれた。秧馬の背中が瓦を重ねたようになっているのを、首を起こして馬の鞍のようにした方が前に進みやすいと、林君は考えた。そのように改良して惠州の民に用いさせたところ、はなはだ便利であるといってくれた。

思うに、浙中(長江下流域)では天下の稲のほとんど半分を作っているのに、この秧馬のことをまだ知らないでいる。陽羨には私のちっぽけな農地があるので、これを教えてやりたいと思う。たまたま衡州の進士(科挙の受験資格がある者)の梁瑄が私を訪ねてくれて、さらに西に行くというので、秧馬について詳しいことを口で授けた。梁瑄が衡州に帰ったならば、張弼(字は秉道)君に会って、秧馬の寸法と乗り方を伝え、一枚の図面を作って、呉の人々に広く伝えるとともに、陽羨の息子たちにも教

えてもらえたら、最も幸いである。

前から張弼君には手紙を送りたいと思っていたのだが、つい怠けていたので、最近のことは梁君から詳しく聞いていただきたい。さらには參寥師さんりょうにも伝言して、万里を隔てた一笑を催してもらえたなら最も佳ろいであろう。

紹聖二年四月二十二日、蘇軾書く。

(1) 秧馬おうばについて記した短文はこの他に 3 篇あり、蘇軾は農民の苦勞を少しでもやわらげたいと考えて普及に努めたことがわかる。(2) 博羅縣知事の林抃はくら りんべんの名は本章 131 ページで、杭州の役人である張弼ちやうひつの名は第 9 章 178 ページですで見ている。(3) 衢州こうと杭州は 200 キロほど離れ、陽羨ようせんとはその半分ほど離れているのだが、惠州から見れば互いに近いということで、梁瓘りやうかんにいろいろと頼んだのである)

■ 殢人嬌

これは王朝雲おうちやううんに贈ったとされる詞。不思議な内容の作品で、仏の教えに帰依することを歌いつつ、男女の情愛も詠んでいる。恐らく、二人の間では了解し合えるものがあつたのだろう。

白髮蒼顏、(白髮のしよぼくれ顔になったときに)

正是維摩境界。(維摩居士の境地になるのです)

空方丈、(からんとした方丈に)

散花何礙。(天女がきつと花を散らすでしよう)

朱唇箸點、^{あか}(朱い小さな唇)

更髻鬟生采。(照^り輝^く髪)

這些個、(これはまさに)

千生万生只在。(一千回も一万回も生まれ代ってここにいるのです)

好事心腸、(心にあるのは好^よい事)

著人情態。(人^{おも}いに情^いをかけます)

閑窓下、(静かな窓^{まど}辺で)

斂雲凝黛。(髪^髪をあげたり 黛^{えい}を引いたり)

明朝端午、(明日は端午の節句)

学紉蘭為佩。(蘭^{らん}を摘んで腰の飾^しりを作^{つく}りましょ)

尋一首、(一首ひねって)

好詩要書裙帶。(好^こい詩^しを帯^{おび}に書^かいてあげましょ)

(最後に「一首ひねる」といっている通りに端午の節句について詠んだとされる詞もあるが、さほど面白味はないので訳さない)

■桃榔杖寄張文潜一首時初聞黃魯直遷黔南范淳父九疑也

詩題は、「桃榔^{こうろう}(くろつぐ、ヤシ科の木)の杖^{ちようらい}を張^{あざな}耒^{ぶんせん}(字は文潜)に寄せる一首の詩。黄庭堅^{こうていけん}(字は魯直^{ろちよく})は黔南^{きんなん}に、范祖禹^{はんそ}(字は淳父^{じゆんほ})は九疑^{きゆうぎ}に遷されたことを聞いたばかりである」。桃榔は杖にする良材であるという。

張耒も黄庭堅も范祖禹も蘇軾と深い関わりのあった人々で、いずれも改革派の攻撃の標的となって、都から遠く離れた地に左遷されてしまったのである。

ねむ
睡りから起きると、

風がすがすがしく、酒はもうなくなっている。

夢の名残とともに、我が身も何やら^{ぼんやり}茫々としている。

かわ
江べりに杖を曳く――

杖は^{こうろう}瘦せた桃榔の枝。

桃榔の林の下を尋ねる――

ひつはつ
華撥の苗の香が立つ。

こうして独りで歩いているうちに、

もしかすると、昔の^{かつこう}隠者の葛洪に会うかもしれない。

遠く^{ちやうきやうれい}にこに来て、かの張九齡を恨む気はない。

遥かに知るのは、

るこく ^{こうゆう}魯国の真男子といわれた孔融――すなわち張耒君のこと、

普段から^{せいけん}氣にかけている盛憲――すなわち私のことを思っているに違いないのだ。

(1) 桃榔と華撥の組み合わせは本章 91 ページですで見ている。(2) 詩の後半では、

かつこう ^{ちやうきやうれい} 葛洪、張九齡、^{こうゆう}孔融、^{せいけん}盛憲の4人の故事を引いている。葛洪の名はすでに本章 77 ペ

ージ以降何度か見ている。張九齡^{とう}は唐代の名宰相。国ためにならない人間は遠い辺地に

置くべきだと建言し、その遠い影響として蘇軾^{けい}は惠州に流されたのである。孔融と盛憲は三国時代の人で、孔融は天下に名高い盛憲^{そうそう}を救おうと曹操^{そん}に働きかけたが、盛憲は孫策^{さく}によって殺されてしまった)

■真一酒法

蘇軾は実験家である。仙薬を練ろうとしてみたり、金を作ろうとしてみたり、料理法を開発したり、種々の醸造法を試みたりと、いろいろなことをしている。これは「真一酒^{しんいちしゅ}」の作り方を記した文章で、徐大正^{じょたいせい}（字は得之^{とく}）に寄せたものである。徐大正は黄州^{こう}にいたときに知り合ってから（第6章 458 ページ）、折々に交流があった。徐大正は惠州^{けい}からさほど遠くはない福建^{ふっけん}にいた。

嶺南^{れいなん}では私的な酒造りが禁止されていない。近頃一つの製法を得たので授けたい。用いるのは小麦粉、もち米、清らかな水の三つだけだ。これを「真一法の酒」といふ。醸^{かも}すど玉^{ぎょく}のような色になり、天然の香りと味があり、王誼^{おうぎ}の家の「碧玉香^{へきぎょくこう}」にそっくりである。……（以下、小麦粉三斗、もち米一斗を用いて二カ月余りかけて醸造する詳しいレシピが記される）……熟成するとよい酒が六升得られる。その他に醗^{うすぎけ}が四、五升ほど取れ、俗に「二娘子^{にじょうし}」というが、これも飲むことができる。醸造にかかる日数は天氣の冷暖によって変わる。ひどく暑いときは、麴^{こう}を半両ほど減らす。

汞^{すいぎん}を使った薬の作り方は人に伝えてもよいが、この方法は伝えてはならない。

■真一酒

上で見た米、麦、水の三者を合わせただけの「真一酒」^{しんいちしゅ}について詠んだ詩。

雪がはじけ、雲が開く——酒が発酵する、

どろりとした乳のようになる。

蜜蜂だって先生を酔わせたことがある。

稲は穂が垂れるもの、麦は穂が立つもの——

陰と陽がこれで揃っている。

器は清潔、泉の水は新鮮——

表も裏もこれで清らかである。

かくてでさあがった真一酒^{しんいちしゅ}を飲むと——

朝日^{あさ}が顔に当たって、紅く暈がかかり、

春の風が骨の髄にまで入って、そのまま消えて声もない。

人間世界でこの酒を作ったのは真に東坡老^{とうばろう}が一人だけ、

青州^{せいしゅう}の役人が作った酒を「青州從事^{せいしゅうじゅうじ}」と呼ぶのであるから、

これを「真一酒」(真に一つだけの酒)と名付けてよいのである。

(1)「蜂蜜云々」のところに、蘇軾自身の注で、「真一酒^{しんいちしゅ}の色と味は、私が黄州^{こうしゅう}にいた

ときに作った蜜酒^{みつしゅ}にすこぶる似ている」と書き添えてある。蜂蜜を発酵させた酒につい

ては第6章292ページで見ている。(2)蘇軾はこの「真一酒」がよほど気に入ったの

だろう、それについて記した短文が（ここでは訳さないが）さらに2篇残っている）

■虔州崇慶禪院新経蔵記

けい 恵州への旅の途中でけん 虔州を訪れていたが（本章44ページ）、その崇慶禪院（すうけいぜんいん）にある経典を納める蔵についてこの文章を書いた。

（この文章の最初に、経典にある「^う得と^なころ無きをもって故に^{ゆえ}得る」という一文を掲げ、それに関する所説を略述している）……私は仏教を学ぶ者ではないので、このあたりのことはよくわからないのだが、^{こうし}孔子は、

「『詩経』にある三百篇の詩を一言で表すなら、^{よこしま}思い邪なし、である」

と、言っている。そもそも思うところはみな^{よこしま}邪であるのだろうか。善であれ悪であれ、思うところがないというのは土や木である。どうしたら、思うところがありながら、^{よこしま}邪ではなく、かつ土や木ではないということが出来るのだろうか。

ああ、私は老いて、もはや数年の暇も^{いとま}残されていないだが、仏僧の寺に入ってそこにある書物をことごとく見て、心に思うところなく^{にょらい}如来の意を理解し、「得と^いころ無きをもって故に得る」に至りたいと思っている。恵州謫居となり、何事もなく月日を送り、その志をできれば遂げたいものと、恵州の経典を所蔵するところではない僧舎の部屋に「^{し おじやさい}思無邪斎」の名を掲げ、その志を示している。

私は南に遷ることになったときにけん 虔州を通過し、^{ゆ かつ}副知事の俞括君と遊び、ある日、^{れん せん}廉泉を訪れて^{すうけい いん}崇慶院に入って^{ほう ゆ そう み}宝輪蔵を観た。そのとき俞君が言った。

「長江ちやうこう以南でこよりも壮麗なところがありますか。その費用は二千万余り、先の長老どんしやうの曇秀が作り始めて、完成に近づいたところで曇秀は亡くなり、今の長老いしやうの惟湜がそれを嗣いで完成したのです。各地を奔走して勧進し、費用を十六年間にわたって集め続けたのは僧ちしやくの知錫あわです。この三人の苦勞を慇懃あわで、何か一言記していただけませんか」

心の内で私はこれを承諾した(つまり、そのときには書かなかった)。

俞括君は博学で文章が上手で、政まつりごとの手腕も確かで、進取の気概に富んでいた。惠州に來た私のところにしばしば手紙をくれて、官職を棄てたなら一緒にみち道を学びたいと言っていた。ところが、虔州の仕事を辞めて郷里に歸る途中ちりやうの廬陵で亡くなってしまった。虔州の人々はそれを聞いて道に哭し、私も涙を流した。

それでこの文章を作って、……、これを石に刻み、俞括君の未来いんの因となることを願うものである。

紹聖二年五月二十七日記

(仏教の經典を議論するなかに孔子こうしの言葉を引くのはやや違和感があるのだが、蘇軾に限らず宋代そうの人々は仏教を仏教それ自体として理解するのではなく、儒学や道教との共通性を見出して、三經を融合させ、より普遍的なところで理解しようとした。そのために、仏教それ自体の理解としては必ずしも正鵠を射たものであったとはいえないところもあったのかもしれない)

■荔支嘆

ライチ
「荔支の嘆き」という詩。

(この詩は荔支に関連するいくつかの歴史的事実を踏まえて詠まれている。それらについて蘇軾自身の詳しい注記が付されている。それをまず見ておく。①漢代の永元年間(この詩は荔支に関連するいくつかの歴史的事実を踏まえて詠まれている。それらについて蘇軾自身の詳しい注記が付されている。それをまず見ておく。①漢代の永元年間に、交州から荔支と竜眼(ライチに似た果実)が宮中に進献された。それを都に運ぶために、十里ごとに一つの置(宿駅)、五里ごとに一つの塚(一里塚)が設けられ、急いで走るあまり死亡する者、猛獣や毒虫の害に遭う者が無数に出た。唐羌(字は伯遊)はこのことを聞き、臨武の長官になると、この状況を上書して朝廷に訴えた。それによって和帝は宮中に果実を届けることをやめさせた。唐代の天宝年間には、(宰相の李林甫が楊貴妃を喜ばせるために)涪州から荔支を運ばせた。子午谷の路を通って都に入ったのだらう。②宋代になって、洛陽から花を宮中に貢ぐことを銭惟演が始めた。大小の竜茶を貢ぐことは丁謂が始め、蔡襄が制度化した。欧陽脩は蔡襄が小竜団を進献したことを聞くと驚嘆し、「蔡襄は士人(ひとかどの人物)ではないのか。どうしてこのようなことまでしてしまったのか」と言った。今年、閩中の役人が茶の品評会を開くことを願い出て、朝廷はそれを許した)

十里に一つの宿駅、塵を飛ばして走り過ぎ、

五里に一つの塚、火を焚いて待ち受ける。

走る者は逆さまに穴に落ち、相次いで谷に倒れる。

これは何をしているのか、

ライチ リゅうがん

荔枝や竜眼を都に届けるのである。

車は飛ぶように走って山を跨ぎ、

船は鳥のように滑って海を横切り、

枝や葉がいま採ったばかりのままに運ばれる。

宮中の美人の顔をひとたびほころばせるために、

大地から塵を巻き上げ、人々の血を流すことが、千年にわたって続けられた。

かんだい えいげん

こう

漢代の永元年間に荔枝は交州から来て、

どうだい てんほう

ふ

唐代の天宝年間には貢物は涪州から取られた。

どうきよう

漢代にそのことを止めさせた唐羌の霊に酒を捧げる者はいないけれど、

りりん ほ

唐代にそのことを行つた李林甫を憎んでその肉を食おうとする者は今もいる。

てんこう

天公(造物者)が荔枝のような余分な物を生じさせたために、

民衆は大きな傷を負わされてしまったのだ。

天公よ、

そのようなことはもうやめていただきたい。

天公よ、

雨を順調に降らせ、風を穏やかに吹かせてくれさえすれば、

穀物が稔って、民衆は飢えることがなく、

それが最高に目出度いことであるのだ。

見るがよい、

ぶ い さん

そくりゅう が

武夷山の溪のあたりに粟粒芽という極上の茶がある、

先に丁謂てい いが、その後で蔡襄さいじょうが籠に納めて宮中に献上した。

かくて、お上の恩寵を買おうと、

争って新奇の意匠を凝らすようになった。

今年はさらに品評会で勝ち抜いた茶をお上の御用にあてるという。

君主が必要として世に乏しいとする物が果たしてこれであるのか。

口を養うためであるとは、あまりに卑しいではないか。

洛陽らくようには宰相を輩出するような忠孝な家がたくさんありながら、

姚黄ようこう花(牡丹の品種)をせっせと献上しているとは、

これまたまことに情けないではないか。

(蘇軾ライチの嘆きは荔枝にとどまらず、同じ時代の茶や牡丹に及んでいる。蔡襄さいじょうや銭惟演せん い えんが優れた実績がありながら、珍奇なものを率先して宮中に献上したことを、蘇軾は前にも厳しく批判していた (第10章 186 ページ))

■荔枝竜眼説

上の詩で、荔枝ライチに似た竜眼りゅうがんという果実があるのを見た。その二つを比較した短文。

閩越びんえつ(嶺南)の人は荔枝ライチが上で竜眼りゅうがんが下だという。このことについて評しよう。

荔枝は食べると蟪蛄ゆうぼの大蟹に似て、雪を砕き膏あぶらが流れるかのようで、ひとつ噉くらうだけでもう満足する。竜眼は食べると彭越ほうえつの石蟹のようで、しばらく噛んでいても得る

ところがない。しかし、酒を飲んで口がべたつくときや、たっぷり食べた後で後味が悪いときには、石蟹が蝸牛にまさることもある。

戯れに紙に書いて、飲んだときの笑いに供しよう。

(2種の蟹を引いて2種の果実を比較している。物事の評価は相対的なものであるというのは蘇軾がいつも言っていることだ)

■次韻程正輔遊碧落洞

従兄の程之才てい し さい あざな せい ほ (字は正輔) が碧落洞へきらくどう (本章64ページ) に遊んだ詩を送ってきたので、それに次韻して返した。

静かなこの山の奥へと到るのは難しいことではない、

この絶境を形容するのが容易ではないのだ。

いつかのときに仙界り はくから流された李白がここに来て、

天上の音楽を奏したという。

李白の胸の内には幾つもの湖がおさまり、

なおかつ広大な余地があって、

冠の紐の飾りには北斗星と金星を付けていた。

夏黄公か こうこう (古の隠者) が李白に紫芝し し (霊妙な効能のある草) を献じ、

赤松子せきしょうし (古の仙人) が青精せいせい (隠者の食べる粥) を馳走した。

それまで溪山は長らくひっそりとして、

誰かが詩を詠むのを待っていたので、

ひぐらし
蜩は枝を抱いて咽ぶように鳴いて李白に請い、

蚊は耳をめぐって澄んだ声で願ったところ、

李白は手を叩き、かつてある人がここで詠んだ詩を笑ったという。

私は近頃独り^{へきらくどう}その碧落洞に遊び、

離れ雲^{こころ}と情が合うと感じた。

貴君はその後を継いで行かれたのだが、

残念ながら、空は霧の雨に閉ざされていた。

貴君は岩の上で長生の薬になる砂を見つけ、

一人だけ服すのは忍びないと、兄弟の情をもって私を思い起こし、

詩を詠んで寄せてくれた。

どうえんめい しゃれいうん
それは陶淵明と謝靈雲を合わせたような絶妙な詩である。

鳥や獣は群れるべきものであろうけれど、

おおどり
鴻は獵具を避けて独り空にあり、

老いた馬は独り野をさまよっている。

この枯れた身をどこに寄せたらよいのか。

どこの山であつても隠れられないところはないはずだ、

水を飲んで^{よわい}齡をのばすことだってできるのだから。

((1) この詩はいろいろな故事を踏まえてなかなか難解である。全体としては、程之^{ていし}才の詩を褒め、これからは従兄を頼りとしたいとの思いを示したものである。その

流れが掴みやすいようにおおまかに訳した。(2) この後、蘇軾と程之才は少なくとも2回は会って親族としての親愛の情を深めるとともに、蘇軾は現在惠州^{けい}で必要とされている幾つかの施策を提案し、程之才はそれを実施に移せるよう努めた。長年の仇敵関係がたちまち解消したのには次のような要因があったのだろう。①程之才は、天下に名高い蘇軾の敵であり続けるのは長い目で見て自身のためにならないと判断し、政治的・経済的に優位に立ついまが和解の最適で最後のチャンスであると考えた。②もともと程之才はそれほどの悪人だったわけではなく、あるいは年齢とともに人間的に成長していたので、直接会って話すことでこれまでのわだかまりが解消した。③蘇軾は党派争いによって翻弄され続けてきたので、和解こそが肝要であることを身をもって示そうとした。④蘇軾の母は夫と実家の間で板挟みになり、その苦しみを見ていた蘇軾は、母のためにも対立の解消に務めた)

■書柳子厚大鑒禪師碑後

蘇軾が次第に唐代の柳宗元^{とうだい りゅうそうげん あざな し こう}（字は子厚）に傾倒していったことは以前にも記したが、これは、韶州^{しょう}の南華寺^{なん か じ}（本章63ページ）の長老重弁^{じゅうべん}から、柳宗元が作った『大鑒禪師碑』の文章を新たに石に刻みたいから揮毫してくれないかとの依頼があり、それに応じた際の後書き。大鑒禪師は六祖慧能^{ろく そ え のう}の号である。

釈迦^{しゃ か}の教えを記した文章を漢訳するときには、儒学の優れた概念に託して行われ

るのが常で、それによって儒学からは遠く離れたことを伝えようとする。大乘仏教の諸経典のうちで『楞嚴經』^{りやうごんきやう}に至って、訳文が精妙で委曲が尽くされ、特に優れたものとなった。それは、唐代^{とう}の房融^{ぼうゆう}の筆の冴えによる。

柳宗元^{りゅうそうげん}は南に遷って初めて仏法を研究し、『曹溪第六祖賜諡大鑒禪師碑』や『南嶽碑』^{なぐくひ}などを作り、それらは古今を通じて絶妙である。しかし、その碑が置かれた南華寺^{なん}に柳宗元の文章を刻んだ石はいまは残っていない。

南華寺^{じゅうべん}の長老重弁師は儒学にも仏教にも通じ、道教にも詳しい。師が言われるには、唐代から今に至るまで釈迦^{しゃ か}の教えを頌述^{しょうじゅつ}する者は多くいたが、柳宗元以上にその本質を簡潔に明らかにした者はなく、柳宗元が仏教の本源から推して述べたやり方は、孟子^{もう し}が儒学において行ったのと同じで、仏教を学ぶ者は、柳宗元が書いたものを昼に読み、夜に暗唱すべきであると。それで、柳宗元の文を石に刻みたいから、私に書くようにとの要請があった。

……(以下、若干の考証が記される)……

紹聖二年六月九日。

■付龔行信

上の文章にあった南華寺^{なん か じ}の長老重弁^{じゅうべん}の依頼を蘇軾^{きやうぎやうしん}に伝えたのは龔行信という浄人^{じやうにん}（在俗で寺の仕事をする者）であった。そのことを記した短文。

重弁禪師^{じゅうべん}は私の善き友人である。師は常々私と手紙を交わしたいと思っておられ、

いざ手紙を出そうとするときになると、南華寺なん か じ じょうにんの浄人は我こそはと争って惠州けい いに行くとする。どうしてなのかとある人が浄人たちに問うと、このような答えであった。

「一目東坡翁とう ぽ おうに会って、数文字だけでも求め得たならば、終生それを持っていたいのです」

私はそれを聞いて笑い、

「この人たちは、数個の文字を求めるために千里の道も軽いとする。かの戴山しょうざんの老婆よりもずっと賢いといえるだろう。もとより重弁じゅう べん禅師は老婆より強い下になろうとするお方ではないことはわかりきっている。昔から、乾明寺けんめい じの僧は訶梨勒か り ろ くの実を煮て薬を作るということを聞いてきた。ここに初めてそれを得て、嘗めてみたところ、精妙そうけい じの極みであった。曹溪寺の一滴の水（禅の要点の譬え）にもあたるのではなからうか」

と言った。

たまたま病のために出ることができなかったので、このことを記して重弁じゅう べん禅師への謝礼とし、書いたものは龔行信に与える。

（(1) 蘇軾の書いたものがもらえるのなら、遠い道も喜んで行くという話。(2) 途中に記されている「戴山しょうざんの老婆」とは次のような話である。王羲之おう ぎ し（書聖と呼ばれる書の達人）が会稽かい けいの戴山の下に隠棲していたときのこと、老婆が竹の扇を売りにきた。王羲之がその値を問うと二十銭だといった。王羲之は一本の扇を手にとると、さらさらと五文字を記した。老婆は、「これを売ってあたしは暮らしを立てているのです。なんだってそれを台無しにしてしまうのか」と怒った。王羲之は、「町に持って行って、王右軍おう ゆう ぐんがこ

れを書いたと言えは百銭で売れるだろう」と言った。老婆が町に行くとすぐに売れたので、数日後に老婆は数本の扇を持って行ってまた書いてくれと頼んだ。王羲之は笑って応じなかった。(3) 重弁^{じゅうべん}は蘇軾^{すお}が金銭のために筆を揮う人ではないことを知っているので、碑文の執筆の謝礼としてここに記されている菓を贈ったのだろう)

■六月十二日酒醒歩月理髪而寢

「六月十二日、酒が醒めて月に歩き、髪を整えて寝た」という詩。

羽のある虫は月を見て、競って翺^{すばや}翻^{ひるがえ}り飛ぶ。

私は月を見て、軒端の光のなかで髪をばらばらにする。

髪を梳^すくとひんやりとした快さに、肌も骨もすっきりし、

露を帯びた風の気^きが、白髪の根元にまで入り込む。

起って舞うと、

月と影と我の三人が、付いたり離れたり……

杯を停めて、この楽しさを問う……

月と影はついに無言のまま。

ごろり^{ひじ}肱を曲げて横になる、

竹の蓆^{むしろ}には佳^よいところがある、

私は天上の楼閣にいるのだ……

夢から覚め、

そうではなかったのを悲しく思うのである。

■和子由次月中梳頭韻

上の詩に弟が和し、それにまた和した。弟の詩には、「ここ二十年近く、白髪が百本余りあって、増えもしなければ減りもしない。ある道人が白髪を抜き去る法を教えてくれたので試してみたところ、数カ月経っても白髪は出てこない」といったことが詠み込まれていた。

強い雨が翻り、

夏の畦からねっとりした泥が流れる。

北の窓辺に寝転ぶ人は、

太古の時代にいる気分である。

吹く風は、明け方に稲の丈を春の筍のように伸ばし、

たま
珠を作る露は、夜の間に稲の根から上へとぼる。

稲には稲の法則があるように、

白髪には白髪の法則があるのであって、

ここに初めて道家の方法が妄言ではなかったと知れた。

ほうしん 法身(仏性)と ほうしん 報身(仏性のはたらき)はもとより二つではなく一つである、

いつか形も魂も妙絶なところに到るのであろう。

(1) この詩は、自然の摂理や仏教・道教の教理を混然一体のものとして詠んでいて、

訳者の理解を超える内容である。この詩もそうだが、蘇軾と蘇轍の間では、深い理解を共有した上でのやりとりをしている詩文があり、その多くは訳者にはお手上げである。つまり、この訳文は何もわかっていなことを白状しただけのものである。(2) この詩には、次のような蘇軾自身の注が付されている。「ある人が私に言った。『草木はいつも未明のころに成長する。早く起きて観察すると、枝が数寸伸びるのが見られる。筍が最も甚だしい。また、夏と秋の境に、稲がちょうど穂を出すころに、黄昏時に月が出ると、露の珠がその根に生じ、幾つも重なり合って、推し上げられるようにしてたちまち上に昇り、あるものは茎の芯に入り、あるものは葉の端から垂れ、かくして稲の穂が出て実が付くのである』。このことを実地に見るとその通りであった。この二つのことと、弟がいう養生の説とは一致するところがある。それでこのことを詩に詠んで寄せる」)

■与王定国

おうきょう あざな ていこく

王鞏（字は定国）からの手紙が届き、その返事を書いた。

((1) ^{てい}定州から南に移る際に、蘇軾は^{おうきょう}王鞏と会おうとしたが、何らかの事情でそれはできなかったようだ(本章16ページ)。推察するに、王鞏は自分にも罪が及ぶのを恐れて行動を自重したのだろう。その甲斐あってかどうかはわからないが、王鞏は官職を得て、その報告となにがしかの弁明を記した手紙を蘇軾に送ったようだ。これはそれへの返事。(2) 冒頭^{けい}に王鞏の手紙を受け取ったのは3月5日と書かれていて、その一方で、文中に惠州に至って8カ月になるとあるので、返事を書いたのは6月ごろであったと推測できる。3カ月ほど間があいたのには、何か気の進まない事情があったのだろうか。

蘇軾はかつて黄州に流されたとき王鞏を巻き込んでしまったことに長く責任を感じていたのだから、王鞏が官職を得るまでの振る舞いを残念に思うようなことはきつなかったはずなのだが……)

三月五日にお手紙を受け取りました。貴君はすこぶる御佳勝、御家族も御健勝とこと、心に懸けておりましたことが解け、はなはだ結構に思っております。

官職を得るのはもとより貧に迫られてのことです。そこに選択の余地はありません。貴君の生計の見通しがようやく付き、誠に喜ばしく思います。

私はここに至ってハカ月となります。ただ末子と身の回りの世話をする三人の女だけを連れてきました。何も不足はなく、風土は悪くありません。世間のもろもろと絶縁したことで、身心ともに安らかです。息子もまた超然と物の外にあって、この父でなければこの子は生まれなかったと、おかしく思っています。

お手紙の中でいろいろと諭してくださり、昔に変わらず、それ以上に厚く思ってください、はなはだ感じ入ります。有難い限りであります。

弟からは手紙がしばしば来て、自適の日々送って、道に到ろうとするかのようです。それで十分でありましょう。

南北どこに住もうが、それも天の定めによるのでしょう。私は帰りたいとは思っていません。来年はここに農地を買い、家を建て、惠州の人になる考えです。

暑い時期、万万加愛されますように。

■与王庠

7月13日、王庠（おうしょう あざな しゅうげん）とその弟の使者が来て、手紙や薬などが届けられた。その後王庠に宛てて記した何通かの手紙が残っている。その中から、訳者が理解できて、興味ある箇所を抜粋して訳す。

おうしょう（王庠ははんじんじん學術も振る舞いも優れた人物として知られ、蘇轍や范純仁など保守派の人々と交流とあって、制科の特別試験を受けるよう推薦された。ところが、改革派が政権を握ったことからその試験は中止となってしまった。王庠はその後も官職に就くことなく生涯を終えた）

遠くより人を遣わして、お手紙で安否を尋ねてくださり、また薬をお贈りくださり、厚く感謝いたします。使者の二人は二月二十五日から七月十三日に至るまでおよそ一百三十日余りをかけて水陸万里余りの道を来たとのこと、二人がまた万里を越えて家に帰るころには、きっとこの歳も尽きているででしょう。

私は罪によって遠くに出され、親しい友人に御心配をおかけしております。陛下は私のことを過分なまでに大切にしてくださり、罪は非常に重いものがありながら、ここに来てからは暇が多いのを喜び、暮らしはまことによいものであります。大いに責められるべき罪がありながら、このように結構な状況にあるのですから、何も言うことはありません。氣候の悪い地に置かれて、倒れ伏した先例はたくさんありますが、それぞれに理由があるのでしょう。寒暖が時期を失ったり、ひどく飢えたりすることがないのならば、にわかに病になることはありません。もしも寿命が尽きるのなら、それは

避けようがなく、北の地にしようが南の地にしようが関係ありません。泰然として、深く思わずらうことなくしていればよろしいのです。

貴君が示してくださった文章は古^{いにしへ}の人の風格があります。……私は若いころから昔の人々を論じるのを好んでいました。すでに老い、世の変転を渡り歩き、しばしば言い過ぎがあったと悔やんでいます。それで貴君にもこのように告げておきたいと思います。儒者の病として、ただ言葉だけで実用性に欠けることが多いものです。

賈誼^{かぎ}や陸贄^{りくし}の学はほとんど世に伝わっていません。老いて間もなく死ぬばかりとなって、それをこそ子弟に教えたく思っています。……貴君は自ら信じるところを変えずにいるなら、きっと棄てられずに用いられるときがくるであります。ものの得失には天の定めがあり、それは決して移すことはできません。学んだものを守るよう勉められますように。遠く学業を成し遂げるであります。いつお会いできるともできません。万万自重されますように。

……私は若いころは山林に逃れたいと思っていました。それは父や兄たちの許すところではなく、結婚を迫られ、かくて今日に至ってしまいました。南に遷ってからは、ただ自分を日々の暮らしの中に置き、蕭然として家財は何もなく、ほぼ行脚の僧に似ております。近頃は痔疾に苦しみ、呻吟することはほとんど百日で、なまぐさのや塩を断ち、一日にわずかに一斤の小麦粉を食べるだけです。これによって病が愈えるだけでなく、枯れ細^{じゃくめつ}って寂滅の楽しみまでも求めようと思っています。

初めは独^{へんしよ}りで貶所に赴こうとし、儿女たちが泣いて同行することを求め、末子の蘇^そ

過^か一人だけを連れてきました。他の者は許州^{きょしゅう}や浙中^{せっちゅう}に寓居させて、それぞれで暮らしを立てさせることにしました。「目の前にいなければすぐに忘れる」とかいうのは、まったくありえないことです。……

……聞^きけば、黔南^{けんなん}に黄庭堅^{こうていけん}を訪ねようとしているとのこと。それは昔の人でもなかなかできるものではなく、もしも貴君が成し遂げたなら、まことに一段の奇事であります。しかし、貴君は長らく御両親と離れておられるのですから、ここは熟慮が必要でありましょう。いま黄庭堅への手紙を記しましたので、もし行かれるときにはお持ちください。

((1) 意思に反して結婚したと記してあるのが興味深い。蘇軾^{そ しかん}の伝記を編むときには、必ずこの一文が引かれる。(2) 王庠^{おうしやう}の家は蜀^{しよく}の榮州^{えい}にあつて、黄庭堅^{こうていけん}の流された黔南^{けんなん}も蜀にある。それなら訪ねるのはそれほど困難ではないが、王庠が両親と長く離れていと記されているので、新法党の政権のもとでは考えにくいのだが、王庠は都^{きよ}にいたのだろうか)

■祭亡妹徳化県君文

蘇軾^{そ しかん}のもとに悲しい報せが届いた。伯父の蘇渙^{そ かん}の娘、すなわち柳子文^{りゅう し ぶん}（字は仲遠^{ちゆうえん}）（第8章102ページ、第10章4ページ）の妻が亡くなったのである。これはその祭文。

あ あ きゅう ふ そ じょ し せいけいかつ
嗚呼、宮傳(蘇軾の祖父の蘇序に死後贈られた称号)の孫は十六人、死生契闊(死生を
ともにしてともに努力する)の間柄ながら、いまではわずかに四人が残るだけとなってし
まっていた。

い と こ じ こうおんぶん つか
ここに我が従妹は、慈孝温文、姑に事えること母に対するようで、夫を敬うこと賓客
に対するようであった。玉の如き二人の甥(従妹の息子)が我が一門を実に輝かせ
てくれた。しかし、一人は天に何の罪があったのか、先に亡くなってしまった。

人の寿命は百年という。それとてひとたび翻り、上を見て下を見る間のこと、わずかに
に病んだかと思うと再び苦しみ、薬をもって救おうとするのも及ばず、どうすることもで
きずに空しくなってしまった。

私は万里の彼方の海の涯にあって、それより百日を経て聞ところとなった。棺を撫
ぜたくてもそれはどこにあるのか、夢にも泣いて寢床を濡らし、北風に長く號びつつ、
この一樽を捧げるのである。

そ じょ そ ふ
(祖父である蘇序の孫が残るところ 4 人だったとあるのは、蘇軾、蘇轍、従兄の蘇不
き
危、そしてここで亡くなった従妹である)

■書金光明経後

そ か こんこうみょうきょう
三男の蘇過が母の供養のために『金光明経』を書き、蘇軾がこの後書き
を記した。後半は仏教についての深い知識がなければ訳せないのもので、残念
ながら割愛するしかない。

私の末子^{そ か}は蘇過^{どうあんぐんくん おうじん し}、その母の同安郡君王閔之^{あざな き しょう}、字は季章は、享年四十六、元祐八年八月一日に都で亡くなり、都の西にある恵濟院^{けいさいいん}に仮に葬った。蘇過はまた喪が明けないうちに私に従って惠州^{けい}に来たので、日に日にその母から遠ざかることを恨めしく思っていた。ここに喪の期間が終わるにあたって、痛切な思いの極みから、『金光明經^{こんこうみょうきょう}』四巻を自分で写し、自分で装丁を施して、虔州の崇慶禪院^{けん そうけいぜんいん}に送り、その蔵書の内に加えてもらって、母の往生の助けとなることを願うことにした。

蘇過は泣いて私に言った。

「經典を書く労力はわずかなものでありますから、それによってよき報いがあるとまで望むことはできません。口に誦じて心に通じ、手に書いて身に沁み込ませ、そして仏祖の教えに通じて、真理の理解に到るのでしょけれど、私のような愚昧な者は、この經典が真実の語であるのか、そもそも寓言であるのかもわかりません。何を見たらよいのでしょうか。何をしたらよいのでしょうか」

私は言った。

「それは善い問いである。私はかつて張方平先生^{ちやうほうへい}からこのように聞いた。……(以下、張方平から聞いたことを踏まえて仏教について深い議論を展開し、その上で、蘇過の行為が母の往生に必ず資すると述べる)……」

蘇過は喜び、『金光明經』の後ろに書いてほしいと願った。

紹聖二年八月一日。

(蘇軾の大恩人である張方平が晩年は仏教三昧の日々を送っていたことは第7章145ページなどで見ている。張方平は確かに深く仏説に通じていたのだろう)

■寄子由三法

養生に関する「食^{しょく}灸^{けんぼう}法」「胎^{たい}息^{そく}法」「藏^{ぞう}丹^{たん}砂^さ法」の三つの方法について記して弟に送った文章。「食^{しょく}灸^{けんぼう}法」は呉^ご子^し野^やから教^{ひし}わ^{つた}た^ふ灸^しの実を食べる健康法で、血の巡りがよくなるという。「胎^{たい}息^{そく}法」は道家の呼吸法で、ほぼ同じ内容のことを前に張^{ちやうほうへい}方^{ほう}平^{へい}に宛て手紙(第6章409ページ)にも書いていて、蘇軾はその後も工夫を重ねて実践していたのだろう。「藏^{ぞう}丹^{たん}砂^さ法」は丹砂(硫化水銀)を焼いて作った薬を服す方法である。それぞれに興味深いのだが、これもまた訳者の手に負えるものではないので、最後の結びの部分だけを訳す。

……私^{たん}は^さこの丹^{だん}砂^さの理^{ことわり}についてややわかってきたところだが、丹砂は人を短気にさせ、苛立ちを起こしたりして、害をなすことも多いので、簡単に成就するものではない。弟はもの静かで穏やかであるから、少し励むなら私より先にこの道^{みち}を得るであらうし、道を得た日には、私を超えているであろう。このことを紙に書いて、後日の確かな証拠としておく。

紹^{しょう}聖^{せい}二年八月二十七日、東坡居士記す。

(蘇軾は丹薬の製造を手掛けつつも、強い毒性があると知っていたので、実際に服薬することには極めて慎重であった)

■題合江楼

ごうこうろう

合江楼（本章83ページ）で記した短文。

青い天に一つの月。ほかには何もない——人間世界においてこれはまことに快い光景である。ところが、ある人は、わずかな雲があった方がよいという。心が不浄な者は常に滓穢^{よごれ}をすっかり清めたいと望むものである、という意味合いがそこにあるからだ。

ごうこうろう

みどり

合江楼の下、碧の秋の流れに空が浮かび、月の光が座敷の中へと入り込む。壊れた茅葺の小屋が七、八軒、眼下に斜めに傾いている。今歳、大水が再び至ったなら、そこに住む者は逃げる暇もないであろう。この地上に遷^{うつ}れるところがないわけではないのに、どういう未練^{すな}があって去らずにいるのだろうか。人の眼の中には沙があるということなのか。

しょうせい

紹聖二年九月五日。

（蘇軾の文章には深い含意があり、それを汲み取って達意の日本語に訳すのははなはだ困難な場合が多くある。ここでは、二つの段落がどこでどうつながっているのかがよくわからない。つまり、最上の美とは完全無欠であるのかという命題、人間はなぜ同じ過ちを繰り返すのかという命題、この二者に何か共通項があると感じて、蘇軾はこの文章を記したのだらう。それは「雲」と「沙^{すな}」であるとここには記しているのだが、果たしてそれが共通項なのだろうか）

■和陶貧士

とうえんめい ひん し
陶淵明の「貧士を詠む」という作品に和した。7首の連作で、蘇軾の作には短い序文がある。

(この連作は、己が手本とするような歴史上の人物を取り上げて詠んでいて、その性質上、種々の故事を踏まえていることから、われわれが読解するにはかなりのわずらわしさがある。ここでは、注釈は最低限に留め、そういうことが言いたいのかかなとなんとなくわかる程度でさりと読み流していただきたい)

序(蘇軾)

けい くろ ちやうきゅう
私は惠州に遷って一年、衣食が次第に窘しくなり、重九(九月九日)がちょうど近づいてきても、樽の身も俎の上も寂しいありさまである。そこで陶淵明の『貧士の詩』七首に和して、きよ か こうあん ぎ こう
許下、高安、宜興にいる息子や甥に寄せることにし、併せて蘇
か
過にも同じように作らせた。

きよ か こうあん いん ぎ こうようせん
(許下と高安(筠州)には蘇轍の子が、宜興陽羨には蘇軾の子がいた)

其の一(陶淵明)

あなゆるもの それ ゆた あ
万族各有託、(万族には各それぞれに託ねられるところが有る)

ぼつん くも ひと よ な
孤雲独無依。(孤とした雲だけれは独り依るべが無い)

ぼんやり おおぞら き
曖曖虚中滅、(曖曖として虚中に滅えたなら)

い つ のこ かがや み
何時見余暉。(何時また余りの暉を見られるときがあるのか)

朝霞開宿霧、(朝霞に宿からの霧が開かれると)

衆鳥相与飛。(衆の鳥が相に与に飛びだす)

遲遲出林翮、(しかし、遅々と林から出てくる翮がある)

未夕復来歸。(そして、未だ夕べにならないうちにそれは復た帰ってくる)

量力守故轍、(その鳥は)おのれの力を量って故の轍を守っているのだ)

豈不寒与饑。(そのようにしていたら) 豈も寒さと饑がなくてすむはずがない)

知音苟不存、(苟も知音が存しないとしたら)

已矣何所悲。(已矣ない、何とも悲しむ所ではすまないのだ)

とうえんめい
(陶淵明の第一首は全体の序章にあたる。ぼつんと浮かぶ雲や、他の鳥とは一緒に行動できない鳥は陶淵明自身の象徴である。終わりの部分は、「知音」(心が通じる友人) がい
るならこの悲しみにも耐えられるという意味。以下にその「知音」が並べられる。そし
て、蘇軾にとっての「知音」はいうまでもなく陶淵明であるということが以下のわとうし
に歌われて行く)

其の一(蘇軾)

長庚与残月、(長庚(宵の明星)と沈み残りの月が)

耿耿如相依。(耿耿と寄り添い合っている)

以我旦暮心、(朝から夜まで心にかかることがあるなかで)

惜此須臾暉。(このつかの間の暉きを惜しんで見つめる)

青天無今古、(青い天は昔も今も変わらない)

誰知織鳥飛。しよくちよう(織鳥(太陽)が飛び続けるわけを誰か知っているのか)

我欲作九原、きやうげん(私は九原(墓)を作って)

独与淵明歸。ひと(独り陶淵明とともに帰ろうと思う)

俗子不自悼、いた(俗世間の人は、自身を悼まずに)

顧憂斯人饑。(陶淵明が飢えているのを気の毒に思っている)

堂堂誰有此、(陶淵明ほどに堂々と生きた人はいない)

千駟良可悲。(千頭の馬を持っていると威張っていた者の方こそ悲しむべきなのだ)

其の二(陶淵明)

淒厲歲云暮、さむさきひく とし ここ く(淒厲も歳は云に暮れる)

擁褐曝前軒。ぼろ くる まえ のき ひにあ(褐に擁まれて前の軒で曝たる)

南園無遺秀、みなみ はたけ どのこ ほ な(南の園に遺した秀は無く)

枯条盈北園。か えだ きた にわ いっぱい(枯れ条が北の園に 盈 ある)

傾壺絶余瀝、つぼ かたむ あま したたり た(壺を傾けてみても余りの 瀝さえも絶え)

窺竈不見煙。かまど のぞ けむり み(竈を窺いてみても煙が見えない)

詩書塞座外、ししょ せき ざわら ふさ(詩書ばかりは座の外を塞ぐほどにあり)

日昃不遑研。ひ かたむ けんきやう いどま(日が昃いても 研 に遑がない)

閑居非陳厄、ひま くらし こうし ちん さいなん な(閑な居は(孔子が)陳のくにでこむった 厄ほどでは非いが)

竊有慍見言。(竊)(孔子の弟子のように)慍の言を見わすものもいるようだ)

何以慰吾懷、なに も わ こころ なぐさ(何を以って吾が懷を慰めるのかという)

頼古多此賢。(頼にも古より此のようにしてくらし賢は多いのである)

(孔子の故事を引いているところは、孔子の弟子にも先生の心を十分に理解していない者がいたように、家の者がぶつぶつ不平を言っているという意味合いであるようだ)

其の二(蘇軾)

夷齊恥周粟、(昔、伯夷と叔齊は(武力で殷を亡ぼした)周の世に生きるのを取じ)

高歌誦虞軒。(山に隠れて)太古の時代を回顧する歌を誦った)

産祿彼何人、(漢の時代の)呂産と呂祿はいったいどういう人だったのか)

能致綺与園。(商山に隠れる)綺里季、東園公(など四人の隠者)を朝廷に連れてきた)

古来避世士、(昔から、世を避けた士であっても)

死灰或余煙。(消えたはずの灰が煙を立ててまた燃え出すことがあったのだろう)

末路益可羞、(人の行く路の終わりには恥じねばならないことがますますあつて)

朱墨手自研。(朱い墨を磨って自分で消そうとしなければならぬことになる)

淵明初亦仕、(陶淵明も最初はやはり出仕したが)

弦歌本誠言。(琴を弾きつつ誠の言葉を歌って)

不樂乃徑歸、(心に楽しまないことがあるとして、ただちに帰ったのだった)

視世差独賢。(世の人と違って独り賢いというべきである)

(伯夷と叔齊は周の世に生きることを恥じて首陽山に隠れ、そのまま餓死した。一方

で、秦の世の乱れを避けて商山に入った東園公、綺里季、夏黄公、甬里の四人(商山

四皓という)は、漢の世になって、皇帝の後継者問題を解決するために呂産や呂祿の招

きに応じて朝廷に姿を現した。「商山四皓」は陶淵明もしばしば讃える賢人であるが(第10章223ページ)、ここでは晩節を汚した者とされている。そこには、蘇軾自身がなお官職に留まっていることによる複雑な思いが反映しているのであろう)

其の三(陶淵明)

采叟老帶索、(采^{さい}の 叟^{いさん}は老^おいても索^{なわ}を帯^{おび}のかわり^ひにしていた)

欣然方彈琴。(それ^{たのしげ}でも欣然^{いつ}に方^{こと}も琴^ひを弾^ひいていた)

原生納決履、(原生^{げんくん}(孔子^{こうし}の弟子^{でし}の原憲^{げんけん})は決^{やぶ}れた履^{くつ}を納^はきながら)

清歌暢商音。(清^{きよ}らかに歌^{うた}ったのは、暢^{のび}やかな商^{しょう}の音^{おと}(『詩經』にある頌歌^{しきやう})だった)

重華去我久、(重華^{ちゆうか}(舜^{しゆん})から我^{わたし}は去^{はな}れること久^{ひさ}く)

貧士世相尋。(貧^{びんぼう}な士^{ひと}はどの世^{じたい}にも相^{いつ}も尋^{つづ}いたのだった)

弊襟不掩肘、(わたしの弊^{ぼろ}の襟^{きもの}は肘^{ひじ}を掩^{おお}ってくれないし)

藜羹常乏斟。(藜^{あかぎ}の羹^{スープ}さえも乏^{とほ}しくて常^{いつ}でも斟^のめるわけではない)

豈忘襲輕裘、(軽^{かる}い裘^{コート}を襲^きるよさは豈^{どて}も忘^{わす}れはしないか)

苟得非所飲。(苟^{かり}にも得^{ぼったり}など^{ねが}は飲^{どろ}たりする所^なのものではない)

賜也徒能弁、(賜^し(孔子^{しこう}の弟子^{でし}の子貢^{しこう})ときたら徒^ただ能^{うま}く弁^{しゃべ}るだけで)

乃不見吾心。(乃^やり吾^{わたし}の心^{こころ}を見^みてくれるようなものでないのだ)

(ここでは4人の名が挙げられている。「采叟」は、九十過ぎまで何の憂いもなく生きた啓采期のことで、陶淵明の好みの人物としてすでに第10章217ページで見ている。

「^{げんせい}原生」は孔子の弟子の^{こう し}原憲、「^{げんけん し}賜」も孔子の弟子の子貢で、2人は対照的な人物であったとされ、原憲はぼろをまともでも楽しげに過ごしていたが、子貢は口先が達者で出世欲が強かった。「^{ちよう か}重華」は古代の聖天子の^{しゆん}舜で、その理想的な時代から遠く離れた世には貧乏で不遇な者が大勢いるのである)

其の三(蘇軾)

誰謂淵明貧、(^{とうえんめい}誰が陶淵明を貧しかったというのか)

尚有一素琴。(一つの素朴な琴があったではないか)

心閑手自適、(^{のどか}心が閑であるなら、^{かな}琴を弾く手も自ずとそれに適うのであって)

寄此無窮音。((陶淵明は)琴の無窮の音に心を寄せたのだった)

佳辰愛重九、(^よ佳^{とき}辰として^{ちようきゅう}重九の節句を愛し)

芳菊起自尋。(^{かくわ}芳しい菊を尋ね歩いた)

疏巾飲虛漉、(ときには粗末な頭巾で酒を漉すのを飲び)

塵爵笑空斟。(ときには盃にあるのは塵ばかりだと笑いもした)

忽餉二万錢、(ふいに二万錢が贈られてきたこともあった)

顔生良足欽。((贈)主の^{がんえん し}顔延之はまことに欽慕すべき人である)

急送酒家保、(陶淵明はその錢を急いで酒代の前払に使ったのは)

勿違故人心。(友人の心に違わぬ大した行為であった)

((1) ^{とうえんめい}陶淵明は敬慕する昔の人として、^{けいえい き}啓栄期と^{げんけん}原憲を挙げたのに対して、蘇軾は陶淵明その人を挙げる。^{がんえん し}顔延之は官職に就く者で、陶淵明のことをよく知っていて、あると

き二万銭を贈った。(2) 序文に記されていたように、蘇軾が和したのは菊の節句の直前であった)

其の四(陶淵明)

安貧守賤者、(貧^{まずし}さにも安^{やす}らかにして、賤^{ひく}さを守^{まも}った者^{もの}として)

自古有黔婁。(古^{いにしえ}自^みみてみると黔婁^{けんろう}が有^あった)

好爵吾不榮、((黔婁^よは)好^{くい}い爵^{わかし}も吾^{きか}は榮^はと^はし^ないとい^つったし)

厚饋吾不酬。(厚^{あつ}い 饋^{おくりもの}にも吾^{わたし}は酬^{こた}えたり^はし^ないとい^つった)

一旦寿命尽、(一旦^{いったん} 寿^{じゆみゆう}命^つが尽^つきたとき^{には})

弊服仍不周。(弊^{ぼろぼろ}の服^{ふく}は仍^{とて}もか^らたを周^{おお}い^きれな^かった)

豈不知其極、(其^そのよ^うに極^{きわ}ま^つて^しま^うこ^とを^しら^なか^つた^けだ^らい^ない)

非道故無憂。(道^{みち}をもと^めるこ^とは^べつ^である^から^と、憂^{うれ}い^はし^なか^つた^ので^ある)

從來將千載、(從^{それ}来^{から} 將^{もう} 千^{せん}載^{ねん}に^もなる^が)

未復見斯儔。(斯^この^たい^いの^まみ^みの^ひとを^を復^もた^見る^こは^ない)

朝与仁義生、(朝^{あさ}に^{じんぎ}と^とに^いに^いき^るこ^とが^できた^{なら})

夕死復何求。(夕^{ゆふべ}に^し死^にん^だと^して^も復^もた^何も^なに^も求^もた^りは^ない)

(ここでは黔婁という 春 秋 時代の人物を挙げている。黔婁は、大臣や宰相として迎えようとする諸侯の誘いを断って清貧に甘んじ、死んだときには満足に体を覆う衣服さえなかった。そのような人物こそが、仁義とともに生きる者であるとして、自分もそのようなことができたなら、その日のうちに死んでしまってもよいと陶淵明は言うので

ある。国のため主君のために忠義を尽くして死ぬという考え方を陶淵明はとらない)

其の四(蘇軾)

人皆有耳目、(人はみな耳と目があるけれど)

夫子曠与婁。(それをまともに使ったと)手本にできるのは師曠しこうと黔婁けんろうだ)

弱毫写万象、(筆先などは弱々しいものであるが、(陶淵明は)全ての現象を写し出しどうえんめい)

水鏡無停酬。(加減することなく人を映す鏡となった)

閑居惜重九、((陶淵明は)のんびり暮らして重陽ちやうようの節句が過ぎ去るのを惜しみ)

感此歲月周。(歲月のめぐることに感じ入った)

端如孔北海、(まさに孔融こうゆうと同じように)

只有尊空憂。(盃が空になることだけを憂いた)

二子不並世、(陶淵明と孔融は同じ時代に並ぶことはなかったが)

高風兩無儔。(その気高さは二人ともに類のないものだった)

我後五百年、(私は二人に後れること五百年)

清夢未易求。(清らかな夢を見ようとしても求めるのは難しい)

((1) 師曠しこうは春 秋時代しゆんじゆうの琴の名手で、たびたび主君を諫めた。陶淵明が師曠どうえんめいを讃えた

詩句を訳者は見出せていないので、この部分の解釈はいささか自信がない。(2) 孔融こうゆうが無類の酒好きであったことは本章 42 ページで見ている)

其の五(陶淵明)

袁安困積雪、(袁安が積もる雪に困られながらも)

邈然不可幹。(邈然としていて、(他人に施しなど)幹める可きではないといった)

阮公見銭入、(阮公は(縁談を承諾すると)銭が入ってきましてと見て)

即日棄其官。(その話を嫌って)即日、其の官を棄ててしまった)

芻糲有常温、(芻や糲だって常でも温が有る)

采芣足朝餐。(芣を采ったって朝餐にするのに足りるのだ)

豈不実辛苦、((貧乏暮らしは)実に辛苦くない豈がないけれど)

所懼非饑寒。(本当に)懼れる所のものは饑えや寒さでは非のだ)

貧富常交戦、(貧さと富さと(どちらをとるのか)は常に交ごも戦うものであるのだが)

道勝無戚顔。(道が勝つときにこそ戚いの顔が無くなる)

至徳冠邦閭、((二人のような)徳の至りは邦や閭に冠たるものとなり)

清節映西閨。(清らかな節は西閨にたいして映くのである)

(ここでは、後漢の袁安と晋の阮脩を挙げている。貧乏暮らしをしていた袁安はある大雪の日に家に閉じこもって平然と寝ていて、訪ねてきた長官に、「人に施し物を求めるわけにはいかない」と言った。阮脩は持参金付きの結婚を勧められると、縛られるのを嫌って、即座に官職を棄てて去ってしまった)

其の五(蘇軾)

芙蓉雜金菊、(芙蓉と、黄金色の菊が混ざり)合って)

枝葉長闌干。(枝や葉を長く垂らしている)

遙憐退朝人、(遠く想い見るに、朝廷から退く方々は)

糕酒出太官。(宮中のお台所からお酒を頂戴する)

豈知江海上、(そうした方々は、まさかこの片田舎で)

落英亦可餐。(落ちた菊の花びらをも食べようとする者がいるなど知りもしない)

典衣作重九、(衣を質に出して重九ちゅうきゅうの祝いをし)

但歳惨将寒。(惨憺たるありさまの歳が過ぎて寒くなろうとしている)

無衣粟我膚、(衣がなければ、粟粒のような鳥肌が立ち)

無酒顰我顔。(酒がなければ、顔をしかめることになる)

貧居真可嘆、(貧乏住まいはまことに嘆かましい)

二事長相関。(衣のないことと酒のないことの二つがいつも関係するのだから)

(蘇軾は其の四で陶淵明の重九ちゅうきゅうを回顧し、其の五で自身の重九を歌っている)

其の六(陶淵明)

仲蔚愛窮居、(仲蔚ちゅういつは窮居くわいくらしを愛し)

繞宅生蒿蓬。(宅を繞めぐって蒿蓬ごうそうが生えていた)

翳然絶交遊、(翳然ひっそりと交遊こうゆうを絶ち)

賦詩頗能工。(詩を賦ふすことでは頗る能すこぶで工じゆうずであった)

举世無知者、(世を挙げよあげて(仲蔚ちゅういつのことを)知しる者は無なかったが)

止有一劉龔。(止ただ一ひとり劉龔りゅうこうだけが有あた)

此士胡独然、(此の士が胡^こして独^{ひとり}だけ然^{そう}だったのか)

実由罕所同。(実^{まこと}に罕^{まれ}に(心^{おな})同じ^{どころ}にする所^{から}があった由だ)

介焉安其業、(介^{しゅかり}焉^そと其^{すべきこと}の業^{やす}に安^{やす}んじて)

所楽非窮通。(楽^{たの}む所^{どころ}のものは(世間的に)窮^{だめ}だったとか通^{うま}いったとかでは非^{なか}ったのだ)

人事固以拙、((仲^{ひと}蔚^{かへり}も私^{もと})人^{とん}との事^{へた}が固^こより以^も拙^{ちつ}であるから)

聊得长相従。(聊^{やは}長^{なが}く(仲^{つぎ}蔚^{した}に)相^い従^けって得^えるのであろう)

(ここでは、後漢の張^{ちやうちゆううつ} 仲蔚^{ちゆううつ}を挙げて、長く手本としたいと歌っている。張仲蔚の振る舞いはあたかも陶淵明自身のことであるかのようだ)

其の六(蘇軾)

老詹亦白髮、(詹^{せん}老人もまた白髮で)

相对垂霜蓬。(向^よき合^ぎうと霜^{しも}を帯^よびた蓬^きを垂^たらし合^あうようになる)

賦詩殊有味、(詩^{こと}を賦^たすと殊^{こと}に味^{あじ}わいがあるが)

涉世非所工。(世^たを渉^くることは工^くではない)

杖藜山谷間、(藜^{あかざ}の杖^{ぼう}をついて山^やや谷^やを歩^あき)

状類渤海龔。(その様^{ばう}子はか^{かい}の渤^き海の龔^{こう}遂^{すい}に似^にている)

半道要我飲、(道^ちの途^う中で待^{まち}ち伏^ふせして私^{わたし}と飲^のもうとするのは)

意与王弘同。(その意^{こころ}はか^かの王^{おう}弘^{こう}と同じであるのだらう)

有酒我自至、(ただ、私は酒^{さけ}があるところへなら自分^{おれ}から行^いくので)

不須遣龐通。(王^{ほう}弘^{こう}が)龐^{ほう}通^{とう}之^しを迎^{むか}えに遣^{はな}わしたようなことはしない为好^い)

門生与兒子、(弟子や息子とともに)

杖履聊相従。(杖を持ち履をはいて、貴公のお付き合いをするであろう)

((1) ここでは、昔の人ではなく、惠州知事の詹範のことを歌っている。(2) 6 句目で、詹範が以ているとした龔遂は、後漢の終わりに世の乱れを避けて辺境の地に逃れた人。

((3) 8 句目にある王弘は陶淵明と同じ時代の人で、江州知事であったときに陶淵明と会おうとしたが、陶淵明は応じなかった。あるとき陶淵明が廬山に行こうとすると、道の途中で友人の龐通之が酒を用意して待っていた。陶淵明が喜んで酒と一緒に飲み始めると、そこに王弘が現れ、そのまま 3 人で飲んだ。実は、王弘が龐通之に頼んで仕組んだことであったのだ。蘇軾は、そんな手の込んだことをしなくても、気安くいつでも知事殿と飲むと言ったのである)

其の七(陶淵明)

昔在黄子廉、(昔 黄子廉が在た)

彈冠佐名州。(彈冠(仕官する意)すると名のある州の 佐 にまでなった)

一朝辞吏歸、(一朝 吏を辞めて歸ると)

清貧略難儔。(清と貧しいことは略と儔び難いものがあった)

年饑感仁妻、(ある年の饑えに(黄子廉が)感じいったのは 仁妻が)

泣涕向我流。(泣いて涕を我に向かって流したことだった)

丈夫雖有志、(丈夫に 志 が有ると雖も)

固為兒女憂。(固より兒や女の為には憂うのである)

恵孫一晤嘆、(恵孫^{けいそん}が^{ひと}一たび(黄子廉^みの^{かんしん}暮らし^を)晤て嘆して)

腴贈竟莫酬。(腴^{であつ}贈^{おくりもの}をしたのだが、竟^{ついに}に^う酬^なけることは莫^なかった)

誰云固窮難、(誰^{だれ}が^い云うのか「固窮^{こきゆう}」は難^{むづか}しいと)

邈哉此前修。(邈^{はるか}なる^{かな}哉 此^この^{さき}前^での^{ほん}修^{しゆ}があるではないか)

(1) 陶淵明^{とうえんめい}は7首連作の最後に「前修^{ぜんしゆう}」(よき前例^{こうしれん})として黄子廉^{こうしれん}を挙げている。ただ、黄子廉^{こうしれん}がいかなる人物であったのか、この詩以外の資料はないようである。(2) 「固窮^{こきゆう}」が陶淵明^{とうえんめい}のよく使うキーワードであることは第10章217ページで見ている。『論語^{ろんご}』にある「君子^{むね}は固^{もと}より窮^{きゆう}す」に基づき、志のある者は必ず困難^{くわんなん}に直面するのであって、そのときにいかに節義を守り抜くかが問われるのである。「前修」に思いを馳せることが「固窮」を耐え抜く大きな助けになるというのがこの一連の詩のテーマである)

其の七(蘇軾)

我家六兒子、(我が家には六人の男子^{なんし}がいる)

流落三州。(三つ四つの州^{しゅう}に流落^{りゅうらく}し)

辛苦更不識、(その苦勞^{くろう}のほどは見^みて知^しっているものではないが)

今与農圃儔。(いまは農民^{にんみん}と同じ^{おな}じようになっている)

買田帶修竹、(私は農地^{のうち}を買^かって青^{あお}い竹^{たけ}をめぐらせ)

築室依清流。(清^{きよ}い流^{りゅう}れのとこに家^いを建^たてようとしている)

未能遣一力、(使^{つか}いの者^{もの}を一人^{ひとり}送^{おく}って)

分汝薪水憂。(諸君^{しよくん}らの暮^{くらし}しの心配^{しんぱい}を軽^{かろ}くするようなことさえもできない)

生念北帰日、(時折思うのは、北に帰ることが叶う日がきても)

此勞未易酬。(諸君らの苦勞に酬いることはでないであろう)

我独遺以安、(私が遺せるものといったら「安らか」ということだけだ)

鹿門有前修。(これには鹿門山に立派な手本があるのだ)

((1) 初句にある「六兒子」とは、蘇軾の三人の息子と、蘇轍の三人の息子である。昔の中国では特に断らずに「子」というときは男子だけを数える。(2) 蘇軾が「前修」としてここで挙げたのは三国時代の龐徳公である。龐徳公は有力諸侯の招きを受けたが、子孫に遺すべきは財産ではなく、「安らかさ」であるとして鹿門山に隠れた(第8章 233 ページ))

■聞正輔表兄将至以詩迎之

従兄の程之才(字は正輔)がまた惠州に来ると聞いて、この詩を送った。

生まれて堯や舜のような仁政の時代に逢い、

嶺南に遊びに来ることもできた……。

この地では、

朝から湿気がもやもやと立ち昇り、

夕暮れの雨は足を重く腫らせる。

朝の食事に蜜唧(鼠の胎児の蜂蜜漬け)を見ることもあり、

夜の枕では鶇鶇(フクロウのような鳥)の声を聞くこともある。

へびに
鬱屈を煮たものを何度か食べさせられそうになり、

こうちゅう しゅこ
鉤軻(鸛鵒という南方特有の鳥)ならもとより御馳走である。

鳥でさえも、空から落ちてしまうのではないかという心配は免れないとか、

ましてこのような地にある私であるのだが、

人が訪れる足音に喜びを抱くこともある。

いつしか土地の訛に染まり、

いつも顔を真っ赤にして汗をかいている。

幸なことに、私は「黄庭」(魂を停止させる境地)に入って、

時には、「丹丘」(仙界の一つ)に遊離することができるし、

目で見ず、耳で聴かないこともでき、

喉で息をしないで、踵で呼吸をすることもできる。

さすがに、ようやく茅が黄ばむ秋が来てくれて、月の照る夜は嬉しい。

我が兄は宮中で用いられるべき器でありながら、

天子の御指示で南の海のほとりにやって来られ、

三軒ばかりしかないようなちっぽけな波止場に、

こく
一万斛をも積載する大きな船を泊められた。

かんたい
漢代の名臣のような人が来られたと人々は言い合うが、

実は、他国に囚われの身となった者を救うために天が派遣したのである。

ありがたくも再び私のところに来られて、

十日も留まって下さるのは喜ばしい限りである。

ただ残念なのは、

ともに妻とは幽明の世界を隔ててしまったこと。

万里の彼方の郷里にもしも帰ることができたなら、

男やもめどうし、二人並んでいっしょに畑を耕そうではないか。

そうし
莊子は妻を喪ったときに盆を叩いて歌ったというけれど、

強いてその真似をすることはないだろう。

(1) この詩の歌い出しは、読みようによっては辛辣な皮肉である。(2) 中程は、慣れない南方の風土を詠んでいて、その中で、いろいろな養生の術を試していることが歌われている。(3) 終わりのところには、「私は妻を喪ってすでに三年、ていしさい程之才は近頃亡くしたばかりである」との蘇軾自身の注が添えてある。程之才の妻が亡くなったのは8月であったという。(4) この詩に程之才が和し、蘇軾がまた和している。その詩は、程之才が妻を喪ったことを慰め、仏教を勧める内容であるのだが、いろいろな故事を引いて意味を取るのが難しく、ここでは割愛する)

■同正輔表兄遊白水山

ていしさい 程之才とともはくすいざんに白水山（本章96ページ）に遊んでこの詩を詠んだ。

まことに偉大である、

造物者が真に豪快で放縦であるのは。

土を掴み、砂をかためる戯れの遊びに興じ、

みどり

さ

翠の峡谷を劈き開いて、雷を放つ雲を走らせ、

き

ふち ほら

奔流を截り破って、潭と洞を作った。

てい し さい

ここに兄(程之才)とともに飛ぶようにして山を登り、

ふ

昔、仙人が履みつけた巨大な足跡を踏み、

杖に身を預けて、年老いた蛇が岩の上でとぐろを巻いているのを見下ろし、

底知れぬあの深い谷へと下ってみようかと想う。

あるいは、雲を穿って天に昇ろうかと想い、

しかし衣が重過ぎると感じる。

見上げる先には、

秋風に落ちかかる葉を救おうとするかのように飛び立った鳥。

おも

念うに、兄は世俗とは独り離れたところに立ち、

人の到り難い絶境にただ私とともにやってきた。

かたつわり

なが

蝸牛の左右の角の争いなどからは永くおさらばして、

胸の中の大自然を丸洗いしようではないか。

ら ふ ざん

顧みて、羅浮山はいま望み見ることができない、

とうげんきやう

まして、桃源郷への路は絶えてしまい、

案内してくれる人はいない。

とうこく

蒸気によって暗くけぶる湯谷の路を帰ると、

ふつふつ

野の小屋に神さびた泉が活活と湧いている。

お く

衣を解いて湯を浴びると、まさしく無垢の人となり、

身の軽さに、雲間おどりを行く鳳となるのである。

(1) この詩にはたくさんのことが詠み込まれていて流れが見えにくく、無理に整理して訳してもこの程度である。(2) 中ほどにある「念おもうに、兄は世俗とは独り離れたところに立ち」(念兄独立与世疎遠)の句は、程之才がいかなる人物であるかを推し量る上で興味深い。かつて蘇軾すいは、随代ほうとくの封徳彝になぞらえて、程之才は根性の曲がった最低の人物であるとしていた(第10章161ページ)。まさしくそのような人物であるのなら、朝廷の高官の期待に応えて蘇軾を苛め、それによって栄転の道が開けることを期待するであろう。程之才はもっぱら地方官として都から離れたところを転々としてきたようで、いまが中央に呼ばれる最後の最大のチャンスであるのかもしれないのだが、程之才は朝廷の高官の不興を買うことも覚悟して、蘇軾と和解する方を選んだのである。(3) この詩に程之才が次韻し、蘇軾は再び次韻した詩があり、もとは24句だったものになぜか40句に増えている。長くなった分さらにごたごたしているので、後半に置かれた4句だけを見ておくことにする)

世間誰似老兄弟、(世の中にこの老兄弟に似る者はいないだろう)

篤愛不復相疵瑕。あつ(篤く愛して、ケチを付け合うようなことは決してしない)

相携行到水窮处、(手を取り合って水の窮まる源にまで到って)

庶幾一見留子嗟。(一目見て、兄にあつと言わせてみたいものだ)

(かつて仇敵関係にあったことなど嘘のように親密な従兄弟同士であることを歌っている)

■与正輔遊香積寺

でい し さい こうしやく じ
程之才とはさらに香積寺（本章 154 ページ）に遊んでこの詩を詠んだ。

南方の山には松や竹が少ない、
あっても野火の災厄に常に苦しんでいる。
この峰だけが松や竹の蒼あおで覆われているのは、
仏祖の力を感じてそれを得ているからであろう。
山には茯苓ぶくりょう（霊妙な薬効があるという茸）が生えていて、
採る人がないために、千年を経て琥珀こはくに化しているという。
夜中にかすかな光を発し、
それを見るのは木客ぼくきやく（山の精）だけである。
私にも長い鋤すきがないわけではないが、
茯苓の真質しを識るのは非常に難しく、
霊苗れいびょうと毒草とはわずかな違いしかない。
茯苓らしきものを手に把とって玩もてあそんでみたものの、
とうとう食わずに棄て置き、
長く嘆息したのだった。
山の僧は道みちを得た人であるようで、
いつも谷から辛苦して水を汲んでいる。

私は水の力で臼^{うす}を舂くことをかつて思案したのだが、それは混沌^{こんとん}に穴を開けるような小賢いことであるといまは恥じている。恐らくこの奥深いところをまた尋ねることはないだろうから、板に今日の歳月を書いておこう。

(1) 松の根元に不老長生の薬効のある茯苓^{ぶくりょう}が生えるということは、これまでも蘇軾はしばしば言及してきた。その真贋は見分けがたいので棄てたとあるのは、蘇軾が己の身で試すことに慎重であったことを示すものである。(2) 「木客」は長江^{ぼくきやく}以南^{ちようこう}の森林地帯に棲む木の精で、数多くの不思議な話が伝わっている。長江以南には神秘の潜む大自然があり、それを背景として、蘇軾も仙界への関心を強めたのであろう。(3) 水力を利用することは前に香積寺^{こうしゃくじ}を訪ねたときに提案しているが、ここではそれを取り下げている。「混沌^{こんとん}」は『莊子^{そうじ}』にある寓話。目も鼻も耳も口もない「混沌」に人間と同じように穴を開けようとしたところ、「混沌」は死んでしまった。つまり、自然のあるがままであるのが最もよいというのである。川の流れも、小賢しく利用するよりは、そのままにするのがよいのだ。(4) このあと2人は別れたが、程之才^{ていしさい}はなおこのあたりに留まり、頻繁に書簡のやりとりが続く)

■記嶺南竹

上の詩で、南方の山には竹が少ないと詠んでいるが、実際には嶺南^{れいなん}の人々は竹をさかんに利用している。そのことを記した短文。

れいなん

嶺南の人々は竹に対して恥じらいを持たねばならない。

食^{おほ}べるとなったら筍、家^{おほ}を庇^{おほ}うとなったら竹の瓦、かし^{おほ}くとなったら竹の薪、着^{おほ}るとな^{おほ}ったら竹の皮、履^{おほ}くとなったら竹の鞋……。まことに「此^この君^{きみ}」なしでは一日も過^{おほ}ご^{おほ}せないのである。

おうぎし

おうぎし

(王羲之の息子の王徽之は、竹なしで一日も過ごせないというほどに竹を愛し、竹を「此^この君^{きみ}」と呼んだ(第3章90ページ)。それは竹の高潔さを讃えたものであったが、嶺

なん

南の人々はもっぱら実用面で竹を見ているだけだと、蘇軾は残念がっているのである)

■江月五首

かわ

江で見る月を詠んだ詩。序文がある。

れいなん

嶺南の気候は普通と異なっている。

かつて私はこのように言ったことがある。

「菊の花が開いたときがすなわち重陽、涼しげな空に月が美しいときがすなわち中秋、日付によって決めるべきものではない」

今年は九月になって残暑がようやく退くようになった。満月の後、月が出るのが徐々^{じゆじゆ}に遅くなるに従って、夜に起きて合江楼に登ったり、あるときは客人と豊湖^{ほうこ}に遊^{あそ}んだり、棲禪寺に入ったり、羅浮道院の扉を叩いたり、あるときは逍遙堂に上^あって暁に及んで帰ったりした。杜甫の「四更山吐月、残夜水明楼」(四更 山 月を吐^はく、残夜^{ざんや}の水明楼^{すいめいるう})の句は古今の絶唱である。その句によって五首の詩を作り、

「残・夜・水・明・楼」をそれぞれの韻とした。

^{と ほ}(杜甫の詩のある「四更」^{し こう}とは午前二時前後のこと。昔の中国では夜の時間を一更から五更の時間帯に分けた。以下の詩は、月の出が遅くなるのに従って詠んでいる)

其の一

^{いっ こう}一更、山が月を吐く――

さざ波の上に^{だいしょうとう}大聖塔が横に^ふ臥す。

^{こう}(杭州の)^{せい こ}西湖のほとり、^{ゆうきんもん}湧金門の外から看るとそっくりではないか。

氷の輪のような月が広い海を渡って行く。

香のような霧が入ってきて、ふと寒さを覚える。

月よ、しばし昇るのを止めよ、

我が盃の一杯がなくなるまでそこで照らしてしてくれたまえ。

^{だいしょうとう}(大聖塔は、^{ほう こ}豊湖のほとりの^{せいぜん じ}棲禅寺の南東にある)

其の二

^{に こう}二更、山が月を吐く――

^{ゆうじん}幽人(隠者＝私)は独りこの夜を過ごしている。

月と人が夜ごと合江楼の下で逢う、

なんと愛らしいことではなからうか。

枝はずっと風に揺れ、

草は露に湿って坐れない。

帰って門を閉ざして寝ようとすると、

虫が夜の間中話し続ける。

其の三

三更、山が月を吐く——

木に棲む鳥が驚いて起つと、

私も起って、夢の中の遊びを尋ねる。

清絶とはまさにこのこと、

月の光が雲を駆け散らし、星を掃いのける。

上か下か、空にあるのか水にあるのか、

迷いつつ、

清らかな江の水を飲んでみるとうか。

(終わりの二句の訳文は原文とはかなり離れている。原文は「幸可飲我牛、不須盥洗耳」

(幸い我が牛に飲ます可し、^べ 須^{すべから} く耳を洗うに違^{たが}うべからず)。唐突に牛が出てきているのは次のような寓話に基づいている。古代の聖天子である堯^{ぎょう}は天下^{きょうゆう}を許由に譲ろうとした。それを知ると、許由はけがらわしいことを聞いてしまったと、耳を洗って山に逃げた。その下流では、巢父^{そうふ}が牛に水を飲ませようとしていたのだが、許由が耳を洗うのを見て、汚れた水を牛に飲ませることはできないと立ち去った(本章 51 ページでも許由の故事を引いていた)。蘇軾の詩は、月光に照らされる川の水はあくまでも清く、耳を洗

った汚れも流れてこないで、牛に飲ませることができると詠んだもの。都から遠く離れた恵州^{けい}にはけがらわしいことは聞こえてこないという寓意であろう)

其の四

^{し こう}
四更、山が月を吐く――

^{きらきら}
皎皎と、この明るさは誰のためなのか。

^{ゆうじん}
幽人が私のところに来るという約束、

^{ぎょくじょう}
坐って玉繩(天の川)が横たわるのを待つ。

(連れだって渡る)野辺の橋は折れた板が多くあり、

山の寺へとひそやかに歩む。

この夜はいったいどのような夜であるのか。

夢のなかでこの世ならぬ幻の町に遊ぶのである。

(「幻の町」と訳した原文は「化城」^{け じょう}。「化城」は仏が現出させた幻の町で、苦しい修行の途中で休息する場である)

其の五

^{ご こう}
五更、山が月を吐く――

遠くの窓からかすかな明かりが部屋に入ってくる。

^{ぎょくこう}
玉鉤(月)が戸に掛かり、

^{かわ}
江は楼を照らして白い絹のように明るい。

天の川はすでに淡く暁に向かいつつあり、

つのぶえ

角笛の音がひんやりと響く。

眠らぬままに五首の詩を詠んで、

南国の歌謡を清く純粋なものに変えようとする。

（「南国の歌謡」と訳した原文は「蛮謳」である）

■書曇秀詩

蘇軾に会おうと遙かな惠州へと訪ね来る人が幾人もいた。芝上人（曇秀道人）（第10章257ページ）もその一人であった。そのことを記した短文。

（ここに見る曇秀は本章174ページに記されていた同名の僧とは別人である）

私が広陵（揚州）にいたとき、晁補之とともに曇秀道人は舟で客人を山光寺に送った。客人が去り、（恐らく別途来ていた）私は酔って舟の中で横になった。

曇秀は詩を作った。

扁舟乗興到山光、（小さな舟で興に乗じて山光寺に到った）

古寺臨流勝氣藏。（古い寺は流れに臨んで優れた雰囲気満ちている）

慚愧南風知我意、（南の風はきっと私の心を知っているのだろう）

吹将草木作天香。（草木を吹いて天の香りを寄せてくれる）

私はそれに和した。

閑裏清遊借隙光、（忙しいなかでわずかな暇を得て清らかな遊びをする）

醉時真境発天蔵。(酔っているときこそが天の真理によるまことの境地である)

夢回拾得吹来句。(夢からかえって、吹き寄せられた句を拾う)

十里南風草木香。(十里の南風、草木はかんばしい)

私はかつて欧陽脩おうようしゅうに向かって文同ぶんどうの詩を唱えたことがあった。

美人卻扇坐、(美しい人が扇を開いて座っている)

羞落庭下花。(それに恥じて庭の花が落ちる)

欧陽脩はこうに言った。

「それは文同の詩ではありませんぞ。その句はもとから世間にあったもので、文同は拾っただけです」

(曇秀に和した詩の句はそのことを思っ作ったもので、曇秀と別れて)三年後に、曇秀けいは惠州に来て私に会ったので、このことを記した。

((1) 曇秀どんしゅうは自由に行動する道士として、気の向くままに惠州けいに来たのであろう。(2) 親友の參寥さんりょう どうせん (道潜) はこのころに海を渡って惠州に行こうと考え、周囲から止められたようだ)

■贈曇秀

芝上人し (曇秀どんしゅう) は10日間ほど惠州けいに滞在して去り、そのときに蘇軾はこの詩を贈った詩。

(曇秀どんしゅうにはこの詩のほか幾つかの薬法を記したものを渡している)

白雲は山を出て、初めから執着する心がない。

鳥は林を出て、必ずしも^{すみか}もとの栖を恋い慕うものではない。

芝上^し人はたまたま山水を愛することから、

湖が深かろうが山が高かろうが、

歩くに任せてどんどん進み、

岩屋の穴の中で仏陀の百千相を礼拝した後、

さらに曹溪^{そうけい}(南華寺)で六祖^{なにかじ}慧能^{ろくそえのう}の像を見て、

どこの水が冷たいか温かい、味わいがよいか悪いかを知り尽くそうとした。

旅の間にわかったのは、

夢に見たものは実は幻ではないということであった。

かくて^{けい}惠州に至った芝上人は、

経文を綴ったものを袖から出し、

その中に、^{たま}壁のような月と^{たま}珠のような星を綴り合わせた詩もあった。

芝上人は人間世界の絶景を、

廬山^{ろざん}、南嶺^{なんれい}、さらには西湖^{せいこ}も、ほぼ遍く見て来たのだ。

西湖はここから北に臨むところ三千里の彼方、

大きな堤^{そでい}(蘇堤)が^{ながなが}冉冉と秋の水を横断しているのを見て、

芝上人は佳句を詠み、

それは(西湖の南の)南屏山^{なんびやうざん}にも説き及ぶものであった。

その句をいま唱えると、

熱気のこもる雲も秋風に追われて靡き去ってゆく。

どうして歓びはわずか十日だけなのか、

どうして杖をついてまた困難な帰路を尋ねようとするのか。

芝上人を引き留めるには、筍や蕨ではとても足りるものではない、

早く^{ライチ}荔子が赤くなってくれないかとじりじり待ち望むのである。

■和郭功父韻送芝道人遊隠静

芝上人（曇秀）が帰るに際して郭功父が詩を贈り、それに蘇軾が次韻した。郭功父は官員としてこのあたりに赴任していた人。

観音菩薩の妙なる智力は、

感に応じ縁に随って人を救済する。

芝上人もまたそのようなお方、

東坡居士を訪ねるためなら、

万里の歩みも辞すものではないと、

惠州にまで来られた。

道義のもとに深く契りを結び、

十年、行き来をともしてきた。

世界の半ばを行き窮め、

杯のような小舟を浮かべてまた渡っていこうとしている。

上人の囊も鉢も焼いてしまっ引き留めようかと思うのだが、

そんな俗な道具にこだわるお方ではない。

もうわかっているのだ、

帰るときには、ただここにこの路があるだけなのである。

■答周循州

惠州の隣の循州の知事である周彦質が何かと支援してくれるのに対して贈った詩。循州の知事が酒を贈ってくれることは本章 110 ページですで見ている。

このごろは、

野菜だけの食事、藜を編んだ寝床、破れた僧衣……。

俗気を取り除こうと、詩を吟じることもしない。

我が前生はきっと禅の修行僧であったはず。

ところが、我が弟子たちは誤って私のことを韓愈の生まれ変わりだという……

貴君の門を叩いて夜話を求めることはまだしていないのに、

朝夕の食事が続ようと、かたじけなくも米を送ってくださる。

貴君の俸禄が他人にまわせるほど多くはないのを知っているので、

黄精の根を食べると飢えることがないというから、

これから捜しに行こうと思っているところだ。

（「禪の修行僧」と訳したところの原文は「^{ろぎょうじゃ}盧行者」で、すなわち^{えのう}慧能（本章63ページなど）である。慧能のもとの姓は盧である）

■食檳榔

^{びんろう}檳榔を食べたという詩。檳榔とは何か。シュロに似た形状の南国の木で、高さは優に10メートルを超え、果実は^{びんろうじ}檳榔子と呼ばれ、噛みたばこのような嗜好品として用いられる。

夜は、枝のない林を月が照らす、
 一万本もの棟木が礎の上に立っているかのようだ。
 昼は、雲間をはるかに扇を広げる、
 なおも暑い九月に蔭を作ってくれる。
 上からは房が垂れ、下では^{あか}絳い刺を繞らせてそれを守っている。
 房が風に揺れると、^{しほう}紫鳳の卵のようなものが見え、
 暗い雨のなかでは、^{そうりゅう}蒼竜の乳のような白さを見せる。
^{ほう}包が裂けるといっぺんに地に墮ち、皮に包まれて自然と熟す。
 北からの旅人は、この実を見せられても何であるのかわからない。
 ここの風俗として食べるよう勧められ、拒むのは難しい。
 中はうつろで、そこにこもる^き気をもらすまいと^か嚼むのだが、
 最初はたいい吐き出してしまう。

か
嚼んだ唾液を吸うとかすかな甘みがあり、
歯にくっついたものは苦みがある。
見た目はひどく厳めしいが、
滋味があってなかなかになまめかしいところがある。
身中の虫を退治することにかけては勲章もので、
腸内の輪を勇んでまわしてくれることは褒美に値する。
南国の頑なな悪い気のなかで、
これは体の傷を補い利を導いてくれるのである。
薬としての効能はたしかであると、
果実の目録に書き記すべきである。
先生(蘇軾)は肉やよい米の御馳走を食べられなくなって、
腹はすっかり壊れた太鼓のようになってしまった。
この実を日に一粒を超えて啖^くらうと、腸や胃に嫌われて、
臍や腎のあたりで雷がごろごろ鳴って、
食べた藜^{あかぎ}やら藿^{かこ}やらが腹中で腐ってしまう。
老いと眠りが少なくなり、
書物を見る燈の膏が尽きてしまっても、なお時を数えて起きている。
この実は眼の痛みをとってくれる。
喉の渴きを抑え、飢えを忘れさせる効果もある。
しかし、農書にはなぜか遠来の客を困惑させるようなことしか書かれていない。

これまでの知見は偏っていて、
悪いところばかりを言っているのを正さなければならない。

■送仏面杖与羅浮長老

釈迦しゃ かの顔を刻んだ杖ら ふ ざん とくを羅浮山の徳長老に贈り、それに添えた詩。

十方三界の全宇宙は釈迦しゃ かの顔の内におさまるといふ。

その釈迦の顔が、東坡居士とう ば こ じの握った掌の中にある。

この杖ら ふ ざん とくを羅浮山の徳長老に送る。

これを携えて山に帰るなら、

徳長老の歩みとともに風が起り、

全てのものがそれに呼応して叫ぶであろう。

■和陶己酉歳九月九日

陶淵明とう えん めいの「己酉き ゆうの歳としの九月九日」と題する詩に和した。蘇軾の作には短い序文がある。陶淵明のものと詩は義熙5(409)年、45歳のときの作。最後に職を辞してから3年後である。

序(蘇軾)

十月一日、初めて菊の花が開いた。それで客人と重九ちようきゆうの宴とう えん めいを催し、よって陶淵明

の「己酉^{きゆうとし}の歳^{とし}の九月九日^{きゅうがつきゅうにち}」の一首に次韻した。(漢^{かん}の時代^{きこう}の高官^{きくわん}であった)胡広^{こくわう}は菊^{きく}潭^{たん}の水^{みづ}を飲んで長生きをしたという。しかし、李固^{りこ}の伝記^{でんき}に付された賛^{さん}を読むと、李固^{りこ}は胡広^{こくわう}のことを全くつまらない人間だとみなしていた。

(1) 序文の日付は10月1日。惠州での最初の1年が経過した。(2) 胡広^{こくわう}のことを記しているのは、詩中にその故事を用いているからであるが、それに類する人物の評判が都から聞こえてきたのだろうか)

(陶淵明)

靡靡^{するする}秋^{あき}已^も夕^{くれ}、(靡靡^{するする}と秋^{あき}は已^もう夕^{くれ}れようとし)

淒淒^{さむさむ}風^{かぜ}露^{つゆ}交^{ゆさ}。(淒淒^{さむさむ}と風^{かぜ}と露^{つゆ}とが交^{ゆさ}っている)

蔓草^{はびこ}不^く復^も栄^{さか}、(蔓^{はびこ}っていた草^{くさ}は復^もう栄^{さか}えることはなく)

園木^{にわ}空^き自^{から}凋^{おのず}。(園^{にわ}の木^きは空^{から}つぽになって自^{おのず}と凋^{しぼ}んでゆ^{ただけ}である)

清氣^{きよ}澄^き余^{のこ}滓^{にごり}、(清^{きよ}らかな気^きが余^{のこ}る滓^すを澄^すませ)

杳然^{はるか}天^{てん}界^{かい}高^{たか}。(杳然^{はるか}にも天^{てん}界^{かい}は高^{たか}くにある)

哀^{かな}蟬^{せみ}無^な留^{ひび}響^{とど}、(哀^{かな}しくない蟬^{せみ}ももうその響^{ひび}きを留^{とど}めてい^なない)

叢^{むれ}雁^{かり}鳴^{くも}雲^ま霄^な。(叢^{むれ}雁^{かり}が雲^{くも}霄^まに鳴^ないている)

万^{よろず}化^{へんか}相^あ尋^つ繹^{こと}、(万^{よろず}の化^{へんか}は相^あい尋^ついで繹^{こと}なり)

人^{ひと}生^{せい}豈^ど不^れ勞^{ろう}。(人^{ひと}の生^{せい}は豈^どたつて勞^{ろう}なしとはい^いかない)

從^{いじし}古^か皆^{すべて}有^{しぬ}沒^あ、(從^{いじし}古^か皆^{すべて}に有^{しぬ}没^あということが有^ある)

念^{これ}之^{おも}中^{このまんなか}心^こ焦^こ。(之^{これ}を念^{おも}と中^{このまんなか}心^こが焦^こげるばかりとなる)

何^{なに}以^い称^{こころ}我^わ情^{びつたり}、(何が以たい我が情に称するの?)

濁^{にご}酒^{ざけ}且^{しば}自^{うっとり}陶^{とり}。(濁り酒で且し自陶しようではないか)

千^{せんねん}載^し非^{ところ}所^{ない}知^{ない}、(千載のさきのことは知れる所では非のだから)

聊^{とりあえず}以^け永^き今^{ゆつたり}朝^{あした}。(聊以のところが今朝は永しようではないか)

(蘇軾)

今日^{けふ}我^{われ}重^{ちゅうきゅう}九^く、(今日が私の重九の節句である)

誰^{たれ}謂^い秋^{あき}冬^{ふゆ}交^{まじ}。(もう秋と冬の境になっているではないかと言わないでほしい)

黄^き花^{はな}与^と我^{われ}期^き、(黄色い花と私は期すものがある)

草^{くさ}中^{なか}実^み後^{おのち}凋^{しぼ}。(草の中にあってもちゃんと後れて凋むのである)

香^か余^{あま}白^{しろ}露^{るし}乾^{かわ}、(花の香りを余して露が乾き)

色^{いろ}映^{うつ}青^{あお}松^{しょう}高^{たか}。(花の色を映して青い松が高々そびえる)

悵^{たが}望^{ぼう}南^{なん}陽^{やう}野^の、(思いをこめて北の方を望み見て)

古^こ潭^{たん}霏^ふ慶^{けい}霄^{せう}。(かの菊潭に雲がかかかるありさまを想い描く)

伯^{はく}始^し真^{しん}糞^{ふん}土^ど、(胡広はまことに糞土な人間で)

平^{へい}生^{せい}夏^か畦^し勞^{らう}。(普段から懸命にへつらってばかりいたから)

飲^の此^こ亦^{また}何^{なん}益^{えき}、(菊潭の水を飲んだところで何のよいこともなく)

内^{うち}熱^{ねつ}中^{ちゆう}自^{みづか}焦^{やう}。(体内の熱で自分を焦がしていたに違いない)

持^も我^{われ}万^{ばん}家^か春^{しゅん}、(私は「万家春」の酒を手を持ち)

一^{いつ}酬^{ちゆう}五^ご柳^{りゅう}陶^{たう}。(ひとたび陶淵明と応酬しようと思う)

夕英幸可掇、(夕方に菊の落花を拾うことができたなら)

継此木蘭朝。^{もくらん}(木蘭の露を朝に飲んだのに続けて食べようと思う)

(1) 惠州では菊が咲くのが遅く、暦よりもほぼ1カ月遅れて重陽^{ちやうよう}の宴を催したのだった。(2) 「万家春」^{ばん か しゆん}は蘇軾の自家製の酒の名である(本章87ページ)

■和陶読山海経

陶淵明^{とう えん めい}の『山海経^{せん が いきやう}』を読む」という13首の詩に和した。蘇軾の作には短い序文がある。『山海経』は古代の地理書で、不可思議な妖怪や神々のことも記されている。

序(蘇軾)

陶淵明^{とう えん めい}の『山海経^{せん が いきやう}』を読む』十三首』は、そのうちの七首はすべて仙語^{せん こ}(仙界についての言葉)である。私は『抱朴子^{ほうぼくし}』を読んで感じる場所があったので、その韻を用いてこれについて賦した。

『抱朴子^{ほうぼくし}』はここまで何度かその名を見てきた晋の時代^{しん}の葛洪^{かつこう}(本章77ページなど)が記した神仙術に関する書物である)

其の一(陶淵明)

孟夏草木長、^{しよ か くき き の}(孟夏には草や木が長びて)

繞屋樹扶疏。^{い え めぐ き ふさふさ}(屋を繞る樹が扶疏になる)

衆鳥欣有託、(衆の鳥が 託 ところが有るのを欣んでいる)

吾亦愛吾廬。(吾も亦た吾が廬を愛している)

既耕亦已種、(既に耕し、亦た已に種えたので)

時還讀我書。(あいまの時に還って我が書を読む)

窮巷隔深轍、(窮った巷は(役人の乗る車の)深い轍からは隔たっているが)

頗回故人車。(頗しば故人は車を回らせてくれるので)

飲然酌春酒、(飲然と春の酒を酌み)

摘我園中蔬。(我が園の中から 蔬を摘んでくる)

微雨從東來、(微かな雨が東從ら来て)

好風与之俱。(好い風も之と与に俱にくる)

泛覽周王伝、(泛と『周王伝』を覽て)

流觀山海図。(流と『山海図』を觀る)

俯仰終宇宙、(俯仰 宇宙の終にまでいってしまうのだから)

不樂復何如。(不樂で復う何如もない)

((1)『周王伝』は、周の穆王が黄河を遡って旅をし、最後は西にはての崑崙山で西

王母に会ったという伝説を記した本。『山海図』は『山海経』の挿絵。(2) 其の一は全

体の序章に当たり、時節のよいところに、他にすることもなく、不可思議なことが記され

ている書物を見ることの楽しさを歌っている。(3) 陶淵明のこの一連の詩は、『山海経』

に記されていることなどを踏まえての作で、『山海経』を詳しく読んでいない者にはさ

ほど面白味がなく、「楽しすぎてもうどうしようもない」というわけにはいかない)

其の一(蘇軾)

今日天始霜、(今日は天から初めて霜がおり)

衆木斂以疏。(もろもろの木は縮こまってまばらになった)

幽人掩閑臥、(静かに暮らす人は門を閉ざして横になり)

明景翻空廬。(澄んだ陽ざしが何も^{いおり}ない廬に差し込んでくる)

開心無良友、(心を開く良い友もないので)

寓眼得奇書。(眼を寄せるものとして奇書を引っ張り出してくる)

建德有遺民、(南に建徳^{けんとく}という素朴な人々の国があって、いまも子孫がいるらしいが)

道遠我無車。(そこまでの道は遠いし、私には行くための車もない)

無糧食自足。(しかし、食糧がなくてもきつと何とか食えるのであって)

豈謂穀与蔬。(穀物が^いないとか野菜がないとか言ってはならないのだ)

愧此稚川翁、(困難をものともせず^{ち せんおう}に南に旅した稚川翁に対して取じねばならない)

千載与我俱。(千年を経てもに^いたいのはこの稚川翁であって)

画我与淵明、(その人と私と陶淵明^{とうえんめい}を描いたならば)

可作三士図。(三士^{さんし}の図が^いできあがるであろう)

学道雖恨晚、(残念なことに、道を学ぶことでは二人に遅れたけれども)

賦詩豈不如。(詩を賦することについては^いそうでもないだろう)

(1) 蘇軾のこの詩も全体の序章に当たる。陶淵明の詩は初夏であったのに対して、この詩は秋の終わりである。よい友もないと、実際とはいささか異なっていることを歌

っているのはちょっとした文学的虚構である。(2) 建徳は『莊子』の寓話にある、遙か南方の国。(3) 稚川翁とは『抱朴子』の著者の葛洪のこと。葛洪は建徳を目指したわけではないが、仙薬を得るために南に旅をし、広州まできたところで知事に引き留められて、羅浮山で晩年を過ごした)

其の二(陶淵明)

玉台凌霞秀、(玉台(神話中の山)が霞を凌いで秀たつとき)

王母怡妙顔。(王母(不老長生の神である西王母)は妙しい顔を怡らげる)

天地共俱生、((西王母は)天地と共に俱に生まれ)

不知幾何年。(それから幾何の年がたったのか知らない)

靈化無窮已、((西王母の)靈化は窮まり已むことは無く)

館宇非一山。(西王母の)館宇は一つの山だけではない)

高酣発新謠、((穆王が訪ねてきたときに)高酣で新しい謠を発ったのだが)

寧效俗中言。(俗中の言に效うようなものでは寧てなかった)

(遙か西方に住む不老長生の神である西王母伝説を歌っている。周の穆王は黄河を遡って西王母に会ったとされている)

其の二(蘇軾)

稚川雖独善、(稚川翁は独りだけきわだって優れていたのだが)

愛物均孔顔。(孔子や顔回のように他の人も大切にしていたので)

欲使蟪蛄流、(夏の季節しか知らない蟬にも)

知有亀鶴年。(亀や鶴のように千年も万年も生きられることを教えた)

辛勤破封蟄、(^{せまいりょうけん}封 蟄を打ち破ろうと懸命に努め)

苦語劇移山。(山を移動させるほど力を尽くして述べた)

博哉無窮利、(そのもたらした益は広く無窮で)

千載食此言。(千年にわたってこの言葉に恩恵を被っているのである)

^{かつこう}葛洪が^{ほうぼくし}『抱朴子』を遺したことを歌っている)

其の三(陶淵明)

迢遞槐江嶺、(^{はるか はるか かいこう みね}遠な遠な槐江の嶺)

是謂玄圃丘。(是は^{これ}(天帝が住む)玄圃の丘だと謂う)

西南望昆墟、(^{せいなん こんきょ こんちんさん のぞ}西南に昆墟(崑崙山)を望み)

光氣難与儔。(槐江山の^{かいこうざん こうき とも ならぶ ない}光気は与に儔ものが難のである)

亭亭明玕照、(^{ただただ あか かん て}槐江山には亭亭と明るい玕(宝玉)が照りかがやき)

落落清瑤流。(ふもとには^{さらさら きよ よう すい な}落落と清らかな瑤(水)が流れている)

恨不及周穆、(^{ざんねん しゅう ぼく おう 裏にあわ}恨なのは、(私は)周の穆(王)のときに及なくて)

托乘一来遊。(托に^{いつしよ の ひと き あそ}乗せてもらって一たび来て遊べなかったことだ)

其の三(蘇軾)

淵明雖中寿、(^{とうえんめい ちゅうじゅ}陶淵明は中寿(八十歳)にならなかったが)

雅志仍丹丘。みやび たんきゅう(雅な志は丹丘(仙界)に至ることにあった)

遠矣無懷氏。む かい(遠く無懷氏(太古の帝王)の民であるとして)

超然邈無儔。(超然と誰も行けない遙かなところにあったのである)

奇文出續息、(息を引き取るときにも優れた文章を作ったのは)

豈復生死流。(生死の境でおたおたする連中とは異なっていた)

我欲作九原、(私は墓場からこの人を起して)

異世為三遊。ち せん いう(稚川翁とともに世を異にする三人の友になりたいものだ)

其の四(陶淵明)

丹木生何許、たんぼく ど こ は(丹木は何許に生えているのか)

乃在峯山陽。すなわ みつざん みなみ あ(乃ち峯山の陽に在る)

黃花復朱實、きいろ はな ま あか み(黄い花がさき、復た朱い実をつける)

食之寿命長。これ た じゅみょう なが(之を食べると寿命が長くなる)

白玉凝素液、みつざん はくぎょく しろ えき かたま((峯山から流れ出る川にある)白玉は素い液が凝ったもので)

瑾瑜發奇光。きん ぎょ ふしぎ ひかり はつ(とくに瑾瑜(の玉)は奇な光を発する)

豈伊君子宝、これ くん し たから けっし(伊は君子の宝というだけでは豈でなく)

見重我軒黃。わ けんこう おもん られ(我が軒黄(太古の皇帝)にも重じ見たものなのだ)

(これは『山海經』にある峯山についての記述をなぞっただけの詩で、特段の面白味はない。まさかそれに倣ったわけではないだろうが、蘇軾の次の詩も同様である)

其の四(蘇軾)

子政信奇逸、(劉向はまことに奇逸な人で)

妙算窮陰陽。(絶妙な算で陰陽のことわりを窮めた)

淮南枕中訣、(淮南王が遺した『枕中書』の要点を掴み)

養煉歲月長。(長い歳月にわたって鍛錬に励んだ)

豈伊臭濁中、(臭気を放つ濁った世の中で)

爭此頃刻光。(つかの間の光を争うようなことはしなかった)

安知青藜火、(青い藜の杖から火を発して)

丈人非中黄、((劉向に天地開闢以前のことを説いた)人はきっと中黄真人であったのだ)

(これは漢代に多数の著作を残した劉向(字は子政)について詠んだもの。とくに怪異なことを記した『洪範五行伝論』にまつわる伝説を題材にしている)

其の五(陶淵明)

翩翩三青鳥、(翩翩ととぶ三青鳥)

毛色奇可憐。(毛の色は奇しくもまた可憐しい)

朝為王母使、(朝は(西)王母の使と為り)

暮歸三危山。(暮れには三危山に帰る)

我欲因此鳥、(我が欲むには、此の鳥に因って)

具向王母言。(具に(西)王母に向かって言いたい)

在世無所須、(「世に在って須める所は無いけれど」)

惟酒与長年。た さけ と ながいき（惟だ酒与長年だけはありたいもの）」

せいおう ぼ（西王母に仕える三本足の鳥、さんせいちょう三青鳥を歌っている。求めるものはないと言いつつ、酒と長生きを願うのは、一種のジョークであらうか）

其の五(蘇軾)

乱離棄弱女、(戦乱から逃れようとして、歩けなくなった四歳の娘)

破冢割恩憐。(父は温愛の情を割いて、墓地の壊れた穴に棄てた)

寧知效龜息、(まさか亀に呼吸法を倣い)

三歳号窮山。(山の奥で、三年の間、生き続けるとは知りしなかった)

長生定可学、(長生はきさと学べるのだ)

当信仲弓言。ちんちゅうきやう(このことを記録した陳仲弓の言葉は信じるべきだ)

支牀竟不死、べいど(牀に身を委ねたまま死ぬことなく)

抱一無窮年。(無窮の年月を過ごす者だっているのだ)

((1) 亀は「き氣」を取り込むことで一万年も生きるという。その呼吸法を「き そく龜息」という。父に棄てられた娘は、素直に亀の真似をすることで、何も食べなくても生き続けることができたのだった。その話を伝えたかつこうと葛洪が記しているのが陳仲弓ちんちゅうきやうという人である。蘇軾には「龜息」を論じた文章があるが、意味を掴むのは難しい。(2) 最後の2句の意味を掴むことはできない。不可思議なことばかりを詠んだこの一連の詩が、そもそも全てよくわからないのだが……)

其の六(陶淵明)

逍遙蕪臯上、(逍遙と蕪臯(の山)の上をゆくと)

杳然望扶木。(杳然に扶木を望むことができる)

洪柯百万尋、(洪きな柯は百万尋のながさ)

森散覆暘谷。(森散と暘谷を覆っている)

靈人侍丹池、(丹池には靈なる人が侍っていて)

朝朝為日浴。(朝朝にここで日が浴びを為る)

神景一登天、(神しい景が一たび天に登るなら)

何幽不見燭。(何に幽いところであっても燭さ見ないことはないのだ)

(この詩が歌っているのは、東の涯の蕪臯山から東を望むと、扶木という巨大な木があつて、その枝の覆う暘谷から太陽が昇るという風景。暘谷には丹池があつて、そこで太陽は水浴びをする。その手伝いをするのが羲和という靈人＝神女である。『山海經』に記されているこの奇怪な風景を、陶淵明は果たして事実であるとして受け止めていたのだろうか。そして、蘇軾は葛洪が語る神仙譚をどこまで信じていたのだろうか。2人は、少なくともわれわれよりは真実性を疑う度合いは小さかったのだろう)

其の六(蘇軾)

二山在咫尺、((救世の道が得られるという)二つの山は実はすぐ近くにあるのだろう)

靈藥非草木。(靈藥は(普通に見られる)草や木のすがたはしていないのだろう)

玄芝生太元、(玄芝という靈藥)は(二山のうちの)太元山に生え)

黄精出長谷。(黄精は長谷山から出るという)

仙都浩如海、(仙都なところは海のように広く)

豈不供一浴。(身を清めるためにいくらでも浴びることができる)

何当従山火、(山に火(霊なる働き)の象徴)があるなら)

束縕分寸燭。(麻の束に移して、灯火を分けるべきである)

(この詩が何を歌っているのか訳者にはさっぱりわからない。仙道に至る道筋はどこにでもあるという趣旨であると仮定して訳してみた)

其の七(陶淵明)

粲粲三珠樹、(粲粲と三珠樹は)

寄生赤水陰。(赤水の陰に生を寄せている)

亭亭凌風桂、(亭亭と風を凌ぐ桂は)

八幹共成林。(八つの幹で共に林を成っている)

靈鳳撫雲舞、(靈鳳が雲を撫でて舞い)

神鸞調玉音、(神鸞が玉をころがすような音を調べる)

雖非世上宝、(世上では宝とはされ非いものではある雖ど)

爰得王母心。(爰に(西)王母の心を得ているのだ)

(この詩で、陶淵明は自由にイメージを飛翔させることを楽しんでいるようだ。この詩に従って、不思議な林の光景を描いた屏風画を想像するとよいのかもしれない)

其の七(蘇軾)

蜀士李八百、(蜀の士、李阿は八百歳になっても)

穴居呉山陰。(呉山の北の穴に住んでいた)

黙坐但形語、(黙って坐り、形をつくって語り)

従者紛如林。(弟子として従う者が林をつくるほど大勢いた)

其後李寛、(その後李寛という人がいて、李阿その人のようにいわれていたが)

雞鶩非同音。(李阿と李寛は鶏と鶩ほどに違っていた)

口耳固多偽、(口から耳へと伝えられることは偽りが多く)

識真要在心。(真実を知る要は心にあるのだ)

(蘇軾ももちろんいろいろな神仙譚には偽が多いと疑いの眼を向けていた)

其の八(陶淵明)

自古皆有没、(古え自ら皆に没が有って)

何人得靈長。(何人であっても、霊れて長く生きて)

不死復不老、(不死であったり、復は不老であったり)

万歳如平常。(一)万歳になっても平常の如であるなどというわけにはいかないのだ)

赤泉給我飲、(赤泉のみずを我に飲ませて給れて)

員丘足我糧。(員丘(木の実)で我の糧を足すなら)

方与三辰遊、(方と三辰(太陽、月、星)と与に遊んで)

寿考豈渠央。(寿考は豈して央(きり)することは渠(みづか)のたろうに)

其の八(蘇軾)

黄花冒甘谷、^{かんこく}(甘谷を覆うのは黄色い菊の花)

靈根固深長。(その靈妙な根は深(長い))

廖井窖丹砂、^{りょう たん さ}(廖氏の村では穴倉に丹砂を蓄えていて)

紅泉湧尋常。(紅い泉が普通にわいていた)

二女戲口鼻、^{ちゅうく}(百七十歳まで生きた趙瞿は、口と鼻の間で二人の微小な娘を遊ばせ)

松膏以為糧。(松やにを食べ物としていた)

聞此不能寢、(こうした話を聞いて私は眠れなくなり)

起坐夜未央。(起き上がって考え続け、夜は明けなかった)

(「其の八」では2人とも不老長生の術について歌っている。ともに可能性はあると信じていたのだろう)

其の九(陶淵明)

誇父誕宏志、^{か ほ ばかてか こころざし}(誇父には誕宏い志があった)

乃与日競走。^{それ ひ と きようそう}(乃でお日さまと競走をした)

俱至虞淵下、^{とも ぐ えん}(俱に虞淵(太陽が沈むところ)^{した}の下にまで至ったときには)

似若無勝負。^{あたか しやうぶ な よう}(似も勝負が無いかの若であった)

神力既殊妙、^{ふしぎ ちから}((誇父の)神な力はそれだけ既に殊に妙れていたのもので)

傾河焉足有。^{かわ かたむ}((喉が渴いたと)河を傾けて(飲み干したところで)焉て足りることが有ろうか)

余跡寄鄧林、(^{のこ}誇父は死んで)余った(^{あと}杖の)跡が(^{どうりん}鄧林(^なの大森林))と寄ったのだ)

功竟在身後、(^{いさお}功は竟いりには身を(^{ついで}喪った)後(^み)に在ったのである)

(^{とうえんめい}陶淵明は、太陽と競争するというおよそ無意味なことをして死んだ巨人に、なぜか強く惹かれたのだ)

其の九(蘇軾)

(蘇軾のこの詩は何を言いたいのかさっぱりわからないので、岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳『蘇東坡詩集』(1927年)にある読み下し文をそのまま写しておく。いつか理解の及んだときに訳文を補いたい)

談道鄙俗儒、(^{みち}道を談ずる(^{だん} 鄙俗の(^ひ ぞく じゆ 儒))

遠自太史走、(^{とお}遠く太史走 自ず)

仲尼実不死、(^{ちゆうじ}仲尼 実(は)死せ不)

於聖亦何負、(^{せい}聖に於いて亦 何ぞ負かむ)

紫文出呉宮、(^{しぶん}紫文 呉宮に出で)

丹雀本無有、(^{たんじゃ}丹雀 本と有る無し)

遼哉広桑君、(^{はるか}遼なる哉 広桑君)

独踰三季後、(^{ひと}ひとり三季の後に踰る)

其の十(陶淵明)

精衛銜微木、(^{せいゑい}海で溺れ死んだ恨みをはらそうと鳥に化した)精衛は微さな木を銜えて)

將以填滄海。(將^{それ}で^も以^{あお}って^{うみ}滄^う海を^う填めてしまおうとした)

刑天舞干戚、((猛獸^{けいてん}の)刑天は(天帝^{たて}と争^{おの}って首を斬られても)干^まと戚^まをふりまわして舞い)

猛志固常在。(猛^{たけだけ}しい 志^{こころざし} は固^{もと}のまま常^{つね}に在^ありつづけたのだった)

同物既無慮、((精衛^{もの}は)ほかの物(鳥)と同じになっても、既^もり 慮^{きにかける} ことも無^な)

化去不復悔。(刑天^{しん}は)化^{しま}で去^{けっ}ってからも、復^くして悔^ないたりしなかった)

徒設在昔心、(徒^{むなし}く在^{むかし}の^{こころ}心^{たち}を設^もっていたところで)

良晨詎可待。(良^よい 晨^{あさ}は詎^{どう}あっても待^まって可^くれるものではないのだから)

(陶淵明^{とうえんめい}は、其^{その}の八^{はち}に続^ついて、精衛^{せいゑい}や刑天^{けいてん}といった激^{げき}しい心^{こころ}を持ったものへの共感^{きかん}を抱^{かか}きつつも、復讐^{ふしゅう}心^{しん}が報^{はら}われるのは難^{がた}しいと歌^{うた}っている)

其の十(蘇軾)

金丹不可成、(金丹^{きんたん}(仙薬)はおいそれと作れるものではなく)

安期渺雲海。(有名^{あん}な仙^き人^{せい}の)安期生^{あんきせい}は東^{あづま}の海^{うみ}の遥^{はるか}か彼^か方^{はう}に行^いってしまっ

誰謂黃門妻、(一^{てい}方^いで、程偉^{ていゐ}が仙薬^{せんやく}作^{さく}りに苦^{くる}心^{しん}慘^{さん}憐^{れん}していたときに)

至道乃近在。(実^{じつ}はその妻^{さい}こそが道^{みち}を得^えた人^{ひと}で、意^い外^{がい}にも金丹^{きんたん}の術^{じゆつ}は近^{きん}くにあ^あったのだ)

屍解竟不伝、(妻^{さい}は昇^{しょう}仙^{せん}してしまっ

化去空余悔。(妻^{さい}が去^さってからは、空^{くう}しく悔^{くわい}いば^ばかりが残^{のこ}ったのだ)

丹成亦安用、(い^いづれに^にしても、金丹^{きんたん}はあ^あったとこ^ころで用^{もち}のないものであ^あらう)

禦氣本無待。(氣^きを正^{ただ}しく制^{せい}御^ぎするの^のは、薬^{くすり}の作^{さく}用^{よう}を待^{まち}つまでもなくで^できるはずであるのだから)

(蘇軾^{そし}は千^{せん}年^{ねん}前^{ぜん}の人^{ひと}であるから、われわれとは相^さ当^{たう}に距^{きょ}離^りがあ^あって、理^り解^{かい}の及^{およ}ばないこ

とは多々ある。それでも、合理的精神の持ち主であって、われわれと共有しうところの方が遙かに多くあると、このような詩で確認することができる。仙薬作りを試みつつも常に疑義をはさみ、その一方で、^き気を制御する呼吸法を長く実践して、そちらの方が体験的に有効性が高いと判断していたのである。蘇軾の説く呼吸法の理論はわれわれには理解できなくても、深く息をすることが健康に資するのは間違いない)

其の十一(陶淵明)

巨猾肆威暴、(^{ひど}巨猾^きの^{ほし}危^いは) ^い肆に^{ぼう}威暴を^{あつゆ}ふるってを(^{あつゆ}戮^{あつゆ}を殺し))

欽駟違帝旨。(欽駟^{きん}は^{みかど}帝の^{こころ}旨に^{そむ}違いて(^{そこう}祖江^{そこう}を殺した))

戮^{あつゆ}強能^{あつゆ}変、(^{あつゆ}戮^{あつゆ}は^{けんめい}殺された^{うま}後で) ^か強に^か能く(^か竜のような^か姿に)変わったのだが)

祖江遂独死。(祖江^{そこう}は^{ついで}遂に^{ひと}独り^し死んでしまった)

明明上天鑒、(^{あかあか}しかし、^{じやうてん}明明と^{かがみ}上天の^{かがみ}鑒は^{かがみ}かがやき)

為^{あく}悪不可^な履。(悪^なを^な為した^なところで、^な履^なげ可^なる^なものでは^なないのだ)

長^{なが}枯^{しぼ}固^{もと}已^{すで}劇、(^{はげ}長く^{はげ}枯^{はげ}られる^{はげ}ことは^{はげ}固^{はげ}より^{はげ}已^{はげ}に^{はげ}劇^{はげ}しい^{はげ}ものが^{はげ}あったから)

●鶚^{しやん}豈^{みさこ}足^{どう}恃。(鶚^{しやん}に^{どう}変身^{うま}して^{しやん}逃^{しやん}れよう^{しやん}としても) ^{しやん}豈^{しやん}した^{しやん}って^{しやん}恃^{しやん}く^{しやん}足^{しやん}く^{しやん}は^{しやん}ず^{しやん}が^{しやん}な^{しやん}かった^{しやん}のだ) ●は

爰+鳥という字

^き危^{きん}と^び欽駟^{きん}の^び二人^{きん}の^び悪^{きん}者^びについて、^{きん}悪^{きん}事^びは^{きん}結^び局^{きん}は^び成^{きん}功^びし^{きん}ない^びとい^{きん}う^びこ^{きん}とを^{きん}詠^びん^{きん}で^{きん}い^{きん}る。陶淵明は王朝の交代を目の前で見たので、この詩はそれを風刺するものであろうとい^{きん}う)

其の十一(蘇軾)

鄭君故多方、(鄭隱^{ていいん}は数々の道術を得ていた)

元翁所親指。(それは^{かつこう}葛洪の祖父の^{かつげん}葛元翁の教えを受けたものだった)

奇文二百篇、(鄭隱は優れた文章を二百篇のこしたのだが)

了未出生死。(ついに生死の境から出るものではなかった)

素書在黄石、(黄石公^{こうせきこう}には『素書』^{そしょ}があって)

豈敢辞跪履。(張良^{ちやうりやう}はそれを授かるためならと^{ひざまず}跪いて^{くつ}履をはかせることもした)

万法等成壞、(万物はどれもできては壊れるものであるけれど)

金丹差可恃。(金丹^{きんたん}だけはいくらか頼みがいがあったりするのだろうか)

(ここでは道術を伝えるいくつかの書物について詠んでいる。書物に書いてあることは必ずしもあてにならないということが言いたいのだろうか)

其の十二(陶淵明)

鷗●見城邑、(鷗●^{ししゅう}という鳥が^{まち}城や^{むら}邑^{あら}に見われるときには) ●^{しゅう}は「朱+鳥」という字

其国有放士。(其^その国^{くに}に^{ほうし}放士(放逐された人)が有るという)

念彼懷王世、(念^{おも}うのは彼の懷王(が^か屈原^{かいおう}を追^{くつげん}いやった)世^{じだい})

當時数来止。(当時^{とうじ}は(鷗●^{ししゅう}が)数^{しば}しば^き来たの止^だった)

青丘有奇鳥、(青丘^{せいきゅう}には奇^{めづら}しい鳥^{とり}が有^いて)

自言独見爾。(自ら言うには「(他意はなく)独^{ひと}り^{あら}見^{だけ}られた爾です」)

本為迷者生、(本^{ほん}は迷^{まど}者^{もの}の為^{ため}に生^{あら}われるのであって)

不以^{くん し}喻^{わざ}君子^{さと}。(君子を以^なわざ^な喻^なそうとするものではないのだ)

(前の「其の十一」に続いて、奇怪な伝説に基づいて、現在の政治情勢を風刺する詩であるとの解釈もあるが、何が言いたいのかわらかではない。蘇軾はこれをどのように理解したのだろうか)

其の十二(蘇軾)

古強^{こ きょう}本庸妄^{ほん ぶよう}、(わしは四千歳だと言っていた古強^{こ きょう}なんぞは庸妄^{ほん ぶよう}であつたし)

蔡誕^{さいたん}亦誇士^{おれぶろしき}。(仙界に行ってきたと言っていた蔡誕^{さいたん}もやはり誇士^{おれぶろしき}であつた)

曼都^{まん と}斥仙人^{しつせんじん}、(曼都^{まん と}が「斥けられた仙人」と呼ばれていたのは)

謁帝^{てつてい}輕挙止^{けいこし}。(天帝に拝謁したものの軽率な振る舞いをして叱られたと嘘を言ったからだ)

学道^{がくどう}未有得^{むけうとく}、(道を学んで得るところがないくせに)

自欺^{じき}誰不爾^{たれふに}。(自身をも欺く駄法螺を並べた阿呆な連中であつたのだ)

稚川^{ちせん}亦隘人^{かつこう}、(稚川^{ちせん}葛洪^{かつこう})もまた了見の狭い人で)

疏録^{しよろく}此庸子^{このんこ}。(こうしたぼんくらどものことまでその著作に無駄に載せたのだった)

(いつの時代にも偽物はいた。蘇軾は、仙人を騙った代表者として古強^{こ きょう}、蔡誕^{さいたん}、曼都^{まん と}を『抱朴子』の中から挙げていて、葛洪^{かつこう}を批判している。現代のわれわれからしたら、仙術を得たと称する者は一人残らず「庸子^{このんこ}」だとしか思えないのだが)

其の十三(陶淵明)

巖巖^{いかに}頭朝市^{ちゆうてい}、(一國の大臣は巖巖^{いかに}朝廷^{てい})や市に頭^{まち}われでるのだから)

帝者慎用才。(帝たる者は慎しんで才あるものを用いなければならない)

何以廢共繇。(堯の時代に)何以して共(工)と繇が(不埒だとして)廢されたのかというと)

重華為之来。(重華(舜)が之を為けたの來った)

仲父献誠言、(仲父(管仲)は誠の言を献じたのだが)

姜公乃見猜。(姜公(桓公)には乃って猜わ見てしまった)

臨没告饑渴、((忠告を聞かなかった姜公は臣下に背かれて)没ぬ臨に饑と渴を告えたけれど)

当復何及哉。(当や復う何したって及いしないの哉った)

(最後は『山海経』から離れ、史実から題材を拾っている。先の2首に関連して、為政者は誰の言葉を信じるべきかということを歌っているようだ)

其の十三(蘇軾)

東坡信畸人、(東坡居士はまことに畸人である)

涉世真散材。(世(世)について(は)まったくの散材である)

仇池有歸路、(仇池に帰るべき路があることはかつて夢に見ている)

羅浮豈徒来。(羅浮山に來たのは何か理由があるのだろう)

踐蛇及茹蠱、(ここに来て蛇を踏んだり虫を茹でて食べたりしているが)

心空了無猜。(心は空で、ついに猜むようなことはない)

携手葛与陶、(葛洪と陶淵明と手を携えて)

歸哉復歸哉。(歸ろうではないか、歸ろうではないか……)

(1) 蘇軾は最後に自身のことを歌っている。(2) これら13首ずつの詩は、意味が汲

み取りにくく、現代のわれわれの関心をひくようなものではないのだが、2人にとって
は重要な関心事を歌ったものであるのだろう)

■偃松屏賛

地に偃^ふす松の姿を息子の蘇^そ過^かが描いて屏風を作り、蘇^そ軾^かがその賛を書いた。
序文だけを訳す。

私は中山^{ちゅうざん}(定州^{ていしゅう})の知事となって初めて北の山の松^{しょう}の膏^{こう}を(酒^{しゅ}にして)食べ、天下に
冠たるものであると知った。中山の松^{しょう}の木理^{もくめ}は堅密^{けんみつ}で、瘠^やせてはいても瘁^{くず}れては
いない。まことに植物の英烈である。

羅浮山^{らふざん}の下に謫居^{てつこ}し、この地は暖かく、松は多いが霜雪^{そうせつ}の厳しさを知らない。優
れた才能を持って裕福な家に生まれた貴人と、庶子として生まれた孤独な人とは
かなりの違いがあるようなものであろうか。士^{ひと}として憂患を経験するのは、むしろ
福ではないとはいえないのだ。

末の子の蘇^そ過^かは私に従って南に来て、寒さの中で松^{しょう}が偃^ふす画を描き、枕もとに置
く屏風を作った。

■十一月九日夜夢与人論神仙道術因作一詩八句即覺頗記其語録呈子由弟
後四句不甚明了今足成之耳

例によって夢に見たことを詠んだ詩。詩題は、「十一月九日夜、夢の中で

人と神仙の道術について論じ、一詩八句を作った。目が覚めてからもよくその語を記憶していたので、記して弟に示す。終わりの四句だけははっきりしないところがあったので、そこは足して完成させた」。

塵の妙なる性質を分析しても、本来、それは空^{くう}である。

さらに微かな陽^ひを一筋ずつ積み重ねて何になるのか。

一つの燈^{ともしび}が長く夜を耿耿^{きらきら}と照らしている。

門を閉ざして呼吸を続けると自然と充滿するものがある。

竈^{かまど}で丹藥^{たんやく}を焼いて火も煙もなくなると、

人間界に赤い銅が残る。

山の神に言おう、

人を眩惑する術をやめるがよい。

私は聞きもしなければ、見もしない、

そうすれば行き詰まることはないのだ。

(夢の中で神仙の道術について詠んだ詩であるから、意味はさっぱりわからない。弟には何か了解できるものがあったのだろう)

■章質夫送酒六壺書至而酒不達戲作小詩問之

この春に広州知事となった章^{こう}●(字は質夫、●は、次の下に呆という字)から、六壺の酒を送るとの手紙が来た。しかし、酒は届かなかった。それで

戯れにそのことを問い合わせたという詩。

酒を送るとの使いが来たとき、

どうえんめい
陶淵明は舞って喜んだ。

私も急いで部屋に風を入れて掃除し、

欠けた盃を洗って待ち構えた。

ところが、思いもかけないことに、

六人の「せいしゅうじゅう青州從事」(酒の名)が、

一人の「う ゆう烏有先生」(存在しないということを擬人化した名)に化けてしまった。

左の手に新しい蟹を持っていたのもむなしくなったからには、

東の垣根を巡って、落ちた花の香りでもかくしかない。

南海の知事である貴君は現代の「ほっかい北海」(後漢の賢人こうゆう孔融を指す)ともいべき人、

きっと春の畑を耕す私のために百樽の酒を贈ってくれることであろう。

(蘇軾の弟子のちん し どう陳師道のこう隨筆によると、広州知事は毎月六壺の酒を蘇軾に差し入れしていたのだが、あるとき使いの者がつまずいて割ってしまい、蘇軾がこの詩を作ったという。六壺を失った償いに百樽を贈るとなると、果たしてそれは何倍になるのだろうか)

■宝月大師塔銘

ほうげつだい し い かん
宝月大師惟簡が亡くなり、その骨を納めた塔に刻む銘文を作成するよう

蘇軾は依頼を受けた。い かん 惟簡はせい と 成都のしょうそういん 勝相院の僧。蘇軾と同郷のび ざん 眉山県の

出身で、同じ蘇姓の遠い親類である。詳しいことは第6章215ページなどで見ている。銘の序文の一部を訳す。

宝月大師ほうげつだいし惟簡い かんは、字は宗古あぎな そうこ、姓は蘇氏せい そ し、眉州眉山び びざん県の人である。私にとっては遠い親類せいと ちゅうわ しょうそういんえい ごだいしに当たる。九歳で成都の中和勝相院慧悟大師に仕え、十九歳で得度し、二十九歳で朝廷より紫の袈裟を賜り、三十六歳で宝月大師の号を賜った。…
…(以下、その事績を略述する)……

紹聖二年六月九日しょうせい、初めてわずかに病み、弟子たちに書状で仏法の大事について告げ、自身に関わることは何も語らなかった。二十二日に至って、弟子たちが集まって朝の挨拶たつ こくをして、辰の刻に及んで、
「吾は行く」

と、言って亡くなった。八十四歳であった。同じ月の二十六日に、成都の町の東の智福院ち ふくいん じふどうの寿塔に骨を納めた。……(以下、弟子、孫弟子の系譜を記す)……

師は若いころから蜀の人の張易簡しょう い かんと親しく、我が父とも深い知り合いであった。我が父はこのように言っていた。

「この人の才能、器量は唐代の澄観どうだい ちようかんにも匹敵するだろう。もし政事に当たるなら世の中に名を立てるし、僧になるならその右に出る者はいないだろう」

果たしてその通りになった。

私は惠州けいに謫居していたところ、(孫弟子の)舟実しゅうじつが来て銘を作るよう依頼された。

(1) 成都から法舟せいと ほうしゅう しゅうじつ ほうえい(舟実)、法栄の二僧が来て、銘文を作成するよう頼まれたのは、

ほうげっだい し

宝月大師が亡くなって約半年後のことであつた。後述するように、二僧が銘文を携えて

帰つたのは、翌年の 1 月中頃である。(2) 宝月大師が若い頃に親しくしていたという

ちやう い かん

ちやういんくんしょう ぐ

張 易簡 (原文は張 隱君 少 愚) は、蘇軾が 8 歳で入学した寺子屋の師匠である (第 1 章

38 ページ)

■小圃五詠

蘇軾は住まいの裏に小さな農地を持っていた。そこで育てている人参、地

おう

く こ

かんきく

よく い

黄、枸杞、甘菊、薏苡の五種の植物について詠んだ詩。いずれも漢方薬に

用いられるものである。

人参

じやうとう

りやうとう

人参の名産地といえば上党と遼東、

上党は天下の脊、遼東は井戸の底、

天下の脊には、天の酒が白い露となって注がれ、

こやし

井戸の底には、海の腋が泉より湧き出て、

はら

どちらからも靈妙な苗が孕まれ育まれ、

人の五体を備えたかのような形に成長する。

ら ふ ざん

その根を羅浮山のもとに移し、

南国の清冽な水を灌ぎかけた。

地が異なり、風雨を隔てても、

臭いや味はやはり引き継いだものがあって、
 青い葉から紫の萼が出て、紅い米を墮^おとすようにして円い実ができた。
 年の終わりに至っても生き生きとしていて、
 我が手で黄色い土を開いて掘り出した。
 人参は炙る必要もない優れた薬で、かりかりと根元まで噛み尽くす。
 かくて我が心は開かれて魂魄が定まり、憂いも悲^{いか}りも洗うまでもなくおさまる。
 身をつぶして我が生命^{たす}を輔^{たす}けてくれるのであるから、
 食べ終わったなら、重ねて人参に^{こうべ}首を垂れなければならない。
 ((1) 人参の特産地として上党^{じょうとう}と遼東^{りょうとう}を挙げている。上党^{たいこう}は太行山脈に位置するので
 「天下の脊」といい、遼東は山に囲まれた盆地状の地形なので「井戸の底」といってい
 るのである。上党の人参について詠んだ詩を第10章364ページで見ているので、恐ら
 く定州^{ていしゅう}で手に入れた人参を惠州^{けいしゅう}で栽培してみたのだろう)

地黄

白朮^{はくくつてん}天^{てん}が言うには、
 地黄^{じおう}を老いた馬に食わせると、
 人が眼を見張るほど馬の毛が輝くという。
 馬によいのなら、人の身に施したらどうなのだろうか。
 私はまさしく衰えた馬、
 意気消沈し、耳を垂れ、櫪^{かいばおけ}の前に伏せる。

地黄をよく肥えた農地に移植したところ、
新春の訪れと競争するかのように葉が茂ってきている。
若いいくつかの根から水に沈むものを選び取って、
釜に浮かべた器に入れて、薪で茹で上げる、
そこに東阿^{とうあ}に産する最上の膠^{にかわ}を加え、北海^{ほっかい}の良い酒をまぜる、
さらに、崖の上で採れる蜂蜜でひんやりとした甘さを足し、
山の生姜によって芳しい辛さを発するようにする、
全体が融け合わさると寒食^{かんしよく}のときに食べる飴のようになり、
飲み下すと「瑞露^{ずいろ}」(酒の名)のような珍味である。
かくて丹田^{たんでん}に自ずと火が宿るようになり、
渴いていた肺に再び潤いがよみがえるのである。
内に熱が籠る症状の人々に与えて、
胸の中の塵をさらりと洗い去ってやりたいものだ。

枸杞

枸杞^{くこ}は靈妙な薬でありながら、
自身を閉じ隠すことなく、
広がって山野に満ちている。
一日のうちでは、牛や羊に踏まれる心配をしなければならないし、
一年のうちでは、野火に焼かれてしまう災難がある。

南国には好事家がいらないのだろう、
枸杞は雑草と同じように見過ごされていて、
春には青い茎が伸びるのに任せ、
赤い珠のような実が熟しても摘む人がいない。
私は低い垣根で護って枸杞を新たに植えたところ、
筍のように節がぐいぐいと成長してきた。
枸杞は根も茎も花も実も棄ててしまうようなところはない。
大いに我が鬢の毛を黒くしてくれるだろうし、
少しばかりは我が客人にも与えよう。
しゅめいどう
朱明洞というところには、
千年の長生きをさせるものがあるらしいが、
夜も靈獣が吠えて守っているという。
仙人がもしも許してくれるのなら、
たす
我が衰えと病を扶けるために、
枸杞を杖にして探しに行きたいものだ。

甘菊

つねに春のような南国の山も初めて寒くなり、
霜を受けると、菊はいよいよよ好くなってくる。
朝に、ぷつぷつと小さな花が出て、

芳しい菊の時節がようやくきたと知れるのである

高い松の蔭でひっそりと根を伸ばし、

他の草から独りにここに秀でて現れるのである。

朝の光に照り輝いたかと思うと、

秋の雨に半ば碎き倒されてしまうこともある。

先生(蘇軾)は病に臥して出ることもなく、

落ち葉が紛々と散り積もってしまった中で、

酒や食べ物を送ってくれる人もなく、

空腹のあまり^{しゅほう}珠寶(菊の花)を食べてみた。

香る風が齒と頬から入り込んできて、

天の調べのような菊を讃える歌をうたいたいくなる。

寒さのなかにあっても根が枯れることはなく、

新しい芽が続々と充満してくる。

^{ひらひら}揚揚と蝶が香りを弄ぶような花を見るなら、

生死の境についてとやかく言う必要はなくなってくる。

^{かん せう}韓愈は、菊がよい季節に後れて花を開くのを残念がったのだが、

まったくおかしいことをいったものである。

(菊には、苦い菊と甘い菊があるという。甘い菊は食用になり、蘇軾は、食に乏しいとき菊の花を食べるという詩を時折詠んでいる)

薏苡

かんだい ぼ えん ぶりよう ご けい
 (漢代の)馬援將軍は武陵五溪に遠征したときに、

よく い めし
 薏苡(じゅずだま)を飯として食らうことで、

毒気を防いで、良好な精神を保とうとした。

薏苡は、溪谷に満ちる毒を除くことはできたが、

死後、讒言によって名声が傷つけられるのを防ぐことはできなかった。

それでも、讒言は風雨のように過ぎ去り、

熱病もしばらく後に谷から消え去ったのだった。

両者ともに治められないようなことではなく、

愛すべきは、草木が永続して成長するその力である。

草木にはそれぞれに良いところがあり、

とりわけ南の涯の地に珍しい産物が並び生じている。

あか ふくろ ライチ
 絳い囊が、荔枝の枝に懸かり、

こころう さ
 雪の粉が、桃榔の実を刮とこぼれ出る。

思いもよらないことに、

雑草のようなもののなかに薬にも食糧にもなるものがあつた。

ひし つ
 芡の実のような円い珠(薏苡)を臼で舂き、

炊くと米のようなよい香りがする。

と ほ とち こうせい
 杜甫は椶や栗を拾い、黄精の根を採って空腹をまぎらわしたという。

いま私は何者であるのか、

幸せすぎることに、

我が座敷には、薏苡^{ぎょく}の玉のような粒が照り輝いているのだ。

■雨後行菜圃

雨の後に野菜畑を巡り歩いて詠んだ詩。

夢から覚めて雨の音を聞く。

我が菜の葉が大きくなっているはず。

喜びを抱きつつ、夜明けに江^{かわ}の路に出る。

地面は湿り、岸に沿って櫓^ろを飛ばして行く舟がある。

天公^{てんこう}はまことに大福長者である、

乳^{あぶら}とも膏^{あぶら}ともいえる雨を黄色い土に注いでくれたのだ。

霜ふる冬にも根が勢いよくはびこり、

葉がもう風を受けてゆらゆらするくらいになっている。

箱に摘み取るのはまだまだ先なのに、

もう杯の横に並べることを想像する。

いま私は艱難の最中、

生計も行き詰まって、十分に口にできるようなものは一品もない。

ほんの少し摘まんで山の僧のように食べ、

清く安らであるのが真に賞味することであるとしている。

かいらん

芥藍はきのこのような味で、ほろほろと齒の間に響き、

はくしょう

白松は子豚に似た味で、土の中から熊の掌のように飛び出してくる。

これらを調理する火の加減を誰が見るのかというと、

小さな竈につきっきりで私が当たるのである。

こう

おか

(この詩は、黄州の東の坡で農地を耕していたころの詩(第6章152ページなど)とよく似ている。蘇軾の真骨頂であるのだろう)

■残臘独出二首

12月の終わりに独りで出歩いて詠んだ詩。ある日のスケッチである。

其の一

しずけさ

もとよりすべき事もなく、幽を尋ねる。

こころ

のびのび

独り往くと意は自ずから長としてきて、

ほうらくきょう

豊楽橋のあたりで魚でも釣ってみようか、

しょうとうどう

くこ

逍遙堂のあたりで杞でも采ってみようか……

るふざん

羅浮山では春が動きたそうとしていて、

雲にかかった日は清らかな光に満ちている。

どこどころ

処々で野の梅が開き、

どの家からも年の終わりに仕込む酒の香りがする。

さげんほう

路で、ひょっとして左元放(伝説の仙人)ではなかろうかと思う目の悪い道士に逢う。

語りかけようとしたものの、
やはり羊に化してしまうのではないかと恐れたのだった。

其の二

^{かわ}江べりにちょっとした細い道筋がある、
曲がりくねって街の背後に出ると、
春の草が茂り合^{へいこ}って平湖が広がる。
さらに歩^{せいぜんじ}いて棲禪寺に至ると、
堂のあたりはがらんとして誰もいない。
見ると、門を閉ざして老人と子供が眠っている。
人の営みというのは腹を満たすことにあるのだから、
食事がすんだなら、むしろ何かするほうがおかしいのだ。
寺に客が来れば何か得られるものがあると思っているだろうから、
諸君等にはいささか施しものをしてそこの掃除でもしてもらおうとしようか。
ここで静かでないのは風に吹かれる松だけで、
私を送り出す音楽を演奏してくれる。

(蘇^{けい}軾は惠州ですでに1年余りを過ごし、^{ほうらくきやう}豊楽橋、^{しやうようどう}逍遙堂、^{らふざん}羅浮山、^{へいこ}平湖、^{せいぜんじ}棲禪寺と
いったこの地の数々のランドマークともすっかり馴染みとなった)

■新年五首

しょうせい

紹聖3 (1069) 年、蘇軾 61 歳。

新たな年を惠州で迎えるのもこれで 2 度目。その思いを淡々と歌っている。

其の一

暁の雨——

じんじつ

人日(一月七日)は暗く始まる。

春の愁い——

じょうげん

上元(一月十五日)へと続く。

水が生まれる——

菜を摘む渚に。

霧が湿る——

梅の花の落ちる村で。

小さな市から人々はみな帰り、

一艘の舟の上で鶴がぴょんと跳ぶ。

この寂寞を慰めるかのように、

点々と漁火が黄昏時に光り出す。

其の二

北の渚で鷺の群が集まっている。

この新たな年はどこに行くのだろう。

高い木々のある寺へとみなが帰るのだ。

巢のある枝へと分かれて入り込む。

そうか、生きる物にはきつとなすべきことがあって、

その時節ごとに己の身のために謀るのだ。

願うのは、獵具を禁じ、

鷺が雪の衣をまとったような雛を連れろのを見ること……。

（「生物会有役、謀身各及時」^{せいぶつ かなら えき あ み はか おの とき およ}（生物 会 ず役有り、身を謀るに各おの時に及ぶ）の句は、
あたかも生態学の基本原理を見るかのようなものである）

其の三

海辺の地はとにかく暖かく、

春の山は限りなく気持ちがいい。

凍るべき溪にも熱を帯びた雨が注ぎ、

雪のような菌^{きのこ}が町の中でも生じる。

軽やかに雷が鳴るのを待って、

筍が先を争って伸び出す。

豊湖^{ほうこ}には藤菜^{とうさい}があって、

じゅんさい スープ

蓴菜の羹にも匹敵するほどに美味である。

其の四

浮き橋の向こうに小さな村があり、
石の岸辺の東に青い山が控えている。
水が出る前に麦はすっかり刈られ、
山を焼いた後に茶の芽が出てくる。
酒造の禁令がないので、
わが家でも「万戸の春」なる酒を作り、
三年目にしてこの翁の腕前が知られるようになった。
ここに茅屋を結んで、
年々の繰り返しが同じであるとわかるようになった。

其の五

ライチ
荔子はいつ熟するのか。
花の先がいま盛んに開いてきている。
夏にどの果樹園の実を買うべきか、
春のうちから樹を選んで論じている。
こじ
居士は客人を引き連れて、
しゅう
いつでも周さんの門を叩くことを許されている。

来年は荔枝の味わいも格別であろう、

懷に抱いて孫たちに食べさせてやるのだ。

(1) 蘇軾自身の注で、「周^{しゅう}さんの家には荔枝^{ライチ}がたくさんある」と記されている。(2)

このころ長男の蘇邁^{そまい}は都^{しゅう}に行つて就職運動をしていて、支援者の助力を得て、韶州^{しょうじん}仁化^{けい}県の知事になれる可能性が見えてきていた。仁化^{けい}県は惠州の北 200 キロ余りの地であるから、実現すれば孫たちに逢えるかもしれないということで、結びの句が詠まれているのである)

■記与舟師夜座

せい と ほうしゅう しゅうじつ
成都からきていた法舟（舟実）（本章 250 ページ）とのひとときを記した短文。

しょうせい せい と ほうしゅう
紹聖三年正月の初めの五日、成都の法舟と夜に部屋に座っていて、ひどく腹が減ってならなかった。家の者は鶏^{はらわた}の腸と野菜を煮た羹^{スープ}を作ってくれて、非常に旨かった。それから法舟と「不二の法^{ふじほう}」について議論した。法舟はそのことを書いてほしいと言った。しかし、それは書けるようなことではなく、たとえ書けなくはないとしても、書くための時間がない。

■題所書宝月塔銘

ほうしゅう しゅうじつ けい ほうげつだい し
法舟（舟実）が惠州に来ていたのは宝月大師の塔銘を蘇軾に書いてもら

うため、それはこのころに完成し、蘇軾は自ら筆を執って法舟に渡した。

私は『宝月塔銘』を作り、澄心堂の紙、鼠須の筆、李庭珪の墨を使って書いた。

全て一代の逸品である。法舟師は万里を遠しとせず、惠州にきて銘を求めた。

私はその意を無にはしなかった。

紹聖三年正月十二日、東坡老人書く。

(ここぞというときには紙も筆も墨も特に選んで書くことは本章 7 ページでも見ている)

■和陶詠二疏

陶淵明が「二疏」を詠んだ詩に和した。「二疏」とは漢の時代の疏広とその甥の疏受。2 人が高位に昇るとさっと辞めて帰郷したことは、みごとな身の引き際の手本であるとして、蘇軾も何度も賞賛していた(第5章2ページなど)。蘇軾がそもそも「二疏」を慕うようになったのは、陶淵明のこの詩を読んだのがその最初であったのではなかろうか。

(陶淵明)

大象転四時、(大なる象(自然)は四つの時(四季)にしたがって転じ)

功成者自去。(功を成した者は自ずから去るのである)

借問衰周来、(借と問うのだが、周が衰えて来(のち)

幾人得其趣。(幾人が其の趣を得ていたのだろうか)

遊目漢廷中、(目を漢の廷の中に遊ばせると)

二疏復此挙。(二疏復が此のことを挙たのだった)

高嘯返旧居、((二疏は)高らかに嘯きつつ旧の居に返ることにし)

長揖儲君傳。(儲君の傳であることに長の揖 たのである)

餞送傾皇朝、(餞送は皇朝を傾げておこなわれ)

華軒盈道路。(華やかな軒が道路に 盈 れた)

離別情所悲、(離別は(二疏にとっても)情に悲しむ所のものであったが)

余栄何足顧。(余なる栄などは何ら顧みるに足りないのだった)

事勝感行人、(この 事 の勝れていることには行きがかりの人までも感じり)

賢哉豈常誉。(「賢いこと哉」といったのは 常 の 誉 では豈してなかったのだ)

厭厭閭里歎、(厭厭と閭里でのくらしを歎しみ)

所嘗非近務。(嘗む所のものは近に 務 とは非っていた)

促席延故老、(席を促けて故老を延き)

揮觴道平素。(觴を揮って平素を道りあった)

問金終寄心、((故老たちが)金について問うたのは終つと(二疏に)心を寄せるからなのだから)

清言曉未悟。(二疏は) 清 しい言で(故老たちが)未だ悟っていないのを曉したのだった)

放意樂余年、(つまり、意を放にさせて余りの年を樂しむのであって)

違恤身後慮。(身後の慮まで恤いたりする違はないのだ、と)

誰云其人亡、(誰は云うであらう、其の人はもう亡い、と。しかし、)

久而道弥著。^{なが}（久くたつに而て、^{つれ}道^{みち}（正しい理）は^{ことわり}弥^{いよ}い^{あきら}著かになっているのだ）

（蘇軾）

二疏事漢時、^に（二疏は漢の朝廷に仕えていたときから）

跡寓心已去。（身は世間の中に置きつつも、心はすでに世の外に去っていた）

許侯何足道、^{きよはく}（許伯が（自身の弟を皇太子の補佐役に推薦したのは）全くもって話にもならず）

寧識此高趣。（二疏の気高さを到底知ることなどできなかったのだ）

可憐魏丞相、（いくらかましかったのは宰相だった魏相で（許伯の先の推薦を疏広が退けたと聞くと）

免冠謝陋挙。（愚かしい申し出をした者があったことを、冠を脱いで皇帝に詫びたのだった）

中興多名臣、（あたかもそれは漢朝の中興のときで、名臣が多いたのだが）

有道獨兩傳。^{みち}（まことの道^{ことわり}（正しい理）があったのは二疏だけであった）

世途方轂擊、^{みち}（世間の途は車がぶつかり合うように錯雑としていて）

誰肯行此路。^{みち}（あえて二疏のような路を行こうとする者はいない）

是身如委蛻、^{ぬけがら}（人の身は蛻をこの世に委ねているようなもので）

未蛻何所顧。^{ぬけがら}（それから脱け出る前も蛻などは顧みるまでもなく）

已蛻則兩忘、^{ぬけがら}（脱け出しまえば、この世のことも蛻も忘れてしまうのであって）

身後誰毀譽。（死んだ後で、誰かが褒めようが誇ろうどうでもよいのだ）

所以遺子孫、（子孫に遺すべきものはといえば）

買田豈先務。（田を買うのは、決して先に選ぶようなことではない）

我嘗遊東海、（私はかつて東の海のほりを旅し）

所歴若有素。(通りすがりながらも二疏とはもとのからの所縁があったように感じた)

神交久従君、(神の交わりを二疏と長く結び)

屢夢今乃悟。(しばしば夢にまで見たけれど、いまこそわかったことがある)

淵明作詩意、(陶淵明がこの詩を作った意は)

妙想非俗慮。(俗人の思慮の及ばない優れた考えてあったのだ)

庶幾二大夫、(少しでも二疏に近づきたいと願う)

見微而知著。(微かなところ見て、真に明らかなことを知るべきである)

(「東の海のほとりを旅し」とあるのは、第5章2ページ以下で見ている)

■和陶詠三良

「三良」を詠んだ陶淵明の詩に和した。「三良」とは、春秋時代の秦の穆公に仕えた三兄弟で、「秦の良れたもの」といわれた。穆公が死ぬと三兄弟は遺命に従って殉死し、人々はそれを悲しんで『黄鳥の賦』を作った。

(孔子以来、殉死は悪しき行為であるとみるのが儒学の伝統であり、陶淵明も蘇軾もそのような考えで詩を詠んでいて、蘇軾は陶淵明よりもさらに強く殉死を否定している)

(陶淵明)

彈冠乘通津、((三良が)冠を弾いて(出仕したことをいう)、通津に乗と)

但懼時我遺。(但ただ懼れたのは時のながれに我が遺されないかということであった)

服勤尽歲月、(勤めに服して歳月を尽し)

常恐功愈微。(常に恐れたは功が愈も微でしかないことだった)

忠情謬獲露、(忠の情によって 謬 も露られることを獲て)

遂為君所私。(遂に君によって私にたいせつにされる所と為ったのだった)

出則陪文興、(そとに出るときには則も(穆公の乗る)文れた興に 陪 い)

入必侍丹帷。(なかに入るときには必ず(穆公のいる)丹い帷のもとに侍った)

箴規嚮已従、(箴 規は嚮ように已に従われ)

計議初無欠。(計議は初めから欠けたところが無かった)

一朝長逝後、(一朝、(穆公が)長に逝ってしまった後で)

願言同此歸。(三良は願って言に同じ 此 歸とした)

厚恩固難忘、((穆公の)厚い恩は固より忘れ難く)

君命安可違。(殉死せよとの君命には安って違(ことは可ないのだった)

臨穴罔惟疑、((三人の墓となる)穴に臨んで惟に疑うことは罔かったし)

投義志攸希。(義にわがみを投じるのは志に希う攸であった)

荊棘籠高墳、(荊棘が(三良の)高い墳を籠い)

黃鳥声正悲。(三良の死を悼む)黃鳥の声は正に悲しい)

良人不可贖、(良人のいのちは 贖 ことは可きいのだ)

泫然沾我衣。(泫然となみだがおちて我の衣を沾らすのである)

(蘇軾)

此生太山重、(この命は太山よりも重いものであるのに)

忽作鴻毛遺。(たちまち鳥の羽毛よりも軽いものとされてしまった)

三子死一言、さんりょう ぼくこう(三良は穆公のたった一言のために死んだのであって)

所死良已微。(死ななければならなかった理由はごく小さかったのだ)

賢哉晏平仲、あんえい(晏嬰こそは賢者であって)

事君不以私。(私情によって主君に仕えることはなかった)

我豈犬馬哉、(「わたしは犬や馬ではない)

従君求蓋帷。とばし(主君の車や帷の近くにいることを求めはしない)

殺身固有道、(我が身を殺すにしてももとより道みちに従うのであって)

大節要不欠。(大きな節義を欠かしてはならないのだ)

君為社稷死、(主君が国ために死ぬのなら)

我則同其歸。(私も一緒に死ぬであらう)

顧命有治乱、(遺命を顧みて、国を治めるものと乱ずものがあるのなら)

臣子得従違。(臣下としては従うこともあれば、背くことだってある)

魏顆真孝愛、ぎ か(魏顆はまことに孝である愛のある人であった)

三良安足希。(三良が及ぶところの者ではない)

仕宦豈不榮、しかい(仕官は榮とすべきものなのであらうけれど)

有時纏憂悲。(憂いや悲しみがまわりついてくる)

所以靖節翁、とうえんめい(だから陶淵明は)

服此黔婁衣。けんろう(黔婁のようにつんつるてんの衣を着て生きることにしたのだ)

(1) 蘇軾は、春秋時代の晏嬰と魏顆の故事を引いて「三良」と比べている。晏嬰の

信念は詩中にそのまま引かれている。魏顥は、父が死んだ後に、当時の慣習に反してその妾を殉死させることなく他家に嫁がせた。その後、魏顥が戦場に出ると、妾の父の霊が現われて魏顥の命を救い、大きな手柄を立てることができた。(2) 黔婁は陶淵明が賞賛する隠者である (本章 201 ページ)

■和陶詠荊軻

荊軻について詠んだ陶淵明の詩に和した。荊軻は中国史上最も有名な刺客。詳しい事績は陶淵明の詩に詠まれている。

(陶淵明)

燕丹善養士、(燕の国の子である)丹は善く士を養っていた)

志在報強嬴。(その志は強い(秦の国の)嬴(王=後の始皇帝)に報いることに在った)

招集百夫良、(百夫の良を招き集め)

歳暮得荊卿。(歳の暮に荊卿(荊軻)を得た)

君子死知己、(君子は己を知るもののために死ぬのだと)

提劍出燕京。(荊軻は劍を提て燕の京を出ることになった)

素驥鳴広陌、(素い驥が広い陌で鳴き)

慷慨送我行。(慷慨って私の行を送った)

雄髮指危冠、((荊軻の)雄った髪は危い冠を指しつらぬき)

猛氣衝長纓。(猛しい気によって(冠を結ぶ)長い纓は衝かれたのだった)

飲饒易水上、(易水えきすいの上で 饒はなむけ (の酒)を飲み)

四座列群英。(四座まんざには 群英たぐさのりっぱひと が列ならんだ)

漸離擊悲筑、((荊軻の親友の)漸離ぜんりが悲かなしげに筑ちく (楽器)を撃うつ)

宋意唱高声。(勇士そういである)宋意たかが高こえらかな声うたで唱うたった)

蕭蕭哀風逝、(蕭蕭ざわざわと哀かなしい風かぜが逝ふき)

淡淡寒波生。(淡淡ゆらゆらと寒つめたい波なみが生しょうじた)

商音更流涕、(商しょう (音階の一つ)の音おとに(客人は)更それそれに涕なみだを流ながし)

羽奏壯士驚。(羽う (音階の一つ)の奏しんべに壯士そうし (=荊軻)は驚めをいから せた)

心知去不歸、((荊軻は)心こころには去ゆけば歸かえることが不ないと知しっていて)

且有後世名。(且それでも後のちの世よに名なを有のこすとおもっていた)

登車何時顧、(車くるまに登のぼった(荊軻は)何時いつまでも顧かえりみることなく)

飛蓋入秦庭。(蓋くるまのやねを飛とばすようしんにして秦りやうちの庭はいに入った)

凌厲越万里、(凌厲はげしいきつで万ばん里りを越こえ)

逶迤過千城。(逶迤うねうねと千せんの城まちを過どおりすぎた)

図窮事自至、((荊軻が差し出した)図ずが窮きわまったところで(暗殺の)事ことが自ついに 至クライマックス となり)

豪主正怔忡。(豪だけだけししい(秦の)主おうも正まじに怔おそれて宮あわてたのだった)

惜哉劍術疏、(惜おしい哉かな (荊軻の)劍術けんじゆつが疏へぼだったために)

奇功遂不成。(奇めづらしい功ミッションも遂ついに成なしとげられ不なかったのだった)

其人雖已没、(其その人は已ひとう没もんでしまっただしれども)

千載有余情。(千載せんねんたっても有あり余あまる情じやうがつたわっているのである)

（陶淵明は穏やかな暮らしを得ようと退隱したのだが、その一方で、荊軻のように「^{とうえんめい}猛志」^し（本章241ページ）を抱く人物を慕う激しいところもあった）

（蘇軾）

秦如馬後牛、（^{とうしん}東昏の^{げんてい}元帝は帝室の^し司馬氏の子ではなくて父親は^{ぎゅう}牛氏であったように）

呂氏非復嬴、（^{しん}秦の始皇帝も王室の^{えい}嬴氏の子ではなく父親は^{りょ}呂氏であった）

天欲厚其毒、（天は秦の害毒をよりひどいものにしようとしたのか）

佞手李客卿、（^{りし}李斯の手を借りて秦の天下統一を成し遂げさせ）

功成志自満、（功が成って志が満ちたときに）

積惡如陵京、（^{しん}積み積んだ悪が岡のように巨大になった）

減身会有時、（身を減らすには必ずその時がある）

徐觀可安行、（じっくり観るならしずしずとそこへと進んでいくことがわかる）

沙丘一狼狽、（^{さきゅう}沙丘で始皇帝が死ぬと近臣はあわてふためき）

笑落冠与纓、（それは知者が冠を落として大笑いするほどのものであった）

太子不少忍、（^{えん}燕の太子はそうなるまで辛抱することができなかったのである）

顧非万人英、（つまりは万人のなかで特に傑出した人物ではなかったのだ）

魏韓裂智伯、（かつて^{ぎかんし}魏桓子と^{かんこうし}韓康子が横暴を極めた^{ちやうじやうし}趙襄子を滅ぼしたときには）

肘足本無声、（声を出さずに肘と足で合図したのだった）

胡為棄成謀、（どうして燕の太子は成算のある計画を立てずに）

托国此狂生、（一国の運命を荊軻のような愚か者に託してしまったのか）

荊軻不足説、(荊軻は言うに足りない人物であったが)

田子老可驚。(荊軻を推薦した田光が老いぼれてしまったのはただ驚くばかりである)

燕趙多奇士、(燕には優れた人物が多いといわれていたが)

惜哉亦虚名。(惜しいことに誰もが虚名にすぎなかったのだ)

殺父囚其母、(始皇帝は本当の父を殺し、母を閉じ込めたのであるから)

此豈容天庭。(天の朝廷においては赦されるような者ではなかった)

亡秦只三戸、(楚には三戸となっても秦を滅ぼすとの意志があった)

況我数十城。(まして燕には数十もの町があったではないか)

漸離雖不傷、(荊軻を見送った)高漸離は遺志を継いで始皇帝を襲った)

陞戟加周營。(傷つけるには至らなかったが、始皇帝はあわてて警護の兵を増やした)

至今天下人、(今に至るも天下の人々は)

愍燕欲其成。(燕が成功すればよかったのにと残念に思っている)

廢書一太息、(私は書物を置いて大きく嘆息する)

可見千古情。(千年来の人の情はここに見ることができるのだ)

(蘇軾は、燕の太子には時代の流れを見る洞察力がなく、刺客を派遣したのは短慮であって、しかも荊軻は大した人物ではなかったと、陶淵明とはかなり異なる見方をしている。ただし、荊軻の遺志を継いで始皇帝を撃とうとした高漸離のことは高く評価し、始皇帝の暗殺に失敗したのを残念がるのは千古に変わることのない人情であるとしている)

■二月八日与黄燾僧曇穎過逍遙堂何道士宗一問疾

詩題は、「二月八日、黄燾^{こうとう}、僧の曇穎^{どんえい}とともに逍遙堂^{しょうようどう}を過り、道士の何宗一^{か そういち}の疾^{いぢ}を問うた」。黄燾は惠州の役人、曇穎と何宗一の名はすでに本章110 ページで、逍遙堂は本章215、258 ページで見ている。

何宗一は心を安らかにして、玄牝^{げんぴん}(鼻と口)を守り、

眼を閉じて、黄庭^{こうてい}(靈妙な氣)を求めている。

疾^{やまい}を問うために三人がきて、

瓶^{びん}に半分の酒を愁^そいへと澆^{しやう}くことにした。

風に揺れる松から時に蕊^{しべ}が落ち、

病んだ鶴^{くしやう}(何宗一)は翼を梳^{くし}ることもできずにいる。

酒がなくなって我らが帰ろうとすると、

山の月が何宗一の醒めた顔を照らし出した。

(このころに従兄の程之才^{てい し さい}は嶺南^{れいなん}の地を去ったようである)

■書柳子厚南澗詩

柳宗元^{りゅうそうげん} (字は子厚^{あざな し こう}) の「南澗中^{なんかんちゆう}に題す」(南の谷川で詠む) という詩を書いて、短文を添えた。柳宗元の詩は永州に流されていた40歳のときの作品。

秋氣集南澗、(秋の氣が南の谷川に集まっている)

独遊亭午時。(独りそこを行くこの真昼時)

廻風一蕭索、(つむじ風は何とも寂しく)

林影久参差。(林の影がいつまでも動いている)

始至若有得、(ここには初めて来たのに、何か得るものがあるような気がする)

稍深遂忘疲。(少し深く入って、疲れを忘れる)

羈禽響幽谷、(奥深い谷から一羽はぐれた鳥の音が響く)

寒藻舞淪漪。(さざ波の中で藻が冷え冷えと舞っている)

去国魂已遊、(都を去って、魂はすでに遊離してしまったのだが)

懷人淚空垂。(友人を思うと涙が勝手に垂れてくる)

孤生易為惑、(孤独で生きると感じやすくなるのだろう)

末路少所宜。(路を失ってからはいいことはほとんどない)

寂寞竟何事、(がっかりとしてもはや何をしたらよいのか)

遲回只自知。(おろおろしているこの私を知るのは私だけ)

誰歟後來者、(誰か後にここに来る人が)

当与此心期。(私のこの心と出会ってくれるであろうか)

リゅうそうげん

柳宗元が南に遷されてから後の詩は、曲がりくねりつつ清らかにして勁いことは、
おおむねこの詩のようである。

しょうせい

紹聖三年三月六日。

リゅうそうげん

(政争によって都から遠く離れた南の地に流されたことでは柳宗元と蘇軾は似るが、
柳宗元は独りで南に川に行くのに対して、蘇軾は様々な人と連れ立って歩むのである)

■服黄連法

解毒作用があつて皮膚病に効く黄連^{おうれん}という薬草についての話。

丙子^{へい し}（紹聖三年）の寒食^{しょうせい}の日、宝積寺^{かんしょく}の長老^{ほうしゃくじ}の曇穎^{どんえい}がこのようなことを話してくれた。

「惠州^{けい}の澄海^{ちやうかい}十五指揮使^{じゅうご し き し}の姚欽^{どうかん}は阜民監^{ふ みんかん}の守備^{しゅへい}に当たっていました。それは熙寧^き年間のことでした。そのとき惠州知事^{ねい}の趙照明^{ちやう き めい}および巡検使^{じゆんけん し}の申氏^{しん}と、阜民監の長官^{ゆ い}である俞懿^いとは仲が悪く、州の役人と阜民監の人間は争ってばかりいました。ついには、阜民監の連中が反乱を起こしたと告げる者がありましたので、知事の趙照明は役場の門を閉ざし、巡検使の申氏は兵を率いて阜民監の連中を討伐しようしました。姚欽は阜民監の門の前に立ちはだかり、巡検使に向かって、『阜民監の者は反乱を起こしていません。戦うのはやめてください』と、言いました。その勢いに、巡検使は兵を鎮め、攻撃するのを止めました。もしも姚欽がいなかったならば、惠州は大変なことになっていたのです。いま姚欽は八十歳を超え、南安軍^{なんあんぐん}での功績をもって雄略指揮使^{ゆうりやく し}となって、広州^{こう}で老いの日々を送っています。頭髮も髯もいもって真黒です。姚欽はこうに言っています。『六十歳で癬疥^{せんかい}を患い、踵^{かかと}から頭^{かう}のてっぺんまで覆われてしまいましたが、ある人が黄連^{おうれん}を服用することを教えてくれまして、それですぐに治りました。それからずっと黄連を服し続けたところ、頭髮は白くならなくなりました。黄連は実を取り除いて、酒に一晩漬け、炙って粉末

にし、蜜でもって桐の実ぐらいの大きさに丸めます。中は空洞です。午後、臥せる前に、酒とともに二十丸飲むのです』と」

ほうしゃく じ どんえい

(宝積寺の曇穎の名は先の「二月八日」の詩で見たばかりである)

■次韻高要令劉湜峽山寺見寄

けい こうよう りゅうしよく きょうざん じ
惠州から西に 200 キロほどの高要県の知事の劉湜が峽山寺に遊んだ詩を寄せてきたので、それに次韻した。蘇軾が先に峽山寺を訪れていたことは本章 66 ページで見ている。

(この詩はかなり難解で、いつも以上の「ずっぱ訳」である)

新たにすばらしいと思えることはなかなか聞けない。

ふる たば
旧く学んだことは束ねてしまったままになっている。

このありさまでは、できることといったら、

昔の季主のように古い師にでもなって世間から隠れることくらいで、

か梅福のように仙人になって世の中から逃れるなどはとても無理だ。

はらわた
空っぽの腸が吐き出すつまらない思いを、

かいに
蚕の糸のように静かに引き出しているだけなのだ。

たん でん き
丹田に気が結集し、心の内の雑草を刈り尽くせるのなら、

ろくしょう
銅が緑青をふくような完成した状態へと向かって、老熟するようになるのだろう。

ぎよく
つまらない人間は、玉があればとにかく服して寿命を延ばそうとする。

^{みち}道に通じた人は、金^いを鑄ても財を得ようなどとはこれっぽっちも考えない。

いわば、天下に名高い山岳もちつぽけなものだとみなして、

我が箆笥のうちに納めておけばよいとする境地にあるのだ。

私はかつて羅浮山^{らふざん}の頂^{しゅめいこく}によじ登り、朱明谷の底にも至った。

眼^{めくら}を旋せると、それらが何だかただの土の塊のように思えた。

それで、おんぼろの家に帰って呑気に寝転ぶことにしたのだった。

友人たちには老いてなお官に仕える者もいるが、

私は、世間とのつながりはごく薄いものとなった。

南国の女性に微笑まれてそのままここに居つき、

辺境の地を流れる川で水浴びをして過ごすのも悪くはないだろう。

そのような心持ちでいると、

思いかげず手紙が届き、新しい詩を喜んで頂戴した。

貴君は残念に思っていてくれる——

私がかつては八州の知事を歴任していながら、

いまは嶺南^{れいなん}の旅人となっていることを、

そして、骨をとかされるほどの讒言にさらされ、

肝も破れるほどの獄吏の酷い扱いを受けたことを。

遠く山にかかる雲は招き寄せることはできないが、

^{かわ}江に射す月の光はどこででも掬い取ることができる。

^{せいえんきょう}清遠峽の寺は遥かな山の中、

驢馬の足も砕かれてしまうほどに険しく、
仰ぎ看ると、滝は我が腰へと注ぎ落ちるばかり、
俯して聴くと、石を打って激しく響く。
千の峰から水が走り出て、
雷のような激流に言葉を失い、稲光のように目にも止まらぬ速さ。
ここにひとたび入ると、人はもう帰ってくることができない。
山の僧がいつも飢えているのは、
とかく食べ物のない中で坐しているからだ。
人間世界にはつまるところ北も南もなく、
かたつむり 蝸 が角と出したり縮めたりしているだけのこと。
仙界の仇池きゅうちには九十九の泉があり、
人間界の嵩山そうざんには三十六の峰がある。
仙界も人間界も同じく一つの夢、
仙人も凡人も区別するところはないのだろう。
辺境の地であっても老いの日々を送るにはよく、
生きるに必要なものはほぼ足りている。
この地の熱気は天をも焦がす焰のようであるが、
それを海を照らす灯火に変えるよう努めたいものだ。

■和陶移居二首

とうえんめい すまい
陶淵明の「居を移す」という詩に和した。蘇軾の作には序文がある。陶淵明の詩は 44 歳のときに火事にあつて南の村に引っ越したときのことを 3 年ほど経ってから詠んだものだという。

序(蘇軾)

私は去年の三月に、川の東の嘉祐寺から合江楼に居を遷した。それから一年になり、病がちで飲びが少なく、川の東の楽しみを強く懷っていたところ、帰善県に数畝の空き地を得た。老人たちがここに昔は白鶴観があったというので、心に欣びが湧き、ここに住むことに決めた。そこで陶淵明の詩に和した。

其一(陶淵明)

昔欲居南村、(昔、南の村に居もうと欲たのは)
非為ト其宅。(其に宅をつくるのがよいとのトをした為では非った)
聞多素心人、(素とした心の人が多いと聞いて)
樂与数晨夕。(数しば晨も夕も与にいようと樂ったからであつた)
懷此頗有年、(此のように懷ううちに頗る年が有ち)
今日從茲役。(今日になつて茲の役(引っ越し)に從うことになった)
敝廬何必広、(敝廬というものは何も必ずしも広なくてよいのであつて)
取足蔽床席。(床と席を蔽うに足であればよいと取るものだ)

隣曲時時来、となりきんにょ ししば き(隣曲のひとつが時時来てくれて)

抗言談在昔。あつ かた そのむかし はなし(抗言するのは在昔の談だ)

奇文共欣賞、すぐ ぶん とも よろこ あじ(奇れた文を共に欣んで賞わい)

疑義相与析。いみ うたが いっしょ しら(義に疑いがあるときには相与に析べるのである)

其一(蘇軾)

昔我初来时、けい(昔、私が惠州に來たばかりのときは)

水東有幽宅。(川の東に静かな住まいがあった)

晨与烏鵲朝、かきさき(夜明けには烏や鵲といっしょに起き)

暮与牛羊夕。(日暮れには牛や羊といっしょに帰った)

誰令遷近市、(誰が町中に近いところに移動させたのか)

日有造請役。(日々に応接の煩わしさがあるようになった)

歌呼雜閭巷、(歌ったり呼んだりする声が路地の奥にまで行き交い)

鼓角鳴枕席。つのはこ(太鼓やら角やらが枕もとで鳴ったりもする)

出門無所詣、(門を出ても尋ねるによいところがなく)

樂事非宿昔。(前のような楽しみはまったくなくなってしまった)

病瘦独弥年、(病んで瘦せ衰えて独り年を越して)

束薪与誰析。(薪を束ねるような仕事をいっしょにする者もないのである)

(蘇軾のこの詩は、ごうこうろう合江楼での日々が満足のゆくものではなかったと歌っている)

其二(陶淵明)

春秋多佳日、(春と秋には佳^{はる あき}い日が多いから)

登高賦新詩。(高^{たか}に登^{のぼ}って新^{あた}しい詩^しを賦^ふしたりする)

過門更相呼、(門を過^{もん}ぎるときには更^よいに呼^{たが}び相^{よ あ}って)

有酒斟酌之。(酒^{さけ}が有^あれば之^{それ}を斟^{やっ}酌^{たり}する)

農務各自歸、(農務^{のらしごと}のときは各^{おの}の自^{じぶん}のところに歸^{かえ}っているのだが)

閑暇輒相思。(閑暇^{ひ ま}がてきると輒^{すぐ}に相^あを思^{おも}い)

相思則披衣、(相^あを思^{おも}うと則^{さっそ}に衣^{ころも}を披^ひけてでかけ)

言笑無厭時。(言^いったり笑^{わら}ったり、厭^あさる時^{とき}が無^ない)

此理將不勝、(此^{ここ}にある理^{ことわり}は將^{きつ}と勝^{すぐ}れて不^いな^{ない}ということはないだろう)

無為忽去茲。(忽^{かるが}く茲^{ここ}から去^さるよう^しな^なことを為^なてはなら無^ないのだ)

衣食当須紀、(衣^い食^{しょく}は当^{あたり}に須^まと紀^きものであって)

力耕不吾欺。(力^{はげ}んで^{はた}らく^{らく}わ^わたし^しあ^あざむ^むし^しない^{ない})

(引^ひつ越^こした後の充^{ちゅう}実^{じつ}した日^{にち}々^々を陶^{とう}淵^{えん}明^{めい}は歌^{うた}っている。その根^{こん}底^{てい}には、自^じ身^{しん}の働^りき(力^{りき}耕^{こう})によって衣^い食^{しょく}を得^えることがあると、最後^{さいご}の句^くで言^いっている)

其二(蘇軾)

回潭轉碕岸、(突^ふき出^でている岸^{かし}辺^べを、潭^{たん}で生^はじた渦^{うず}卷^まきが巡^{めぐ}る)

我作江郊詩。(そのおもしろさに私^{こころ}は「江^{かう}郊^{こう}の詩^し」を作^{つく}った)

今為一塵氓、(いま私^{すまい}は一つ^{ひとつ}の塵^{ちん}を持^もつ民^{たみ}になろうとしている)

此邦乃得之。(この邦^{くに}にいるからこそこのようにもできるのだ)

葺為無邪齋、(屋根を葺^むいて「無邪齋^{じゃさい}」と名付けよう)

思我無所思。(私には思うところがないといえるようになりたいと思うからだ)

古観廃已久、(古い道教の寺院はずっと前に廃墟になり)

白鶴鶴何時。(そこにいたであろう白い鶴はいつ帰ってくるのやら)

我豈丁令威、(私はかの丁令威^{ていれい い}ではないけれど)

千歳復還茲。(千年の後にまたここに帰ってくるであろうか)

江山朝福地、(この江山^{ふくち}からなら福地(仙境)の朝に詣でることができるであろう)

古人不吾欺。(古^{いにしえ}の人(葛洪^{かつこう}をいうのであろう)は私を欺きはしないのだ)

(蘇軾のこの詩は新しい住まいへの期待を詠んでいる。(1)「江郊^{こうこう}の詩」は本章 101 ページで見ている。(2) 蘇軾が自分の書齋を「思無邪齋^{しむじゃさい}」と名付けたことは 87 ページで見ているが、新しい住まいでも同じ名を用いることにしたのであろう。(3) 丁令威^{ていれい い}は伝説の仙人。鶴にまたがって現世を去り、千年後にまた戻ってきた。(4) 陶淵明^{とうえんめい}の詩は、新しい住まいでの近隣の人々との交流を詠んですこぶる現実的かつ庶民的であるが、蘇軾は孤り仙界へと飛翔しようとしている)

■和陶桃花源

川を遡って奥へ奥へと行くとそこに人知れぬ別世界がある——これは、古今東西誰しもが空想することであろう。陶淵明^{とうえんめい}は、そうした空想をすこぶる普遍的な形で文学作品に昇華させてみせた。それ以来、誰もが陶淵明

の描いたユートピア＝桃花源^{とうかいげん}に憧憬を抱くようになった。蘇軾は桃花源を詠んだ陶淵明の詩に和するとともに、陶淵明の記した『桃花源の記』に準じた序文を添えた。

桃花源記(陶淵明)

晋太元中、武陵人捕魚為業。緣溪行、忘路之遠近。忽逢桃花林、夾岸數百步、中無雜樹、芳華鮮美、落英繽紛。漁人甚異之。復前行、欲窮其林。

林盡水源、便得一山、有小口、髣髴若有光。便捨船、從口入。初極狹、纔通人。復行數十步、豁然開朗。土地平曠、屋舍儼然。有良田美池桑竹之屬。阡陌交通、雞犬相聞。其中往來種作、男女衣著、悉如外人。黃髮垂髫、並怡然自樂。

見漁人、乃大驚、問所從來。具答之。便要還家、為設酒殺雞作食。村中聞有此人、咸來問訊。自云先世避秦時亂、率妻子邑人來此絕境、不復出焉、遂與外人間隔。問今是何世、乃不知有漢、無論魏晉。此人一一為具言所聞、皆歎惋。余人各復延至其家、皆出酒食。停數日、辞去。此中人語云、「不足為外人道也。」

既出、得其船、便扶向路、處處誌之。及郡下、詣太守、說如此。太守即遣人隨其往、尋向所誌、遂迷、不復得路。

南陽劉子驥、高尚士也。聞之、欣然規往。未果、尋病終。後遂無問津者。

(晋の太元 中 (陶淵明より数十年前)のこと、武陵の人で魚を捕えることを業と為るものかいて、溪

そ ゆ みちの とお ちか わす たちま もも はな はやし あ さし はき すうひやく
に縁って行くうちに、路之遠い近いも忘れてしまった。忽ち桃の花の林に逢った。岸を夾んで数百
は なか き ま な かぐわ はな あざ うつく はなびら
歩にわたって、その中に(桃ではない)樹が雑じることは無かった。芳しい華が鮮やかに美しく、英
ひらひら お さかなどり ひと はだ これ ふしぎ ま まえ すす そ はやし きわ
が繽紛と落ちるのであった。漁の人は甚はだ之を異におもい、復た前に行んで、其の林を窮め
し
ようと欲た。

はやし みず みなもと つ そこ ひと やま あ ちい くら あ ほのか ひかり あ よう
林は水の源で尽き、便に一つの山が得り、小さな口が有って、髣髴に光が有るかの若であつ
た。便で船を捨て、口從り入った。初めは極めて狭く、纔に人を通すだけであつた。復た行くこと数
じゅうほ から ひら あか とち たい ひろ たてもの りっぱ よ た うつく
十歩で、豁然と開けて明るくなった。土地は平らで曠く、屋舎は儼然であつた。良い田や美しい
いけ くわ たけの たけい あ みち みち まじ つう にわとり いぬ こも き そ なか
池や、桑や竹之属も有って、阡と陌とが交わり通し、鶏や犬のこえが相ごも聞こえた。其の中を
おうらい う つく だんじょ き こも ことごとよそのに ひと よう ろうじん
(人が)往来し、(作物を)種えて作り、男女の著ている衣は、悉く外の人の如であつた。黄髪も
こども なら うれしげ おのずか たの
垂髫も並んで怡然で自ら楽しんでいるのだつた。

さかなどり ひと み すぐ おお おどろ よ き どころ たず くわ それ こた
(その人々は)漁の人を見て、乃に大いに驚き、従つて来た所を問ねたので、具しく之に答えた。
そし むか いえ かえ ため さげ もう とり ころ しじ つく ぐら なか
便て、要えて(その人々の)家に還り、このひとの為に酒を設け鶏を殺して食を作った。村の中の
こ ひと い き みな き ど たず みずか い さき よ しん
(人々は)此の人が有ると聞いて、咸が来て問い訊ねた。(人々が)自ら云うには、「先の世に秦の
とき みだ さ さいし ぐら ひと ひき こ た せかい き また で
時の乱れを避け、妻子や邑の人を率いて此の(世間との関りの)絶えた境に来て、復た出ることは
なく でし つい そと ひとと あいだ ひら いま なん よ あ
なかったの焉た。遂には外の人とは間が隔いたのです」と。また、「今は何の世で是りますか」と
と つま かん あ し な ぐらん ぎ しん こ ひと ひと ひと
問い、乃りは漢の有ることを知らないし、無論のこと魏や晋はしらないのだつた。此の人は一つ一
ため くわし き こど い みな おどろきなげ ほか ひと それ ま まね そ
つその為に具く聞かれた所を言つて、皆が歎惋いたのだつた。余の人も各それに復た延いて其
いえ つれてい みな さげ しじ だ とど すうじつ わか き ここ なか ひと つ い
の家に至き、皆が酒や食を出した。停まること数日、辞れて去った。此の中の人々が語つて云
そと ひと ため い ほど な です
うには、「外の人々の為に道う足のことでない也」と

すで で もと ふね え すぐ きき みち そ ところどころ ここ しるし まち なか つ
既に出て、其の船を得て、便に向の路に扶つてゆき、処々に之だと誌をつけた。郡の下に及くと、

たいしゅ もう こ よう はな たいしゅ すぐ ひと や そ ゆ したが
 太守のところに詣でて、此の如に説いたのだった。太守は即ち人を遣って其の(漁師が)往くのに随
 きき しるし どころ たず つい まよ ま みち え な
 わせ、向に誌をつけた所を尋ねさせた。しかし、遂に迷って、復た路を得ることはできなかった。
 (かの有名な隠者である)なんよう りゅう し き たか すぐ し ある これ き よろこん い こころ
 南陽の劉子驥は高く尚れた士で也が、之を聞いて、欣然で往こうと規みた。
 どう はた つ や お のち つ ゆ(みち) と もの な
 しかし、未どう果せないままに、尋いで病んで終わってしまった。後には遂いに津を問う者もい無く
 なったのである。

序(蘇軾)

世伝桃源事多過其實、考淵明所記止言先世避秦乱来此、則漁人所見似是其子孫、非秦人不死者也。

又云殺雞作食、豈有仙而殺者乎。

旧説南陽有菊花水、水甘而芳、民居三十余家、飲其水皆寿、或至百二三十歳。

蜀青城山老人村、有見五世孫者。道極陰遠、生不識塩鹽、而溪中多枸杞、根如竜蛇、飲其水故寿。近歳道稍通、漸能致五味、而寿亦益衰。

桃源蓋此比也歟。使武陵太守得而至焉、則已化為争奪之場久矣。

嘗思天壤之間若此者甚衆、不独桃源。

余在潁州、夢至一官府、人物与俗間無異、而山川清遠、有足樂者、顧視堂上、榜曰仇池。覺而念之、仇池武都氏故地、楊難当所保、余何為居之。

明日以問客、客有趙令時德麟者曰、公何為問此、此乃福地小有洞天之附庸也。杜子美蓋云、万古仇池穴、潜潜通小有天。

他日工部侍郎王欽臣仲至謂余曰、吾嘗奉使過仇池、有九十九泉、万山環之、
可以避世如桃源也。

(世間どうかいげんで桃花源とうえんめいのこととして言い伝えているものの多くは事実を誇張しすぎている。陶淵明が記しているのは、先の世しんに秦の乱れを避けてここに来たというだけであって、漁師が見たのはその子孫で、秦の時代の人々が死なずにいたわけではない。また、鶏を殺して食べていると記してある。桃花源の人々がもしも仙人であつたなら、生き物を殺すようなことはしないはずだ。

旧い説なんよう きくかいすいに南陽に菊花水というところがあって、その水は甘くて芳しく、三十余りの家があって、その水を飲んで長生きをしていて、百二三十歳に至る者もいるとある。

蜀しよくの青城山せいじょうざんには老人がたくさんいる村があって、五世の孫を見る者もいるという。道が極めて険しくて遠く、その人々は塩も酢も知らない。溪の中には枸杞くこが多くあり、その根は竜のようにわだかまっている。その水を飲むから長生きなのである。近年はやや道が通じるようになって、次第に五味を味わうようになって、長寿であることもだんだんと衰えてきているという。

桃花源とはきつとこのようなところであるのだろう。もしも武陵ぶりやうの太守がそこに行くことができたなら、ずっと前に争奪の場となってしまっていただろう。

思うに、天地の間にはこのようなところがきつとたくさんあって、桃花源だけではないのである。

私は頰州えいにいたときに、夢でとある役場に行き、その人々はこの俗世と異なるところはなかったけれども、山や川は清らかで十分に楽しめるものであった。振り返って建物の上を見るとさうち「仇池」と書いた額があった。目が覚めてから考えると、仇池というのは武都ぶとの旧ていは氏族が棲んでいたところようなんどうで、いまは楊難當が守備に就いているのであった。どうして私はそのようなところに行ったのだろうか。

翌日、そのことを人々に尋ねると、趙令時ちやうれい じ あざな とくりん(字は徳麟)がこのように言った。

「あなたは どうして そのようなことを問われるのですか。仇池しゅうちうとは、小有洞天しやうゆうどうてんに付属する仙界に通じ
るところではありませんか。杜甫と ほの詩にもこうあります。

万古仇池穴、(万古 仇池の穴)

潜通小有天。(潜かに通じる小有天)』

別の日に、王欽臣おうきんしん(字は仲至)ちゆう しが私にこのように言った。

「私はあるとき使命を受けて仇池に行ったことがあります。九十九の泉があつて、一万の山がそのまわりにありました。世を避けるのに桃花源のようなところがありました」

(蘇軾きゆう ちが仇池を夢に見たことは第10章177ページや212ページなど何度か記している。その仇池が現世に存在するところなのか、仙界に存在するところなのか、ここではどちらともはっきりさせずに書いている。桃花源とう かげんもまたそのようであるのだろう)

(陶淵明)

嬴氏乱天紀、(嬴氏えい し(秦の王室)てんが天の紀ちつじょを乱したときに)

賢者避其世。(賢者けんじゃは其の世そを避けた)

黃綺之商山、((たとえば)黃こう(公)や綺き(里季)は商山しやうざんに之いつてかくれたのだが)

伊人亦云逝。(伊の人たちも亦た云に逝ったのだった)

往迹浸復湮、(往った迹は 浸と復た湮れて)

来逕遂蕪廢。(来た逕は遂には蕪れて廢れてしまった)

相命肆農耕、((ここにきた人々は)相それぞれに命じあつて農耕に肆め)

日入従所憩。(日が入むと憩うような 所 を従った)

桑竹垂余蔭、(桑や竹が余るほどの蔭を垂らすようになり)

菽稷隨時藝。(菽や稷を時に随って藝えた)

春蠶收長糸、(春の蠶から長い糸が收れ)

秋熟靡王税。(秋に熟れたものは王の税としてとられることは靡いのだ)

荒路暖交通、(荒れた路が暖に交わり通じ)

鷄犬互鳴吠。(鷄や犬が互いに鳴いたり吠えたりしている)

俎豆猶古法、(俎 豆は猶も 古 の 法 のままであるし)

衣裳無新製。(衣裳も新しい製などはない)

童孺縦行歌、(童孺は縦に行ながら歌い)

斑白飲遊詣。(斑 白は飲げに遊び詣っている)

草榮識節和、(草が榮ってくと節が和やかになったと識り)

木衰知風厲。(木が衰えてくと風が厲しくなったと知る)

雖無紀歷誌、(紀曆を誌したものなどは無(雖も))

四時自成歲。(四つの時が自ずから歳を成るのである)

怡然有余樂、(怡然といったら 余るほどの 樂しさが有るのだから)

于何勞智慧。(何に于いて智慧を 勞 すことがあるうか)

奇蹤隱五百、(奇な蹤が隠れてから五 百)

一朝敞神界。(一朝のこと神界が(われらのまえに)敞かれたのだった)

淳薄既異源、((し)かし 淳 な(桃花源)と 薄 な(現世)とは既に 源 からして異なるので)

旋復還幽蔽。^{たちま ま}（旋ち復た^{くら とご}（桃花源は）幽蔽^{かえ}されたところへと還ってしまったのだった）

借問游方士、^{ち たず}（借とお問ねしますが、方^{ちつじのなか うろろ}で游する士^{みなさま}がたよ）

焉測塵囂外。^{どうした}（焉^{よこれ}て塵^{がやがや}て囂^{そと}とした（現世の）外^{はかりしる}のことなど 測^{はかりしる}ことはできませんでしょうな）

願言躡輕風、^{ねが}（わたしが）願^{そう}うのは、言^{かろ}だ、輕^{かぜ}やかな風^ふを躡^ふんで）

高举尋吾契。^{たか あが}（高^わく挙^{ちぎ}って吾^{たず}が契^{たず}のところ（桃花源）を尋ねることなのだ）

（この詩は、先の「桃花源の記」をなぞっただけで、後人の偽作ではないかといわれている。確かにこれといって新味のない蛇足であるようだ）

（蘇軾）

凡聖無異居、（凡人と聖人はいるところを分けているわけではない）

清濁共此世。^{せい たく}（この世において清と濁はいっしょ^たになっているのである）

心閑偶自見、^{とう かげん}（心が静まっているとたまたま桃花源のようなところが見えたり）

念起忽已逝。^{ねん}（しかし、おかしな念^{ねん}が起こるとそれはすく^くどこかに消えてしまう）

欲知真一處、（真にこれ一つというところを知ろうとするには）

要使六用廢、（眼、耳、鼻、舌、身、意の六つとも廢さなければならない）

桃源信不遠、（桃花源は実は遠いところにあるのではない）

藜杖可小憩、（杖をついてちょっと休憩するくらいで行けるのだ）

躬耕任地力、（それはすなわち、自ら耕して、できばえを大地の力に任せ）

絕学抱天藝、（学問を断って、天の与えてくれた技艺に任せることであろう）

臂雞有時鳴、（肘が鶏なら時がくれば鳴いてくれるし）

尻駕無可税。(尻が駕籠なら費用なしで乗れる)

苓龜亦晨吸、(蓮に乗る龜は長く生きる呼吸をし)

杞狗或夜吠。(長寿をもたらす枸杞は神の犬によって守られている)

耘樵得甘芳、(草や木から甘く芳しいものを得て)

齧齒謝炮制。(焼いたり煮たりしないでそのまま食べる)

子驥雖形隔、(劉子驥は実際に桃花源に行こうとしたけれども、遠く隔たったままだったが)

淵明已心詣。(陶淵明は心のなかですでに至ったのである)

高山不難越、(行こうとすれば、高い山だって越えられないことはないし)

浅水何足厲。(浅い水なら衣をちよいと挙げればよいだけだ)

不如我仇池、(それはそうと、私は仇池へと)

高拳復幾歳。(高く拳がって行ったのは何年前であったのか)

從來一生死、(もとより生と死は一つであると知っていた)

近又等癡慧。(近頃では愚かなのも賢いのも等しくなっている)

蒲澗安期境、(惠州の近くには安期生がいた菖蒲澗もあれば)

羅浮稚川界。(葛洪がいた羅浮山もある)

夢往從之遊、(夢に安期生や葛洪と遊び)

神交廢吾蔽。(私を覆うつまらぬものをなくすなら、神の交わりができるのだ)

桃花滿庭下、(庭に桃の花が咲き)

流水在戶外。(戸の外に水が流れる——ならばここがすでに桃花源であろう)

卻笑逃秦人、(そう思うと、秦の世の乱れから逃げたという人々は)

有畏非真契。(恐れを抱いていたのであるから、仙界と真の契りを結んだのではなかったのだ)

(蘇禪式はここでユートピアは穏やかな精神の中に存在すると歌っている)

■食荔支二首

ライチ

荔支を食べて詠んだ詩。序文がある。

惠州知事の東堂には(仁宗皇帝の時代に)宰相であった陳文恵公(陳堯佐)を祀った祠があり、その堂の脇に公が手づから植えた荔支が一株ある。土地の人はそれを「將軍枝」と称している。今年は大いに実が熟し、知事が賞味し、その余りを役人一同に配り、そして高く採れないものは猿を放って取らせた。

(陳堯佐は潮州知事であったときに惠州知事も兼務していたという)

其の一

宰相を祀った祠のもと、

將軍の大木の傍らで見上げると、

燃える雲、火のような実が連なり、

したたる瑞露(果汁)はまさに天漿(天上界の水)を酌むものである。

爛れるばかりの紫が垂れて先ず熟し、

高くにある紅は遠く揚って空にかかるかのようにである。

この甘さは遍く下役にまで配られ、

また黒衣郎こく い ろう(猿の別称)にも至った。

其の二

羅浮山ら ふ ざんの下は四季すべてが春、

盧橘ろ きつも楊梅ようばいも順次新たに稔る。

日々三百ライチの荔枝を食らって、

とこしえに嶺南れいなんの人となることを辞すものではない。

(この第二首はいかにも蘇軾らしい詩であるので、原詩と読み下し文を掲げておこう)

羅浮山下四時春、ら ふ ざん か し じ はる(羅浮山下 四時の春)

盧橘楊梅次第新。ろ きつ ようばい し だい あら(盧橘 楊梅 次第に新たなり)

日啖荔枝三百顆、ひ くら れい し さんびやく か(日に啖う 荔枝三百顆)

不辭長作嶺南人。じ どころ れいなん ひど な(辞さず 長しえに嶺南の人に作ることを)

■遷居

上の詩で、「とこしえに嶺南の人になるのもよい」と歌ったのは、それを積極的に望んだわけではなく、罪を赦される可能性はほぼなくて、惠州に長く住み続けることになるとすでに覚悟を決めていたからだろう。4月20日、住まいを嘉祐寺か ゆ う じに遷し、この詩を詠んだ。序文がある。また、先に陶淵明とう えん めいに和した詩でも見たように(本章 279 ページ)、新しい住まいの建

築にも取りかかっていた。

私は紹聖元年十月二日に惠州^{けい}に至り、合江楼^{ごうこうろう}に寓居した。その月の十八日に嘉祐寺^{かうじ}に遷った。二年三月十九日にまた合江楼に遷り、三年四月二十日に再び嘉祐寺に戻った。ときに白鶴峰^{はくかくほう}の上に新居を築いていて、少しくそこに落ち着くことを願うものである。

前年^{すいとう}は水東^{かゆうじ}の地(嘉祐寺)を家とした、
首^{こうべ}を回らすと夕陽が川面に麗らかであった。
去年^{ずいせい}は水西^{ごうこうろう}の地(合江楼)を家とした、
春の雨が細やかに顔を潤した。
東も西も私が選んだのではなく、
縁が尽きたら移動するという次第であっただけだ。
今年はまた東に移り、
もとの館でしばし憩うこととなった。
すでに白鶴峰^{はくかくほう}に住まうところを買っていて、
そこで老いて終わる計画を立てている。
新たな住まいの北の戸口の下に大きな江が流れていて、
我が家の石段に、雪のような浪しぶきがかかるようになるだろう。
かき
牆の先に、青い山々が連なり、

こんもりと結った髪がずらりと並ぶかのようになるだろう。

『抱朴子』には下策だとしてあるので慚じねばならないのだが、

昇仙するための薬をそこで練るとしよう。

そこに住むのは、柳宗元が配所で虚しく死んで、

廟に丹い荔枝を供えられるようになったのよりはまだしもまさるであろう。

吾が人生にはもとより期するものはなく、

この世を眺めて過ごせればそれでよいのだ。

ふと思う間にも何千年もの年月が過ぎ去り、

あるいは、塵の一粒一粒にも宇宙がある。

生きるものの息(生命力)などは、

つまるところ、蚊や蚋が吹くほどのたわいもないものなのだ。

(ここに歌われている哲学的省察は、「とこしえに嶺南の人になる」のは、苦悩の果ての結論であることを示すものであると考えてよいだろう)

■書嶺南筆

夏のある日の出来事。

紹聖三年五月二十七日、川の西側を行くと、筆を売る者がいた。形はほぼ筆に似ていたので、二十銭で二本求めた。筆先に墨をつけると、すぐに墨は散ってしまった。実に嶺南にはよい筆がない。

■和子由盆中石菖蒲忽生九花

弟の詩に和した。弟の詩は、「石の鉢に菖蒲しょうぶを植えたところよく茂り、八
ないし九の花が開いた。ある人が、長生きをする吉祥であると言ったので、
息子の蘇遠そえんが、私の誕生日に合わせて、頌歌を作ってくれた。それでこの
詩を詠んだ」というもの。

菖蒲しょうぶは春に葉を出し、秋に実を結ぶ、

どちらもほんの束の間のことである。

寿命を延ばしたりする神薬は、

果たしてこの人間世界に存在するのだろうか。

鼻がなければ、薝蔔くちなしの香りは知りようがない。

花が咲いてから、菖蒲が吉祥を示していると初めて知る。

その花だって、蝶を満足させるほどのものではない。

蟬が鳴くのは、寒さが迫り来るのに急かされてのことだ。

来年になって茎に一寸に十二の節が現れるようだったら、

それこそ長寿の薬として用いることができるのだから、

子供らに白い髯の世話を焼かせることもなくなるだろう。

(この詩の個々の句は、必ずしも意味を明確には封固めないけれど、全体として、菖蒲の
花をもつばら目出度いものとする弟の詩に対して、「ほんまかいな？」とまぜっかえし

たものなのだろう)

■両橋詩

6月、^{けい}惠州の町の東と西にかかる二つの橋が^{けい}ほぼ同時に完成し、蘇軾は祝賀の意を込めてこの詩を詠んだ。橋の計画は^{せんはん}惠州知事の詹範が立てたもので、蘇軾は従兄の^{てい し きい}程之才に助力を要請していた。序文がある。

^{けい}惠州の町の東で^{かわ}江と^{かわ}溪の合流するところにかつては橋があった。しばしば壊れてしまったためにとうとう廃され、小舟でもって渡していた。

^{ら ふ ざん}羅浮山の道士^{どうしやあん}鄧守安がここに浮き橋を作った。四十艘の小舟を二艘ずつ対にし、二十対を鉄の鎖で繋ぎ、川岸に石の礎を備えて鎖をとめた。橋は水の増減に従って上下する。表札を立て、^{とうしんきょう}「東新橋」と称した。

惠州の西の^{ほう こ}豊湖のほとりにはかねてから^{ちようきょう}長橋があって、しばしば作っては壊れるということを繰り返していた。

^{せいぜんいん}棲禪院の僧の^{き こ}希固が兩岸で工事を行い、高さ九間の飛閣(アーチ橋)を、すべて^{せきえんぼく}石塩木を用いて作った。石塩木は鉄石のように堅い。表札を立て、^{さいしんきょう}「西新橋」と称した。

^{しょうせい}どちらも紹聖三年六月に工事が完了したので、この二詩を作って祝した。

(この序文で興味深いのは、橋を造るという公共事業を実際に担ったのが道士であり僧侶であることだ。かつて杭州副知事そして知事のときに行った公共事業でも、やはり

仏教界の力を借りている。^{とうしゅあん}鄧守安は本章 77 ページ以来何度かその名を見ているが、大規模工事を指揮する実務能力にも長けていたのだ)

東新橋

群れる鯨を鉄の^{ロープ}索で貫き、
その背中に空を横たわる虹を負わせる。
鯨の頭は、雪のような波しぶきを^{かわ}江に上げて揺れ、
鯨の尾は、雲を崩す勢いの^{かわ}溪の水を叩いてはねる。
鯨の群れは自在に伸縮し、水の増減に応じて上下する。
巨大な索を^{ろくろ}轆轤で巻き上げると、
川面には青い^{みずら}蛟がのたうちまわる。
川を奔る舟は、鯨に触れずに間を抜け、
ばらばらになった筏も、衝突して滞留することはない。
たった一本の橋であるのだが、広く東西に伝えられ、
舟の橋を知らない人々が、喜び笑いあって競って渡る。
馬蹄の音が雷のように響き、
江に住む魚や竜は驚いて逃げてしまう。
これまで、人々は江を渡ることの難しさを長く嘆き、
公私ともに川岸で留まらなければならないことに困っていた。
悪賢い連中はこの難所を食い物にし、

舟で人を渡そうと、水鳥のように出沒した。

あたかも、沈みかけた船に向かって浮き袋を売ったり、

高いところから降りられなくなった人に梯子を売ったりするようなものだった。

ここ百年で、砂や泥に落ちた者が何人いるのかわからない。

この波の上に、安らかに憩える広間ができるとは……

朝でも夜でも自由に往来でき、

酔っ払いも、手助けなしにやすやすと渡れる。

知事殿は私に酒を馳走してくれて、

「孔子は、鶏こうしを割くのにわざわざ牛刀ぎゅうどうを用いるまでもないと言われましたが、

牛刀けいどうでも鶏刀でも上手に割ければ結構。

浮き橋でも飛閣でも、橋は非常に役立ちますな」

と、言いつつ、鄧守安とうしゅあんと希固きこを褒めるより先に、

私が犀帯さいたいを寄付したことを賞賛してくれる。

私は知事殿の長寿を祝してから、

「杖にすぎるこの老人の一言をお聞きください。

ものは壊れてしまう前に修繕することが大切です。

ぜひ後悔するようなことはありませんように」

と、言ったのである。

(1) 蘇軾は橋の建築費として犀帯さいたい（官員の印である立派な帯）を寄付し、次の詩には、蘇轍の妻も寄付した者の一人であったことが歌われている。(2) 最後の言葉に、危機管

理に対処する蘇軾の姿勢がよく出ている。先に杭州知事であったときに、災害は被害が顕わになる前に対処することが肝要であると力説していたことと通じるものがある。

(3) この2首は韻を揃えていて、やや無理があったのだろうか、詩の流れがなめらかでないところがあるので、訳すに当たって若干の整理をしている)

西新橋

昔の橋は、千本の木を柱とし、
 虹の切れ端のようなものが湖に掛っていた。
 いつしか梁は水に浮いたり、深い泥の中に陥ってしまったりし、
 板は破れて、川の勢いに流されてしまったりもした。
 かくして、遠い岸辺が水に沈んでしまうようになったのを笑って見ているしかなくなり、
 町そのものが低くなってしまったかのように感じたのだった。
 そこで、農事の閑な折に、百歩の堤を作ることになった。
 暑熱の地には堅固な木がなく、
 みなぎる水によって簡単に流されてしまう。
 千年にわたって存在するものといえば、
 羅浮山の西にある鉄柱のような石塩木だけで、
 白蟻も敢えて登ろうとはしない。
 銅製の駱駝のこぶ、鉄製の馬蹄のように頑丈で、
 昔、仙人が石に鞭を撃って走らせて海上に石橋を掛けたように、

石塩木をもって橋を作ることになったのである。

私は長らく筆を置いて、潤筆料を稼ぐこともしていないので、

短い鞭さえも持っていないのだが、

空に梯子を掛けようとした。

昔高官だった者がふくら囊のなかを探って寄付をし、

我が弟の妻までも黄金を出資してくれた。

百人が一本の杭にとりかかり、

百尺の深さまで泥の中に打ち込んだ。

工事が完了に至ると、

近隣の人々が雲のように集まり、

いずれも食べ物や酒を携えて持ち寄り、

三日間飲み続け、そのために西の村の鶏はことごとくしめられてしまった。

聞くところでは、

百年前には、ほうこ豊湖は海に近くて犀が棲んでいたとか。

それがいまでは、

海が山に変わり、枯れた川筋に草が茂っている。

後の人々はどうか忘れないでほしい、

この橋のできる前は、

冬でも臍までつかって水を渡らなければならなかったことを。

■擷菜

「菜を擷^つむ」という詩。序文がある。

私は王参軍^{おうさんぐん}の土地を借りて菜を植^はえた。畑は半畝にも及ばないものだが、一年中息子とたっぷり食べられるだけの野菜が採れる。夜に飲んで酔い、酒を醒ますのにちょうどよいものがないときに、菜を擷^つんで煮ると、肥えた土の味わいがあり、風味がたっぷり含まれていて、米も肉もこれに及ぶものではない。人は生きて、これ以上に何を得ようとして食^くうのか。四句の詩を作った。

^{おうさんぐん}（王参軍（参軍は役職名）は、かつて官職に就いたことのある近所の地主であろう）

秋が来てから、東の畑にたっぷり湿^しり気が満ちるようになった。

^{だいこん} 蘆菔^{からしな}に子が生じ、芥^{かいらしな}に孫ができた。

^{しん か そう} 晋の何曾は一日の食事に一万銭を費やしたとか。

私は同じくらいに食べ飽きている。

何が悲しくて、鶏や豚を食べるのか、さっぱりわからない。

■食雞卵説

上の詩にあるように、蘇軾^{そし}は（完璧ではないにしても）菜食主義者で、卵も食べまいとしていた。そのことを記した短文。

水族は癡暗^{おろか}であるとして人は軽々しくそれを殺す。ある人は、水族はむぎむぎと殺されてしまったことを(閻魔大王に)訴えることもできないのだからそれで仕方がないのだと言うが、それは悪者を怖がって放置していることについて屁理屈で善人を欺くような言い分である。

李常^{りじょう}がかつてこのようなことを言った。

「雄のいない鶏がいて、卵を生みました。鶏は卵を抱いて、殻を破って雛が出てきたのですが、数日もしないうちに死んでしまいました。これからすると、卵を食べたからといって殺したことにはならないのでありませんか」

それに対して私は言った。

「そうではありません。およそ動くものはすべて仏の子です。竹につく蝨は初めは竹の葉にまかれた粉のように見えますが、しばらくするとともに動くようになり、百匹、千匹の群れとなります。いずれも仏の子でないものはありません。かつて梁^{りょう}の武帝^{ぶてい}が描かせた水陸画^{ろくどう}を見ましたが、六道^{そと}の外までも、淡い墨によって、人や獣や鳥や魚らしきものが空中にぼんやりと漂っているありさまが描かれていました。それらは仏の子が流浪^{いやく}して最も陋劣^{ろくどう}なものです。じめっとしたところから生じる竹の蝨のようなものでさえもそこにはなくて、あるかないのかわからないぼんやりとしたものばかりです。水族や鶏の卵であっても殺してよいものではありません。もしも私に殺そうと一念が起ると、すでに地獄が具わっているのです。殺されたことを訴えられるか訴えられないかは関係ないのです」

私は長らく殺すことを戒^{けい}めていた。惠州に到ってからは、その戒めを破ってしばしば

貝や蟹を食べてしまった。今日そのことを悔い、また前の戒めを修めようと思う。今日は家の者が鯉を一匹買った。長さが一尺余りあって、弱っているとはいえまだわずかに動くことができる。これを水瓶の中に置き、もしも死んでしまったならば食べ、生きたならば赦そうと思う。

いささかこのことを記して一笑に供する。

(1) 李常 (字は公沢) が蘇軾の親友であったことは第6章 72 ページなどで見ている。(2) 蘇軾が李常に向かって言ったことは論旨がうまく掴めないままに訳した。生命の価値は等しいということであろうか)

■悼朝雲詩

惠州^{けい}に来て最も悲しいことが起こった。7月5日、王朝雲^{おうちょううん}が亡くなった。時に34歳であった。これは王朝雲の死を悼む詩。

先に紹聖元年十一月、戯れに『朝雲の詩』を作った。紹聖三年七月五日、王朝雲^{おうちょううん}は病のために惠州で亡くなった。棲禪寺^{しぜんじ}の松林の中の東南、大聖塔^{だいしょうとう}に向き合う地に葬った。私はすでに墓誌銘を作った。ここに前の詩に和して、我が悲しみをやわらげようと思う。

王朝雲は始めは字を識らなかつた。晩学ながらすぐに書を学び、楷書をほぼ会得した。かつて泗水のほとりの尼僧義沖に仏教を学び、大義をほぼ理解した。死に際して、『金剛經』の四句の偈を誦して絶えた。

(先に戯れに詠んだという詩は本章 89 ページで見ている)

苗が成長しなかったのは、

天のなすところであつたのか。

——君が生んだ子は百日に至らなかった……

幼い鳥に、我が鳴き声を伝えることができなかった。

太陽が進むのを止めることはできない。

——残念なことに、君に千年の寿命を与える薬がなかった。

旅行く君に贈るのは、ただ『金剛經』の偈こんごうきやうがあるだけ。げ

この心の深い痛みは、

我が前世からの負い目を償うのに十分であろう。

過去、現在、未来の三生もわずかに指を弾く間のこと、

恐れるのは、君との後の縁までもこれで断たれてしまったのか。

家に帰って遠い近いもわからぬままに竹の根に伏し、

夜の燈火があがったところに、

だいしやうとう
大聖塔に遠く礼拝する。

■朝雲墓誌銘

上の詩の序文にあった王朝雲おうちやううんの墓誌銘。

とう ば じ しょう ちやううん あざな し か おう せんとう
東坡先生の侍妾を朝雲という。字は子霞、姓は王氏、錢塘の人である。

さと
敏くして義を好み、先生に仕えて二十三年、忠と敬そのものであった。

しょうせい じんしん けい こうしん
紹聖三年七月壬辰(五日)、惠州で死んだ。三十四歳であった。八月庚申(三日)、豊湖のほとりの棲禪山寺の東南に葬った。

とん
子の遁を生み、一年にならずに死んだ。

ぎ ちゆう し こん
常に尼僧の義沖に従って仏法を学び、その大意をほぼ識った。死に直面して、『金
ごうきよう げ
剛經』の四句の偈を誦して絶えた。

銘に曰く、

浮屠是瞻、伽藍是依。(仏陀を見るなら、伽藍に心を寄せよ)

如汝宿心、惟仏之歸。(そなたのかねてからの心は、ただ仏のもとに帰ることにあった)

■題棲禪院

おうちやううん せいぜんいん
蘇軾は8月3日に王朝雲を棲禪院に葬った後、8月9日に墓参した。そのことがわかる訪問記録。

しょうせい
紹聖三年八月六日夜、風雨が強かった。朝になると、院の東南に、巨人の迹が五つついていたという。この月の九日に息子の蘇過と来てそれを見た。

(別の文章でも、六日の夜に不可思議な現象が起こったことを記述していて、それは釈迦の慈悲が広大であることを示すものであるとし、それに託して王朝雲の冥福を祈っている)。

■丙子重九二首

へい し しょうせい ちようきゆう
丙子すなわち紹聖3年の9月9日の重九の節句に詠んだ詩。

其の一

しょうかい
瘴海(南の熱い海)のほどりにいること三年、

えつきよう
越嶠(南国の山)こそ真の我が家となった。

ちようきゆう
山に登って重九の祝いをするに、

ばんきく
蛮菊(南国の菊)は秋であっても花はまだ咲かない。

かや
ただ茅が黄色の浪をつくって、丘も窪地もうずめている。

たんしゅ たんみん
蜃酒(蜃民の酒)は妙なものでもたくさん入っているのか、

かりん
酸っぱくて甘くて、梨だか櫨だかの味がする。

酒のさかなに何かないかと思っていたら、

隣りの爺さんが持ってきてくれたのは蛙と蛇。

無理むり酔っぱらって、

うた なげ
飲び謡おうとしたものの、悲しい嗟きが混ざってしまう。

今年はなんとも悪い年まり、

疫病によって多くの人が乱れる麻のように倒れ伏した。

私は今日の節句を元気に迎えたものの、

おうちようん
狂風は朝焼けの雲を巻き去ってしまった(王朝雲の死をいう)。

そのために、私はいまや霜降る夜の月、
天の涯にぽつんと一つ掛かるだけとなってしまった。
西の湖(王朝雲の墓がある)に今日は行くまい、
夕暮れの木立に鴉からすが寒々と鳴いているだろうから。
(王朝雲おうちやううんが亡くなったところから、蘇軾の詩文の数は少なくなっているようである)

其の二

行き詰まった途みちにあっては、選ぶこともないままに、
友は乱れ雲のように我が眼の前を通り過ぎてゆく。
ほかの人々のことは改めて数えることもしないが、
お二人の知事殿しじばかりは特にお目にかかりたくて、
去年と同じ合江楼ごうこうろうでまたともに飲んで、
秋の水が波紋を作るのを見下ろす。
この水にしても、この人々にしても、
沄沄ばしやばしやと追いつ追われつ流れて行く。
老いたならば、おのおの休息すべきであるのに、
造物者はどうして長く勤めさせようとするのか。
この佳き節句であるのだから、
お二人とともに存分に楽しもうではないか。
我が客人には何をもってもてなせばよいのか――

清らかな岸辺で魚が遊んでいる、
漁師の三百本の指が、鉄のような強い網を使って、
魚の群れを掩ってしまおうとしている。
えものが多いのはむろん愉快である、
しかし、買い取って放ってやるのはもっと嬉しいことだ。
その楽しみこそ不朽であって、
明年には帰耕しようと思っている私にはよい思い出となるだろう。
(「二人の知事殿」とあるのは、^{けい}惠州^{せんはん}知事^{ほうしやう}の詹範と、その後任としてやってきた方子容である)

■野吏亭記

新たに^{けい}惠州^{ほうしやう}に赴任した方子容^{ちんぎやうき}知事は、(本章 291 ページ)に所縁のあ^{あずまや}る亭を修復し、そのことについて蘇軾が記した。

もとの宰相の陳文恵公(陳堯佐)が^{あずまや}この亭を建て、「野吏亭」と名付けた。それは^{こうし}孔子が言うところの「先進の礼学におけるは野人なり」からきているのだろう。

公は朝廷にあって、特にこの地をしきりに恋しく思ったという。しかし、亭や庭は日々に損なわれてしまい、およそ九十七年を経て、知事の方子容^{ほうしやう}がまた新たに完全な姿にした。

^{しょうせい}紹聖三年十一月二十一日記す。

こうし ろんご
 (孔子の言葉は『論語』にあつて、「昔の先輩方が礼楽に対する態度は野人的であつた」、
 つまり素朴で野性味があつたという意味。 ちんぎょう き
 陳 堯佐は南方の地にあつて、 古 いにしえ
 の素朴な
 人のような役人でありたいと「野吏亭」と名付けたのだろう)

■和陶乞食

とうえんめい
 陶淵明の「食を乞う」という詩に和した。

(陶淵明)

饑来駆我去、(う え き わたし か ゆ
 饑えが来て、我を駆りたてて去かせる)

不知竟何之。(い った どこ い わか な
 不知竟何之。(竟い何に之たらよいのか知らない))

行行至斯里、(ゆ ゆ こ さと いた
 行行至斯里、(行きまた行き、斯の里に至り))

叩門拙言辞。(もん たた しどころもどろ ことば
 叩門拙言辞。(門を叩いて 拙 に言辞をならべる))

主人解余意、(しゅじん わたし こころ わか
 主人解余意、(主人は余の意を解ってくれて))

遺贈豈虚来。(おくりもの けし き むな
 遺贈豈虚来。(その遺贈は豈て来たことを虚しくはしなかった))

談諧終日夕、(はなし あ ひ く お
 談諧終日夕、(談がびったり諧って、日の夕れがたも終わって))

觴至輒傾杯。(さかずき く すぐ さかずき かたむ
 觴至輒傾杯。(觴が至れば輒に杯を傾けるのであった))

情欣新知歡、(こころ あたら し よろこ うれ
 情欣新知歡、(情のうちに新しく知りあった歡びを欣くおもい))

言詠遂賦詩。(ことば よ つい し ふ
 言詠遂賦詩。(言を詠んで遂いには詩を賦した))

感子漂母惠、(あなた ひょうぼ めぐ かん
 感子漂母惠、(子の「漂母の恵み」に感じ))

愧我非韓才。(わたし かん さい な は
 愧我非韓才。(我には韓の才が非いことを愧じるばかりだ))

街戢知何謝、(こころに^{ふく}街み、^{おさ}くに^{どのよう}戢めて^{かんしゃ}何に^{わか}謝したらよいのか知らない)

冥報以相貽。(せめて^{あのよ}冥からの^{むく}報いで^も以って^{あなた}相に^{おく}貽ることにしよう)

(1) 終わりの方にある「漂母の恵み」とは韓信の故事(第10章172ページなど)である。韓信は若いころは貧乏で、漂母(洗濯婆さん)から施し物をもらってどうにか暮らしていた。後に漢の高祖を助けて天下統一の事業を成し遂げ、漂母に十分な恩返しをした。

(2) 陶淵明は韓信のようににはできないので、「あの世から恩返しをします」と言った。この「冥報」について蘇軾はかつて短文を記していた(第6章261ページ)

(蘇軾)

莊周昔貸粟、(昔、^{そうし}莊子は^{もみこめ}貧乏で^{もみこめ}粗米を借り)

猶欲舂脱之。(自分で^つ舂いて^つ脱穀しようとした)

魯公亦乞米、(魯公^{ろこう}(^{がんしんけい}顔真卿)もまた米を乞い)

炊煮尚不辭。(自ら^{ろこう}煮炊きすることも^{ろこう}辞さなかった)

淵明端乞食、(陶淵明^{とうえんめい}こそは^{とうえんめい}食を乞い)

亦不避嗟来。(嗟来^{さらい}(さあさあもらい)において)の^{さらい}招きも^{さらい}避けなかった

嗚呼天下士、(ああ天下にこの人ありとされる^し士でも)

死生寄一杯。(死ぬか生きるかは一杯の飯によるのだ)

斗水何所直、(一斗の水にはさほどの価値はないけれど)

遠汲苦姜詩。(姜詩^{きやうし}は母のために遠く^{きやうし}苦勞して汲みに行った)

幸有余薪米、(幸いにも私には薪も米も余裕があつて)

養此老不才。(この老いた不才の身を養うことができている)

至味久不壞、(ここに至味^{しみ}(最高の味わい)があつて、それは永久に壊れないものであるから)

可為子孫貽。(子孫に贈るべきはこれなのである)

(1) 困窮に陥って人に食を乞い求めた例として、陶淵明^{とうえんめい}の他に莊子^{そうし}と顏真卿^{がんしんけい}を挙げている。顏真卿について本章 126 ページで見ている。(2) 姜誨^{きやうし}は親孝行者でいわゆる「二十四孝」のひとり(第9章 39 ページ)で、母の好む川の水を遠くまで汲み^きに行った。食を乞うたわけではないけれど、どれほど優れた人でも飲食のために苦勞する例として引かれている。(3) 「至味^{しみ}」は、飢えることを心配しないですむ穏やかな暮らしにあるのだろう)

■西江月

惠州^{けい}の梅の花を詠んだ詞。実は王朝雲^{おうちやううん}を悼み思ふ詞であるという。

玉骨那愁瘴霧、(玉からなるそれ(梅)は熱気を帯びた霧にも愁うことはありません)

冰肌自有仙風。(氷のような肌^{はだ}には仙界の風情があります)

海仙時遣探芳叢、(海の彼方の仙人はときに芳しい花の中にそれを探る使者を派遣します)

倒掛緑毛麼鳳。(それとは枝にさかさまにかかる緑の毛の鳥です)

素面翻嫌粉浣、(素顔^{おしろい}のままで、かえて白粉を施すのを嫌い)

洗妝不褪唇紅。(化粧を洗い流しても唇の紅は褪せません)

高情已逐暁雲空、(気高^{こころ}い情は暁の雲を追ってすでに空しくなり)

不与梨花同夢。(昔の人と同じように梨の花を夢に見ることもないのです)

(1) 前半は、南国の暑い気候においても咲く梅を詠みつつ、王朝雲^{おうちやううん}のありし日の姿を追憶しているのだろう。(2) 「枝にさかさまにかかる緑の毛の鳥」のことはすでに本章95ページで見ている。(3) 後半は、梅がすでに散ってしまったこと、すなわち王朝雲が亡くなってしまったことを歌っているのだろう。(4) 「梨の花の夢」とは、梅を惜しんでかえって夢に梨の花を見たという唐代^{とう}の詩に拠る。夢にも逢うこともできないと蘇軾は嘆くのであろう)

■和陶和胡西曹示顧賦曹韻

陶淵明^{とうえんめい}の「胡西曹^{こせいそう}の詩に和して、あわせて顧賦曹^{こふそう}に示す」という詩に和した。西曹も賦曹も役職の名称で、胡と顧がどのような人であったのかは知られていない。陶淵明の原作は、紫^{あおい}の葵に託して志の遂げられない嘆きを歌っているのに対して、蘇軾^{そおき}の詩は、長春花^{ちやうしゆん か}を惜しみつつ、実は王朝雲^{おうちやううん}を悼み思うものであるという。

(陶淵明)

蕤賓五月中、(蕤賓^{すいひん}は音階の五番目)、すなわち五月中^{ごがつ うち}の中の)

清朝起南鵬。^{きよ}(清らかな朝に、^{あさ}南から^{みなみ} 鵬^{すずしいかぜ} が起つ^た)

不駛亦不遲、(駛^{はや}も不^なく、亦^また遅^{おそ}も不^なく)

飄飄吹我衣。(飄飄と私の衣を吹く)

重雲蔽白日、(重なる雲が白日を蔽って)

閑雨紛微微。(閑かに雨が紛れて微微とふる)

流目視西園、(目を流して西の園を視ると)

曄曄栄紫葵。(曄曄と紫の葵が栄えている)

於今甚可愛、(今に於ては甚だ愛でる可きものであるのだが)

奈何当復衰。(当と復た衰えてしまうのを奈何もできない)

感物願及時、(物に感じて、(そのもっともよい)時を及えたいと願うが)

每恨靡所揮。(毎も恨ごとに揮っても(飲むべき)所の(酒が)靡いのだ)

悠悠待秋稼、(悠悠と秋の稼を待っていたところ)

寥落将賒遲。(寥く落てしまって、将ら 賒 ものを 遅 ってしまったのだった)

逸想不可淹、(逸る想いは淹め可が不)

猖狂独長悲。(猖狂おしく独り長く悲しむのである)

(蘇軾)

長春如稚女、(長春花は若い娘のように)

飄飄倚輕颺。(飄飄と軽やかな風に寄り添っている)

卯酒暈玉頬、(朝の酒に玉の 顔 をぼっと染めて)

紅綃卷生衣。(おろしたての紅い衣を巻いたかのよう)

低顔香自斂、(顔を垂れて香りを内におさめ)

含睇意頗微。(目に思いを含ませた様子はなかなか微妙である)

寧当娣黃菊、(菊と比べたらその姉とすべきであって)

未肯似戎葵。あおい(葵と比べてもその妹というわけではないだろう)

誰言此弱質、(見かけはいかにも弱々しいだが)

閱世親盛衰。(世の盛衰を実は見守っているのである)

頽然疑薄怒、(つんとして少し怒っているようにも見えるので)

沃盥未可揮。(化粧をするための水を差し出すのをはばかれもする)

瘴雨吹蛮風、(ところが、熱気を含んだ雨と南の荒い風が吹いて)

凋零豈容遲。(凋んで枯れてしまうのをとどめることはできなかった)

老人不解飲、(老人は飲んで思いを解くこともできずに)

短句余清悲。(不十分ながらもこの悲しみを短いに句に託すしかない)

■蝶恋花

以下の3篇の詞は制作の時期は明らかではなく、ここに並べるのは必ずしも適切ではないだろう。王朝雲おうちょううんと関連させて鑑賞することも不可能ではないかもしれないと考え、上の詞と合わせて読むことにする。

記得画屏初会遇。(憶えています、屏風の前で初めて会ったときのことを)

好夢驚回、(でも、好い夢は覚めてしまって)

望断高唐路。(あのときへと行く路はもう断たれてしまいました)

燕子雙飛来又去、(二羽の燕が飛んできてはまた去り行きます)

紗窓幾度春光暮。(窓辺で春はこうして幾度となく暮れてしまうのです)

那日繡簾相見処。(あの日、刺繡をほどこした簾のもとで会いました)

低眼佯行、(あなたは眼を伏せ、行ってしまおうとして)

笑整香雲樓。(でも、にっと笑って髪を整えたのでした)

斂尽春山羞不語、(それがすっかり終わっても、恥ずかし気に何も言いませんでした)

人前深意難輕訴。(この深い意は軽々しくは訴えられないからと)

(少女とのはかない恋の追憶の歌である)

■蝶恋花

暮春のころの若い娘の微妙な心の陰翳を歌った詞。

蝶懶鶯慵春過半。(蝶だって気だるいの、鶯だってそうよ。春はもうすぐ終わりなのですもの)

花落狂風、(花は落ちて、ぜんぶ風のせいなの)

小院残紅滿。(お庭は紅いの、散った花びらでね)

午醉未醒紅日晚。(お昼のお酒が醒めないうちから日が沈んでゆきます)

黄昏簾幙無人卷。(黄昏になっても、カーテンをかけることもしないのよ)

雲鬢鬆眉黛淺。(髪は崩れたまま、黛も中途半端のまま)

總是愁媒、(何をしても悲しくなってしまうから)

欲訴誰消遣。(誰かすっかり消しちゃって下さいな)

未信此情難繫絆。(こんな気持ちはきっとどうにもならないわよね)

楊花猶有東風管。(楊の花だって風のまにまに飛んで行かないのですもの)

■点絳脣

追憶の詞。

紅杏飄香、(杏の^{あか}紅い花から香りがただよい)

柳含煙翠拖輕縷。(柳は緑の煙のなかで糸のように軽やかに揺れています)

水辺朱戸。(あの人の部屋は水辺にあるのです)

尽卷黃昏雨。(きっと窓は開いたまま、夕暮れの雨になっても)

燭影搖風、(蠟燭の影が風に揺れています)

一枕傷春緒。(枕につこうとしても春を傷む心がおさまりません)

歸不去。(帰りたいのに)

鳳樓何處。(あの人の家はどこなのでしょう)

芳草迷歸路。(草が茂って路に迷ってしまうのです)

■陳太初尸解

蘇軾のところにまた「異人」が訪ねて来た。そのことを記した文章は実はすでに第6章 213 ページで見えていたのだが、ここに再掲する。蘇軾と同郷の眉山眉山県出身の道士陸惟忠は、15 年前にも黄州に流されていた蘇軾の前にふらりと現れ、そしてまた惠州にも現れたのである。

(この文章が書かれたのは翌年であるが、陸惟忠が来たと推測されるこの時期に読んでおこう)

私は八歳で小学に入り、道士の張易簡を師とした。童子およそ百人がいたが、師は私と陳太初ばかりをいつも褒めていた。陳太初は眉山の市井の子であった。

私は成長するにつれて学問がますます進み、ついには科挙にも制科にも合格した。一方で陳太初は田舎の小役人になった。

その後、私は黄州に流され、そこに眉山の道士の陸惟忠が蜀から訪ねてきた。あれこれ話すなかで、「道を得た者に陳太初がいます」というので、詳しく尋ねてみると、我が同学の陳太初その人であった。

昨年(紹聖3(1096)年)、私は惠州でまた陸惟忠に会った。陸惟忠はこのように言った。「陳太初はすでに尸解しました。蜀の人の呉師道が漢州の知事であったときのことです、陳太初は初めて知事に会いにきて、しばらくその客人となっていました。ちょうど元日の朝に、陳太初は知事に衣食と餞別の錢を求め、別れを告げました。陳太初は受け取ったもの全てを町の貧しい人に与え、城門の下に座り、そのまま死

でしまいました。それを聞くと、知事は役場の小使いに、亡骸を担ぎ出して野原で焼くよう命じました。小使いは亡骸のもとに行き、『このクソ道士め。なんだって元旦からこの俺さまに死人を担がせたりなんぞさせるのだ』と罵りました。すると、陳太初はにやりと笑い、『おまえを煩わせたりはせん』と言って、門から金雁橋きんがんきょうのたもとまで歩き、そこで座り、改めて死にました。小使いがそれを焼くと、もうもうと立ち昇る焰と煙の中に、くっきりと陳太初の姿が浮かびあがりました。見物に出た町中の者がそれを見たのです」

■書陸道士鏡硯

陸りく惟忠い ちゅうが携えている鏡と硯について記した短文。

陸道士は一つの鏡と一つの硯を蓄えている。どちらも宝とすべきものである。硯は頭が円い斧形、色は青、背に文字が刻まれている。墨によく克ち、筆によく合う。恐らく唐とう以前のものであろう。鏡は古く、背の文字を読むことはできない。

我が家にも鏡があって、ちょうどよく似ている。その銘に、「漢かんに善い銅はくようがあつて白陽から出る。これを取つて鏡とした。清く明るい(原文は「清如明」)。左に竜、右に虎、これによって鏡を守らせる」。この銘から考えると、この鏡は漢代の物なのだろうか。私はかつてそれを蘇頌そ しゅうに見せたことがある。蘇頌は博学をもって世に知られた人である。蘇頌はこのように言った。「この鏡は古いもので、これ以前のは皆このような作りで、『禹鼎象物』の法を受け継いだものでありましよう。『白陽』という地名はい

まはありません。^そ楚に^{はくこう}白公がいて、^{なんよう}南陽の^{はくすい}白水を取ってそこに町を作りました。白陽とはその白水のことでしょうか。漢の時代の人は『而』と『如』を通用させたものです。鏡の中心はわずかに盛り上がっていて、鏡面は小さくて四角い。学者は^{しゅうしんきょう}聚神鏡であるあるという。

^{へい し}丙子十二月一日、書く。

(いくつか意味のわからない用語があるが、そのまま記しておく)

■書陸道士詩

^{りく い ちゅう}陸惟忠は詩が巧みで、諧謔の人であった。そのことを示す短文。なお、
陸惟忠は^{いん}筠州に蘇轍を訪ね、そこで^{ご ふく こ}呉復古(本章119 ページなど)と一緒に
なって^{けい}惠州にやってきたようである。陸惟忠も呉復古も自由に天下を往
来している。

^{ちやう こう}長江以南の人は^{ばん ちゅう はん}「盤遊飯」を作るのを好む。^{すづりざかな}鮓、^{ぼしにく}脯、^{なます}膾、^{あぶらこ}炙などいろいろな
のを飯の中に埋めこんだものである。俗にいう「掘得窖子」(^{けつとくこう し}穴を掘れば何でも出てくる)
というものである。

^{ら ふ きん どんざい}羅浮山の曇穎はおよそ食べられるものを^にごたまぜにして^{こくどうこう}煮て、これを「谷董羹」(なん
でもスープ)と名付けている。客人はみな「結構であります」といって褒める。

^{りく}詩人の陸道士は一聯の句を出して、このように言った。

投醪谷董羹鍋裏、(鍋に何でも投げ込んだスープがあるなら)

掀箸盤遊飯碗中。(椀をほじれば何でも出てくる飯もある)

とうばこじ こうしゅうさい
東坡居士は大いに喜んで、江秀才にそれを記憶して皆に教えて笑いの種とするように言った。

このとき、呉復古はこうに言った、

「この羹スープは仏様にお供えいたしましょう」

てきほうきょう
翟逢享は何も言わずに、ただ唾をぐりと飲み込むだけであった。

へいし
丙子十二月八日。

どんえい こうしゅうさい
(曇頴は本章 112 ページ以来何度か見ている。江秀才はどのような人物であるのか不明。翟逢享てきほうきょうは、白鶴峰はくかくほうに作りつつあった新居の西隣の人物で、後の詩では翟秀才と記されている。2人の秀才は科挙に応じようと勉強に励み、詩を詠むような教養を具えた人であるのだろう。蘇軾には、どの土地に行っても、いろいろな階層の人々が出入りするサロンの主人になるという特技があった)

■書李承晏墨

りく いちゆう ごふくこ
陸惟忠は宝とすべき鏡と硯を持っていたが、呉復古は墨の逸品を携えていた。

しだいふ
近ごろの士大夫には墨を造る者が大勢いて、墨工もまたその技を尽くすのだが、

ちようぐう りていけい ほんこく ちようこく
張遇、李廷珪の古い墨には及ばない。潘谷と張谷がその本物かと思わせるようなものを作りはするが、その形態を竊み取っただけのものでしかない。

呉復古ごふくこが出したこの墨は、孫準そんじゆんの遺したもので、李承晏りしやうあん(李廷珪の甥)の造った本物であるという。その色を考え、他の数品と比較して、真偽を定めることができるだろう。

紹聖しょうせい丙子十二月二十一日書く。

(五代十国時代の南唐なんとうに仕えた李廷珪りていけいの墨は極上品とされ、垂涎すいぜん的であった。その甥が造ったものならかなりの品であるのだが、蘇軾そしは真偽を保留している)

■次韻子由所居六詠

陸惟忠りくゐちゆうと呉復古ごふくこが携えてきたのだろう、蘇軾そしは弟が筠州いんの住まい様子を詠んだ詩を得て、それに次韻した。6首のうちの4首を訳す。

(蘇軾そしの詩は白鶴峰はくかくほうで建築が進みつつあった新居を詠んだもの。新居はおおむねできあがっていて、残る工事は井戸を掘ることであった)

其の一

部屋の前に百合を植えた、

瑪瑙めのうの盤があちこちで揺れるかのよう。

部屋の後ろに菊を植えた、

金を砕いて匙しにして並べたかのよう。

草木にはきつと情があるのだろう、

季節の盛りを過ぎたころにも人を慰めようとしてくれる。

ゆうじん

幽人(ひっそりと暮らす人＝蘇軾)は独り楽しみ、

世上の旅の難しさなどは知らずにいる。

其の三

静かな住まいに古めかしい趣がある。

井戸は西隣と分かち合っている。

夏の盛りには、

一杯飲んだくらいでは涼しくならないので、

人々がいつまでもそこでがやがや騒いでいる。

先生(蘇軾)はじっと喉の渴きを我慢して、

皆が散り散りになってからおもむろに酌みにゆく。

ゆっくり待っただけに、味わいは格別である。

(西隣の人とは先に名を見た^{てきほうきょう}翟逢享である)

其の四

先生は素焼きの器に飯を盛る。

人に与えられるようなものは何もない。

酔客を何でもって楽しませるのかというと、

石段の下の花を嗅がせるのである。

井戸の水は西隣と分け合い、

竹林の陰を東の家に借りる。

行脚の僧が何も携えずに、

ただ一身を天涯に寄せるのと同じである。

其の六

新しい住まいは瓦を葺いたので、

もう風雨の憂いはなくなるだろう。

ろうちく 籠竹の横に はんのき 檻を栽えたので、

ちっぽけな詩をそこで詠むことができるだろう。

あとは、かん 漢の時代 じし の貳師將軍を煩わして、

剣でもって山を刺してほとばしる水を出してもらっただけだ。

百尺の深さまで掘り下げて、

二本の綱を牛に載せて運んできて釣瓶に使おう。

(残る工事は井戸を掘ることだと、かん 漢の じし 貳師將軍の故事を引いて詠んでいる。あるとき町を敵に囲まれ、水が得られなくなって人々が苦しんだときに、將軍が剣で山を刺すと、水がほとばしり出たのだった)

■和陶歳暮作和張常侍

とうえんめい 陶淵明の「ちやうじやう 歳暮れに張常侍に和す」という詩に和した。張常侍(常侍は官職名)は陶淵明の親類であるという。蘇軾の作には序文がある。

序(蘇軾)

十二月二十五日酒盡、取米欲釀、米亦竭。

時吳遠遊、陸道士客於余、因誦淵明歲暮和張常侍詩、亦以無酒為嘆、乃用其韻贈二子。

(十二月二十五日、酒がなくなった。米を取って酒を造ろうと思ったが、米もまた尽きてしまった。

このとき、^{ごえんゆう}吳遠遊と^{りくどうし}陸道士が客人として私のところにいた。^{ちやうじやう}陶淵明の「歳暮に張常侍に和す」の詩を読み、私もまた酒のないことを嘆いたのだった。そこでその詩の韻を用いて詩を作って二人に贈った)

(2人の客人の^{ごえんゆう}吳遠遊は^{ごふくこ}吳復古、^{りくどうし}陸道士は^{りくいちゆう}陸惟忠のことである)

(陶淵明)

市朝悽旧人、^{まち} (市や ^{ちやうてい} 朝の(このごろ)で ^{ふる} ぎごとは ^{ひと} 旧い人の ^{いた} ころを悽ませる)

驟驥感悲泉、(^{はやいうま} 歳月は ^{ひせん} 驟驥のように(走りゆき)、^{かん} 悲泉(日の落ちるところ)があるのを ^{かん} いたみ感じる)

明旦非今日、^{あした} (明の ^{あさ} 旦はもう ^{きょう} 今日では ^な 非いのだ)

歳暮余何言、(^{とし} 歳の ^く 暮れに ^{わたし} 余は何も ^{なに} 言えない)

素顔斂光潤、(^す 素の ^{かお} 顔からは ^{ひかり} 光も ^{うるお} 潤いも ^{なぐさ} 斂ってしま)

白髮一已繁、(^{はくはつ} 白髪だけが ^{ひとえ} 一に ^{すで} 已に ^{たか} 繁あるのだ)

闊哉秦穆談、(^{おかしな} 闊 ^な ことであつた ^{しん} 哉、^{ぼくこう} 秦の穆(公)が ^{かた} 談つたのは)

旅力豈未愆、(^{せぼね} (自分に限って)は ^{りき} 旅の力は ^な 豈て ^な 愆われは ^な 未いと(ありえないことを) ^な いったのだ)

向夕長風起、(夕べに向って長からの風が起り)

寒雲没西山。(寒ざむとした雲が西の山に没れる)

厲厲氣遂嚴、(厲厲と気が遂に厳しくなり)

紛紛飛鳥還。(紛紛と飛ぶ鳥は還ってゆく)

民生鮮常在、(民の生が常のように在ることは鮮く)

矧伊愁苦纏。(矧伊や愁いと苦しみに纏つかれているのである)

屢闕清酤至、(屢しば清酤が至ることが闕けてしまい)

無以樂當年。(それで以て当の年を楽しむことができ無いている)

窮通靡攸慮、(窮ったり通ったりするのは慮 おもひ憂いものでは靡いのであって)

憔悴由化遷。(憔悴えるのは化遷に由っておけばよい)

撫己有深懷、(己を撫って深い懐いがある)

履運增慨然。(わが運りあわせの履に慨然が増すのである)

(この詩は陶淵明が54歳のとき、晋朝の安帝が劉裕によって殺された年の作であると推測されている。劉裕はその翌年、晋朝から皇位を奪って自身が皇帝になる。陶淵明は引退して10年余り経っていたが、世の変転に無関心だったわけではなく、不正義のはびこる世の中に対して自身が無力であることを、ときにはこうして深く嘆いていたのだった)

(蘇軾)

我生有天祿、(我が人生において酒はいわゆる「天から与えられた祿」のようなもの)

玄膺流玉泉。(たとえそれがなくても玄膺^{げんよう}(唾液腺)からは自然と玉泉^{ぎょくせん}(唾液)が流れ出る)

何事陶彭沢、(陶淵明先生はどうしたことか)

乏酒每形言。(酒が乏しいと毎度毎度言葉に出している)

仙人与道士、(仙人とか道士とかいうものは)

自養豈在繁。(自ら養って、あれがまいとかごちゃごちゃいったりしないはずだ)

但使荆棘除、(自身の内にある荆棘^{いげん}のようなものを取り除いてしまえば)

不憂梨棗愆。(よい梨棗^{かじつ}が稔らないとか心配する必要はないのだ)

我年六十一、(我が年齢は六十一だ)

頽景薄西山。(頽景^{ゆうひ}がもう西の山に迫っている)

歳暮似有得、(歳の暮れになって何か得たものがあったのか)

稍觉散亡還。(散り散りになっていたものが還ってきたような気がする)

有如千丈松、(千丈の高い松も)

常苦弱蔓纏。(いつもは蔓がからまってくるのに苦しんでいるけれど)

養我歳寒枝、(歳の終わりの寒さにも己の枝を養っているなら)

会有解脱年。(きっと(蔓が枯れて)解脱のときが来るのだ)

米尽初不知、(米がなくなったのを知らずにいた)

但怪饑鼠遷。(ただ飢えた鼠どもがよそに行ってしまったのを変だとは思っていた)

二子真我客、(貴君ら二人はまことに我が客人である)

不醉亦陶然。(酒で酔わなくても陶然^{とうぜん}としているのだから)

■記惠州土芋

上の詩やその前の詩に第四首にあったように、蘇軾はぎりぎりの生活をし、最後の蓄えを使い尽くすようにして新居を整えたようである。これは、年末に呉復古とともに芋を炙って食べたという短文。

岷山(蜀中の山)のふもとでは、凶年には蹲鴟(大きな芋の類)を食糧とする。これを食べると疫病に罹ることもなく、人によいものである。

『本草』には芋、土芝について、「気を益して饑を充たす」と記してある。惠州にはそれらがたくさん産するのだが、食べても病を免れるわけではない。

呉復古はこうに言った。

「それは芋の罪ではありません。芋は、皮を取り去り、湿った紙で包み、火であぶります。それを熱いうちに食べると、ふかふかできめこまやかで、よく気を益して饑を充たすのです。いま惠州の人々は皮と一緒に水で煮て、冷ましてから食べます。これでは少し堅くて味も薄くなります。病をおこすのも当然でしょう」

丙子の除夜の前の両日、夜に腹がひどく減ったので、呉復古が芋を二本あぶって食べさせてくれた。非常にうまかったので、そのことを書いておく。

■除夕訪子野食焼芋戯作

同じく呉復古とともに芋を炙って食べたときに戯れに詠んだ詩。

ひゅうひゅうと、風が松に鳴る。

春とはいえ、うすら寒さを感じる。

ぎゅるぎゅると、

それと伴奏するように、

我が飢えた腸が夜中に至って鳴り出す。

呉君は芋を牛糞の火の中に放り込んで焼いてくれる。

さながらこれは、

かの貧乏坊主の食い残しをさらに食らうようなものではなからうか。

（(1) 終わり句の原文は「山人更吃懶残残」(山人 更に吃つす懶残の残りを)で、「山人」とは唐代の中頃に宰相となった李泌さんじん き らいざん のこのことで、李泌は玄宗皇帝の治世の末期に政治が乱れたときに世間から離れて山に籠っていた。そのときに人の食べ残しを食らって生きる懶残らいざんという乞食坊主と往来するようになった。懶残はあるとき李泌のもとを訪れると、火の中から焼けた芋を掘り出して喰らい、「これは決して他言しませんように。そなたは十年後に宰相になるであろう」と言った。蘇軾は自分を李泌に、呉復古を懶残に比べつつ、呉復古の食べ残しの芋を食うようでは、李泌のようになる見込みはないと自嘲したのであろう。(2) 訳者が依拠する孔凡礼『蘇軾年譜』(1998年)は、この詩はこれより2年後に詠んだとしているが、ここに置く方が適切であると思われる)

■夢斎銘

紹聖4 (1097) 年、蘇軾 62 歳。

蘇軾^{けい}は惠州^しに来て3度目の正月を迎えた。そこに芝上人^{どんしゅう}（曇秀）（本章219ページ）がふらりとまた現れた。前回芝上人が惠州にきた折に、蘇軾は上人の居室に「夢齋^{ぼうさい}」という名を与えていて、上人はその後で筠州^{いん}にいる蘇轍を訪ね、『夢齋の銘』を作ってもらった。その銘を携えて上人はまた戻ってきたのである。蘇軾は銘に以下の序文を書き添えた。蘇軾に一筆したためもらうためなら、筠州から惠州へ約700キロの道も厭わなかったのである。

至人^{しじん}（最高の境地に達した道人^{どうじん}）は夢を見ない——

それについてある人がこう言った。

「漢^{かん}の高宗^{こうそう}も、周^{しゅう}の武王^{ぶおう}も、孔子^{こうし}も皆が夢を見ましたし、仏陀^{ぶつだ}も夢を見ました。夢を見ているのは覚めているのと異なるものではなく、覚めているのは夢を見ているのと異なるものではありません。夢はすなわち覚めていて、覚めているのはすなわち夢であるのです。どうして夢を見ないなどということがあてしょうか」

晋^{しん}の衛玠^{えいかい}は少年のころに楽広^{がくこう}に夢について尋ねた。楽広は「夢とは『想』^{そう}です」と答えた。衛玠は「夢を見るのは肉体や精神が外部と接していないときです。どうしてそれが『想』であるのでしょうか」とさらに尋ねた。楽広は「それは『因』^{いん}によるのです」と答えた。

ある人がその「因」の説について尋ねたので、東坡居士^{とうばこじ}がこのように言った。

「人の心は、塵（現実のうたかた）に依拠してそこにあるのであって、心だけが独立して

あるのではありません。塵の生滅とともに心は変化し、ある一念がそのままずっと留まるということはありません。夢を見ているのと覚めているのとの間にも、塵と塵が入れ替わり、数々の変転の後には、そのもとのものを失ってしまいます。肉体も精神も外部と接触していなくても、ここに『因』(変転の連鎖)がないとはいえないであります。たとえば、ある羊飼いが寝ているとしましょう。羊を『因』として馬を念います。馬を『因』として車を念います。車を『因』としてそれを覆う蓋を念います。ついには音楽が奏でられる中で蓋の下に身を置く王公となった夢を見ます。そもそも羊飼いと王公とは遠く隔たっています。しかし、『因』から『想』がこのようにして生じることは少しも怪しむに足りないなのです」

居士が最初^しに芝上人と知り合ったのは夢の中でのこと。夢に見たことを求めて現実に得て、今に至って二十四年、その間に五回会ってきた。会うごとに視て笑うのは、ここはいったいどこなのか、今日はいったい何の日なのか、私は上人はいったいどういう人なのか。

上人の寓居するところに居士は『夢齋^{ぼうさい}』と題し、弟がその銘を作った。銘に曰く、

法身充滿、处处皆一。幻身虚妄、所至非実。

我觀世人、生非実中。以寤為正、以寢為夢。

忽寢所遇、執寤所遭。積執成堅、如丘山高。

若見法身、寤寢皆非。知其皆非、寤寢無為。

遨遊四方、齋則不遷。南北東西、法身本然。

((1) 夢に見たことが現実に起こったと、蘇軾は何度が記している。蘇軾は夢と現実を

明確に分ける境界線はないと考えていた。(2) 芝上人^しには24年前に夢で会ったのが最初だとあるが、それは黄州^{こう}にいたときだったことになる。かつて揚州^{よう}で、蘇軾^そは芝上人と3回会っていると歌っていた(第10章258ページ)から、今回は惠州^{けい}で2回目で、合計5回である。(3) 弟が作った銘は原文をそのまま掲げておく。やはり夢も現実も同じだという趣旨であろう)

■書劉景文詩後

かつて杭州^{こう}で親しくした劉季孫^{りゅう き せん}(字は景文^{あざな けいぶん})が任地先の隰州^{しつ}で亡くなり、困窮^{こんきゆう}に陥った遺族のために賻贈^{ふぞう}(喪に服している家族への贈り物)を賜るよう蘇軾^そが朝廷に願い出たことは第10章209ページで見た。芝上人^{し どんしゅう}(曇秀)はどれほど蘇軾^その心を喜ばすことを知っていたのか、旅の囊^{ふくろ}から劉季孫の詩を取り出して見せた。蘇軾^そは感動の余りこの短文を記した。

劉季孫^{りゅう き せん}には英偉^きの気があり、三国時代^{し ちんとう}の士、陳登^{ちんとう}のようであった。この詩を読むと、ありありとその姿が想見される。劉季孫はまた若くして隰州^{しつ}で亡くなった。哀しいかな、哀しいかな。

曇秀^{どんしゅう}は道を学び、人の愛憎から離脱した人である。しかし、この詩を出して見せてくれて、私とともに泣いたのであった。

丁丑^{ていしゅう しゅうせい}(紹聖四年)正月六日。

(1) 劉季孫^{りゅう き せん}の詩は残念ながら伝わっていない。(2) 三国時代の陳登^{ちんとう}は、蜀^{しよく}を建てた

りゅう び

劉 備が他に匹敵する者がいないと絶賛した人物)

■弁道歌

「道」について弁じた詩。「道」といっても、この詩はもっぱら練丹術れんたんじゆつのことを詠んでいて、「詩をもって論じることではなく、蘇軾の詩集に入れるべきでない」との評もある。もとより訳者の理解を超えた内容で、全体で42句あるなかから冒頭の10句だけを原文と「ずっぽ訳」を掲げる。いかにチンプンカンプンであるかわかるであろう。蘇軾は仏教にしろ練丹術にしろ、その世界特有の語彙を自家薬籠中のものとして自在に詩に詠んでしまう、その力技はまさしく超絶的である。ただし、この詩の最も肝要な部分は化学反応式を使って記述すれば何の苦もなく理解できるはずのものである。なお同じころに陳守道ちんしゅどうという道人に贈った、やはり練丹術について詠んだ詩があり、同様にきわめて難読な作品である。

北方正氣名祛邪、東郊西応帰中華。

離南為室坎為家、光凝白雪生黄芽。

黄河流駕紫河車、水精池産紅蓮花。

赤竜騰霄驚盤蛇、姪女含笑嬰兒呀。

十二樓瞰靈泉霏、華池玉液陰交加。

北方に正しいき気があって「祛邪」と名がついている。

東と西の方角が定まると、正しい気は中華へと帰るので、

北に向かって家を建て、南に向かって部屋を作り、

正しい気をそこに導くと、

白雪の光を凝らし、黄色い芽(液)が生じる。

ここに、^{こうが}黄河の流れは^{し が しや}紫河車を載せ、^{すいしやうち}水精池からは^{ぐれん}紅蓮の花が生じる、

(つまり、黄色い液から激しい化学変化によって生命の本質を支えるものができてく)

そのために、赤い竜が天に昇ってわたかまる蛇を驚かすばかりに火をおこし、

^{たじょ}姪女(丹砂)と^{じゅうに ろう}嬰兒(鉛)を煉り合わせる。

かくて、^{じゅうに ろう}十二楼(人の耳目)は^{しやう}霊なる泉が湧き上がるのを見下ろし、

^{かち}華池(溶けた鉛と^{ぎよくえき}硫化水銀)の玉液に陰の作用が加わるのである。

■呉子野絶粒不睡過作詩戲之芝上人陸道士皆和予亦次其韻

「類は友を呼ぶ」の諺の通り、蘇軾のもとには異人、奇人が集まってきて

いて、このときには^{ししやうにん}芝上人(曇秀)、^{どんしゆう}呉復古(字は子野)、^{ごふくこ}陸道士(字は子野)、^{あざな}蘇軾(字は子瞻)、^{しや}陸道士(字は子瞻)

^{ちゆう}忠)、^{ちんしゆうどう}陳守道といった面々が顔を揃えていた。呉復古は穀物を絶って眠ら

ずにいるという仙人になるための術を試みていて、それについて蘇軾が

戯れに詩を詠んだので、芝上人と陸道士が和し、蘇軾も次韻した。

^ご呉君は不死の「^{ごつう}五通の仙」となって、

^{むしやう}無生の一大の縁に^{えにし}終わりを告げようとしている。

呉君が眠らずにいるのは、

孤独の鶴が真夜中の時を知って鳴くかのよう、

呉君が穀粒を絶っているのは、

蚕が成熟して三度目の眠りに入っているかのよう。

呉君は、芝上人ししょうにんが人間世界を夢に譬えて理解しようとしているのを憐れみ、

呉君は、私がいも変わらず酔っては禅の真似事をするのを大目に見ている。

江や山と会うのもとからの故のあること、

詩や酒を新年の楽しみとしても、

まあよろしいのではなかろうか。

((1)「五通ごつうの仙せん」とは、仏教が「六通ろくつう」(六つの超越的な力)を説くのに対して、神仙術は不死を求め、生も死もともに超越するものではないので、一つ足りないということによる。(2)「無生むしょうの一大えにしの縁」とは生々流転の因果を指すのであろう。(3)芝上人ししょうにんと夢については上の「夢斎ぼうさいの銘」で見ている(本章329ページ)

■書過送曇秀詩後

芝上人ししょうにん(曇秀どんしゅう)が惠州を発つことになり、蘇過そかが送別の詩を詠んだ。蘇軾はそれを書いて短文を添えた。

三年避地少経過、(私たちはもう三年の間、この遠隔地でじっとして)

十日論詩喜琢磨。(一つの詩を十日間も喜んでこねくりまわしている)

自欲灰心老南嶽、(もはや南方の山で心も灰にしておもうとしていたところ)

猶能滿足慰東坡。^し(芝上人は足を腫らして^{とうば}東坡先生を慰めにきた)

来時野寺無魚鼓、(来るとき、田舎の寺には鳴らすべき太鼓もないくらいにさびれ)

去後閑門有雀羅。(去るとき、門の前は雀を捕る網を張れるほどにひっそりしている)

從此期師真似月、(これより師はまさに月ようになって)

断雲時復掛星河。(ちぎれ雲とともに天の川にかかるであろう)

私は^{こうりょう}広陵(揚州)にいたときに^{どんしゅう}曇秀を送る詩を作り、そこに、

老芝如雲月、(芝上人は雲間の月のように)

炯炯時一出。^{あかあか}(時折、炯炯と光を現す)

と、あった。

今、^{けい}曇秀はまた^{やまい}惠州に来て、私に会ってくれた。私は病にあって、ずっと詩を作っていない。息子の^{そか}蘇過は句を捜すことくらいはどうかできて、時に見るべきものもある。この一篇は^{はてさて}咄咄、老人には迫りくるものがある。そこで特にこれを書いて、貴君の^{ふくろ}旅の^{ふくろ}嚢を満たそうと思う。

^{ていしゅう}丁丑(紹聖四年)正月二十一日。

^{よう}(揚州での蘇軾の詩は第10章258ページで見ている)

■縦筆

筆に^{まか}縦せて作ったという詩。

我が白髪頭はまことに寂しく、
霜を帯びた風が吹きすさむ秋の野原のようだ。
この病がちの身を、
ちっぽけな家の藤蔓の牀に寄せている。
そうだ、寺の坊さんに報せておくれでないか、
「先生はちょうど春の睡りのさなか、
明けの鐘は軽くついてもらえませんか」
と。

(結びの二句の原文は、「報道先生春睡美、道人輕打五更鐘」(報道せよ 先生の春睡の
美なるを、道人 軽く打て 五更の鐘を)。本当か嘘かはわからないが、この詩が都に伝
えられると、新法党の高官は、蘇軾はこんなにも呑気に暮らしているのではないかと怒り、
さらに遠方に流すことを決めたという話がある。この詩がなくても、惠州での蘇軾の
日々を聞くなら、蘇軾を憎む人々は、痛め付け方がまるで足りないと思ったであろうこ
とは容易に推測できる)

■白鶴峰新居欲成夜過西鄰翟秀才二首

詩題は「白鶴峰で建築中の新居が完成間近となり、とある夜に、西鄰の翟
秀才を訪ねた」。白鶴峰に新居を作っていることは本章 279 ページから何
度か見ていて、いよいよ完成間近となった。翟秀才は本章 320 ページで
見た翟逢亨である。また、新居の西側には林行婆という年配の女性がい

たことがこの詩からわかる。「行婆」は家にいて仏に仕える女性、つまり
念仏婆さんである。

其の一

りんぎょうば
林行婆の家は戸を閉ざしたところ、
てき
翟先生の家はまだ閉めずにいる。
黄昏の後にも残る細く曲がった月、
山の中腹に我が新居がぼんやり見えている。
我が煩悶は、
帯のように流れる川に繋いで流してしまおう、
我が愁いは、
剣のように鋭く尖った山でかち割ってしまおう。
ちゅうげん
北に中原を望むにしてもそこに帰る日はない——
隣家にとる明かり、
村で臼を舂く音、
その間を日々行き来するのだ。
ちゅうげん らくよう こうが
（「中原」は洛陽を中心とした黄河中流域を指し、そこが中華文明の本来の中核地帯で
そう かいほう
あると認識されていた。宋の都の開封も「中原」に含まれる）

其の二

りん

林ばあさんがもう戸を閉めてしまったのは、

隣りにくる大酒飲みから樽の酒を守るためであろう。

てき

翟先生の戸がまだ開いているのは、

隣りから明かりが漏れくるのを待って本を読もうとしているからだろう。

かわ

私は江と同じ深さまで百尺の井戸を掘るつもりでいる。

氷のような水を分け合って夏も涼しく一緒に過ごせるであろう。

私は、鶴に变じて都に行き矢に射られてしまった仙人であるのか、

それとも前世は修行僧であったのか、

はくかくほう

後々の人よ、この白鶴峰の家は訪ねるまでもない、

私がいま行き来しているのは夢の中でのことであるのだから。

ひつたく

きょうこう

(この詩は、畢卓(隣家に忍び込んで酒を盗み飲みした人物。第8章4ページ)、匡衡(家が

貧しくて隣家から漏れくる光で勉強した人物)、徐佐卿(鶴となって皇帝の庭に遊びに行き矢で

ぼうかん

射られてしまった仙人)、房琯(己の前世は禅僧であったと知らされた人物、第10章3ページ)、

おうさん

王桀(国が滅んで他郷に住んで望郷の詩を詠んだ人物)といった人々の故事を畳みかけるよう

に用いて、それはそれで蘇軾らしさが溢れているのだが、故事について詳しく吟味

するのは煩わしいので、大意が通じる程度にゆるく訳した)

■白鶴山新居鑿井四十尺遇盤石石盡乃得泉

はくかくほう

うが

わだかま

あ

詩題は「白鶴峰の新居で井戸を鑿ち、深さ四十尺で盤る石に遇い、それ

をつらぬいて石が尽きたところで泉を得た」。前の詩で見たように蘇禪は
新居で井戸を掘り、ついに水が出たのだった。

海辺の国は蒸し暑さに苦しめられる。

新しい住まいには高くて涼しいという利点がある。

登ったり降ったりする労力と引き換えに、

この乾燥したところで眠れることを得ようというのである。

ただし、気に掛けていたのは、

かわ
江への路は急峻であるから、

腰を屈めて水を汲んでこななければならないことだ。

そこで、四人の男にこつこつと屹と働いてもらって、

えいれいこうしよ
礪礪と重なり合う高まりを切り下げてもらった。

十日ほどで深さ一丈に達すると、

下に青くわだかまる石があった。

一日中、火をほとばしらせて石を穿ったけれど、

いつになったら水が飛び出してくるのが見られるのやら、さっぱりわからない。

そこで、酒と食事をより豊かにして、

四人の男につち椎をより強く、きり鑽をより鋭く穿ってもらった。

ついに山の石は尽きるときがきたが、

それでも私の思いはまだたけなわ闌に達しなかった。

今朝ボーイになって僮僕が飛んできて、

「岩の下はこねて取れる黄色い土になっています」

と、喜び勇んで言った。

もう朝のうちに、瓶びんに雪の融けの水みづのようなお冷を汲み取ることができ、

夕方までには、大きな甕かめに凍てつく早瀬の水を溜め込むことができた。

我が生き方はいつもこのようなものだ……

どこに行っても艱難のないことはない、

その後に得られる一勺の水、

これもまた天たまものの賜である。

肱を曲げてごろり横になり、

あり余る飲びにひたるのである。

(井戸いどといえば、黄州おうしゅうの東の坡おかで古井戸を発見したときの飲びを歌った詩を第6章154ページで見ている)

■白鶴新居上梁文

2月14日、白鶴峰はくかくほうの新居がいよいよ完成し、蘇軾はこの文を記して、神々に捧げた。

鵞城がじょう(惠州)の万戸ばんこは二つの川がの間に散在し、白鶴はくかくの一つの峰いざおが千の巖の上に
独り立つ。海には浮動する山が出没し、そこから仙人あがが飛び騰とつてこの峰との間を

往き来する。古代にはここに斎宮さいぐうがあって福地ふくちと呼ばれていた。いつしか茂る草に覆われ、狐狸こりの棲みかとなった。ものには興廃あはれがあり、時に隠れもし顕れもするである。

東坡先生とうばは万里の南に遷り、三年の間、惠州に寓居してきた。もはや故郷に帰る歓びを得ようとの心が起こることもなく、ここを終焉の地とする計画を立て、木を切つて山を越え、江を遡かえってその北のここへと来た。古びた村を隣りとし、南の高まりに垣根を廻らせ、船の帆が天の涯に消えるのを見送り、沈み行く月を枕から眺めようとする。王羲之おうぎしが隠棲して筆を洗ったような池を開き、葛洪かつこうが山に入って丹藥たんやくを焼いたような竈を作ろうとする。そして、その家を去って千年の後に、かの仙人てれいの丁令威と同じように鶴にまたがって帰ってくるのだ。

我が一つの宅地を長く子孫に伝えよう。いま垣根を築き、二本の柱を立てた。道に見に来る者があり、村の人々が手伝ってくれる。老人たちに集まってもらって鶏や豚で宴会を開こう。子供等には驚鳥でも鴨でも持ってきてもらおうとしよう。みんなで楽しく笑って、限りない歓びを結ぼうではないか。

児郎偉、抛梁東。喬木參天梵釈宮。尽道先生春睡美、道人輕打五更鐘。

（ヤーレヨ、梁を東に抛るなら、高い木の向こうに天をつくようなお寺。先生は春の眠りのまっただなか、お坊さま方よ、お寺の鐘はそとつしましう）

児郎偉、抛梁西。嫋嫋虹橋跨碧溪。時使使君来問道、夜深燈火乱長堤。

（ヤーレヨ、梁を西に抛るなら、緑の谷をまたがる虹の橋。知事殿がふらり道を訪ねにきまし

ようから、夜も堤に明かりをいっばい ともしましょう)

児郎偉、抛梁南。南江古木蔭回潭。共笑先生垂白髪、舍南親種両株柑。

(ヤーレヨ、梁を南に抛るなら、南の江には回る潭に蔭を落とす古い木。笑ってしまうのは、

真っ白な髪の先生が、二株の蜜柑を家の南に植えるのですって)

児郎偉、抛梁北。北江江水揺山麓。先生親築釣魚台、終朝弄水何曾得。

(ヤーレヨ、梁を北に抛るなら、北の江では水が揺り動かす山の裾。先生は魚釣り台を築い

たけれど、朝からずっと遊んでも何も得られません)

児郎偉、抛梁上。壁月珠星臨蕙帳。明年更起望仙台、縹緲空山隘雲仗。

(ヤーレヨ、梁を上を抛るなら、草のカーテンから覗く円い月と珠の星。来年は仙界を望む

台も造って、はるばると杖をついて雲へと昇って行きましょう)

児郎偉、抛梁下。鑿井疏畦散隣社。千年枸杞夜長号、万丈丹梯誰羽化。

(ヤーレヨ、梁を下に抛るなら、掘った井戸から隣りの家々へとほとぼしる水。千年の寿命を

延ばす枸杞がぐいぐい育って、万丈の梯子を昇って仙人になるのです)

伏して願うのは、この上梁の後には、山には麦が稔り、海には嵐がなく、気は爽やかで人は安らかで、陳君には薬がたっぷりあって、米が安くて、林婆さんには酒がいくらでも作れますことを。そして、私の家に来る人々には、福と寿がますます増しますことを。

(1) 後半の民謡調の歌詞の最初は、先に見た「縦筆」(本章 336 ページ) と同じである。(2) 最後にある陳君は惠州の薬屋で、林婆さんは先に見た林行婆である)

■和時運四首

陶淵明の「時運」の詩に和した。「時運」とは時の巡り、つまり四季の運行である。それぞれに序文がある。

序(陶淵明)

時運游暮春也。春服既成、景物斯和、偶影独游、欣慨交心。

（時運によんだのは暮春に遊ぶおもい也。春の服が既に成って、景物が斯も和かで、影を偶
 になって独り遊ぶと、欣びと慨きとが心のうちで交わるのである）

（「春服」の2文字を見ると、昔の読書人は必ず『論語』の一節を思い浮かべた。ある
 とき孔子が弟子たちに、「いつか思い通りにできるようになったら何をしたいかね」と
 尋ねると、それぞれが答えたなかで最後に曾皙は、「春の終わりにには、できあがった春
 の服を着て、若者五六人、少年六七人とともに沂水で身を清め、雨乞い台のあたりで風
 に吹かれ、歌いながら帰りたいと思います」と答えた。「私もそれに賛同しよう」と孔
 子は言った。陶淵明の「時運」の詩は、このことを踏まえて詠まれている）

序(蘇軾)

丁丑二月十四日、白鶴峰新居成、自嘉祐寺遷入。

詠淵明時運詩云、斯晨斯夕、言息其廬。似為余發也、乃次其韻。

長子邁、与余別三年矣、挈攜諸孫、万里遠至、老朽憂患之余、不能無欣然。

ていちゅう しょうせい はくかくほう か ゆうじ うつ
(丁丑(紹聖四年)二月十四日、白鶴峰の新居ができあがり、嘉祐寺から遷って入った。

どうえんめい じうん こ あさ こ ゆうべ ここ いこ こ
陶淵明の「時運」の詩を詠みあげると、「斯晨斯夕、言息其廬」(斯の晨 斯の夕、言に息う其の
いかり
廬)とあり、あたかも私のために発したかのようである。それでその詩に次韻した。

まい
長男の邁は私と別れて三年になる。孫たちを連れて万里の彼方のここにきた。老い朽ちて憂患
よろこ
が多くあるけれど、喜びがないわけではない)

(1) 引用された陶淵明の句は以下の「其の四」にある。(2) 蘇邁は希望通りに 韶州
じん か
仁化県の知事を授かり(本章262ページ)、この年の1月末に任地にいったん到着すると、
迎えに行った蘇過とともに家族全員を連れていて惠州に来た。蘇軾がちょうど新居に
移るころに3年ぶり(本章20ページ)に蘇軾は長男一家と会ったのである)

其の一(陶淵明)

じわじわ とし めぐ
邁邁時運、(邁邁と時は運り)

ぼかぼか よ あさ
穆穆良朝。(穆穆と良い朝がきた)

わ はる ふく き
襲我春服、(我が春の服を襲て)

はてさて ひがし のべ
薄言東郊。(薄言 東の郊にいこう)

やま の こ もや あら
山滌余靄、(山は余っていた靄が滌われ)

そら かす にじ あわ
宇曖微霄。(宇には微かな霄が曖かかっている)

かぜ あ みなみから
有風自南、(風が有って南 自きて)

か あたら なえ そだて
翼彼新苗。(彼の新しい苗を翼てくれる)

其の一(蘇軾)

我ト我居、(私は我が住まいを占った)

居非一朝。(住まいは一日だけのものではない)

龜不吾欺、(龜による占いは私を欺くことはなく)

食此江郊。(この江のあたりで暮らすことになった)

廃井已塞、(ためになった古い井戸は塞ぎ)

喬木干霄。(高い木は空を覆ったままでよい)

昔人伊何、(昔ここにいたのはどのような人であったのか)

誰其裔苗。(その子孫として誰がいるのだろうか)

其の二(陶淵明)

洋洋平津、(洋洋とした平らなところの津で)

乃漱乃濯。(漱いで乃り、濯って乃りする)

邈邈遐景、(邈邈とした退い景に)

載欣載矚。(欣んで載り、矚で載りする)

人亦有言、(人も亦たこのように言うことが有る)

称心易足。(「心に称うなら足れ易い」と)

揮茲一觴、(茲の一つの觴を揮って)

陶然自樂。(陶然と自ら楽しむのだ)

其の二(蘇軾)

下有澄潭、(下に澄んだ淵があつて)

可飲可濯。(飲むこともできれば濯^{すす}ぐこともできる)

江山千里、(江や山が千里の彼方まで)

供我遐矚。(私の眺めのうちに入ってくる)

木固無脛、(木にはもとより脛^{すね}があるわけではなく)

瓦豈有足。(瓦にはむろん足があるわけではない)

陶匠自至、(しかし、職人たちが自^{おのずか}らやってきてくれて)

嘯歌相樂。(歌いつつ楽しむうちに我が家を作ってくれた)

其の三(陶淵明)

延目中流、(目を流れの中ほどに延^めりながら)

悠想清沂。(悠^{はる}かに清らかな沂^{きよ}のかわを想^{おも}う)

童冠齊業、((そこでは)童と冠^{こども わかもの いっしょ}が齊^{べんきょう}に業して)

閑詠以歸。(閑かに詠^{のど}い^{うた}ら^{なが}帰^{かえ}っていったのだった)

我愛其静、(我は其の静かなるありさまを愛^{あたし そ しず あい}し)

寤寐交揮。(寤^さめても寐^ねでも交^{こも}ごころが揮^{ふる}いたつ)

但恨殊世、(但し恨^{ただ ざんねん}なのはもはや世を殊^{よ こと}にして)

邈不可追。(邈^はるか^おに追^{でき}いかけることは不可^{ない}のだ)

(これは孔子の弟子の曾皙が理想とした楽しみへの憧憬を歌っている)

其の三(蘇軾)

我視此邦、(私はこの邦を視るに)

如洙如沂。(洙水や沂水のあたりのようである(孔子の故郷のように純朴な風俗であるという意味))

邦人勸我、(この邦の人が私に勧めるのは)

老矣安歸。(「老いてどこに帰ろうというのですか(ここに永住なさい)」)

自我幽独、(私は独り静かな暮らしをするようになってから)

倚門或揮。(門のあたりに佇みつつ、時に心が奮い立つことがある)

豈無親友、(私にだって親しい友がなかったわけではない)

雲散莫追。(雲が消えるように散ってしまってもう追いかけることはしないのだ)

(蘇軾のところに遠く来る者もいたが、蘇軾が罪に落ちてからは背を向ける者の方が多かったのだろう)

其の四(陶淵明)

斯晨斯夕、(斯の晨も斯の夕も)

言息其廬。(言さ其の廬で息としているのだ)

花葉分列、(花や葉が分れて列び)

林竹翳如。(林や竹が翳如をつくっている)

清琴橫床、(清らかな琴は床に横わり)

濁酒半壺。(濁った酒は壺に半ばだけ)

黃唐莫逮、(黄^{たい}唐^{このむかし}は逮^{およ}ぶものでは莫^ないので)

慨独在余。(慨^{なげ}きは独^{ひと}り余^{わたし}のもとに在^あるのだ)

(終わりのあたりにある「黄唐」は伝説の黄帝^{こうとう}と理想の天子^{こうてい}であった堯^{ぎょう}の時代を指す。

孔子^{こうし}もまたそのような遠い昔に強い憧憬を抱いていた)

其の四(蘇軾)

旦朝丁丁、(朝早^{とんとん}くに丁丁と)

誰款我廬。(我が廬を叩くのは誰であろうか)

子孫遠至、(子や孫が遠くから来たのだ)

笑語紛如。(笑いや語りが入り混じる)

剪髮垂髻、(前髪を切りそろえたのやら髪を束ねたのやらが)

覆此瓠壺。(わいわいと酒壺をひっくりかえてしまった)

三年一夢、(三年もまた一つの夢)

乃復見余。(諸君等はこちらでまた私を見たのである)

(最後は蘇軾^{そまい}一家が来たことを歌っている。孫たちが実際に酒壺をひっくりかえしたかどうかはわからないが、なけなしの酒をこぼされても、蘇軾はここにこ眺めていたであらう)

■次韻惠循二守相会

惠州^{けい}の方子容^{ほうし}(字は南圭^{あぎな}) 知事と循州^{なんけい}の周彦質^{じゆん}(字は文之^{しゅうげん}) 知事が蘇軾^{ぶんし}

の新居を訪問して詩を詠んだので、それに次韻した。新居の建築にはこの
2 知事の支援があったであろう。後の詩でわかるように、周知事はちょうど任期を終えて都に帰還しようとしていた。

一緒に会うときには、
ほんのわずかな時間とともに惜しむ。

杯の酒は浅くとも、
こころ
意はことに深いものがある。

しかも月の下で三人の影を合わせているのであるから、
万里の彼方の天の涯にいるなどという感慨を起こすことはない。
東の山のあたりに松や菊を愛でる小道を開いたばかり、
南の部屋が完成して斧の音は聞こえなくなったところ、
貴君らの詩は誠に幸先のよいものである。
また酒壺を携えてさらに来訪されるがよろしかろう。

■又次韻二守同訪新居二首

上の詩の二人の知事がまた同じ韻を使って、新居をもう一度訪れたいという詩を詠んだので、それに答えた。

我が新居は、

町の北側の草深い^は数畝の地を開いたもの、
暁には、窓はすがすがしく明け、
夜には、部屋は奥深く静まり返る。
この地を占って建てたとはいえ、
生涯最後の真の家ではなく、
いさか^{けっかふざ}か結跏趺坐して我が心を看ようとするものである。
聞^きくところでは、
貴君等は酒壺をさげて、わからない字を尋ねにこられるとか、
ならば、木に登って歌を唱えて迎え入れるのでしょうか。
ともあれ、我が家の北の扉からの眺めを楽しんでいただけよう。
真下には広々とした^{かわ}江……。

(2人の知事との同じ韻を用いての贈答はさらに2回繰り返されるが、これより後は割愛する)

■和陶答龐參軍六首

^{とうえんめい}陶淵明の「^{ほうさんぐん}龐參軍に答える」という詩に和した。それぞれに序文がある。
陶淵明の詩は60歳のときに龐參軍の詩に応じたもの。龐參軍(參軍は職掌名)にはこれより半年ほど前に贈った詩があり、そちらの序文によると、
2人は1年ほど前に知り合って親しくしていたのだが、龐氏^{こうりょう}は江陵に參軍の職を得てそちらに出て行った。江陵は^{じんりょう}陶淵明の住む^{ちやうこう}潯陽からは長江

を遡ったところにある大都市で、そこを治める謝晦^{しゃかい}は実力者であった。

序(陶淵明)

龐為衛軍參軍、從江陵使上都、過潯陽見贈。

（龐^{ほう}は衛軍^{えいぐん}(謝晦^{しゃかい}の率いる軍団)の參軍^{さんぐん}と為^なり、江陵^{かうりやう}從^から上都^{じやうと}(當時の都^{なんさん}、南京^{つか})へ使^{じん}わされ、潯陽^{じんよう}を

過^{よぎ}ぎって(詩^{おく}を)贈^{こん}って見^みれた)

(ここにある龐參軍^{ほうさんぐん}の動きは当時の政治情勢と関連している。これより4年前に、劉^{りゆう}裕^{ゆう}は晋朝^{しん}を滅^{めつ}ぼして宋朝^{そう}の初代皇帝となった。しかし、即位からわずか2年で劉裕は死ぬと、後継者争いが起こった。謝晦は一方の側の中心人物で、都にいる同調者のところに使者として龐參軍を送った。龐參軍はおそらくいささか危険な役目を担っていたのであろう。それを陶淵明^{とうえんめい}に打ち明けたはしなかったろうが、恐らく察知するものがあったに違いない。謝晦らの企みは一時的に成功するものの、後に謝晦は反乱を起こして討伐されてしまう)

序(蘇軾)

周循州彦質、在郡二年、書問無虚日、罷歸過恵、為余留半月。既別、和此詩追送之。

(循州知事の周彦質^{しゅうげんしつ}は、任地にあること二年、一日も欠かすことがないほどの手紙をくれた。知

事を辞めて帰還するに際して恵州を通り、私にために半月も留まってくれた。すでに別れて、陶淵

明^{めい}の詩に和して追って送別の詩とした)

其の一(陶淵明)

衡門之下、(衡 ^{きをわたした} だけの門 ^{もん} 之 ^の の下 ^{もと} にも)

有琴有書。(琴 ^{こと} も有 ^あ れば書 ^{ほん} も有 ^あ る)

載弾載詠、(載 ^{あちん} で弾 ^ひ たり載 ^{こちん} で詠 ^よ んたり)

爰得我娛。(爰 ^{ここ} に我 ^{わたし} の娛 ^{たのし} めを得 ^え ている)

豈無他好、(他 ^{ほか} に好 ^{よいこと} などは豈 ^{けっし} て無 ^な いのであつて)

樂是幽居。(是 ^こ の幽 ^{かすか} な居 ^{くらし} を樂 ^{たの} しているのだ)

朝為灌園、(朝 ^{あさ} に為 ^す るのは園 ^{はたけ} に 灌 ^{みずをそ} ぐこと)

夕偃蓬廬。(夕 ^{ゆう} べには蓬 ^{くさぶき} の廬 ^{いおり} に偃 ^ふ すのである)

(陶淵明は龐参軍が危うい使命を帯びていることをうすうすわかっていて、この一連の詩を詠んだのであろう。最初に、穏やかな暮らしのうちにささやかな楽しみ見出すのをよしとする己の信条を歌い、以下、龐参軍とのこれまでの交遊を順に歌っていく)

其の一(蘇軾)

我見異人、(私 ^{いじん} は異 ^{いじん} 人に会 ^い い)

且得異書。(し ^{いしよ} かも異 ^{いしよ} 書 ^{いしよ} を得 ^え た)

挾書従人、(異書 ^{いしよ} を手 ^て にして異 ^{いじん} 人に教 ^{しよ} えを乞 ^こ えば)

何適不娛。(いつ ^い つても樂 ^{たの} しくないことはな ^い い)

羅浮之趾、(羅浮山 ^{らふざん} のふ ^ふ もとに)

ト我新居。(我が新居を作ったところ)

子非玄德、(あなたは劉備ではなく(私は諸葛孔明でもないの(に))

三顧我廬。(三回も我が廬を訪ねてくれた)

(1) 異人(道士や禅僧など)と会えて異書(道教や神仙術などの書物)があればいつでも楽しいというのは、いかにも蘇軾らしい。(2) 終わりはいわゆる「三顧の礼」の故事を引いて周彦質の訪問をたびたび受けたことを詠んでいる)

其の二(陶淵明)

人之所宝、(ほかの人之宝とする所のものがある)

尚或未珍。(尚も或は珍だとは未のである)

不有同好、(好むところが同じようで有るので不ければ)

云胡以親。(云胡って以て親しくはできない)

我求良友、(我は良い友を求めて)

実覲懷人。(実に懷うような人に覲うことができたのだった)

歡心孔洽、(歡ぶ心は孔はまだ洽うものがあり)

棟宇惟隣。(どうとう棟宇を惟に隣りにしたのだった)

(これは龐參軍との出会いを詠んだもの)

其の二(蘇軾)

旨酒荔蕉、(旨い酒と荔子と芭蕉)

絶甘分珍。(絶妙にうまくて珍しいものをあなたと分け合おう)

雖雲晩接、(我が晩年になって知り合ったのだが)

数面自親。(自然と親しくなればしば会うようになった)

海隅一笑、(海辺の涯の地で笑い合う)

豈云無人。(どこでも心親しむ人がいないということはないのだ)

無酒酤我、(私は酒を買うことができないので)

或乞其鄰。(隣)からもらってゐることもある)

((1) これは周^{しゅう}彦^{げん}質^{しつ}との出会いを詠んだもの。(2) 酒をもらう隣人^{りん}とは林婆^{りん}さんであろう)

其の三(陶淵明)

伊余懷人、(伊^{これ}は余^{わたし}が懷^{おも}っていたとおりの人^{ひと}で)

欣德孜孜。(徳^{とく}を欣^{よろこ}ぶことでは孜孜^{いそいそ}とはげむのだ)

我有旨酒、(我^{わたし}に旨^{うま}い酒^{さけ}が有^あるときには)

与汝樂之。(汝^{あなた}と与^{とも}に之^{それ}を樂^{たの}しんだ)

乃陳好言、(乃^{あるとき}は好^よい言^{ことば}を陳^{かた}らい)

乃著新詩。(乃^{あるとき}は新^{あた}しい詩^しを著^{あら}わした)

一日不見、(一^{いち}日^{にち}不^あ見^な、一日見わないと)

如何不思。(あなたのことを如何^{どうして}も思^{おも}わ不^ないわけにはいかなかった)

其の三(蘇軾)

将行復止、(あなたは行こうとしてまた止まり)

眷言孜孜。(顧みて急いで話をする)

苟有於中、(心の中にある限りを)

傾倒出之。(傾けて出してしまおうとする)

奕奕千言、(きらきらとした千の言葉は)

粲焉陳詩。(輝いて詩として並べられる)

觴行筆落、(盃が巡り、筆を走らせる)

了不容思。(考えるひまもないほどにすばやい)

其の四(陶淵明)

嘉遊未斁、^{よ あそ まだ みちた}(嘉い遊びが未まだ斁らないのに)

誓將離分。^{きて いま はな わか}(誓も将や離れて分れることになってしまった)

送爾于路、^{あなた みち おい おく}(爾を路に于いて送り)

街觴無欣。^{さかづき ふ よろこ な}(觴を(ちに街くんだけれど欣びなどは無かった)

依依旧楚、^{のちのち ふる そ こうりょう}(依依と(あなたは)旧き楚のあたり(江陵へとゆき))

邈邈西雲、^{はるか にし くも}(邈邈な西の雲(をわたしはみていたのだった))

之子之遠、^{こ ひと とお い}(之の子が遠くに之ってしまっからは)

良話曷聞。^{よ はなし まった き}(良い話を曷く聞かなくなってしまった)

(これは龐參軍が江陵に行ったことを詠んだもの)

其の四(蘇軾)

忼妙侍側、(美しい少女がかたわらに座っている)

兩髦丫分。(髪を二つに分けて左右に垂らしている)

歌舞壽我、(少女は私のために^{ことほ}寿いで歌い舞い)

永為歡欣。(永く続く歓びとしてくれた)

曲終淒然、(曲が終わると急に寂しくなって)

仰視浮雲。(空に浮く雲を見上げた)

此曲此声、(この曲とこの声)

何時復聞。(いつまた聞くことができるだろうか)

(ここでは、蘇軾が歌舞を得意とする少女を呼んで周彦質^{しゅうげんしつ}を引き留めようとしたことを歌っている。先に2人の知事と応酬をした詩を見たが、最後の詩(訳は省いた)にそのことが詠まれていた)

其の五(陶淵明)

昔我云別、(昔我が云で別れたとき^{かつてわたし ここ わか})

倉庚載鳴。(倉庚が載と鳴いていた^{うぐいす ちよう な})

今也遇之、(今也之に遇と^{いままたここ あ})

霰雪飄零。(霰や雪が飄零とふってくる^{あられ ゆき はらほら})

大藩有命、((あなたには)大きな藩からの命が有って^{おほ はん しめい あ})

作使上京。(上京への使^みいと作^{つか}っている)

豈忘宴安、(豈^けして(あのころの)宴安^{やすらかさ}を忘れてはいないのだからけれど)

王事靡寧。(王事^{じのしごと}にあつては寧^{やす}らくことも靡^ないてあろう)

其の五(蘇軾)

擊鼓其鏜、(太鼓がドンと撃たれると)

船開艫鳴。(船が動き出して櫓^この音が響く)

顧我而言、(あなたは私を振り返り見て何かを言うとするが)

雨泣載零。(雨のように涙がこぼれ落ちる)

子卿白首、(かの蘇武^{そぶ}が白髪頭^{はくはつこう}になって)

当還西京。(都に帰還したように、あなたはいま帰ってゆく)

遼東万里、(万里の彼方^{りょうとう}の遼東から)

亦歸管寧。(管寧^{かんねい}が帰ったように私も帰るときがくるのだろうか)

(終わりのところでは、蘇武^{そぶ}と管寧^{かんねい}の故事を引いているが、要するに自分もまたいつか帰還が許されるであろうという淡い期待を歌ったもの)

其の六(陶淵明)

慘慘寒日、(慘慘^{うすぐら}寒^{さむ}い日^ひざし)

肅肅其風。(肅肅^{ひゅうひゅう}と其^{ここ}に風^{かぜ}がふく)

翩彼方舟、(翩^{ひるがえ}るような彼^かの方^にの舟^{ふね}は)

容裔江中。^{ゆらゆら かわ なか}(容裔と江の中を(すすみかたしている))

勗哉征人、^{つと なき ゆ ひと}(勗め哉い征人よ)

在始思終。^{はじ あ おわ おも}((あなたは出仕の始めに在っても終り)のときを思っていたはずだ)

敬茲良辰、^{こ よ とき たいせつ}(茲の良い辰を 敬 にして)

以保爾躬。^{そし あなた み たも}(以て 爾の躬を保ちたまえ)

^{とうえんめい}(陶淵明は、与えられた使命を全うするよりも、自身が大切にすることを全うさせることを優先せよと言っているのだろう)

其の六(蘇軾)

感子至意、(あなたの至誠の心に感じて)

托辞西風。(風に託してこの送別の辞を送る)

吾生一塵、(私の生命はひとつぶの塵)

寓形空中。(空中にたまたま形を宿しているだけ)

願言謙亨、(願うのは謙讓をもって貫き)

君子有終。(君子として生涯を全うされること)

功名在子、(あなたに功名があるのならば)

何異我躬。(それは我が身にあるのと同じなのである)

■浣溪沙

^{はる こころ}
「春の情」というタイトルの付いている詞。

道字嬌訛苦未成、(ふにゃふにゃと言葉ははつきりません)

未応春閣夢多情。(まさか春の寢床でよい人に会う夢を見るには早すぎますよね)

朝来何事緑鬟傾。(でもこの朝に髪が乱れているのはどうしてなのでしょう)

彩索身輕長趁燕、(ブランコに乗って燕を追いかけているのでしょうか)

紅窓睡重不聞鶯。(窓辺での眠りはまだ深く、鶯の声も聞こえていません)

困人天氣近清明。(このものうさは清明^{せいめい}に近い季節だからでしょうか)

(春の朝の少女の夢を詠んだこの詞はいろいろな味わい方があるだろう。蘇軾のもと
にきたばかりのころの王朝雲^{おうちょううん}を追想しての詞であると思っても悪くはないのかもしれない)

■種茶

茶を種^うえるという詩。

松の間に旅の茶が生え、

松と同じように痩せてひょろひょろと伸びた。

茨^{いばら}たちはこれを仲間に入れまいと、

争うように覆いかぶさって蔭の下に隠してしまおうとした。

天公^{てんこう}によって遺棄されたものなのか、

百歳になってもなお幼稚のままである。

最上の「紫筍」のような茶であるのだから、

大きいはならなくても、孤独の根は長い寿命を保っている。

私はこれを白鶴峰の上に移した。

それは春の雨の後の土の軟らかいときで、

十日にわたって曇り空が続いてくれたので、

晩年に至ってついに思い通りに繁茂できるようになったようだ。

長年の流転の苦を忘れて、

戢戢と鳥のくちばしのような芽を出し始めた。

臼について磨りつぶすほどにはならなくても、

摘んで香りを楽しむくらいのことならできるだろう。

宮中にたくさんの茶が集められて、

互いに優劣を競い合っているようであるが、

我が園から出るこのひと啜りの味と比べたら、

はてさてどうであろうか。

(移植した茶のことを詠みつつ、己自身を歌っているようである。茶の品質を競い合うことについて本章 178 ページで強く批判していた)

■三月二十九日二首

3 月 29 日に詠んだ詩。この年は閏二月があり、新居に移った 2 月 14 日

から2カ月半ほどが経過した。

其の一

南の嶺を雲が通り過ぎて、翠^{みどり}の山裾が現れ出る。

北^{かわ}の江に雨が飛び散って、涼しさが送られて来る。

酒が醒めて、夢からかえると、もう春の尽きようとする日、

門を閉ざし、机によりそって、香を炊くとしよう。

其の二

門の外では橘の花がなおちらほらと見え、

垣根の先では荔枝^{ライチ}の実がすでに熟し始めている。

樹は暗く草は深く、人は静かにいるところ、

簾を巻いて、身を横たえて山を眺めるとしよう。

■記授真一酒法

白鶴峰^{はくかくほう}の新居に鄧守安^{とうしゅあん}（本章104ページなど）が訪ねてきた。そのことを記した一文。

私が白鶴峰^{はくかくほう}の新居にいと、道士の鄧守安^{とうしゅあん}が突然来て門を叩いた。時はすでに真夜中で家の者はことごとく寝ていた。

その後ろに背の高い人がいた。^{こうろう}桃柳の葉を衣にし、手に酒を携え、髪を乱した姿は神々しく、かの仙人の^{りょどうひん}呂洞賓を思わせるものがあった。

^{しんいちしゅ}「真一酒を飲んだことがありますか」

と、その人が言った。

三人は座に就き、携えてきた酒をおのおの数杯飲み、節をとって高らかに歌い、合^{ごう}江楼の下に行った。風が振るって水が湧き、大きな魚があれこれ出てきた。

そしてその人は袖から一巻の書物を出して、私に授けてくれた。真一酒の造り方と、修養の九箇条が記されていた。その末尾に、

^{きゅうか せんじん り せい}「九霞仙人李靖が書く」

と、あった。

別れた後、私は恍惚としてしまった。

((1) これは実際にあったことを記したのではないのだろう。^{しんいちしゅ}真一酒については、白鶴峰に移るよりかなり前にすでに蘇軾は詩文に記しているので (本章 172 ページなど)、いまになって仙人からその製造法を授かったというのは矛盾している。ことさらに秘方めかした遊びなのであろう。(2) ^{りょどうひん そう}呂洞賓は宋代の人々が繰り返し語り継いできた極めて有名な仙人である (第9章 100 ページ)。(3) 蘇軾は、故郷に帰る望みも、朝廷に復帰する望みもあえて抱くことなく、近くの県知事になった長男に支えられつつ、^{とうしゅあん}鄧守安のような惠州の人々とともに穏やかな日々が続くことを願って白鶴峰の新居を構え、季節は春から夏へと移っていったのだった)